
ツイートピア

・J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイートピア

【Nコード】

N49870

【作者名】

・J

【あらすじ】

時は西暦2100年。人間の体内にツイッターを組み込むシステム「バイオツイッター」が実用化された時代のお話。主人公の「ノルコ」は、ごく平均的な家庭に育った女の子。彼女を中心として過ぎてゆく日常は、一見ありふれたもの。が、バイオツイッターによる相互監視が当たり前になっていたり、お金を必要としない経済システムが確立していたり、よくわからないことになっている。しかしそんなことはノルコにはどうでも良いことで、目下の課題は「良いお嫁さんになる!」ということだった……。 (ワンシーン1

40文字以内)

ツイートピア1〜18（前書き）

【用語】

ツイート：つぶやき。

TL：タイムライン。ツイートを新しいものから順に並べたもの。

リプライ：特定の人に向けたツイート。

(1)

ピピピピ、ピピピピ　目覚まし時計を止め、少女はベッドから起き上がる。彼女の名前はイズミ・ノルコ、小学五年生だ。寝癖がピンピンはねた頭をポリポリしつつ、つぶやいた。ノルコ「おはよー」　早速、友達や家族から来る。いつしか世界はツイートで結ばれるようになったのだ。

(2)

鼻歌をつぶやきながら服を着ると、ノルコはランドセルを持って一階に駆け下りた。朝ごはんの仕度が出来ていた。ノリコ「めだまやきだ！」　母「今日はお米を買ってこないと」　父「また円高かー」　弟「ウエエー」　みんな好き勝手につぶやいている。朝からとてもにぎやかなのだった。

(3)

ノルコは目玉焼きの黄身とご飯を混ぜて、醤油をちよつとかけて、プチ卵かけご飯にして食べるのが好き。イズミ家は父と母とノルコと弟の四大家族だ。弟の名前はイズミ・セルゲイビッチ・ロマーノフ(自称)　なんだけど、長いから弟でいいよね。　弟「ウイイイ？」

(4)

朝食を食べたノルコと弟のワク(本名)は、集団登校のために玄関の前でみんなを待った。ノルコ「あうう、寝癖が」　何度モクシを入れてみるが、てっぺんの毛が手ごわいのだった。そのうち皆がやってきた。「アホ毛」「アホ毛だ」「アホアホ!」「アホ毛」
ノルコ「うるへえ」

(5) ノルコ達、つぶやね 咄音つばやね小学校の一団は、朝日が照らす小綺麗な街角を歩いていく。集団登校するのは治安が悪いからではなく、その方が楽しいからだ。「あつ、ノルコのニーソ、新しくなってる!」「うわつ、犬のウンコー!」「通報してやる!」「通学路をにぎやかなリプライが飛びかう。」

(6) 校門付近に変な人が立っていたので、一行はリプライをいったん止めた。男「ビヴァーチェ! ついにここにたどり着いた! 素晴らしい!」男は一人ツイートを繰り返しながら歩き去っていった。少し不思議な人であるらしい。ノルコは「一人ツイートって楽しいのかな?」と思った。

(7) 教室に入ると自動的に全クラスメートと相互フォローになる。レイタ「ちつ、今日の授業つまんねーの! 体育も音楽もねーじゃん! 楽しみ給食しかねーじゃん!」サトウ・レイタ君がいつも通り呟きまくっている。彼は金髪ツンツン頭の自称イケメンだ。ノルコは正直ウザイないつも思う。

(8) ノルコ「算数だっておもしろいよ?」レイタ「へっ!」彼はそう言って机の上に飛び乗ると、くるくる回ってからビシッとノルコを指差しつぶやいた。レイタ「算数が好きな女って変だな!」女子「そんなことない!」×15ツイート。少年は朝から全女子を敵にまわしてしまったようだ。

(9)

レイタ「割り切つてやるぜ！ 7÷3でも9÷2でも、俺なら割り切つてみせるぜ！」 一同が全員ため息をついた時、予鈴がなつて先生がやってきた。先生「そうか、じゃあまずキミから割り切つてあげようね」 先生はそう言つてレイタの両耳をつまむと、思いつきり引つ張つた。レイタ「ア”ッー！」

(10)

レイタ「体罰反対」 午前の授業中、彼はずっとそう呟いていた。おかげで午前中のタイムラインは「体罰反対」と「レイタうるさい」で8割がた埋め尽くされてしまった。給食の時間、彼は先生と目が合うや否や。レイタ「たいばt……」 とうとうクラス全員にリムーブされてしまった。

(11)

お昼休みのあとの授業はお昼寝の時間と決まっている。しかも科目は【つぶやき史】で、先生は癒しのウイスパーパーボイスの持ち主、ツブヤ・クオ先生だ。クオ「じゃあ今日は教科書11ページから始めるんだお」 もう既に3人寝た。先生はなぜかメロンを持ってきている。

(12)

クオ先生はメロンを片手に持ちながらつぶやき始めた。クオ「今から一世紀くらい昔に、世界中でインターネットというものが流行つたんだお。ちょうどこのメロンの表面の模様みたいに、地球上に通信ケーブルが張り巡らされてたんだお」 そしてまた6人ほど寝た。

(13)

クオ「このメロンはあとで先生が美味しくいただくんだお」 そういつてクオ先生は教え子達の反応を待つ。どうやらウケを狙つた

らしい。「ZZZ……×3リツイート」クオ先生はにっこり微笑むとメロンを教壇に置いた。それだけのために持つてきたらしい。クオ「じゃあ、続きを話すんだおっ」

(14)

クオ「インターネットが普及してしばらくたったある日、頭のいい人たちがツイッターっていうソフトを開発したんだお。それをみんな、パソコンという原始的な情報端末で楽しんだんだお。それに面白くて便利なものだったんだお」みな次々と眠りに落ちていくが、授業内容はＴＬに残るので特に問題ない、たぶん。

(15)

クオ「パソコンはやがてモバイルに、モバイルはブレイン・インプラントに、ブレイン・インプラントはナノ・インサートにどんどん進化していったんだお」自称【けなげな美少女】のノルコも、横文字がいっぱい並んだために我慢できず、気絶するようにして寝てしまった。

(16)

クオ「パソコンと呼ばれていた装置は、今はみんなの体に組み込まれてるんだお。耳たぶをクリックするとＴＬ画面が出るのもそういう仕組みだお。何か質問あるお？」しかし起きているものは誰もいなかった。それを見て先生はニッコリ微笑んだ。クオ「よしっ、じゃ今日はこれで終わりだお！」

(17)

チャイムとともにノルコは目を覚ました。ノルコ「あうう、今日も耐えられなかったか……」そして自分の耳たぶをクリックし、クオ先生の授業ＴＬを、映像モードで呼び出した。ノルコ「うわあ」先生はくねくねと身振り手振りを駆使し、わかりやすい説明に心

を砕いていたのだ。ノルコ「いい先生だあ」

(18)

ノルコはクオ先生のT.Lを閉じ、前の席のレイタを見た。レイタ「ZZZZ……うおおっ、ひつまぶしい」 どうやらいい夢を見ているようだ。腹立たしい。ノルコはレイタの椅子をボコンと蹴っ飛ばした。レイタ「敵襲?!……ZZZZ」 ノルコは次の授業の準備をしつつ、家族のことを考えていた。

ツイートピア19〜40（前書き）

【用語説明】

ファボる：ツイートを気に入り登録すること。

DM：ダイレクトメール。送った人と送られた人しか見れない。

耳たぶクリック：視界にTL画面が表示され、その場所の情報を確認できる。

(19)

ノルコが午後の授業をうけているころ、母のイズミ・ヨコはスーパーに買い物に来ていた。リプライが飛んできた。店長「よっ、奥さん相変わらず若々しいね！ お子さんがいるとは思えねえや」
水色ワンピース姿のヨコ。よく学生と間違われ、ナンパされる。ヨコは返信する。ヨコ「うふふ、当然なのよ店長」

(20)

ヨコは野菜と肉をカゴに入れ、お米売り場に向かう。ヨコ「3kgと5kgごつちにしましょ？」 ヨコは耳たぶクリックでお米売り場のT.Lを開いた。「まあ、お向かいさんつたら30kgも一度に……欲張りねえ」 そして5kgのお米をよいしょと担ぎ そのままスーパーを出た。

(21)

店長「奥さんちよつとー！」 店長が必死の形相で追いかけてきた。ヨコ「あらなにかしら？」 店長「奥さん、今日はシユウマイが5割引なんですよ！ 買っていつてくさいよ！」 といってシユウマイをヨコに押し付けてきた。店長「まったく、奥さん欲がないんだからっ！」

(22)

ヨコは車に乗ると、行き先を自宅に設定して発進させた。そしてシユウマイが5割引きであることの意味を考えた。ヨコ「つまり、いつもの感覚より2倍多く買ってもひんしゆくを買わないのよね。買っても買わない、うふふ」 今は全てがT.Lで管理される。マネ

ーという概念は時代遅れになったのだ。

(23)

つばやね市は太平洋に面しており、年間を通してカラッとした気候。ノルコの父、イズミ・アフレルは臨海地区にある研究所で働いている。家から車で30分ほどの場所だ。アフレル「うわっち！」
試験管が絵に描いたように爆発して、ネバネバした液体が飛び散った。アフレル「やっちまったか」

(24)

アフレルは服や髪やメガネについたネバネバを溶剤でふき取る。はたして何作ってるのか？ アフレル「口に入れても大丈夫な糊を作ってます」 糊 地味ではるが、重要な工業製品のひとつだ
ところでアフレル君は絶倫なんですか？ アフレル「い、いたって普通ですが?!」

(25)

アフレル君はなぜ化学製品に関わろうと？ アフレル「本当は僕、『火星』開発に行きたかったんですよ。でも学力が足りなくてだめでした」なるほど化学製品の『化製』と『火星』をかけてるんですか。ダジャレがお上手で。アフレル「いや……そういうわけじゃ」

(26)

アフレル「僕がここで働いているのは、たんに僕がこの仕事をこなせるからです。僕にできる仕事の中で緊急性が高かった仕事、それが『食べられる粘着剤の開発』だった訳です。平凡な理由ですよなるほど。ところで一人ツイトの多いアフレルさんを見て、同僚の方が心配そうな顔をしています！

(27)

実験を終えたアフレルはデスクに戻った。夕日が海に沈もうとしていた。デスク上の電子フォトに家族の笑顔が写っている。アフレル「ふう、今日も良く働いたなー」アフレルが火星を目指したのは事実なのだ。そして彼は、火星に行けたら幼なじみのヨコに告白するつもりでいたのだ。

(28)

妻のヨコは昔からよくモテた。アフレルは自分と彼女では釣り合わないと思っていた。だがある日、アフレルは意を決してこうつぶやいたのだ。アフレル「もし僕が火星に行けたら、そこからヨコにプロポーズの手紙を送るよ」と。笑って流された。しかしヨコは密かにそのツイートをファボっていたのだ。

(29)

アフレルは一心不乱に勉強した。理系の大学に進学し、修士課程まで進んだ。その後就職し、資格を得るための職務経験をつみつつ、夜遅くまで勉強した。しかし彼が第5次火星開発選抜に合格することとはなかった。次の選抜は10年後だった。彼は、あの約束は忘れてくれと、ヨコにDMを送った。

(30)

ヨコ《じゃあ私も一緒に連れてってくれるのね、火星に！》それがヨコから届いた返事だった。あれから月日が流れ、二人の子供が生まれ、今に至る。アフレル「そろそろ帰るか」外に出ると、空に星がまたたき始めていた。アフレル「ちゃんと約束守らないとね」彼はそう呟きつつ、家路についた。

(31)

ノルコ「おなかすいたよう……」学校から帰宅したノルコは自室でそうつぶやいた。今日はいつもの【おやつ】が置いてなかった

のだ。弟に聞いてみたところ。ワク「ヴェイ？ シュウマイなんて知らナッシン！」とのことだった。ノルコ（今夜の食事はきつと荒れるなあ……） ノルコは率直にそう思った。

（32）

アフレル「ただいまー」 父のその声が夕飯の合図だった。ノルコはダイニングに飛んでいった。テーブルの上にたくあんが一切れだけのったご飯が置いてあり、その前で弟がグズっていた。ワク「whyばれた」 ヨコ「お母さんにはみんなわかっちゃうんだから、ワクは悪い子ね」

（33）

弟のワク（セルゲイピッチ・ロマーノフ）は友だちとの交友で悪いことを覚え始めた。食卓でシュウマイを食べると、食卓ＴＬにその記録が残ってバレるけど、自室でコツソリ食べれば大丈夫だろうと思ったのだ。ヨコ「レンジでチンした時間が、ノルコが帰ってきた時より20分も早かったのよ？」

（34）

アフレル「だめじゃないかワク。ほら、ちゃんと謝って」 しかしワクは、たくあんご飯を持って部屋に閉じこもってしまった。きつと泣いている所を見られたくないのだろう、そうノルコは思った。部屋のＴＬは人に見られないように、部屋主の権限でロックをかけられるのだ。

（35）

ノルコは夕食中、姉としてなんとか弟を更生させねばと思っていた。そこで弟に対してDMを送ることにした。DMは二人の間にか聞こえない、言わば心の声である。ノルコ《意地はっててもいいことないよ？ お母さん、目が本気なんだから》 しかし返事はな

かった。

(36)

そのころ母のヨコもまた、密かにワクにDMを送っていた。ヨコ
《今の世の中、悪いことをするとなんでもすぐにバレちゃうの。で
も良いことするとすぐに褒めてもらえるの。だからお母さんはワク
に良い子になって欲しいの》 しかし返事はなかった。

(37)

父のアフレルもまた、ワクにDMを送っていた。アフレル《ふほ
ほおー、やっぱり母さんの作る料理はうまいなあー。このシヨウガ
焼きさいこー！ ふほっふ。ワクー、早く戻ってこーい。みんな待
ってるぞお？》 しかし返事はなかった。

(38)

三人ともDMに集中しているので、食卓は異様なまでに静かだっ
た。一方ワクは、部屋の机につっぱしたままDMを受信していた。
ワク(シヨウガ焼き……ウウイイ) こみ上げる食欲に負け、ワク
はさすがと食卓に向かった。どうやらアフレルのへんてこなDM
が、一番効果的だったようだ。

(39)

ダイニングにやってきたワクに、三つの視線が注がれていた。ワ
ク「ソーリー……」と言ってモジモジ。ヨコ「もつとちゃんと謝る
の」 ワク「あ、アイムソーリーなんだYO！」 三人は互いに視
線を交わし、そしてワクの方を見て、同時に言った。「日本語で！」

(40)

ワク「おやつ食べちゃってごめんなさい……」 ヨコ「いいわ」
そう言ってヨコはワクのシヨウガ焼きを暖めなおした。その日ワ

クはご飯を2回おかわりした。育ち盛りなのだ。ヨコはおやつを増やさなきゃと思った。ノルコ「ところでシュウマイ美味しかった？」
ワケ「オフコース！」

シートピア41〜61（前書き）

【用語説明】

BOT：プログラムに従ってフォロワーのシートの真似をしたりする。

RT：リシート。シートをおうむ返すこと。

(41)

ノルコはお風呂に入ってパジャマに着替え、自室のベッドでゴロゴロしていた。ルイ「ノルの明日のアホ毛はね、きつと3本！」
ノルコ「そのアホ毛というのをやめなさい……」 時々クラスメイトからリプライが飛んでくる。レイタ「おま！ 風呂長が……」
即効ブロック。

(42)

ピヨッター「今日のシュウマイのうほほ」 机の上のひよこ型B
OTのピヨッターがわけの分からないことをツイート。ノルコ「今日はとんだシュウマイだったぜ」 ピヨッター「とんだアフレルの糊が爆発」 ノルコはプツとふき出してしまった。ノルコ「はしたないわっ」

(43)

ノルコは部屋T1を操作して三日分巻き戻した。三日前、友だちがノルの部屋に遊びに来たときの光景が再現される。ノルコ「あっ」
友だちのルイが床に落としたボツキーを、みんなに見られないようにコツソリ口に運んでいた。ノルコ「5秒ルール？」 ノルコは速攻問い詰めた。

(44)

ルイ「だって、もったいないじゃないか……」 ノルコ「ちゃんと毎日掃除してるんだから。汚くなんかないんだから！」 ルイ「え？ そういう理由で怒ってるのか？」 ルイを小一時間問い詰めた後、ノルコはコロコロで丹念に床を掃除した。ノルコ「10秒だ

つて1分だつて大丈夫なんだから！」

(45)

いい加減じゆうたんがむしれてきたころ、母からDMが来た。ヨコ《よるほー》 ノルコ「あっ！」そしてあわてて時計を見た。10時を回ろうとしていた。ノルコ「ねなきや！」 ノルコはベッドに飛び込むと、地球のみんなに向かつて「おやすみ」とつぶやき、目を閉じた。

(46)

ピピピピ……ピピピピ……。朝の目覚まし時計がなる。ノルコはパツチリ目を開いて起き上がる。ノルコ「おはよ……う？」 自分の頭をさわってみたら、今日は寝癖がついていなくシットリしていた。窓の外からシトシトと雨音がきこえてくる。ノルコ「今日は雨なのか」

(47)

ノルコは朝ごはんを食べる前にトイレに行く派だ。ノルコ「トイレがないことを確認……と」 そういつて耳たぶをつまむ。トイレ内にトイレを置くことは法律で禁止されているのだ。ノルコは確認を終えると便座に座った。ちなみに、けなげな美少女はウ○コなんてしません。

(48)

食卓にて。ワク「マアム、ソイソースブリーズ！」 アフレル「おっ、ちよつと円安になった」 ノルコは厚焼き卵をご飯に埋めてギョウギョウ固めて、なんちゃって卵おにぎりにして食べるのが好き。ノルコ「うーん」 天気が悪いと何となく家の中が陰鬱だな、とノルコは思ったり。

(49)

ノルコは今日も玄関の前でみんなを待つ。花柄傘クルクル。ワク「袈裟斬り! 袈裟斬り!」 弟は自分の傘(別名、聖剣シツツシユバルト)で雨を切ろうと頑張るもズブ濡れだった。ルイ「のーるー!」 友だちがやってきた。ルイ「むう、ノーアホ毛か」 ノルコはルイにチヨップした。

(50)

ノルコ「あつ、またあの怪しい人」 校門の近くに真つ黒なレインコートを着た謎の男が立っていた。一同はリプライどころか足まで止めてしまった。男「雨……レイン……今日は重大なことが起きそうだぞ……。ビバーチェ!」 そして男はスキップしながら去っていった。ノルコ「なんなのかー?」

(51)

ノルコ「はつくしゅ!」 算数の授業中くしゃみをしてしまった。ノルコ「ティッシュがないなう」 RT「ティッシュ RT「ティッシュ誰か RT「ていしゅー RT「ていしゅを誰に? RT「亭主をノルに RT「ノルの亭主? RT「どうということなの?

(52)

レイタ「なあ、なんで俺がノルの亭主なん?」 ノルコは問答無用でこぶしをみぞおちに叩き込んだ。レイタ「うふぐう!」 そして隣りのリンちゃんくれたティッシュを受け取る。ノルコ「ありがとう、みんな!」 そして鼻をかんだ。あくまでもおしとやかにノルコ「ちーん」

(53)

次の授業もノルコの大好きな体育だ。みんなで跳び箱やらマットやらを用意する。ノルコ(なんか頭がボーっとするな……) ルイ

「ノルコ顔赤いよ？ 風邪ひいたんじゃないか？」 ノルコ「しかし体育は休みたくないなう」 体育館の屋根を叩く、雨の音が響いていた。

(54)

跳び箱が得意な子のグループは、台上前転の練習をしていた。レイタ「俺、兄ちゃんからすっげえ技教わったんだぜー！」といってレイタは台上宙返りをやってのけた。「うおお」 体育館中がその大技にどよめいた。ノルコはそれを見て、ムツとしてしまった。勝手なことをしては危険が危ないじゃないか。

(55)

ノルコ「先生やっていいって言ってないじゃない、怒られるよ？」レイタ「なんだー？ ひがみかー？」 ノルコ「違うもん！ あのくらい私にも出来るし！」 レイタ「じゃ、やってみるよー」 ノルコ「やらないよ！」 そう言い捨てて、ノルコは跳び箱に向かう。

(56)

ノルコ(宙返りくらい、出来るよ……) ノルコは助走の途中、ふとそう思ってしまった。ノルコ(ロイタ板を強くけって、体が浮いてから手突けばいいだけなの) しかし、そんなことをする気はさらさらなかった。ノルコはただ台上前転をするだけのつもりだった。しかし……。

(57)

跳び箱が間近に迫っていた。ノルコはいつも通り飛ぼうと板に踏み込む。その時だった。ノルコ(んん?!) 頭の中がムズツとした。そして気がつけば板をかなり強く蹴ってしまった。体が予想以上に高く舞い上がった。ノルコ「うそー！」 あぶない！ その

場の誰もがそう思った。

(58)

ノルコは前転とも前方宙返りともいえぬ、中途半端な姿勢で跳び箱に突っ込んだ。「キヤアアアア！」 ツイートではない本物の悲鳴が、場の空気をつんざいた。頭から突っ込んだノルコは台の上でバウンドし、そのままマットに向かって放りだされた。誰もが啞然とし、凍りついた。

(59)

そしてノルコは気絶した。目を覚ました場所は保健室だった。保健医のジエネ先生がそばにいた。ノルコ(ううん……) ジエネ「気がついたのね」 先生は身を起こそうとしたノルコを制しつつ。ジエネ「頭を強く打って気を失ったのよ、まだ横になっていた方がいいわ」 ノルコは小さく頷いた。

(60)

リジエネ「どこか痛むところは？」 ノルコは首を横にふる。特にどこも痛くなかった。リジエネ「そう、今は大丈夫でも後から症状が出るかもしれないから。あとで病院で検査するからね」 ノルコは再び、ただ黙って頷いた。その様子を見て、先生が不審げに首を傾けた。

(61)

ノルコはけして大人しい子ではない。先生もそれを知っている。そのノルコがまだ一言もツイートしていないのだ。リジエネ「もしかして……ちょっと、何かつぶやいてみてくれない？」 ノルコ「つ……う……」 二人はみるみる青ざめた。ノルコは つぶやけなくなつた。

(62)

医者「ファイルが壊れている」 医者は出し抜けにそう言った。
ヨコ「えええ!?」 ノルコは今、母の付き添いで病院に来ている。
『壊れてる』という単語にノルコしたたかビビッたわけだが、何せ
咳くことが出来ないのだった。ノルコ(どうなっちゃんだろ……)

(63)

ヨコ「な、治るんです？」 医者「再インストールすれば良い」
そう言つて医者は、棚から小瓶を取り出した。そして中身をスプ
ーンですくう。群青色のいかにも毒々しい液体だった。医者「はい、
あーんして」 ノルコは小刻みに首を振った。どう見ても、マズそ
う。

(64)

医者「注射にする？」 ノルコは速攻で口をあけた。注射は古代
における拷問の一種である。もつての他だ。医者「じゃ、あーん」
ノルコ(?!@¥ ! 〒) なんとも例えようのない味がし
た。強いて言うなら、水色のビー玉を溶かしたような味？

(65)

「ぎよくりっ」 ノルコはその怪しげな液体を一思いに飲み込ん
だ。横で母のヨコがおろおろしていた。医者「よしよし」 ヨコ「
え、もう終わりです？」 医者「はい、10日ほどでファイルは修
復されます……いや、2週間くらいだったかな？」 ノルコはとて
も心配だった。

(66)

つぶやけなくなったノルコ。風邪で熱も出てきた。けな気で病弱な薄幸の美少女となったノルコは、自室のベッドに埋まっていた。ノルコ(うーん、うーん……) うなされ声すらTLに残らない。噂によると、人は100日つぶやかないと死んでしまつらしい……ブルブル。

(67)

ルイ《ノル、無理しちゃだめだからね。明日はちゃんと休むんだよ？ ノートは私がつとくからさ》 友だちのルイからお見舞いDMが飛んできた。ノルコ(ありがとうルイちゃん、ついでに給食のミルクも……) と返信しようとしたが出来なかった。ノルコ(歯がゆいわ！)

(68)

《えっ、ほんとにツイートできなくなったの？》 《レイタのあんぽんたんが悪い！》 《ノルちゃんかわいそう……》 《100日もかからないって絶対！》 《つぶやけなくても元気だして！》 次々飛んでくるDM。しかし返信できない。たんに言つてノルコは切なかった。

(69)

ノルコは何が何でもツイートを返したくなつた。「ぶお？」でも「うえい！」でも良いからとにかく返したかった。ひとまず踏ん張つてみた。ノルコ(んー！ んんー！ いえやあー！) ノルコ「つとpu%；1：ヴい」 変なのが出た！ みんな「無理しちゃだめー！！」×222ツイート。

(70)

熱がさらに出てきたようだ。ノルコはＴＬを閉じた。「けふつ、けふつ」 咳は出る。しかしツイートにはならない。ノルコ（咳をしても……ノーツイート） 滅多に泣かないノルコも、流石にちよちよ切れそうになった。これが１００日も続いたら、ホントに死んじゃうかもしれない。

(71)

トントン ノックの音。アフレル「はいるぞー、卵がゆだぞー」 ワクも父の側にいて心配そうにしていた。アフレル「あーんしてやるか？」 ノルコは首を横に振ってお椀とレンゲを受け取った。アフレル「大丈夫だぞ、すぐに良くなる」 そう言って父は娘の頭を撫でた。

(72)

アフレル「父さんなあ、もう少ししたら仕事がひと段落つくんだよ。それでな、ノルコの病気がよくなったらな、みんなで旅行でもしようと思ってるんだ。どこがいいかノルコも考えておいてくれよ」 そう言って再びノルコの頭を撫でて、父はサツと部屋を後にしたのだった。

(73)

ノルコが『旅どんとcom』を調べていると、突然リプライが来た。レイタ「知ってるか？ コーヒーはカフェインで牛乳はセロトニンだから、コーヒー牛乳飲みすぎるとオーバードーズ起こすんだぜ？ 別名ゲリだぜ？」 なんのこっちゃ？ ノルコは普通にスル―した。

(74)

しかし何か気になって、ノルコはレイタのＴＬを訪問してみた。案の定、叩かれまくっていた。「お前何言ってるんだ！」「諸悪の根

源！」「お前のかあちゃんズンダモチ！」「もしかしてレイタなりの贖罪なのか？ レイタ「ちよっ、最後のヒデエ！」「そんなわけないか、寝よう寝よう。

(75)

チュンチュンというスズメの鳴き声とともにノルコは目を覚ました。「おはようー」と呟こうとするが、やはり出来ない。今日は大事をとって学校を休むことになっている。ノルコ(何して過ごそうかな?) そんなことを考えながらノルコは一階へと降りて行った。

(76)

食卓では父のアフレルがコーヒーを飲みながらWEB新聞を読んでいた。アフレル「おっ?」 しかしアフレルはそれ以上なにも言わない、呟けなくなった娘に対し、どう向き合えばいいのか計りかねているようだ。ノルコはそのままキッチンへ向かう。ヨコがパンを切っているところだった。

(77)

ヨコ「あら、早いよね。もつと寝ていていいのよ?」 そう言っ
てヨコはノルコの耳たぶをつまむ。「36.8度。まだちょっと熱
があるわね、休んでいた方がいいわ」 しかしノルコは首を振って
否定した。必要以上に心配されるのはもう嫌だと思ったから。

(78)

ノルコは卵とフライパンを用意して、自分好みの完璧な半熟加減
のスクランブルエッグを4人分作り、食卓に持っていった。朝寝坊
のワクが目をこすりながら降りてきた。ワク「は、はうどゆーゆー
どうー?」 心配そうに他人行儀な挨拶をしてきたワクに向かって、
ノルコは親指をグツ! と立ててみせた。

(79)

ノルコはトーストに卵を乗せて食べたら負けと思っている。アフレルはとても急いでいるようで、ワクと同時に食卓を立った。アフレル「今日は仕事の最終報告があるんだ」 呟けないノルコはケチヤップでトーストに字を書いてみた。【いてら】 アフレル「ふほっ」 ワク「イエア！」

(80)

ワクは家を出るとすぐ学校に向けてダッシュした。ワク(トウデイ、姉ちゃん、イナツシン、アンビリバーボー) そんなミステリアスなフリーダムを感じながら走っていると、後ろから黒い影が迫ってきた。謎の男「ヒーハハー、ユーアーご機嫌ボーイ?!?! ビバーチエ！」

(81)

ワク「ホワッツ!?」 ワクは思わず走りながら身構えた。ワク「フーアーユー!?」 謎の男「ふふふ、僕かい? 僕はね、見ての通りのストレンジヤーさ!」 そういつて男は腰をクネクネさせながら、さらにワクに迫ってきた。ワク「ヴェイイ?! ゴアウエイ!」

(82)

ワクはもう二度と一人では通学しまいと思った。こんなに怖い思いをしたのは初めてだ。あれから200mばかり男は追いかけてきて、ワクに聞いてきた。男「お姉ちゃんは呟けなくなっただな? だな?」 ワク「ホワイユーノウ!?」 男「HaHaHa! 僕は世界の全てを知っているのさ!」

(83)

ワクは速攻で職員室に駆け込み、そして先生に報告した。先生は青筋たてて驚いて、ただちに眩音市ツイッターポリスに連絡した。不審者はシステムによって3秒以内に発見されるだろう。これで一安心だ。……しかし、その男は何故か捕まらない。そのことを後にワクは知ることになる。

(84)

その頃、職場にいたアフレルは、学校から連絡を受けてビックリしたものの、無事を知ってホッとしていた。ひとまず仕事をやっつけねば。研究テーマである【食べられる粘着剤】の最終報告をまとめてデータベースに登録する。アフレル「ふう、これでまた一つ、この世の中の富が増えたぞ……」

(85)

お昼休み、アフレルが妻の特製弁当を頬張っていると、上司に呼び出された。アフレル「なんででしょう？」上司「はいお疲れさん、これ辞令ね」アフレルは自分のデスクに戻り、その辞令の中身を讀んだ。そこにはこう書かれていた。【価値ある研究をしてくれてありがとう、お疲れ様でした】

(86)

アフレルは昼から1時間ばかりかけて荷物を整理した。そして休憩所の窓から海を眺めつつ、しばしボーとしていた。同僚が声をかけてきた。同僚「よう、やったじゃないか！次はどこに行くんだ？」アフレル「うーん、そうだな……何しようかなあ」同僚「おいおい、しっかりしろよ、せつかくのチャンスだぜ？」

(87)

アフレルは研究テーマを消化したのでリストラされた。仕事が無ければ働かなくてもよい、ごく当たり前のことだ。アフレルは3時

前に早々と帰宅した。アフレル「なんだか不思議な感じだなあ」
そんなことを呟きつつ、アフレルはしばんやりする。アフレル
「…………自由か」

(88)

アフレルは仕事を達成したことへの感慨をひとしきり逡巡したの
ち、気を取り直して新たな職を探すことにした。耳たぶクリックで
TLを表示し、就業に関するページを次々と開いていく。求人側と
求職側が相互にフォローを投げ掛け合い、ベストなマッチングを模
索していくのだ。

(89)

しばらくしてヨコが買い物から帰ってきた。今夜はハンバーグの
ようだ。キッチンに向かう途中でヨコは、職探しに没頭して口が半
開きになっているアフレルを発見した。ヨコ「まあ、あなた！」
ヨコは驚きのあまり、買い物袋を落としてしまった。ヨコ「リス
トラされたのね！」

(90)

ノルコ(宇宙の果てみたいなの退屈さだよ…………) 寝るのに疲れ果
てたノルコが一階に降りてみると、そこには口を半開きにした父ア
フレルがいた。おまけに目の焦点もあっていなかった。ノルコ(な、
なににごと?) そしてキッチンの方からは…………。ヨコ「シクシク…………シクシク…………」

ツイートピア(91)

ノルコがキッチンに入ると、そこには濡れタオルで顔をおおって
泣いている母のヨコがいた。心配になったノルコは、ヨコのエプロ
ンをギュッと握ってしまった。テーブルの上には合挽き肉、まな板
の上に玉ねぎのみじん切り…………これか。ヨコ「ノルコ、お父さんが

ね……リストラされたのよ！」

(92)

それからノルコは母とハンバーグのタネを作った。あとは夜になつたら焼くだけだ。そうして部屋に戻ろうとした時ワクが帰ってきた。そしてやはり口が半開きの父を、怪訝な目つきでしばらく眺めていた。なんだか大変そうなお父さん。咳けないノルコは心の中でこう呟く。(がんばれお父さん)と。

(93)

朝。今日は金曜日で、明日はお休み。ノルコは「もう一日休んだら？」と言われたが、退屈なので学校に行くことにした。ノルコ（つぶやけないからますます退屈なの） 昨日はワクが不審者に追いかけられたというこで、ちゃんとみんなを待ってからの登校だ。ノルコ（るんるん）

(94)

ミニスカニーソ姿のルイがやってきた。くしくもノルコと同じ服装だ。目が合うと同時に火花が散った。ルイ「ノル！ 無事だったんだね！」 恍惚の笑みで駆け寄ってくるルイだが……。ノルコ（みきった！） ルイ「なにい！？」 ルイの手はノルコのスカートを狙っていたのだ！

(95)

ノルコは自身の股間に迫り来る手を手刀で切り払うと、そのままルイに抱きついた。そして膝の先でそつとルイのスカートをまくりあげた。ルイ「ひゃう！」 秘儀『スカートめくり返し』だ。ルイ「私の負けだどつ？」 そしてルイはくず折れた。スカートめくり。最近女の子の間で流行ってるらしい。

(96)

ルイ「どつやら……心配することは何もないみたいだね」 ノルコはウンウンとうなずいてから、親指をグツ。ルイ「熱は下がったんだ？」 ウンウンうなずいてグツ。ルイ「今日の給食は五目おこわだぞ？」 ウンウン、グツ。ルイ「本当につぶやけないんだね…

……」 うグツ！

(97)

いつもの穏やかな通学路だった。近所のおじいさんが道端を掃除している。ププーとクラクシヨンを鳴らしながらゴミ収集車が走っていく。オートカーが等間隔を保って道路を進んでゆき、空ではカラスがカアカアいいながら、コンビニの窓を拭くお兄さんを見張っている。今日も世界は通常運行だ。

(98)

昨日のバラエティ番組のこと。今日の宿題のこと。いつの昔のかわからないギャグ。ワク「グツツ、グツツ」 友達「ゲラゲラw」 下の学年の子の会話もいつも通り。でもノルコのクラスメートは「私もなんか風邪ぎみかも、あっ」 「あのアイドルは無口なところが、おっ」

(99)

ルイ「そんでさー、うちのオヤジの靴下がすっぱくなっちゃってさー」 ノルコはウンウンと相槌をうつ。ルイ「そっぴやノルコんところのお父さんって……あ」 ノルコ(?) ルイ「ごめん、答えようがないよね、呟けないんだし」 気にしないでと伝えるために、ノルコは精一杯の笑みを浮かべてみた。

(100)

3時限目はつぶやき史だ。いつもは寝る気まんまんの子達も、今日はしっかりクオ先生を見ている。ノルコがつぶやけなくなったことが、少なからず影響しているようだ。つぶやきの秘密を知りたいという、好奇心の目が先生に注がれている。クオ(こ、これはやりずらいんだお……！)

(101)

ノルコの顔をチラと見て、その空気を読んだクオ先生は核心となることから説明することにした。つまりバイオツITTERの仕組みについてだ。クオ「昔パソコンと呼ばれていた機械が、今は僕らの体の中に入ってるって話は前回した通りだお。今日はそこところを詳しくやっていくんだお」

(102)

クオ「人間の体はたくさんの要素で成り立っているお。赤血球とか白血球とかミトコンドリアとか細胞とかのことだお。それと同じようにして、ナノインサートイド・エレクトロ・デバイスというものが入ってるんだお」先生は、これで誰か寝るかと思ったのだが……。みんな「ざわざわ」クオ「だ、だお」

(103)

クオ「略してNED。これは顕微鏡じゃないと見られないくらい小さな電子部品で、僕らの体に大体3〜5兆個入ってるといわれているお。この部品がお互いに連携しあつて、僕らの中に一つのコンピュータを作り上げてるんだお」みんな「どよどよ」クオ（き、緊張するお……）

(104)

クオ「NEDも一種の機械だから、衝撃とかでたまに壊れるんだお。たとえば過去に、カミナリに撃たれて全身のNEDがショートしちゃった人がいたんだお。でも『リゲインスト』という薬を飲むことでちゃんと回復したんだお」そういつて先生はニッコリ微笑んだ。

(105)

だからちゃんとノルコの病気もなおるんだ、ということを理解し

しないうちに、人類の99%がNEDを持つようになったお」

(110)

クオ「そしてNED化された人間社会は、政治・経済・文化、あらゆる分野において変化して、そして今の世の中が形づくられていったんだお……」　そこでチャイムが鳴った。教え子はもちろん、全員の眠りの底におちていた。クオ「じゃあ今日はここまでだお。ちゃんと復習するおっ」

(111)

ノルコ(う、うう……今日も寝てしまったか)　そして耳たぶクリックで授業T1を開いた。インスト薬がなんたら、というところまでは記憶がある。ノルコ(ふむふむ……なるほど)　そして驚愕の事実に出ちのめされた。ノルコ(スペクタクルだなあ……現実感がないわあ!)　ルイ「ん、ノル?」

(112)

ルイ「寝ぼけてるのか?」　ノルコはじつと自分の手のひらを見つめ、そして見比べるようにルイの顔を見上げた。ノルコ(私達の中には私達の良く知らないものがいっぱい詰まっているんだ……)　そしてルイの手をギュッと握った。ルイ「えっ……?」　ノルコ(人類恐るべし!)

(113)

今日の給食は五目おこわ。ちょっと珍しい。ノルコ(もぐもぐもぐもぐ) ノルコは赤飯とかおこわとか、ずっと嚙んでたらお餅になるかなって思っちゃうタイプ。ノルコ(もぐもぐもぐもぐ) でもみんなは、ノルコが呟けないから、その代わりにやたらモグモグしてるんだと思ってしまったた。

(114)

ノルコのクラスでは5〜6人で席を作り給食をとる。ノルコの島はカズノリ、レイタ、ルイ、リン、ヤマオの6人。委員長キャラのカズノリに絡みまくるレイタに女子らが冷えた突っ込みを入れるのが定番。そして少し不思議な少年のヤマオなのだが……いや少しどころじゃない。

(115)

ヤマオはなんと生まれてから6回しか呟いたことがないのだ。これは世界的なレアケースだ。その内容は「おぎゃあ」「うにゆる」「とでもいうかと」「右の上」「暑いと?」「それがいいと」 特に4つ目の「右の上」は、学術的研究にも取り上げられたりするほどだ。何かと注目されている少年なのだ。

(116)

そんなヤマオが今、五目おこわをもぐもぐし続けるノルコをジッと見つめてるではないか！ 7度目の呟きな予感が、教室中、いや世界中に吹き抜けた。ノルコ(もぐもぐもぐ) ヤマオ(ジー) ノルコ(もぐもぐもぐもぐ) ヤマオ(ジー) ノルコ(もぐもぐもぐもぐ)

もぐ) しかし何もおこらなかつた。

(117)

レイタ「グアツテム!!」 痺れを切らしたレイタがヤマオを羽交い絞めにした。そしてふくよかなアゴの肉をタプタプ。拝みたくなるほど豊かな福耳をビーン。カズノリ「や、やめなよレイタ君……せ、世界を敵にまわすよっ」 レイタ「てめー! 今日という今日は絶対つぶやかす!」

(118)

ヤマオに加えてノルコまで眩かないので、ノルコ達の島はやけに静かだ。人一倍つぶやくレイタも今日は空回ることが多く、ついに黙ってしまった。レイ「リン、髪伸びてきたね」 リン「うん、肩にかかつてきちゃったの」 ぽつぽつと眩く二人だが……。レイタ「つまんねーの」

(119)

レイ「レイタ! あんたね!」 ルイがバーンと立ち上がった。ルイ「誰のせいでノルコが眩けなくなつたと思ってるんだ! まだあんた謝つてもないでしょ?!」 ノルコがあわててルイの袖を引くが。レイタ「しらねーよ! こいつが勝手に俺の真似してコケたんだろ!?!」

(120)

ルイ「真似じゃない、うつつたんだ! 周りのやつに引つ張られてそうなつちゃうことあるって、ウイキにも書いてあるんだからな!」 この年頃の男子が口げんかで女子に勝つのは難しい。レイタ「……んだよ、眩けないからってなんだよ!」 そう言つて走つて出て行つてしまった。

(1 2 1)

ルイ「食器片付けやがれバーカ！」 ノルコはどちらかと言えば困っていた。ルイの肩を抑えつつ首をぶんぶん振る。そして気づけばクラスの人々に対し頭を下げていた。ルイ「なんで謝ってんのさ！ もう……」 その気持ちをどう説明すればよいかわからないノルコ。出来たとしても眩けないのだ。

(1 2 2)

ひとまずノルコは座った。ルイ「ごめん、ついカツとなって」ルイは悪くない。そしてみんなが言うほどレイタも悪くない。跳び箱の件では、実はノルコにも非があった。レイタを見返したい気持ち少しはあったのだ。ノルコ(ううう) すっかり冷えこんでしまった教室の空気、どうしよう。

(1 2 3)

ヤマオ「おこわうまい」 ノルコ(！？) ルイ「え！ なに？！」 クラス中「シャベッタアアアアア！」 全世界「ギヤアアアアアアアアア！」 シャベッタアアアアアアアアアアア！」 ヤマオが……しゃべった！ こんな時に！ 七番目の眩きはなんと、「おこわうまい」だった！

(1 2 4)

ヤマオの機転(？)によって給食時間のピンチを乗り切ったノルコは、午後の授業をつつがなく済ませて家路へとついた。あの後クラスの話題は、ヤマオの7度目のツイートで持ちきりで、海外の研究者からも詳しい状況を知りたいという問い合わせが殺到するほどだった。

(1 2 5)

たぶん今も教室で、ヤマオのツイートに関するリプライが飛び交

っている。ノルコもそれに加わりたかったのだが、なにぶん眩けない身だ。ノルコ（つぶやけないって、つまんない！）　そうノルコがため息をついたその時。　謎の男「フフフ……ビバーチェ」　ノルコはゾっとした。

(126)

目の下に濃いクマのある怪しげな青年がそこに立っていた。ウネウネした黒髪で顔が半分隠れている。そして襟の高い黒のコートで全身を包んでいる。ノルコ（この人、昨日ワクを追いかけた人だ！）　特徴が一致していたのですぐにわかった。　謎の男「ふふふ、そんなに警戒しないでおくれよ」

(127)

謎の男「ああ、君はまるで声を失った小鳥のようだね」　ノルコ（知ってるの?!）　謎の男「僕は何でも知っている。そう僕は知りすぎた男なのさビバーチェ！」　男はまるでノルコの心を読んだようにそう呟き……いや。　ノルコ（この人、つぶやいてない！）　なんと彼の言葉はＴＬに映らない！

(128)

バイオツイッターが普及した現在、人は言葉を口にすればそれがそのままツイートになる。逆にツイート能力を失えば言葉を口に出来なくなる。今のノルコがその状態だ。しかしこの青年はツイートすることなく言葉を口にしている。それはつまり。ノルコ（生まれつきツイッターを持っていない人?!）

(129)

謎の青年「ふふ、それはちょっと違う」　青年は指をチツチとやり、おもむろに髪をかき上げた。ノルコ（?!?)　なんと青年には耳が無かった。あれでは耳たぶクリックが出来ない。　謎の青年「

僕はね、昔とある事情でツイートを失ったんだ」 事情はわかったが……しかし。ノルコ（私に何の用？）

（130）

謎の青年「何の用事があるのかと君は思っているね？」 ノルコ

（だから何？） 通報してしまおうと、ノルコが耳タブに手をあてると。謎の青年「君は僕を通報しない。その代わりに僕についてくる」

ノルコ（なにゆえ？） 謎の青年「僕が君の病気の治し方を知っているからさ！」

(131)

ノルコは知らない男について行くほどお尻は軽くない。ぷんつとそつばを向いてその場を後にした。ノルコ(しかし、何か気になる)特にあの失われた両耳が。そして何もかもを見通したような、あの言動が。振り返えてみると、男はちょうど曲がり角に消えていくところだった。

(132)

ノルコ(ちよつとだけ……) ノルコはいったん道を引き返し、近くのマンションの植え込みに隠れて、あの青年の動向をうかがった。謎の男「トウルツトウ、ルーララ」 やあ!」 男はクルクル周りながら通りを歩き抜け、時々通行人に唐突な挨拶をして驚かせていた。ノルコ(変な人!)

(133)

ノルコ(ただの変わった人なのかな? 本当に悪い人ならとつくに捕まってるだろうし) バイオツイッターによる監視網が徹底された今は、歩きタバコ犯でさえ一瞬で捕まってしまう世の中だ。ノルコは男が角を曲がったのを見計らうと、小走りでその後を追いかけた。ノルコ(どこに行くんだろ?)

(134)

男は太い通りから、徐々に入り組んだ住宅地へと進んで行った。ツイナビがあるので迷子になることはないが、追跡がだんだん難しくなっていく。ノルコは男の後ろ10mくらいを歩き、一戸建ての塀や植え込みに隠れながら尾行をつづけた。しかしとうとう見失っ

てしまった。

(135)

ノルコ(あれね?) あちこちキョロキョロしてみるも、どこにも居ない。そしてハツと気づく。君は僕について来る、という青年の言葉通りのことをしてしまった。ノルコ(口惜しいわ……)そして諦めて引き返そうとしたとき。「ビバーチェ」ノルコは飛び上がった。

(136)

謎の男「ほうらやっぱりついて来た！ 僕んちすぐそこだよ、カモン！」 そういつて青年はノルコを担ぎ上げた。ノルコ(！~~~~) 謎の男「ハハハ！」 男はそのまま100mほどダッシュ。その先にあつたのはなんと…… ツイッター協会の施設だった。謎の男「ただいまー！」

(137)

教会ではなく協会だ。十字架とかが立ってそうな場所に鳥の姿をしたモニュメントが飾ってある。ツイート鳥。ノルコ(あわわ……) 男は建物の中に入るとロビーのソファーにノルコを下ろした。謎の男「君はここでちょっと待つ。おばさんが紅茶を運んでくる」

(138)

男はの奥へと消えていった。どうやら何人かの人がここで共同生活をしているようだ。ノルコがどうしたものかと思案していると、お茶のポットを持ったおばさんが、たまたま通りがかった。おばさん「あら？」 ノルコがあわてて立ち去ろうとすると。おばさん「お待ちなさい！」

(139)

おばさん「そこに座つて。お茶でも飲んでいきなさい！何か事情があつて来たんでしょ？」ノルコ（困つたなあ……）話そうにも呟けないし、来たのではなくて連れてこられたのだ。おばさん「まあ、もしかして呟けない？何かあつたのね……。ともかくいったん落ち着きましようね」

(140)

おばさんは茶器とスコーンを持ってきてノルコにふるまった。お茶はハーブティーのようだ。本当は別の所に持っていくものだったのだらう。ノルコはまるで自分が、迷える子羊になつてしまつたよくな気がして、ぶるぶると恐縮してしまつた。おばさん「遠慮しなくていいのよ、どうぞ召し上つて」

(141)

ノルコはそう言われてお茶を一口。ノルコ（おいしい！）おばさん「ここはツイッター協会。世間では『ツイートピア』なんて呼ばれているわね。ツイート社会になじめない人や、問題を抱えた人達の相談にのつたり、保護をしたりしているの。あなた小学生？」ノルコはコクコクとうなずく。

(142)

おばさん「下校してすぐここに来たのね。何か帰れない事情があるのかしら？ときどき家出して行き場がない子がたずねてくることもあるのよ、ここは」ノルコはぶんぶんと首を振つた。そして建物の奥の通路を眺めた。あの男の人はどこに行つてしまつたんだらう？

(143)

おばさん「無理して呟かなくてもいいのよ。落ち着いたら少しづつ教えてくれればね」その時、あの男が戻つてきた。黒コートを

脱いで、白のカッターシャツ姿になっていた。謎の男「おばさん！ その子呟けない病気なんだよ！ 僕が思った通りついてきたから、そのまま連れてきちゃった！」

(144)

おばさん「またお前が連れてきたのかい？ これで何人目か……まあ仕方ないわね」 ノルコ(また?) 謎の男「それよりおばさん！ またユウタがふさぎ込んでるよ」 おばさん「そうだよ、いま昼のおやつにしようと思ってただけ」 謎の男「よし、じゃあみんなでお茶しよう！」

(145)

謎の男「さあさあ！ こっちこっち！」 男はノルコの手を引っつかむとグイグイ引っ張っていく。謎の男「おばさん、お茶とお菓子もってきてね！」 おばさん「ちよ、ちよとお前！ お待ちなさい！」 男は通路の奥の部屋を開けて中に飛び込んだ。謎の男「友達を連れてきたよ！」

(146)

部屋の中にはワクと同じくらいの歳の少年がいた。床の上に座りこんで、うつむいている。視線の先には2体のBOTが置いてあった。猫型BOTと犬型BOTだ。二人が入ってきて少年は微動だにしない。遅れておばさんが来た。おばさん「やれやれ、まったくこの子は……」

(147)

おばさん「ごめんねお嬢ちゃん、この人ここの職員なんだけど、ちょっと変わったところがあつてね……」 男は少年の側にしゃがみ込んで話しかけた。謎の男「さあ、BOTばかりみてないで、僕らとお話するんだ！」 少年は静かに首をふり、そしてつぶや

く。ユウタ「リッチちゃんが咳かない……」

(148)

ノルコ(リッチちゃん?) 犬型BOT「イタイノ? クルシイノ?
? ダイジヨウブダヨ……」 猫型BOT「……」 犬型BOT「
ヨシヨシ、ココガイタイノ? ヨシヨシ」 猫型BOT「……」
リッチちゃんとは猫のBOTのことなのだろうか? ノルコはなぜだ
か胸が苦しくなってきた。

(149)

ノルコはおばさんの顔を見た。おばさん「まあ、色々とねえ……」
どうやら複雑な事情があるようだ。おばさん「それよりホウ、
このお嬢ちゃんことを教えて欲しいのだけど」 ホウとは謎の青年
の名前であるらしい。ノルコも早く帰りたいのでそうして欲しか
った。だが。ホウ「待って」

(150)

犬型BOT「オトモダチ、キタノ? シャベルノ?」 猫型BO
T「……」 犬型BOT「……」 猫型BOT「……」 犬型BO
T「……」 猫型BOT「……」 ユー君「ユウタ「!……リッ
ちゃん!」 猫型BOTが呟いた。そして犬型BOTの名前はユー
君。つまりユウタの分身なのだ。

(151)

猫型BOT「ユー君」 犬型BOT「リッチちゃん、ヨシヨシ」
猫型BOT「ユー君」 犬型BOT「モウイタクナイノ? ヨシヨ
シ」 猫型BOT「ユー君、ユー君、ユー君」 突如、少年の瞳に
涙があふれた。ユウタ「うっ、うわぁっ、うわぁぁぁぁぁあ
あぁ!……!」

(152)

ユウタ「ああああああ!!」　ホウ「ユウタ君!」　ホウは咄嗟にユウタを抱きしめた。そして一緒に泣き始めた。ノルコとおばさんは、わけも分からず立ち尽くすのみだった。やがて。ホウ「ちよつと待ってるんだ!　すぐ楽にするよ!」　そういつてホウは部屋を飛び出していった。

(153)

ホウはすぐに戻ってきた。なにやら旧式のタブレット端末を持ってきて、ユウタの前にかざした。おばさん「あんたそれは!」　ホウ「今こそこれを見せる時なんだ!」　見せるつていつたい何を?　ノルコはだんだん怖くなってきて、足がすくんできた。少年の慟哭がただ事じゃなかったから。

(154)

ホウ「ノルコ。君はいま僕に説明を求めている」　ノルコ(だから何なの!?)　ホウはタブレット端末の電源を入れた。そこに表示されているのはTLのようだ。しかしTLは、見たことも無いほどの超高速で流れていた。ホウ「これは、グローバルタイムライン、GTLだ」　GTL?

(155)

ホウ「この世の全てのツイートが流れるタイムラインだよ!」　名前は聞いたことがあったが、見るのは初めてだった。そして少年は泣き続けていた。ホウ「さらにこれがパーソナルタイムライン、PTLだ」　そういつてスイッチを押す。すると今度は、訳のわからない暗号の激流が表示された。

(156)

PTL?　そんなものは聞いたことがない。　ホウ「PTLは、

その存在が公に知られていない。個人情報をも分に含むもの、というより個人そのものだから」　ホウはノルコの顔をキツと見つめて言った。ホウ「そしてさらにその上位TLが存在する。それが……グロスオブPTLだ！」

(157)

グロスオブPTL、何だそれは？　ノルコはもうわけがわからない。そしてふと気づいた。ユウタが泣き止んでいるのだ。そしておそらくユウタ自身のPTLが表示されてるのであるうディスプレイを、ポーッと覗き込んでいるのだった。ホウ「グロスオブPTL。それはつまり、神のTL……」

(158)

ホウ「神のTLは全ての苦しみを癒す。全ての孤独をあがなう。そして、この世の全てを見るものに教える！」　そう言つてホウはスイッチに指をかけた。おばさん「けれどホウ！　それを見せたらその子もお前みたく……！」　ホウ「ただ今この子に必要なのはこれなんだ！　ノルコ、君も見るかい？」

(159)

ノルコは直感的に理解した。このグロスオブPTLこそが、ホウがノルコの病気を治せると言った理由なのだろうと。　ノルコはディスプレイを見つめた。呪文のように暗号化されたTLだ。ホウがスイッチを押せば、そこに全世界の人間の意志が、暗号化されて表示されるのだ。

(160)

ノルコは咄嗟に両目を手で押さえた。見ない、絶対に見てはいけない。咳けない病は早く治したいけど見ちゃいけない。戻れなくなる。そんな気がする。　ホウ「フフフ……そうだね、それで良いん

だ、君は」 ピツとスイッチが押される音がした。数秒してもう一度ピピツと音が鳴った。

(161)

ホウ「もう目を開けて大丈夫だよ。お茶にしよう！」 ノルコが恐る恐る目を開けると、少年ユウタの表情が見違えるほどに明るくなっていった。ユウタ「リツちゃん……いつでも一緒なんだね……もう痛くないんだね！」 その代わりにおばさんが、顔を抑えてシクシクと泣いていた。

(162)

ユウタは驚くほど元気になり、お腹がすいたと言ってお菓子をねだってきた。4人はロビーに戻ってスコーンを食べ、紅茶を飲みながらお話をした。ノルコは聞いているだけだったが、ユウタが幼馴染みのリツちゃんの事をあまりに楽しそうに話すので、ついつい顔がほころんでしまった。

(163)

ノルコの事情を理解したおばさんは「あやうく人さらいじゃないか！」と、ホウを叱責した。ホウは「すべてはGPLTの思召しさ」といつてとぼけた。どうやってホウがGPLTを発見したのか？ そしてユウタの幼馴染みに何があったのか？ ノルコは聞かないでおくことにした。早く帰らねば。

(164)

ユウタ「また遊びに来てね、お姉ちゃん！」 ノルコは3人に手を振りその場を後にした。そして家に向かいつつ色々と反省する。今日起きたことをお父さんが知ったらきつと酷く怒られる。お父さんは普段はアシだけど、怒ると本当に怖いのだ。ノルコは想像してブルブル震えた。

(165)

道路を横断するため歩道橋を渡るノルコ。呟音市の光景が目の前
いっぱい広がる。手を繋いで買物に行く親子。道路を行き交う自
動車の流れ。マンションの影からちよこんと覗く、あの協会のツイ
ート鳥。いつもと同じ景色のはずなのに、いつもと違う景色に見え
る。ふとノルコはそう思う。

(166)

不意に、ノルコの瞳に一筋の雫が伝った。ビククリして思わず袖
で拭う。ノルコ(今日の私、なんだか変……) 帰ろう。ノルコは
強くそう思う。暖かいご飯と優しい家族が待ってる自分の家へ。ノ
ルコはキツと前を見て、静かな微笑みに満ちる街角を、一目散に駆
けていった。

ツイートピア(番外編)(前書き)

震災に向けて。

ツイトピア（番外編）

（1 i）

話は3年前に飛ぶ。21世紀も終わろうとしていたある日、東京湾の沖合い200kmの地点でマグニチュード8の地震が起きた。太平洋湾岸に位置するノルコが住む岬音市は、激しい横揺れの後に大津波に襲われたのだ。

（2 i）

ノルコが学校から帰宅した直後だった。ノルコは母のヨコと、当時まだ保育所に通っていたワクと身をよせあつて地震に耐えた。直後にアフレルからツイトピアが来た。アフレル「大丈夫か！」 そうして安否確認を済ませると、ノルコ達は歩いて避難場所の学校に向かった。

（3 i）

父アフレルの職場は太平洋湾岸に位置する研究所だった。鉄筋コンクリート造の研究所は、津波が来た際の避難場所に指定されていた。アフレル達職員は屋上に上がり、一切のツイトピアを伏せて退避困難者の声を探った。

（4 i）

研究所から500mほどの個人住宅に住むお年寄りが、徒歩で避難していることがわかった。津波到達まであと15分という速報が緊急ツイトピアされていた。間に合わないかもしれない。警察も消防も間に合いそうに無い。アフレル達は直ちに救出作戦を立てた。

（5 i）

大至急、車を回すようオートカーコントロールに申請してみるもパニック状態だった。そこで自衛隊の予備役だった研究員の一人が、自ら車を運転して現場に向かうことになった。その間アフレル達は、津波の状況を調べて知らせることに全力を挙げるようになった。

(6 i)

沖合いに出ていた漁船は、全て波に対して船を立てていたが、漁港付近にいた1隻が波を乗り越えられず転覆した。数名が波に飲まれて見えなくなった。連絡を受けていたレスキュー隊がスクランブル出動し、ヘリコプターによる決死の救助を開始した。

(7 i)

出発した研究員がお年寄りの元にたどり着き、連れて戻ってきてまもなく、津波の第一波が到来した。研究所1階のガラスを突き破り、2階の上まで水が押し寄せた。高さ4 mの大津波だった。アフレル達は身を寄せ合い、海へと去って行く引き潮をい眺めながら、いま生きていることに感謝したのだった。

(8 i)

津波が完全に引くころには、全ての人の安否状況が確認された。犠牲者が波に飲まれる際のラストツイートは丁寧なフィルタリングされたが、間に合わず見てしまった人が数人いて、後にカウンセリングを受けることになった。ノルコ達は避難場所の体育館からアフレルと連絡を取り、互いの無事に安堵した。

(9 i)

体内ツイターの普及により、自然災害による被害は最小限に抑えることが可能になった。しかし、今なお救いきれない命は存在する。時代がどんなに豊かになっても、技術がどんなに進展しても、人々の生きるための戦いは終わらないのだろう。

(1 0 i)

翌日の昼には岬音市は平常通りの活動にもどった。ノルコのクラスでは地震に関する臨時講習が開かれ、そこでノルコは父の職場の人達が、逃げ遅れたお年寄りを救ったことを知った。ワクはその日一日、父親自慢ツイートをして不謹慎だと母のヨコに怒られたりした。

(1 1 i)

その夜ノルコは犠牲になった人のために何が出来るのかを考えた。でも答えなどあるわけがなかった。そんなノルコに父はいつた。「祈るしかない」と。祈ることで何が救えるのか、今はまだわからない。でもノルコは祈ることにした。大きな明るい月の夜空に向けて未来のために。

(167)

ノルコは家につくと、静かにドアを開けてソートと中に入った。いま父に見つかったらきつと「殺すぞ！」と言われてしまう。ソートと、あくまでもソート。アフレル「おかえり、ノルコ」居間からノツソリと父が現れた。ノルコはゾートとした。

(168)

アフレル「遅かったね」そう言つて父はノルコの肩を掴んだ。以前、ノルコが黙つて門限をやぶつた時、父アフレルはこう言つたのだ。アフレル「誰かにノルコを殺されるくらいなら、いま父さんが殺してやるぞ！」と。どんだけ心配したんだらう。

(169)

帰宅が遅れた言い訳をしようにも、ノルコはつぶやけないのだった。小刻みに顔を振つてオロオロしていると、父は出し抜けにこう言つた。アフレル「ヤマ才君がしゃべつたんだつてね！」ノルコは一転して顔を縦にウンウン振つた。ヤマ才君は本当に偉大だ。

(170)

どうやらヤマ才君が七度目のツイートをしたことは、父アフレルが仕事探しを中断してしまうくらいの衝撃をもっていたらしい。ノルコの帰宅が遅れた理由もそれだと、すっかりアフレルは信じ込んでいて、変な人について行つたとは微塵も思つてないようだ。

(171)

部屋に入つてすぐヤマ才君のTシャツを開く。相当なりプライがヤマ

才君宛てにあつたはずだが、それでもツイート数は七つのままだった。『おこわうまい』 ヤマ才君はこのツイートでノルコを助けてようとしてくれたのか？ ノルコはヤマ才君に聞いてみたかったけど、残念ながら咳けないのだった。

(172)

そのころ、耳のない青年ホウ（本名キナシ・ホウジ）は協会の詰め所でタブレット端末をいじっていた。調子が悪いようだ。ホウ「画質がとつてもバルラツチョ」 おばさん「そりゃ何年前の代物だね」 9.5インチの薄型。ざつと半世紀前の代物だ。

(173)

ホウはバイオツイッターを持っていない。そのため、こうして旧式のタブレット端末に、オリジナルの電子回路を組み込むという無茶な手法でもってバイオツイッターをエミュレートしているのだ。今日やっと協会のコネで量子オーバードライブ回路を手に入れて組み込んだところだ。ホウ「ビバーチェ！」

ツイートピア(174)

グロス・オブ・パーソナル・タイム・ライン

ホウは設定を終えると、GPTLを表示させた。全世界の人間の心の声が、おびただしい速度で流れていく。その様子はまるでナイアガラの激流のようだが、それでも前よりスクロールが滑らかなになった感じがする。

(175)

ホウ「クルミナーレ！」 イタリア語で絶頂を意味する言葉が発したのち、ホウは癲癇の発作を起こして気絶した。おばさん「もう、いわんこつちやない」 おばさんは慣れた様子で、ホウの足を引っ張って部屋まで運んで布団をかけた。ホウはその布団の中で、又ク又クと眠りについた。

(176)

おばさん「まあ頑張りなよ、私達の英雄さん」 そう言っておばさんは、耳のないホウの頭を撫でて退室する。ホウはムニヤムニヤ言いながら、まるで子供のような寝顔で眠っている。そして事実、彼はいま子供の頃の夢を見ていたのだった。

(177)

ホウは捨て子だった。ホウを育ててあげた両親は彼にツイッター削除の薬を打ち、^{アンインストール}万が一にも耳たぶクリックが作動しないようにと耳まで切り落とし、そして道端に捨てたのだった。彼は運良く協会に拾われたが、ツイッター能力は戻らなかった。

(178)

子供の頃のホウは、ツイッターを失っていたためか、まったく他人と交流しなかった。ありとあらゆるコミュニケーションを拒絶し、部屋にこもって本を読むばかりだった。そしてある日、思いついたように古典電子技術の勉強を始めたのだ。

(179)

おばさん(当時はお姉さんだった)をはじめ、協会の人たちはホウの変わりように困惑した。彼は彼が学ぶために必要なあらゆるツールを要求してきた。そしてやがてその意図がわかった。彼は彼なりの手段でツイッターを取り戻そうとしていたのだ。

(180)

彼が古典的な電子機器によるツイートを取り戻したのは11歳の時だった。バイオツイッターのネットワークと、昔ながらのワールドワイドウェブの間に接続を確立することは、専門家でも難しいことだ。しかし彼は自力でそれを成し遂げたのだった。そして彼はさ

らに独自の研究を続ける。

(181)

一人一人の人間をノードとして自然生成されているバイオツィッタ―ネットワークだが、ホウはその中にコアとなる領域を見つけた。すべてのツィットが必ずその場所を通るといふポイントだ。彼はその場所を「セントラル」と名づけ、そこに接続するためのプロトコルを作った。

(182)

その過程でホウはパーソナルタイムラインを発見し、そしてまた神のTLとでも言うべきGPTLを発見した。そして、そのストリームを眼にした瞬間、彼の世界の全てが変わった。光が弾け飛び、鐘の音が鳴り響き、限りない幸福感と万能感に包まれたのだ。

(183)

ビバーチエ イタリア語で「快活」を意味するその言葉が、ホウの口癖になったのはそれからのことだ。その後ホウは、自分で開発したGPTLディスプレイを使って、心に傷を持った多くの人を救ってきた。あたかも奇跡のように。それが彼が「英雄さん」と呼ばれる所以だ。

(184)

ホウ「うっん……」 ホウは30分ほどで眼を覚ました。起き上がって軽く腕を回す。首をひねる。立ち上がって屈伸運動をする。ホウ「オウエイ」 どうやら調子が良いようだ。そして彼は、本来彼が知るはずもないその言葉を、最大限の確信をもって口ずさんだのだった。ホウ「おこわうまい」と。

(185)

ノルコはカレーライスをぐちゃぐちゃにする人とだけは結婚したくない主義。ワク「チェーンジ！」　ワクはもう2杯目のおかわり。そして父アフレルは落ち着かない様子でキョロキョロ。ヨコ「どうしたのあなた？」　アフレル「いやーその」　ワク「チェーンジ！」　アフレル「食うの早いなあワク」

(186)

アフレル「えーとだ、父さん思ったより早く暇になっちゃって、明日あたりどっか遊び行こうかなって」　そしてノルコをチラと見る。まだノルコのツイートは治っていないのだが。アフレル「どこか行きたいところある？」　するとノルコはすかさず手をあげた！　ノルコ「\$あ；r1」　そしておろした。

(187)

アフレル「ノルコ？」　ノルコは「てへっ」と頭を叩くと、メモ用紙をとりだした。そこにペンで「東京のおうち」と書いた。アフレル「東京？」　ヨコ「あんな田舎に？」　ワク「チェーンジ！」　そこでノルコはテーブルの上の手をおき、カタカタと何かを打つしぐさをする。アフレル「あっ、そうか！」

(188)

ヨコ「ええ？　なあに？」　アフレル「ノルコは頭がいいな、その手があったな」　と言ってノルコに向かってグツ！　ノルコもグツ！　ヨコ「??」　アフレル「いけばわかるさ。ということでは東京の爺さん婆さんに会いに行くぞ！」　ワク「チェーンジ！」

げふっ」「ヨコ」「ワク、食べすぎよ!」

(189)

翌日、一家はアフレルの実家がある東京に向かった。東京は喧音
市から車で1時間ほどの場所にある大田舎だ。かつて日本経済の中
枢だった街は、超高層だんだん畑と首都高速道水田、大地下トンネ
ル促成栽培場からなる食料基地になっている。ヨコ「いつ見てもす
ごい街」誰がこうなることを想像しただろう。

(190)

アフレルの両親、ノルコにとっては祖父母にあたるイズミ・クメ
ゾウとウメナ 名前から察する通りあまり仲はよくないのだが
は、トヨスの造成地に住んでいて、かぼちゃとかとうもろこしと
かを作っている。ときどきモンゼンナカに繰り出してオールしたり
する、ハイカラな人達だ。

(191)

青々と風になびく稲草の海を抜けて車は走る。巨大なドーム型集
光屋根をくぐり、色とりどりの果実がゆれる高層だんだん畑を見送
る。やがて潮の香がかすかに漂う、見晴らしの良い畑作地にたどり
着く。見渡す限りの畑のなかに民家が点々と建つそのなかに、アフ
レルの実家はあるのだ。

(192)

クメゾウ「おーい、うおーい!」遠くで手を振っているのはク
メゾウ爺さんだ。農作業の途中で抜け出てきたらしい。迷彩柄の
ニツカポツカに麦藁帽子、トレードマークのサングラス。アロハシ
ヤツから伸びるごつごつした腕も、シワのよった顔も、真っ黒に日
焼けしている。クメゾウ「よおーきたのー!」

(193)

ノルコとワクは車を飛び降りると、まっしぐらにクメゾウおじいちゃんの元に駆けていった。クメゾウ「いよう！ チビっこども！」
ワク「イエア！ グランパ！」 といって飛びつくワクを、クメゾウ爺は軽々と持ち上げた。力仕事でこぶ立った手、その膂力は老いてますます盛んなのだった。

(194)

クメゾウお爺さんはノルコ達の知らない遊びをたくさん知っている。まるで歩く玩具箱のような人なので、ノルコもワクもおじいちゃんが大好きだ。本当はノルコも「ヘイ！ ジーじ！」と言って飛び込みたかったのだが、つぶやけないことの気後れが少しあったりした。

(195)

クメゾウ「んん？ なんじゃノルコ？ さつさと来んかい！」
そういつてホレホレとワクを担いでない方の腕を差し出す。ノルコは“うん！”とうなずくと、その腕に飛びついた。おじいちゃんはノルコの体を持ちあげて、あつという間に肩の上に担いでしまった。

(196)

アフレル「父さんただいま」 近くの空き地に車をとめたアフレルがやってきた。クメゾウ「おー、よく来たな！ 仕事は見つかったか？」 アフレル「いや、それがまだ」 クメゾウ「なんだ、まだニートなのか！」 アフレル「に、ニート？」 それはいったいいつの言葉だろうと、アフレルは首をかしげた。

(197)

クメゾウ「はっはっは、まあ今では遠い昔の言葉だな！」 ヨコ「うふふ、昔の方は何かと大変だったんですよねー」 クメゾウ

「うんむ、そうなじやぞー。ワク、ノルコ。母さんは相変わらずベ
ッピンさんだのー、うちのヒキニートにはもつたないわ!」 ア
フレル「ひ、ひどお!」

(198)

ヨコ「うふふ、私の旦那はヒキニート。うふふふ。ところで、お
義母さんはお畑に?」 クメゾウ「ああ、かぼちゃ畑の雑草抜いと
るわい、いって手伝ってやってくれるかのー。さあチビども! 今
日はなにして遊ぶかな! Ha Ha Ha!」 そういって二人を担
いだまま家の中に入っていつてしまった。

(199)

ヨコが家の裏のカボチャ畑にいくと、ウメナがせつせと除草をし
ていた。紫色のレギンスにシルクの長袖シャツ。ひさしの長いピン
ク色のバイザーをかぶり、首の日焼けを防ぐためのスカーフがなん
ともお洒落。そのシャンとした姿を見るたびにヨコは「あんな歳の
とり方をしたいもだわ」と思うのだ。

(200)

ヨコ「お義母さん、来ました」 ウメナ「よお嫁。じいさんはど
こ行ったい?」 ヨコはさりげなく手袋をはめつつ。ヨコ「お家へ
ウメナ「あんのくそじじい! 野良仕事を嫁にまかせて孫と遊ん
どるんかい、ドタワケ!」 と言いつつカマを手に取り立ち上がる。
ヨコ「いつものことですね!」

(201)

ウメナ「いつかキンタマ刈り取ってやるわ!」 と言いつつカマ
をぶんぶん振るウメナさん。ウメナ「ところで用意はしてきてるん
だね?」 ヨコ「はいもちろん」 手袋の上に腕抜きをはめている
ヨコの装いは、もうばっちり農作業仕様になっていた。ウメナ「ふ

んっ、イビリがいがいなね！」

(202)

太陽の下、草をむしって汗流す。薬剤は使わないポリシーだ。大
変だが、一つ一つこだわりのこもった野菜に育つ。ヨコ「実も大き
くなって」 ウメナ「そろそろ収穫できるね」 ヨコ「毎年楽しみ
なんですよ、お義母さんのカボチャ」 ウメナ「世辞はいいから手
を動かし」 口は悪いが本音では喜んでいたり。

(203)

ウメナ「ノルコの調子はどうなんだい？」 ヨコ「まだ治る気配
は……。お医者さまが言うには有機パラメトリの再結合がなんとら
……。」 ウメナ「細かいことはログを読んだからいいよ、友達とう
まくいってないとか無いんだね？」 ヨコ「それはありがたいこと
に、みんな良い子たちで」 ウメナ「うむ」

(204)

ウメナ「あの歳の頃が呟けないなんてのは、しんどいだろうねえ」
ヨコ「ええ、時々無理やり呟こうとしたり。こつちも何とか察し
て代弁してあげるんですけど……」 ウメナ「ノルコはもつと歯が
ゆい思いをしているはずさ」 ヨコ「ええ」 ウメナ「早く治ると
いいんだけどねえ」

(205)

ヨコ「そういえば、ノルコが何かを思いついたみたいで」 ウメ
ナ「ん？」 ヨコ「呟けなくても呟ける方法とか。でも教えてくれ
ないんですよ、アフレルさんは気づいたらしんですけど」 ウメナ
「呟けなくても呟ける？ なんだいそれは？」 禅問答のようなそ
の問いに、二人はそろって首をかしげた。

(206)

クメゾウ「ゲンじいさんのパソコンなら仏間の押入れじゃ」ノルコはアフレルとともに仏間にいた。アフレル「まずは仏様を拝もう」そして仏壇のろうそくを点け、遺影をとりだす。先祖代々の写真の中からアフレルは、二つを選んで仏壇に立てた。アフレル「お爺さんお婆さん、遊びにきたよー」

(207)

羽織袴のいかめつらしい表情をした人はアフレルの祖父で、ノルコにとっては曾祖父にあたる「イズミ・ゲン」お爺さんだ。そしてその隣、白いワンピースに麦藁帽子の若い女の人は「イズミ・ミチコ」ノルコの曾祖母にあたるが、若くして亡くなったためアフレルも会ったことが無いのだという。

(208)

チーンと仏鈴をならし、二人は手を合わせた。アフレル「よし、じゃあ探そうか」仏間の押入れを開けると、いつの昔のものかわからない電気機器がホコリをかぶった状態で詰まっていた。このキラキラした丸いのはDVDと言らしい。ノルコ「??」アフレル「それはノルコにはまだ早いな」

(209)

ややしばらくして、押入れの奥から一台のノートパソコンが出てきた。二人ともホコリまみれ。クメゾウ「だがパスワードがかかるとるぞい。ほれ王手！」どうやらワクと将棋をして遊んでるらしい。ワク「サンドウィッチ！リバーズ！」クメゾウ「うお？

！それはオセロじゃ！」

(210)

誰も知らないゲン爺さんのパスワード。でもノルコは覚えていたのだ。4つか5つのころ、ノルコはお爺ちゃんの膝の上で、PCを起動させるところを見ていたのだ。ノルコはゲンお爺さんにこう聞いた。ノルコ「これなんてよむのー？」　ゲン爺さんは言った。ゲン「ツイト、ウイズ、ブレイビー」

(211)

ノルコ「ぶれびー？」　幼い頃のノルコに、その意味がわかるはずがなかった。しかし今ならわかる。そしてノルコ自身の名前と生年月日、それがゲン爺さんのPCを開くパスワードだ。「twee t | w i t h | b r a v e r y | 5 0 5 n o r u k o」　ノルコはただたどしい手つきで入力し、そしてリターンキーを叩いた。「ウエルカムWINDOWS」

(212)

ウィンドウズXYZが起動され、背景画面に3人の赤ちゃんが写し出された。ゲンお爺さんの3人の孫の写真だ。つまりそのうちの一人はアフレルということになる。とぼけた口元が特徴的だ。ノルコ（お父さんかわいい！）　お父さんに言ったらどんな顔するかな？　ふとノルコはそう思ったり。

(213)

アフレル「この赤ん坊はいつたい誰なんだろうね？」　とかやっぱりとぼけつつ。アフレル「ノルコのお目当てはこれだろ？」　そう言っつてさざ波のような形をしたアイコンを指差す。ノルコ（ツイーブ……これだ！）　そしてアイコンをダブルクリック、ついクセで耳たぶクリックしそうになる。

(214)

ツイッターver12.4 これは当時最先端のツイッター用ブラウザだ。フォロワー同士のネットワークを図式化したり、自分のツイートがどう波及していったかを解析する機能があり、かつ直感的に使いやすい構成。バイオツイッターの普及によりその役目を終えたが、今でもご高齢の方が使用していたりする。

(215)

ツイッターの最終バージョンである12.4は、バイオツイッターとの接続もサポートしている。よってこのブラウザを使えば、咳けない病気にかかったノルコでもツイートが出来るのである。しかし、その設定方法は古の彼方に忘却されてしまい、知る者は少ない。

(216)

ひとまずノルコは適当に何かツイートしてみることにした。ゲン「あーあー」 当然だが、ゲンお爺さんの名前で咳かかれてしまう。ノルコ(ルイちゃんに手伝ってもらおう) そしてアフレルの助言も得ながら、何とかしてルイのプロフィールを検索し、そしてフォローした。

(217)

ノルコはルイに何か話しかけようと、たどたどしくキーボードを手にかける。アフレル「jee」 アフレルが覗き込んでいる。ノルコ(うーん) 書いている途中の文章を見られるのって何だか気恥ずかしい。アフレル「ん？」 どうやら気づいたようだ。アフレル「お父さん畑を手伝ってくるよ！」

(218)

空気を読む父をもったノルコは幸せ者だ、そう思いつつ文章作

成にとりかかる。ゲン「ルイちゃん。わたしノルコ」しかし反応がない。ルイのステータスは読書中になっている。たぶん自室でマンガを読んでいる。しばらくして。ルイ「ど、ど、どちらさまででで?!」明らかに困惑している。

(219)

ノルコが状況を説明しようと文章をつづっていると今度は。カイザワ「ふ、ふおおお……」ヨシシゲ「げ、ゲンじいさんが……」ギンジ「黄泉帰りよったあああああ!」なんだが大変なことになってきたぞ。ノルコはだんだん焦ってきて、おでこに冷や汗まですにじんできた。

(220)

ゲン「えと、私ゲンおじいさんのホームページ、のることいいます」焦ってキーボードを打ったのでメチャクチャになってしまった。カイザワ「うおおー! なんまんだー! なんまんだー!」ヨシシゲ「どーまんせーまん!」ギンジ「ベントラー! ベントラー!」ますます大変なことに。

(221)

ノルコ「ゲンおじいさんおpcかりてます!」必死に事情を説明するも埒が明かない、お父さんと呼ばうと思ったその時。ルイ「ノルコなの? お爺ちゃんのpcからツイートしてるの?!」ノルコはそのリプライをすぐさまリツイートした。ありがとうルイちゃん。

(222)

カイザワ「おお! そういうことか!」ヨシシゲ「ゲンさんのお孫さんとな!」ギンジ「とうとうゲンさんがお迎えにきたのかと思っただわwww」ノルコはホッと胸をなでおろす。ルイ「いき

なり95歳のお爺ちゃんから呟かれて何事かと思つたよ!」

(223)

ゲン「めんごめんg」 ルイ「いや、別にいいんだけどね。とにかく呟けるようになったわけだ」 ゲン「でもmんどの、キー打つの、へんかんも」 ルイ「え?」 カイザワ「キーボードなんぞよく打つのー、わしらでもよう使わん昔の機械なのに」 ルイ「ええ?」

(224)

ルイ「ごめん、ちょっとググるわ」 キーボードなんて古代の代物は、最近では殆ど知られていないのだった。ゲン「お爺ちゃんの上でめてたから」 ヨシシゲ「賢いのう! 5つかそこらだつたらうに」 ギンジ「ゲンさんに似たのだらうな、あの人も切れ者であつた」

(225)

ルイ「ノル……調べたけど、君は半世紀も昔の機械を使っているのかね」 ゲン「うぬn」 ルイ「??」 ゲン「まちがい、うんうん」 ルイ「そ、そう……。まあ大変そうだけど頑張つて」 ゲン「んはnを二回押すと出る」 ルイ「へええー、なんか大変そうだけど面白そうでもあるね」

(226)

ゲン「ゲンお爺さんはこれでしゃべるより早くしゃべつてた」 ヨシシゲ「まあ、昔の人はみんなそうだったのう。ブライントタッチといつてな、手元を見ないでキーを打つんじや」 ノルコは試しに、キーを見ないで打つてみた。ゲン「あwse d r f t g y ふじこ」
想像を絶する技術!

(227)

ゲン「むりゃだー」 ヨシシゲ「まあ、今はもう失われし古代の技である」 ノルコは画面の前でフウと一息ついて、そして何を呟こうかなと考える。ノルコ（初対面のおじいちゃん達と何を話せば良いのか？） そのとき。ウメナ「お、お義父さん!?」 ヨコ「どうして呟かれてるんです?!」

(228)

ノルコ（あわわ…… やっぱりお爺ちゃんの名前で呟くとみんなを驚かせちゃう……） ノルコはこの作戦はやっぱりあきらめようと思った。知らない人に迷惑をかけてしまう。「私はゲンお爺ちゃんのお孫のノルコです、みんなを驚かせるのでやっぱり呟くのはやめます」 そうツイートしようとした、その時。

(229)

アシオ「ゲン爺さんが生き返ったと聞いてやってきました!」
サトコ「ああ? ゲンさんがよみがえったって? ウメナとうとうイカれたかい?」 イシゾエ「いやあ、どうやらゲンさんのお孫さんのようだあ」 ヨネクラ「え? ゲンさんの孫さんって男ばっかじゃなかったけ?」

(230)

ルイ「ゲンさ…… じゃなかったノルコ! 私の呟きリツイートして! みんな混乱してる!」 アフレル「ノルコ、お父さんのツイートもだ」 ヨコ「ああ、なんだノルコだったの」 ウメナ「へえ、うまいこと考えたもんだね、義父さんのPCまだ生きてたんだね」

ツイートピア(231)

ステイブン「oh! ゲン! ナツカシイね!」 チョ「わー、

何だか懐かしいクラスタが沸騰してきてる！」 ケンイチ「ゲンさんって確か、その道では一角の人だったよね。まとめウイキないかな」 ジブ「何だ何だ！ 祭りか！」 アゲオ「よくわからんがめでたい、酒だ！」

(232)

ノルコの意味とは関係なく、ゲンお爺さんと付き合いがあった人や、当時の世相を知っている人たちが勝手に集まってきて盛り上がりつつしまってる。まもなく「#FUKKASTU | GENN」というハッシュが立ち上がり、飲めや歌えやの大騒ぎになってしまった。ノルコ(うーん何だかもう、どうでもいいや！)

(233)

どんちゃん騒ぎを横目に見つつ、ノルコはゲンお爺さんのプロフィールを見る。フォロワー数750に対し、フォロワー数は4000人程度。ノルコの間感としては少な目な方だ。故人とはいえ、お歳を召した方ならフォロワー数が数万に達していてもおかしくない。

(234)

ノルコ(本当に大事な相手しかフォロワーしない人だったんだ)当然、その550人の中にノルコも含まれている。最後にフォロワーした相手から10番目にはワクが登録されていた。PC版のツイッターなので、使用者が亡くなってからもTLはどんどん進行していくわけだ。

(235)

ゲンお爺さんのTLを流れるどんちゃん騒ぎを眺めていると、ノルコは何だか、まだゲンお爺ちゃんが生きているような気がしてきた。まだ小さなノルコを膝の上にのせ、シワシワの手でマウスを操作するお爺ちゃんが、今ここにいるような、そんな気が。ノルコ(

お爺ちゃん……元気にしてるかな？
(

(236)

ゲンお爺さんの最後のツイートは家族も知人もみんな知ってる。もちろんノルコも知ってる。ゲン「喜びは光、すべてに感謝」 麻酔でぼんやりとした意識の中、お爺さんは最後の力を振り絞ってそう呟いた。そして翌朝、静かに息をひきとったのだ。

(237)

ノルコはゲンお爺さんのTLを遡っていく。お爺さんがツイッターを始めたのが12歳の時。それ以来のツイートが全て詰まっているので、どんなに頑張ってもその一部しか見ることが出来ない。よほど根気よくTLを遡らないといけない。だからお爺さんの若い頃の話は、誰にもわからないのだ。

(238)

ノルコが聞いた限りでは、ゲンお爺さんはちよつとした論客だったそう。昔から社会問題に強い興味をもっていたお爺さんは、バイオツイッター移行期の混乱の中で精力的な活動を行った一人なのだ。ノルコ(昔はバイオツイッターなんてなかった) ノルコはその時代をうまく想像できなかった。

(239)

時は2030年代。はじめ、バイオツイッターは海外の一部で、ひそかなブームを起こしているだけのものだった。しかし時の3大国、アメリカ、中国、インドにおいて本格的な普及が始まると、世界の情勢は大きく変わり始める。

(240)

当初、日本やEU諸国では導入反対の声が大勢を占めていた。人が、従来の人としての形を失ってしまう。そんな危機感が強かったのだ。しかし経済活動にバイオツイッターが用いられるようになる、たとえ反対論を唱える人であっても、それを使わざるを得ない状況が生じてきた。

(241)

バイオツイッターを導入するか否か。その問いに対するゲンの答えはこうだった。ゲン「導入は不可避な流れだ。だから賛成とか反対とか言っていないで、導入に向けたガイドラインを考えるべし」そしてこうつけ加えた。ゲン「しかし私自身は決してバイオツイッターを使用しない」と。

(242)

バイオツイッターは量子コンピューターによって開発された。大規模量子演算機が膨大な計算の末に導き出した究極のコミュニケーションツールで、その機能には未解明な部分が多々あった。ゲン「バイオツイッターは遺伝するかもしれない」当初は一笑に伏されたその発言は、後到的中することとなる。

(243)

『このままでは世界は、全ての人間が監視しあう究極の監視社会、デリストピアになってしまう!』 過激な反対勢力が活動をはじめ、世界のあるあちこちで血生臭い事件がおきた。それに対しゲンはこう反論した。ゲン「ツイッターによる相互監視を、オーウェルのな一方監視状況と同じに考えるのは間違いだ」

ツイートピア(244)

また、それと正反対の主張もあった。『体内ツイッターを使って

全ての人間の行動を把握すれば、犯罪も事故も自殺も無くなる、活用すべきだ!」 それに対するゲンは。ゲン「特定の個人、団体に対して、監視する権限を許すべきではない。そういった強い監視は、より深い抜け穴を作るだけで意味が無い」

(245)

自由で透明感のある意思疎通は、人の心を正しく明るい方向へと導くだろう。そんな性善説のような考えに基づき、ゲンはバイオツイッターの価値を認めていた。しかし、その副作用を十分知らないうちに見切り発車をするのは良くないという理由で、ゲン自身は使用を拒んでいたのだ。

(246)

しかし実際に「遺伝する」というバイオツイッターの副作用が知られるのは、普及してしばらくたってからのことだった。後から知って深く後悔する者は後をたたなかつたし、ゲン自身も深く反省したものだ。もっと明確に、反対の立場をとるべきだったのではないかと。

(247)

ゲンとミチコの間にも生まれたクメゾウは、バイオツイッターを持つため者として生まれた。ゲンはクメゾウが12歳になるまで体内ツイッターの使用を認めず、12歳の誕生日に決断させた。クメゾウはその日のうちにインスト薬を打った。もうバイオツイッターなしには成り立たない世の中だったのだ。

(248)

クメゾウお爺さんからアフレルお父さんが生まれ、そしてノルコとワクが生まれた。ツイッターを体内に宿す者として。ノルコ(ゲンお爺ちゃん)のつばやきは、どれくらい今の歴史に影響しているん

だろう?) ふとそんなことを考えたりするノルコだった。

(249)

一般庶民のつぶやきが、世界の歴史を左右すると考えるのは難しい。しかし時にはほんのささやかな啖きが、多くの人の心意によって増幅され、無視できないほどの大きな力をもつことはありうる。ゲンのツイートの中にも、そんなツイートがあったのかもしれない。可能性は誰にも否定できないのだ。

(250)

tweet | with | bravery 勇気をもってつぶやく。そんなゲンお爺さんの言葉を、ノルコは今ならわかる気がする。ノルコ(はうっ!) ビクっとなって振り返ると、ノルコの後ろにお父さんやお母さん、ワクもクメゾウお爺ちゃんもウメナおばあちゃんもいて、みんなでPCを覗き込んでいた。

(251)

クメゾウ「パスワード知ったんかい!」 ヨコ「こんな古い機械がよく動くわね」 アフレル「どうだい、友達とはしゃべれた?」 ワク「クール!」 ノルコはなんだか恥ずかしくなってしまう。PC画面をボタンと倒した。ウメナ「さ、ぼちぼち切り上げな。もうすぐお昼だよ」

(252)

将来は良妻賢母になるんだとノルコは心に決めている。一度PCを終了させて台所に向かう。畑で採れたカボチャをウメナお姉さん(そう呼ぶように言われている)と一緒に料理するのだ。ウメナ「ちよつと若いカボチャだからお団子にしようか」ノルコは注意深くカボチャを切ってレンジにかけた。

(253)

ウメナ「友達とはちゃんと喋れたかい？」レンジの中をジーッと覗き込んでいるとウメナがそう聞いてきた。ノルコはちよつと首をかしげ、そっぴやそれどころじゃなかったなと思いきこす。ウメナ「別のことに夢中になってたってかい？」ノルコはウンウンとうなづく。

(254)

ウメナ「ゲン爺さんのフォローさん、まだあんなにいたんだねえ。何か発見はあったか？」ノルコはちよつと考えて、そして首を横にふった。ウメナ「そりゃ残念だ」ノルコはその言葉に首を傾げる。ウメナ「ゲン爺さんのことは私に良くわからないんだ、口数の少ない人だったからね」

(255)

ウメナ「ちよつとは名の知れた論士だったらしいけど、ミチコ義母さんが亡くなってからはほとんど喋らなくなっちゃった」ノルコの表情が無意識のうちに真剣になる。それをウメナは見逃さなかった。ウメナ「ミチコお義母さんのこと、聞きたいかい？」ノルコ

はウンと強くうなずいた。

(256)

ウメナ「あたしも、ミチコ義母さんと会った事は3回しかないんだ」ウメナは食事の準備をしながら続ける。「遊びに行った時に2回、あと1回が……入院してた時のお見舞いだ」なぜか一瞬、ウメナは言葉を詰まらせた。ノルコ（なんだろう？）ウメナとクメゾウが、中学校以来の仲であることは知っていたが。

(257)

ウメナ「体が弱いわけじゃなかったのにね、うちの畑を作ったのもミチコ義母さんだったんだよ。本当に、ガンっていうのは嫌な病気だね」そしてウメナは遠い目をする。ウメナ「綺麗な人だったよ、遺影もそうだけど、あんな麦わら帽子が似合う人はそういないやね」

(258)

ウメナ「ノルコ、自分から呟けない以外に支障はないんだね？」ノルコはうなずく。ウメナ「ミチコ義母さんの若い頃の写真があるよ、少ないけどね」それは是非見てみたい！ノルコは思わずジャンプしてしまった。それを見てウメナはニツと笑う。そして二人の間に数枚の画像が投影された。

(259)

野菜畑を背景にしたゲンとミチコのツーショット。二人とも宇宙服を思わせるデザインの「東京都公式農作業服」を着ている。すらっとした体形で長い髪を後ろに束ねていて、こうして見ると病気で亡くなったのが嘘のようだ。ウメナ「入植した時の記念写真だね」ノルコはまじまじと画像を見据えた。

(260)

イズミ・ミチコは第二次緑園都市計画における東京入植者の一人だ。南東北州の高校の園芸科を卒業している。いつどこでゲンお爺さんと知り合ったのか、それはウメナお姉さんも知らないらしい。ウメナ「こっちの写真は私がとったんだよ」それは台所で料理をしているエプロン姿のミチコだった。

(261)

ウメナ「ミチコ義母さんの作るかぼちゃ団子があまりに美味しかったんでね、教えてもらったんだよ」写真の中のミチコは、もうもうと湯気の上がるカボチャを、片栗粉と一緒にポウルでこねていた。ノルコ(！?) ノルコは驚いた。熱々のカボチャを、なんと素手でこねていたのだ。

(262)

ウメナ「こねる時に一さじのサラダ油を加える。それがイズミ家に伝わるカボチャ団子の作り方だ。でもやっぱりこねる時の手の感覚なんだね、あの美味しさを生んでいたのはさ。私が何回作ってもあの味にはならないんだ、不思議なことに」ノルコは思わずうなづいてしまった。

(263)

その時ちようどレンジがチンと鳴った。カボチャを取り出して火の通りを確認する。ウメナ「どうだい？」スーッと箸が通った。ノルコはOKサインを出す。そしてポウルの中にカボチャと片栗粉をいれ、一さじのサラダ油を加えた。ウメナ「やってみるかい？」ノルコは「おーっ」と手を上げた。

(264)

もくもくと湯気を立てる熱々のカボチャ。ノルコはぐつと息を飲

む。ミチコおかあさんはやってた。そして私はそのひ孫。やって出来ないわけが無い！ そう意を決して手を突っ込んだ。ノルコ（！！） 熱くて飛び上がりそうになった。片栗粉をうまくからめて混ぜないと確実にやけどする。

(265)

ウメナ「……ほう、やるじゃないか」 ノルコの眉間にびびりシワがよる。熱くて熱くてたまらない。でも我慢してかき回していく。指先は真っ赤だ。ウメナ「あんまし無理するんじゃないよ？」 でもやる、最後までやりとおす。なぜならばノルコは、健気で勇敢な、お料理上手の美少女なのだから。

(266)

なんだかんだでノルコは最後まで混ぜきってしまった。すぐに流水で手を冷やす。しばらくヒリヒリしそうだ。ウメナ「よくやったノルコ。これでお前さんも立派なイズミ家の女だね」 さあ、あとは焼くだけだ。やがて台所にたちこめる香ばしい匂い。ノルコは胸がいつぱいになった。

(267)

そのころちょうど、食卓の長机でクメゾウとアフレルがビールを一杯やっていた。クメゾウ「くーっ、仕事のあとのビールはやっぱりうめえな！」 アフレル「父さん、さっきまでワクと遊んでなかった？」 クメゾウ「こまけーことはいいんだよ！」 アフレル「ええ？ うーん……」

(268)

ワク「ぶはーっ、ヒック！」 ヨコ「麦茶で酔っ払ってるの？ ワク」 クメゾウ「なあー、アフレル。仕事ねえなら紹介するぞ？ この辺はいくらだって人手がいるんだ、ブラブラしてねーでっ」

やってみたらどうだ？」 アフレル「いやあ、大丈夫だから」
ク「ホワッツ、ニート、イズイット？」

(269)

クメゾウ「ニート(NEET)ってのはな、当時最先端っていわれた職業のことよ。ニード(NEED)から点々としてニート。つまり何か欠けてても特に問題はねえ、必要じゃなくなることたあねえってことだ！」
ワク「インタレスティン！」
アフレル「意味がわからない……」

(270)

クメゾウ「親父がよくぼやいてたんだがな、昔は働かない奴はメシ食っちゃいけないかったんだ。大変な時代だったろーな」
ヨコ「ええ、それだといつも誰かが飢え死にしなきゃいけないなくなっちゃう」
アフレル「全員分の仕事をいつも用意するなんて不可能だからね」
ワク「アンビリーバボー！」

(271)

クメゾウ「だからって、いつまでも無職でいいわけじゃねえんだぞ？」
アフレル「わかってるよ、ちゃんと探してるって」
クメゾウ「ま、変な仕事が好きなお前のことだ、時間はかかるのかもしれねえ。でもいい加減妥協しろよ？」
アフレル「うん、でももうすぐ見つかりそうない気がしてるだ」

(272)

ヨコ「ねえねえあなた。いったいどんな路線で探してるの？」
アフレル「うん、まあ、やっぱあれだね」
ヨコ「あれ？」
ワク「ホワッツ、ザット？」
アフレル「夢のある……感じのかな！」
そういつてアフレルは照れくさそうにアゴをさすった。何だかみんな、ため息が出てしまった。

(273)

クメゾウ「まあ……夢もいいが、夢だけじゃ食べねえぞ！」ヨコ「うふふ、そうですね。ところでさっきからいい匂いがするんだけど、何を作っているのかしら」ノルコがウメナと一緒に料理を作っている、他のみんなは待つていてと言い残して。みんな、それとなくそわそわしているのだった。

(280)

まもなくウメナが皿を持ってやってきた。ウメナ「お前ら！今日のはノルコの手作りだ！ありがたくいただけーい！」ドーンと置かれた皿の上で、焼きたてカボチャ団子が湯気を立てている。ヨコ「あら美味しそう！」クメゾウ「ほう、これはなかなか」クメゾウはさっそく箸を伸ばした。

(281)

ウメナ「たわけーい！」一瞬で叩き落とされる箸。クメゾウ「なにすんじゃい！熱いうちに食うたるうかと思っただに！」ウメナ「先にやることがあるんだよ！」すると台所から、小皿を手にしたノルコが歩み出てきた。ヨコ「ノルコ？」小皿にはもちろんカボチャ団子が乗っている。

(282)

ノルコはそのまま仏間に進むと、ゲンとミチコの遺影の前に小皿を置いた。そして正座し、仏鈴を鳴らし、厳かに手を合わせて瞑目した。クメゾウ「フム」アフレル「ああ、なるほど」ヨコ「……ノルコ」ワク「オーマイガツ」何となくみんな、そつちを向いて手を合わせてしまった。

(283)

ノルコは戻ってくると、さあ食べて食べてと手をバタバタさせた。ヨコ「ノルコもこの味を伝授されたのね！」クメゾウ「じゃあ食うぞ！ 腹が減って減ってたまらんだ！」クメゾウに続いて、みんなも次々と手を伸ばし始めた。ウメナ「ふふん、じゃあ他の食いもんもぼちぼち出すかね」

(284)

ウメナの手によって次から次へと食事は出され、いつしか食卓は料理でびっしりに。ノルコが作ったのはカボチャ団子だけだったので、ノルコはまだまだ修行が必要だなと思った。でもみんな喜んで食べてくれたので、ひとまず満足することに。ノルコ(少しでもミチコお姉さんの味に近づけたかな?)

(285)

お茶を飲んで一服して、落ち着いたところで帰ることになった。クメゾウ「これ持ってけい！ ノルコ」そう言ってクメゾウはノルコに例のPCを手渡した。クメゾウ「ここにあっても仕方がないしな」ノルコはウンと頭を下げる。そして帰りの車の中ずつと膝の上に抱えて、大切に持ち帰った。

(286)

ホウ「ベアトリーチェー！」 なにやら人名のような言葉を叫んでホウはぶっ倒れた。おばさん「またかい」 ホウ「おお……マイスイート……マイディア」 おばさん「??」 ホウは顔を赤らめ、両手で胸を押さえ、高揚している。おばさん「もしや……恋!?!」
一体誰に？

(287)

ヨコ（あら……何だか寒気がするわ） ヨコが街角で背筋を振るわせていた。彼女は今【古着パッチワーク英会話教室】の帰りである。ヨコ（今夜はおでんにでもしようかしら？ 暑いからって冷たいものばかり食べてちゃいけないわ） さっそくヨコはアフレルにリプライを飛ばした。

(288)

アフレル「おでん?! いいね! ガンモドキいっぱい入れてね！」 アフレルは面接先から即効リプライを返してきた。ヨコ「決まりね」 ヨコはそそくさといつものスパーに入って行く。ところで奥さん、旦那のことニートとか言っておきながら無職なんですか？ ヨコ「主婦は立派な職業よ！」

(289)

ヨコは大根を手に取り、商品T.Lを確認した。ヨコ「あら、これクメゾウお義父さんのところの」 どんな商品にもマイクロサイズの電子タグが取り付けられており、全てツイッターと連動している。生産者はもちろん、種まき時期から使われた肥料の情報、果ては運

搬車両のナンバーまで調べられる。

(290)

クメゾウお義父さんが作ったのなら安心と、ヨコはその大根をカゴに入れた。ヨコ「あら」隣にキャベツを手にしたまま直立不動になっている男性がいる。ヨコ「何をそんなに調べているのかしら？」品物の情報は芋づる式に際限なく調べられるので、気付いたらとんでもない情報まで調べてたりってことも。

(291)

ヨコもいつだったか、板子ヨコの情報を芋づる式に調べていって気づいたら南米の地質学に詳しい人と話し込んでしまっていたことがあった。ヨコ「ほどほどにしないとねえ……」そしてヨコはほどほどに買い物を済ますと、やっぱりレジを通らずに店を出た。というか、なんであるのだろうか……レジ。

(292)

ヨコ「あっ！」ヨコはハッと気づいて立ち止まった。ヨコ「ガンモドキを忘れたわ！」ああしまった、旦那様の大好きなガンモドキ、早くもどって買い足さなければ。店長さんに笑われてしまうかもしれないけど。そしてヨコが踵を返したその時だった。ホウ「その美しいお姉様、お忘れものはこれですね？」

(293)

イタリア風のシックな縦縞スーツに身を包んだホウが、手にガンモドキの入った袋を持って立っていた。ヨコ「ええ!？」ホウ「あなたがガンモドキを忘れるだろうことを予感していたので。きつとお困りになると思いましたので」ヨコは激しく困惑した。確かにガンモドキのだけだ。

(294)

ヨコ「あ、あの、ありがたいんですけど、知らない方から頂くわけには！」　そう言っただけヨコは逃げるようにその場を立ち去った。

ホウ「ああ……なんてエレガントな人なんだ……ビヴァーチエ！」

ホウはガンモドキを強く胸に抱きしめた。そして堪えきれぬ喜びの発露として、小刻みに震えたのだった。

(295)

ヨコ（いったい何だったのかしら……どうして私がガンモドキを買い忘れたことを？）　ヨコは不審に思いながらも、心の奥ではドキドキしていた。色んな男の人に声をかけられてきたが、あんな風にアプローチされたのは初めてだ。ヨコ（いけないわヨコ。私は子も夫もある身なの！）

(296)

ヨコは始終落ち着きなく、ガンモドキを買うだけのために店内を3週ほどグルグルしてしまった。店長「お、奥さん？」　ヨコ「え？、ああ、ちよつと買い忘れをね。うふふ」　そうして店内をうろついていると大変恥ずかしいことに、お化粧直しに行きたくなくなってしまった。　ヨコ（いやだわもう……）

(297)

たかがトイレ、されどトイレ。トイレには人の世の全てが流れていると言う。そんなトイレだが、世の中に数少ない「非ツイッター領域」でもある。誰にも見られることのない秘密の空間であり、同時に誰の庇護も受けられない孤独な密室でもある。ヨコ（スーパ―のトイレを使うのは億劫だわ！）

(298)

たとえ情報共有時代であっても、トイレの秘密などはちゃんと守

られている。しかし同時に、トイレで何か事件が起きても、誰の助けも求められないのだ。しかし背に腹は変えられないので、ヨコはよくよく注意してスーパールのトイレに入り、お化粧を直すことにした。

(299)

ホウ「ビヴァーチエ」ヨコ「ひっ！」トイレの中からさきほどの男が現れた……ような気がした。ヨコ「……ほっ」極度の緊張でいるわけの無い人まで見えてしまったのだ。ヨコ「ドキドキするわ……」ヨコは恥ずかしいやら恐ろしいやらで、ひどく落ち着かなかった。

(300)

ヨコは家に帰る道中、ずっと先ほどの男のことを考えていた。ヨコ「リプライをみられていたのかしら……？でも、私とアフレルさんの共通フォローに、あんな方いたかしら……」ヨコはさんざん首をひねってみるが良くわからない。そうこうしているうちに、家に着いてしまった。

(301)

ヨコ「ああ！」ガンモドキを買っていなかった！ヨコはその場にくず折れた。ヨコ「もういやだわ……」仕方ない、ガンモドキは何かで代用しよう。そうため息をつきつつ玄関を開けようとしたヨコの目の前に。ヨコ「これは……」そこには袋いっぱいのがんモドキ。そして一刺しの赤いバラ……。

(302)

ヨコはしばし放心状態のまま、その場に立ち尽くした。ヨコ「このガンモドキは……捨てましょう」そう思いつつ赤いバラを抜き取って、草むらに捨てようと手を上げるが。ヨコ「……この花に……」

…罪はないわ！）そして結局家の中に持ち込んで、キッチンの窓際に生けたのだった。

(303)

少し落ち着いたヨコは、赤バラの商品ＴＬを開いた。何の変哲もない赤バラのようだ。購入者はトキワ・チカコ（43歳） 近所にあるツイッター協会の管理人さんだった。ヨコ「どうゆうことかしら……」 ポツリつぶやくヨコ。ヨコ「あっ、ノルコ」 いつのまにかノルコが近くに來ていた。

(304)

ヨコ「えと……これはね、そこで拾ったのよ。綺麗でしょ？」
ノルコはぴーんと背伸びをして、赤いバラの花をしげしげと見つめ、うんつと一つうなずいた。そしてテーブルの上においてある食材に気づく。ガンモドキがいつぱいある。お父さんの大好きなガンモドキ。ノルコ（今夜はおでんだ！）

(305)

ヨコは困ったなと思う。これでガンモドキを捨てるに捨てられなくなった。そして気づく。もしガンモドキの商品ＴＬをノルコが調べてしまったら……。ヨコ「ねえノルコ、お願いがあるんだけど」
ノルコはうんつとうなずく。ヨコ「お風呂を掃除していてくれない？ お母さん少し疲れちゃって」

(306)

暇で暇でしかたが無かったノルコはダッシュでお風呂に向かった。買った。ホツとしたヨコは、ガンモドキの商品ＴＬを調べた。こちらの購入者もツイッター協会のチカコさんだった。しかしそこからの譲渡情報がまったく無い。紛失物と同じ扱いになっているのだ。
ヨコ（やっぱり気味が悪いわね……）

(307)

ヨコは購入者のチカコさんに直接問い合わせることにした。ヨコ「かくかくしかじか」チカコ「あらら、それは申し訳ありませんでした。うちのホウの仕業です」ヨコはチカコから詳しい説明を受け、例の男がツイッター能力を失なった者であることを理解した。ヨコ「そういうことでしたか」

(308)

事情を理解したヨコは、まるで喉に刺さった骨がとれたような気持ちになった。そして鼻歌まじりで晩御飯の仕度を開始したのだ。た。ノルコ(じー) ヨコ「はっ」全然、疲れているように見えないヨコを、ノルコがしげしげと見つめている。ヨコ「あ、ありがとうノルコ、おかげでお母さん元気になったわ！」

(309)

その日の夕食、アフレルは好物のガンモドキをモシヤクシヤほお張りながらビールを飲んでいた。アフレル「こんなにたくさん入れてくれるとは思わなかったよ！」 喜びいっぱい表情のアフレル。ヨコ「え？ それほどでもないのよ？」 微妙な微笑のヨコ。ノルコ（お母さん何かあった？）

(310)

ヨコ「そういえばあなた。今日の面接はどこに行ったの？」 アフレル「牛を見に行ってたんだ」 牛？ みんなそう思った。アフレル「親父の紹介でね、見てくれるだけでもいいからってさ」 ヨコ「牧場を見学してきたの？」 アフレル「うん。あと、ちょっとカウボーイ的なことをね」

(311)

そう言つとアフレルは、動画ファイルを起動して食卓の上に投影した。ワク「カウボーイ?!」 ヨコ「あらホント」 のどかな牧場の光景だった。動画の中でアフレルは、手綱を引いて牛を引つ張り出しているところだった。アフレル「これが結構大変なんだ。なかなか言うことを聞いてくれなくて」

(312)

牛を引つ張るといふより、引つ張られているアフレル。それを見て牧場主さんがゲラゲラ笑っている。ヨコ「これじゃどつちが牛だかわからないわ」 アフレル「えー？ そう？」 ヨコ「それで受かったの？」 アフレル「来たけりゃ来いって言われたけど断った。」

思った以上に大変な仕事ってわかったから」

(313)

ヨコ「そう……」 夫がカウボーイというのも悪くないかと思っ
ていたヨコは、少し残念に思った。アフレル「あっ！」 その時な
んと動画の中で、1頭の牛が放尿を始めてしまった。アフレルが飲
んでいるビールと同じような色をしている。お食事中にこれはいけ
ない。アフレル「うわー、あー」

(314)

ワク「ライク・ア・ビアー！」 アフレル「ワク、それは言っち
やいけない……。ごめんよみんな」 そう言っただけ動画を消すアフレ
ル。ヨコがポツリと一言。ヨコ「牛さんはいいわねえ、どこでもお
トイレできて」 ノルコ（ん？） その一言にノルコは、何となく
ピンときてしまったのだった。

(315)

ノルコ（お母さん、きつとおトイレで困ったことがあったんだ）
トイレにツイッターを設置してはいけないという法律がある。そ
のせいか「トイレで起こった犯罪は世間に知られることがない」と
いう都市伝説が広まっているのだ。おかげで公衆トイレは、何とな
く使いにくい状況だ。

(316)

ノルコは厚揚げをモジユモジユしながら思う。学校のトイレも使
いにくいのだ。世の中にはトイレに行くとからかわれるという理由
で我慢し続けて、腸閉塞になってしまっ子もいる。さらに問題なの
が、仮にトイレを覗かれたりしても、そのことを訴える手段がない
ということだ。

(317)

ノルコ(でも、いつ誰がどれだけ使ったか、なんてことが全部記録されちゃうのもいやだ) これは根の深い問題だとノルコは思った。アフレル「どうしたノルコ? 難しい顔して」言われてハッと気づいて、おもむろに首を振るノルコ。お食事中に何てこと考えてたんだろう。ノルコ(はしたないっ)

(318)

ノルコは食器をキッチンに返す時に、母が昼に拾ってきたという赤いバラのTシャツを調べた。ノルコ(あつ……) 購入者はツイッタ―協会のおばさん。この間会ったあの人だ。ノルコ(ということは) 高確率でホウさんが絡んでるはずだ。そうノルコは推理した。何だか気分がゲンナリしてきた。

(319)

ノルコは自室に戻りつつ考える。お母さんのトイレの話とホウさんの間に因果関係があるのだとしたら、それは一体どういう状況だろう? ノルコ(あの赤バラ……もしかしたらホウさんがお母さんに上げたのかも?) ほぼ正解といえる推理。しかし、それとトイレとの因果関係は?

(320)

ノルコ(お母さんがトイレから出た直後に、ホウさんがお母さんに赤バラを渡した?) そこまでノルコは考えて、やっぱりワケがわからないなと思った。ホウの動機がわからない。なぜお母さんに赤いバラを? 赤いバラってどんな時にプレゼントする? ノルコ(あああ!)

(321)

ノルコ(お母さん、ナンパされたんだ!) そして母はそのバラ

を受け取って帰ってきたのだ。これは由々しき事態。そう思ったノルコは、何が何でもホウさんとコンタクトを取らなければと思った。しかし。ノルコ（ホウさんにはリプライを飛ばせない……） 直接会って話すしかない……いや。

(3 2 2)

青年ホウには不思議な能力がある。あのGPTLとかを見たせいで、人の心を読めるようになったらしい。心が読まれてしまうのは、正直気分の良いものではないが、ならばそれを逆手に取ることも出来るはずだ。ノルコ（私達の平和な食卓を……乱さないで！）ノルコは目を閉じ、強く念じた。

(3 2 3)

《ビヴァーチエ》 どこからともなくそう聞こえてきた気がした。ノルコ（私のお母さん美人だから気持ちわかるけど、お願いだから変な気を起こさないでっ！） ノルコは10回くらいそう念じてから目をあけた。ノルコ（伝わったかな？） それを確かめるためにも、明日ホウさんに会いに行かないと。

(3 2 4)

ノルコ（お母さんの様子をもう一度確かめておこう） ノルコは一階に下り、キッチンへと向かう。ノルコ（……こっそり） 入り口の影から母ヨコの姿を覗うノルコ。ヨコは食器を洗っている。いつもと様子は変わらない。ノルコ（あっ） キッチンから赤バラが消えているのを、ノルコは見逃さなかった。

(3 2 5)

ノルコ（まだ生き生きしてたのに……なんで？） ノルコはそこでハッと気付く。隠蔽したのだ。と。ヨコ「ん？」 ヨコに気付かれた。ヨコ「なあにノルコ。ご飯足りなかった？」 ノルコは首

を横に振って、その場を後にする。アフレル「おっ、ノルコ」その時ちよつと、父が風呂から出てきた。

(326)

スウエット姿で頭から湯気を立ててるアフレルは、どうやらノルコが微妙な表情をしていることに気付いたようだ。ノルコはマズいと思い、顔を伏せる。どう切り抜ける？ ノルコ(……そうだ！)

ノルコはお腹を押さえてモジモジした後、ダッシュでトイレに駆け込んだ。ノルコ(セーフ！)

(327)

もちろんお腹なんか痛くない。というか、けなげ美少女はウコしない。ノルコは便座に腰掛けたまま、しばし考え込んだ。ノルコ(こついうときはどうしたらいいんだろう？ お母さんが浮気するかもしれない……誰に相談することもできない) といつかつぶやかない。ノルコ(……こまったな)

(328)

ノルコはリビングのＴＬにアクセスする。ヨコとアフレルが会話している。というか、普通に声が聞こえてくるのだけ。アフレル「また明日も面接だから、早くに出かけるよ」ヨコ「そう？ 朝ごはんなん時にする？」アフレル「ううん、5時にはここを出るから。移動しながら食べてくよ」

(329)

ヨコ「そんなに早く？」アフレル「そうなんだ。南房総の先まで行くからね」ヨコ「結構遠いわね。受かったとしても通えるの？」アフレル「出社はたまにいいんだ。あとは殆ど自宅で行ける。また研究職なんだけど」ヨコ「そう、受かるといいわね！」アフレル「え？ う、うん。がんばるよっ」

(330)

ノルコは手を洗ってトイレを出た。自室に戻りつつ思う。お母さんの様子がやつぱり変だ。何となく、お父さんと話したくないみたい。会話を出来るだけ早く切り上げようとしている感じがする。ノルコ（お母さん……まさかとは思うけど）　そうしてノルコの不安な一夜は更けてゆくのだった。

(331)

そして翌朝。現在 8 時半。今日は日曜日なのでワクは朝寝坊している。結局、朝の 4 時に起きてアフレルのお弁当を作ったヨコは、ソファアの上ででうつらうつらしている。一人でイチゴトーストを食べたノルコは。ノルコ（好機！）　そう心の中で気合を入れて、家を飛び出して行った。

(332)

ツイッター協会に行つて、ホウに会つて確認して帰ってくる。ただそれだけだ。スムーズに行けば 10 分で行つて帰つて来られる。しかし。ノルコ（どっちだっけ……）　住宅地の隘路は思いのほか複雑だったりする。バイオツイッターの地図機能を使っていたにも関わらず、ノルコは少し迷ってしまった。

(333)

ノルコ（勝手に出かけたって、お父さんに怒られる！）　ノルコは血の気がサーッと引く思いで、まるで迷路のような戸建住宅の細道をさまよっていた。すると。「おはよう！」　ノルコは喉から心臓が飛び出すかと思った。後ろを振り返ると。ホウ「来るんじゃないかと思っていたよ、ビヴァーチェ！」

(334)

ノルコは内心ホツとしたが、それを顔に出すわけにはいかない。ノルコ（確かめなきや！）そしてジツと相手の顔をにらむ。昨夜の祈りが届いたなら、ホウは何らかのリアクションをしてくるはず。ホウ「そんなに僕の顔が気になるかい？」と言って髪をかき上げ、無い耳を見せてくる。ノルコ（あれれ？）

(335)

私の心を読めるのなら答えてくれるはず。ノルコは念じた。ノルコ（お母さんに何かしたの?!）するとホウは少しうな垂れた様子で、一つため息をついた。ホウ「昨日ね、ユウタ君が家に帰っちゃったんだ。寂しくなるよ」ユウタ君とは、協会で会ったあの少年のことだが。ノルコ（とぼけてる?!）

(336)

ホウ「君は僕に聞きたいことがあつてここにきた」ノルコは首を縦に振る。ホウ「だが僕はそれに答えることが出来ない」ノルコは首を傾げる。ホウ「なぜならそれは、僕の極めてプライベートな部分だから」ノルコはその場で地団駄を踏んだ。ホウ「そして君は今、不公平を感じている」

(337)

そっちはプライベートとか言っておきながら、こっちが考えていることはお見通しではないか。そんなの不公平だ。ノルコはそう思つて地団駄を踏んだのだ。はしたないとは思いつつも。ホウ「君もその気になればなんだってわかるはずだ。僕が全てを管理しているわけじゃないんだから」なんと意味不明だ。

(338)

ホウ「君は恋をしたことがあるかい？」ノルコはドキリとした。そう改まって聞かれてみれば、ノルコは未だ誰にも恋をしたことが

なかった。ホウ「恋とは不思議なものさ。お互いの気持ちと気持ち
が合わせ鏡みたいに向き合って、どこまでも互いの姿を連ねていく。
果てしが無い。ビバーチエ」

(339)

ホウ「僕が君の心を読めたとしても、僕が僕の心を読めない限り、
僕は何も掴めやしない。つまりはそういうことだ」 ノルコはホウ
の言葉をただ黙って聞いていた。お母さんのことがどうとか言う
以前に、その言葉には強い説得力があるように思えたのだ。そして
自分にとって大事な言葉であることも。

(340)

ホウ「さあ、そろそろ帰らないと、きつと大変なことが起こるぞ」
ノルコはギクリとしてその場でたじろいだ。ノルコはホウに何か
一言いいなかった。でも呟けないのだ。ノルコは奥歯を強くかみ締
めてウンウンと唸ってみたが、鼻で空気がヒューヒュー言うだけだ
った。ホウ「ふふ。また今度だ！」

(341)

ノルコは家に帰ってソートと中に入る。ワク「ホウエア？」 寝
ぼけたワクが突っ立っていたので、ノルコは反射的に「シー」と唇
に指をあてて黙らせた。リビングのソファーでは、母がまだすやす
やと眠っている。ノルコはホツと内心ため息をついて、自室へと戻
っていった。

(342)

ノルコは学習機の引き出しからゲンお爺さんのPCを取り出した。
そして起動させている間に考える。先ほどのホウの話をもとめると、
やはりホウはお母さんに恋をしてしまったようだ。そして合わせ鏡
の例え話から察するに、その顛末はホウにもわからないのだろう。

ノルコ（ますます厄介だわ）

（343）

『GPTLは世界の全てを僕に教える』　ホウが言っていたあの言葉はウソなのだろうか。ノルコはふとそう思う。GPTL、グロス・オブ・パーソナル・タイムライン、神のTL。そんな良くわからないものに取りこまれてしまった人が、今私のお母さんに恋してる。ノルコは気が気じゃなかった。

（344）

まずはGPTLについて知らなければならぬ。ノルコはゲンお爺さんのPCでそれを調べることにした。キーワード検索機能を使って「GPTL」の単語を含むツイートを片っ端から調べていく……つもりだったが。ノルコ（無い……全然）　GPTLという言葉は、どこをどう探しても見つからなかった。

（345）

まるで何か大きな存在によって、言葉そのものが隠されてしまっているようだった。ノルコは薄ら寒い気分になってきた。ノルコ（そうだ！）　あの管理人のおばさんなら知ってるかもしれない。ノルコは思いつくや否や、ツイッター協会の管理人、トキワ・チカコさんのプロフィールを検索した。

(346)

ゲン「こんにちはチカコさん。私はこの間お世話になりましたノルコです。ゲンというのは私のひいお爺さんの名前です。今私は、ゲンお爺さんのPCを使ってツィートしています。チカコさんに聞きたいことがあります」ノルコは頑張ってこの長文をこしらえて、そしてチカコさんにリプライした。

(347)

チカコ「あらノルコちゃん、お久しぶり。何となく事情はわかったわ。聞きたいことってなあに？」ゲン「少し時間がかかります。うつのに」チカコ「構わないわ、今はお昼ごはんのホットケーキを作っているところなのよ」ノルコはお腹がグウと鳴るのを抑えつつ、キーボードを手にかけた。

(348)

ゲン「ハウさんのGPTLのことを知りたいんです」TLの向こう側でチカコさんがピタッと手を止めたような感覚があった。ゲン「どうしても気になって。調べてもわからなくて」チカコ「あれはね……何て説明したらいいのかしら」どうやらチカコさんにも良くわからないようだ。

(349)

ゲン「ハウさんはGPTLで、世界の全てを知ったと言っていました」ノルコはそこまでツィートして手を止めた。今朝ハウと会った時のことは、チカコさんに伝えない方がいい。なぜなら「ハウにどんな用事があったの？」と聞かれたとき、どう返事をして良いか

わからないからだ。

(350)

ゲン「もしホウさんが世界の全てを知っているのなら、ノルコ達の将来とかも知っていることになります。それが私には不安です」

チカコ「うーん。確かにそれはわかるわ。ホウがその知識を使って何をしでかすかわからないものね」　ゲン「はい」　チカコ「でもね、その心配はきつとないわ」

(351)

ゲン「どういうこと？」　チカコ「今のところ、ホウがGPTLの力を悪用したことはないわ。それに、世界の全てを知っているなんてこと自体、私はちよつと疑わしいと思っている。もしかすると、ただのあの子の妄想なんじゃないかしらって」　ゲン「妄想」　チカコ「そう、ただの妄想かもよ？」

(352)

チカコ「あら、ホットケーキが焦げてきたわ、ちよつと待ってね」　ゲン「すみません」　チカコ「いいのよ」　ノルコは、チカコがホットケーキをひっくり返している間に考えた。ただの妄想、確かにそれはあるかもしれない。でもホウさんはしばしば人の心を読むじゃないか。

(353)

ノルコはそのことをチカコさんに聞いてみた。チカコ「ホウは昔から勘の鋭い子だったわ。ツイッター能力を早くに失った影響かしらね。どこか人を見透かしたような所があったわ」　ゲン「そうなんですか」　GPTLという単語そのものがホウの創作物なのだろうか？　ノルコはそう思うようになってきた。

(354)

ゲン「GPTLというもホウさんの妄想？」　チカコ「妄想かもしれないし、実際にあるものなのかもしれないし、まあ、私にもちよつとわからないわね」　ノルコは正直ガツカリしたが、チカコさんの話を聞くうちに、ホウさんはノルコ達の悪いようにはしないのではという安心感もわいてきた。

(355)

チカコ「ホットケーキが一枚出来たわ。ゲン……じゃないノルコちゃん。食べに来ない？」　ノルコは必死で首を横に振って、すぐにそれが意味の無いことだと気付き、とっさにキーボードを叩いた。ゲン「もうおhrghnたばまちt」　そんなことしたらお父さんに怒られちゃう！

(356)

チカコ「もうお昼食べたの？　それは残念」　ゲン「おかまいなくです」　チカコ「ほらほら、匂いにつられてホウがやってきたわよ。GPTLのこと聞いて見る？」　ゲン「おねがいしまっす」　焦って打つと相変わらず変な言葉になってしまうのが歯がゆい。チカコ「あのねホウ、かくかくしかじか」

(357)

そしてノルコは大変なことに気付いて、座ったまま飛び跳ねてしまった。ノルコ（ホウさんがさっき私と会ったってこと言っちゃったらどうしよう！）　ノルコはなすすべなく、ただホウがそのことを言わないようにと念じるのみだった。ノルコ（ないしょないしょないしょないしょ！）

(358)

しばらくして。チカコ「ノルコちゃん。ホウがね、今とつてもわ

かりやすい例え話をしてくれたわ」 どうやら祈りは通じたようで、ノルコはホッと胸をなでおろした。ゲン「聞きたいです！」 チカコ「ええ、もちろん。ホウはGPTLのことを、『すごく良い映画のようなもの』って例えたの」

(359)

すごく良い映画と聞いて、ノルコが真っ先に思い浮かべるのは、オードリー・ヘップバーン主演のローマの休日だ。「世界で一番素敵なレディ」というキーワードで色々調べていたら、この古い映画に行き当たった。その日のうちに二回見て、それからもちよくちよく見ている。素敵な映画は何度見ても素敵だ。

(360)

チカコ「良い映画って、何回見ても面白いものでしょう？ 結末とかみんなわかってるのに」 ゲン「わかります」 チカコ「何もかもがわかっていても、ぜんぜん飽きない。何度見ても新しい発見があつて、胸がドキドキする。ホウはGPTLのことを、そう例えているのよ」

(361)

何度見ても新しい発見がある。その言葉にノルコはピンときた。先ほどホウは言っていた。恋とは合わせ鏡のようなものだ。今ある自分の状態によって、相手の見え方が変わってくる。それと同じように、GPTLから見えてくるものも変わってくる。言わばそれは、自分と世界との間の合わせ鏡なのだ。

(362)

ゲン「すごくよくわかりました。ありがとうございました」 チカコ「いえいえどういたしまして。また何か気になることがあったら、遠慮しないで聞いてきてね！」 ノルコはひとまずチカコさん

とさよならした。今日のところはこの辺にしておこう。なんだか頭の中がいつぱいだ。

(3 6 3)

グウウー。またお腹が鳴った。ノルコは部屋で一人、顔を赤らめた。ノルコ(頭を使うとお腹が減るの) そろそろお昼ごはんの間。ノルコ(腹が減ってはなんとやら!) ノルコは椅子から飛び降りて、一つグーンと背伸びをすると、パタパタと足音を立てて一階に降りていった。

(364)

窓辺からあふれ出す陽射しがダイニングテーブルを照らしている。テーブルの上にはバターと蜂蜜の瓶。キッチンから漂ってくるは香ばしい匂い。ヨコ「もう少しで焼けるからね、ホットケーキ」ノルコ(！?) チカコさんもホットケーキを作ってた。これは何か関係があるとノルコは思った。

(365)

ノルコはテーブルについて、コップにミルクを注いで一口飲む。ノルコ(ふうー) 牛乳を飲むと気分が落ち着くのは何故なんだろうと、ノルコはしばし思いを馳せる。そしてダイニングがとても静かなことに気付く。ワクは? ヨコ「ワクはお友達の家でご馳走になるんだって、いいわねー」

(366)

ワクが日曜日友達の家に住居する。ノルコ(毎週恒例のアレか)アレとは何か。それはまた後の話。それより家の中が静か過ぎて落ち着かないノルコは、ひとまずテレビをつけてみた。JPN48000の特集でもやってないかな? テレビ「お昼のニュースです」どうやら期待は外れたようだ。

(367)

テレビ「今国会において法案が提出されていましたが、公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の集中審議が週明けから始まります」 どうやら政治関連のニュースらしい。ノルコ(トイレ法?) また訳のわからない法律を作ろうとしてい

るなー、とノルコは思った。

(368)

ヨコ「できたわー、ちよっと作りすぎちゃった」　ヨコがお皿の上三段重ねになったホットケーキを持ってやってきた。ノルコの隣の席に座ってナイフで八等分にする。ヨコ「トイレ法ねえ、これってなにげに切実な問題よね」　ヨコはテレビを眺めつつ、ため息を一つついた。

(369)

ノルコは聞きたくても聞けないことがたくさんあったが、どのみちつぶやけない身なので黙ってホットケーキをパクパクと食べた。ヨコ《ねえノルコ、ここだけの話なんだけどね》　ヨコは形式的にあたりを見回してから、そっとDMを送ってきた。ヨコ《……実はね、お母さんナンパされちゃったの!》

(370)

ノルコはもう少しで舌を嚙んでしまふところだった。ひとまず肩間にシワを寄せて困惑の意を伝えておく。ヨコ《シツクなスーツに身を包んだ、若い紳士だったわ。ねえノルコ、お母さんどうしたらいいと思う?》　シツクなスーツに身を包んだビバーチェ、もといホウ。ノルコはプツと噴出してしまった。

(371)

ヨコ《ちよっとノルコ!　お母さんは本気でノルコに相談してるのよっ》　ノルコはペコリと頭を下げて謝った。ヨコ《まあ、お母さんの気持ちはもう決まってるんだけど、ノルコにも話しておきたいと思ったの。ノルコももうすぐ大人になつて、お母さんみたく殿方に声をかけられるようになるから》

(372)

お母さんの自身満々な所は是非とも見習いたい。そうノルコはいつも思う。ヨコ《1、一度だけデートする。2、すげなくことわる。3、お友達になる》ヨコはそう言いながらホットケーキの切れ端を選択肢代わりに置いていく。ノルコはうーんと考えるふりをした。本当はもう決まってるんだけど。

(373)

ノルコは3番のホットケーキをフォークで刺し、そして口の中に放り込んだ。モグモグ、おいしい。ヨコ《うん！ ノルコなら3番を選んでくれると思った！》そう言いつつ、ヨコは1番と2番のホットケーキを食べてしまった。ヨコ《やっぱりね、こういうご縁は大切にしないといけないわ！》

(374)

お母さんはやっぱり魔性の人だ。ただそこにいるだけで男の人を苦しめてしまう。ノルコは素直にそう思う。そして自分もその血を受け継いでいるのだなとしみじみ実感し、未だ小さな胸の奥でフツと女の魔性をたぎらせたのだった。ヨコ《ノルコに相談したら、お母さん何だかすつきりした！》

(375)

その頃。アフレルは、妻と娘がホットケーキを囲んで不適な笑みを浮かべていることなど露にも思うことなく、面接先の研究施設を見渡していた。アフレル「なんて大きい施設なんだろう」クサヨシ「ふふふ。これが人類最後の砦、ガンバール研究基地の全貌だよ」アフレル「人類最後の……砦！」

(376)

館山市から車で30分、南房総の先端に位置するは野島岬。そこ

から太平洋に突き出す形で全長2 km、幅60メートルの滑走路が延びている。その付け根には巨大な巻貝を思わせるフォルムの施設が建っている。巨大ロボット研究所兼対悪性地球外生命体迎撃基地、通称「ガンバール研究基地」である。

(377)

アフレル「現実感がない……」 アフレルは研究基地の近くの高台の公園にきていた。先ほどクサヨシ氏に基地の中を案内してもらったのだが、体育館ぐらいの建物に格納されている「巨大な鉄の手」やら、一機で100トン超の出力を生み出すロケットブースターやらですっかり目が眩んでしまった。

(378)

クサヨシ「もし、悪意を持った地球外生命体が侵略してきたら、あの滑走路から我らがガンバールロボが出撃し、持てる力を奮って戦うことになるのだ」 アフレル「うわあ……」 そのガンバールロボは現在開発中でバラバラになっているが、完成すれば全長80メートルを超える巨大ロボとなる予定。

(379)

アフレル「でもまだ未完成なんですよね？」 クサヨシ「我々がその気になれば4時間以内に組み上げ出撃させられる。設計上の3%ほどの戦力しか発揮できないが」 アフレル「倒せるんですか？！」 そうアフレルが問うと彼は。クサヨシ「ふふふ……無理に決まっているだろう？」 と、自身満々に答えた。

(380)

クサヨシ「だってアフレル君、宇宙空間を何万光年も渡ってこれるほどの生命体だぞ？ 今の人類がどう『さかしま』になったって勝てるわけがないじゃないか」 と言っておきながら自信満々であ

る アフレル「じゃ、なんで作ってるんです？ 面接受けに来た僕が聞くのもなんですけど……」

(381)

クサヨシ「アフレル君、君はそんなことも調べないで我々が研究基地の門を叩いたのか」 アフレル「はい、そうなんです」 クサヨシ「ふふ、君が来たタイミングから察するに、我々が求人を出した瞬間に飛びついたのだらう、時間にして今から2時間前だ」 アフレル「まさしく！」

(382)

アフレルは本当は別の研究所の面接を受ける予定だった。しかし行きの電車の中で求人検索をしている際、「巨大ロボット開発の研究者募集」の文字をついつかり発見してしまい、即効で食いついて、受けるはずだった面接を蹴ってまで、ここガンバール研究基地を訪れたのだった。

(383)

第5次火星開発選抜の3次審査を通ったアフレルの実績が評価され、こうして飛び込みの就職面接と相成ったのだが、十分な予備知識を蓄える余裕などあるわけがなかった。クサヨシ「まあいい、立ち話もなんだ、そこに座りたまえ」 アフレルは促されるまま、近くにあったアヒルの遊具にまたがった。

(384)

クサヨシは白衣をサツと翻すと、音も無くアヒルの隣のカエルにまたがった。スプリングの足を使って前後にギツタンギツタンするアレだ。クサヨシ「倒せるアテのない宇宙人への対応として、巨大ロボットを建造するのは何故か。君の質問はそういうことだね？」 アフレル「はい、そうです」

(385)

クサヨシ「ではその質問をそのまま君に返すでしょう。何故だと考えるかね？」 アフレルはハツと息を飲んだ。つまりこれは口頭試験なのだ。アフレルはいま試されている。アフレル「はい、僕が考えるにその理由は……」 アフレルは一息おいて宙を見やる。遊具が僅かに傾いだ。アフレル「心意気です」

(386)

クサヨシは常時険しいその表情を僅かに緩めて言った。クサヨシ「心意気とね？ その真意は？」 アフレル「はい、つまり勝てないからといって戦う気持ちまで捨ててしまう訳にはいかないからです。そんなことでは全ての宇宙生物に見下されてしまいます。さらに僕たち人類の尊厳を自ら放棄することにもなります」

(387)

クサヨシは黙って耳を傾けている。アフレル「悪意ある侵略者から地球人類の尊厳を守る。その目的のために持てる力を結集することの意義は、実際とても大きいのではないだろうか」 アフレルは自分の考えを言葉にするたびに、目の前の非現実的な研究基地の光景が、ごく当然のもののように思えてきた。

(388)

アフレル「さらに、最先端の技術を集結し、科学の可能性を追求するための絶好の場となり、御施設で開発された技術は、僕たちの生活の中に確実に生かされていくはずですよ。そして何より……」

クサヨシはもうかなり満足げな表情だ。アフレル「子供達が喜びます！」 クサヨシ「ハツハツハ！」

(389)

クサヨシ「うむ、ほぼ合格と言っていいだろう。子供が喜ぶか。言われて見ればそういう意義もあったな」 アフレル「では……」
クサヨシ「さっそく本部に通達しよう。また一人、我が秘密基地に熱い野郎が加わったとな！」 アフレルはグーツと胸の前で拳をにぎりしめ、そして天に突き上げた。

(390)

クサヨシはカエルの遊具をギツタンギツタンしながら続ける。クサヨシ「君はこれまでの経歴から、有機化学の応用に精通しているようだ。現在、油圧駆動系の開発部隊に不足がある。さっそく明日から現場に加わって欲しい。開発資料は全て公開されている。膨大な量だが君なら処理できると信じている」

(391)

アフレル「明日からですか？」 クサヨシ「善は急げというではないか。何か問題か？」 アフレル「僕は岷音市に住んでいるので引越す必要があるんです」 クサヨシ「基地のB2に寮がある。すぐにでも手配できるぞ。完全個室で共同の温泉もあるのだ」 アフレルは正直困った。家族にどう説明しよう。

(392)

クサヨシ「時間が必要かね？」 確かに時間が必要だった。しかし巨大ロボットの開発なんてなかなか出来ることじゃない。一瞬の躊躇も許されないとアフレルは直感していた。アフレル「いいえ、大丈夫です。明日から出向いたします」 クサヨシ「よるしい。では本日はこれにて終了、また明日だ！」

(393)

クサヨシはカエルの遊具からエレガントに飛び降りると、そのままスタスタと歩いて基地へと戻っていった。アフレルはその背が見

えなくなるまで目礼を続け、再びアヒルに跨る。どつと疲労が押し寄せてきた。アフレル（単身赴任……）　遠い水平線を眺めつつ、アフレルはしばしボーっと佇んだ。

ナビゲーターをつけることも出来る。

(398)

ワク「エネミー・イズ・カミング。3・5・7」 タケシ「おつと複数敵か、熱くなるぜ！」 現在、全世界に三千万人のプレイヤーがあり、それぞれ腕を競いあっている。そして万が一、本当にエirianが侵略してきた時は、上位のプレイヤーが本物のガンバールの操縦者に選ばれることになっている。

(399)

ワクはこのアプリのことを最近知ったのだが、実は公表から15年以上が経過している。いまだその人気は色あせない理由は、まさしくガンボールが実際にあるためである。ワクもその仕組みを初めて知ったときは、おでこが真っ赤になるほど興奮した。パイロットに選ばれる可能性は、常にあるのだ。

(400)

このゲームのユニークなところは、年齢が低ければ低いほど撃破ポイントが高く与えられるところだ。そこには「巨大ロボットの操縦者は少年に限る」という開発者の思想がこめられている。世の中には30歳すぎのプレイヤーもいるが、加齢でポイントを稼げなくなるので、いずれは引退する。

(401)

というわけで、今を生きる少年ならば、誰でも一度はガンボールのパイロットを目指すご時世なのだ。タケシ「いっちょ撃破！」
ワク「キープ・ユア・ガード！ レフト！ カミン！」 左9時方向から慣性の法則無視して突っ込んでくる円盤が、ガンボールの足を掠めた。タケシ「くっ！」

(402)

タケシはスロットルを上げ、敵の追撃を振り切る。ガンバールの脚部に装着されたブースターから灼熱色のジェットが噴出する。ブースターの燃料は最大稼動で3分しか持たない……が。ワク「ファイナルアタック・オールレディ」 タケシ「ロックオン！」 ワク&タケシ「ヒア・ウィ・ゴー！」

(403)

メインブースターから太陽の如き閃光があふれ出た。機体の限界を超えてガンバールが飛翔する。反物質燃料の投入による、桁違いの出力が開放されたのだ。タケシ「耐えてくれ！ ガンバール！」 機体そのものを超高速の弾丸に変えて、ガンバールは残り2体の敵に突っ込んでいく！

(404)

体当たりで一体撃破し、進路変更。強烈なGに耐え切れず、バールを装着した方の腕が瓦解した。タケシ「がんばれー！」 ワク「ガンバール！」 レールガンを頂点として、流星のような弧を描いて敵に突っ込むガンバール。衝突と同時にトリガーオン！ タケシ「シユウウウトー！」 ワク「エキサイティイン！」

(405)

ポロボロに傷ついたガンバールは、それでもなお、その巨体を雄々しく空に羽ばたかせていた。その背後で最後の円盤型エイリアンが爆散飛散激散する。タケシ「やったぜ！」 ワク「ウィー・ウィル・ウィン！」 撃破ポイント198。タケシ「ちつくしよー、これでもまだワクに負けてるぜー！」

(406)

現在の最高撃破ポイントは302で、保有者はルーマニアに住む

10歳の少年だ。ガンバールのプレイヤーは世界中におり、ワク達も彼らとタッグを組んで遊ぶ。ワク「グッゲーム！」 タケシ「ぐっげーむ！」 だからワクは頑張って英語を勉強したのだ。独学なので見事な日本英語になってしまったが。

(407)

タケシ「よし、次だ次！」 二人が次のステージに進もうとしたその時、ワクにアフレルからDMが来た。ワク「アリトル・ウェイティン」 タケシ「ほい？」 ワクはいったんアプリを切ってDMに集中した。こんな時間にお父さんからDM。なんだろう？ アフレル「ワクー、今ちよつといいかー？」

(408)

ワク「ホワツツ？」 アフレル「仕事が決まったぞー」 ワク「コングラッチュレイション！」 アフレル「ありがとー。でも困ったことに単身赴任なんだ」 ワク「タンシンフィン？」 アフレル「ソロ・アサインメント」 ワク「OH！」 英語で言った方が通じるって……とアフレルは思ったり思わなかったり。

(409)

アフレル「やっぱ、いやか？」 ワク「うーん……ノープロブレム！」 アフレル「そ、そうか」 あっさり問題なしと言われてホッとしたような、でもちよつと寂しいような、そんな複雑な思いがアフレルの脳裏に巡った。ワク「ホワツツ・ワーク？」 アフレル「んとなー、ガンバールの開発なんだ」

(410)

ワクは興奮のあまり、その後30分くらいの記憶が吹っ飛んだ。タケシ君がいうには、部屋の壁が突き破られるかと思ったとか。防音性の高いお家にも関わらず、近所から「子供が雄たけびを上げて

いてうるさい」との苦情が入ったとか。とにかくすごい興奮っぷりで、一時的にフロロワーが半減したくらいだ。

(411)

その日の夕方。ヨコはタケシ君のお母さんにお詫びのリプライをしているところだった。ヨコ「うちのワクがご迷惑をおかけしました」 タケシママ「いえいえ、男の子はあれくらい元気な方が良いんですわ、オホホホ。我が家の防音機能がまだまだということですよ、ウフフフ」

(412)

ヨコはリプライを切ると、家族のみんなに向かってポツリつぶやいた。ヨコ「タケシ君とこのママは、なんであんなにこだわるのかしら？ 防音に」 みんな一様に首を傾げたが、これはという回答を思いついた者はいなかった。それよりもっと大事なことがある。ヨコ「あなた、就職おめでとう」

(413)

アフレル「あ、ありがとう、ヨコ」 ヨコ「うっん、明日からお仕事頑張ってるね。今夜はお祝いにお赤飯を炊いたのよ」 アフレル「うっ」 実はアフレル、赤飯があまり好きではない。特に甘い豆の入っているのが苦手で、彼の中で甘いご飯は、ご飯とすら認識されない程のシロモノなのだ。

(414)

アフレルは自分で背広のシワを伸ばしながら、正直肩身の狭い思いだった。明らかに妻の機嫌が悪くなっている。それもそうだ、単身赴任なんて大事な事を、相談もなく決めてしまったのだから。アフレルはDMを送った。アフレル《ねえヨコ、怒ってる？》 ヨコ《うっん全然。なんで？》

(4 1 5)

アフレル《いや、僕一人で大事なこと決めちゃったからさ……。
気にしてないならいいんだ》 ヨコ《うん、別にそのことは気にし
てないわ。あなた甘い赤飯苦手だったけど、塩豆の赤飯なら大丈夫
よね》 アフレル《え？ うん、全然OKだよ！ 何でも食べるよ
！ だって、明日からはもう……》

(4 1 6)

ヨコ《秘密基地のごはんってどんなかしらー、あなた何食べたか
ちゃんと教えてね。参考にしなきゃ》 アフレル《うん。ご飯を食
べる時間はみんな合わせよう。食べるものは別になっちゃうけど、
やっぱりみんなで食卓囲むって大事だと思うし》 ヨコ《ええ、そ
うね。ちゃんとしないとね》

(4 1 7)

夕食後。ノルコはワクの部屋で、ガンバールについて教えて
もらっていた。ワク「ウィ・ビート・エイリアン・ウィズ・ガンバ
ール」 ノルコ（ようわからんものう、巨大ロボットってなにかー？）
話をしたり聞いたりしながら姉弟は、晩御飯の時から両親が口を
開いていないことを気にしていた。ワク「hum……」

(4 1 8)

イズミ家のTLは現在、ワクのツイートだけになっている。きつ
とパパとママはDMで話し合ってるんだと思う。しかし両親ともム
ツツリしている状況は、子供にとって居心地のよいことではない。
ワク《喧嘩？》 珍しく日本語DMのワク。しかしノルコに出来る
ことは、口をへの字にするくらいなものだった。

(4 1 9)

ルイ「ノルコノルコノルコー！」 突然ルイからノルコにリプライが来た。ルイ「ちよつとちよつと！ お父さんがガンバールの研究員になったって本当？！ マジ本当？！」 突然まくし立てられて、ノルコはしばらくポカーンとしてしまった。しかし考えて見れば、どのみちつづやけない。

(420)

ルイ「ああー、もう！ ノルコと話したい話したい話したい！ 最近全然遊んでないじゃないか！」 そんなルイの熱烈ラブコールに、ノルコはほんのりと頬を赤らめる。ノルコ（そうだ！ こういう時こそお爺ちゃんのパＣ！） ノルコはさっそくゲンお爺さんのパＣを立ち上げた。

(421)

ゲン「私もみんなと話したいと、いつも思っているよ」 ルイ「わっ、びっくりしたー。ノルコか。うん、そうだよね。ごめんねなんか無理言っちゃってさ。でも凄いいねお父さん。巨大ロボット開発なんて、地球中のちびっ子たちの憧れじゃないか」 ゲン「でもノルコには良くわからない」

(422)

ルイ「わかんない人にはわかんないのかなー、巨大ロボットの口マン！ 強くて大きくて黒光りしてるんだぜ！」 ノルコはそういうのより、可憐で小さくて薄桃色なものの方にロマンを感じるタイプ。ゲン「そんなに凄いの？」 ルイ「うん、超すごい！ JPN 48000のメンバーになるくらい！」

(423)

それはちよつと微妙な凄さだなとノルコは思う。JPNのメンバーってそこそこオシャレで、あとは踊りと歌をちゃんと覚えれば、

案外簡単になれちゃうものだ。なんたって4万8千人もいるのだから。ルイ「なんかさ、最近ノルコの周りで色々起きるね。気付いてるか？　今ひそかなノルコブームなんだぞ？」

(424)

ゲン「私がブーム？」　ルイ「うん、近頃フォロワー数どんどん増えてるだろ？」　確かに、ルイの言うとおり、近頃ノルコのフォロワー数はうなぎのぼりだ。ヤマオ君がつぶやいた時にドンと増えて、ゲンお爺さんのPCを使うようになってからもジリジリと増え続けている。ゲン「ふーむ」

(425)

ゲン「そんなことよりツイート治したい」　ルイ「はは、まあそうだよ。フォロワー数が増えたって自分がつぶやけないんじゃないよ切ないよね」　ゲン「うん」　呟けないことは確かに切ない。しかしノルコは最近、呟けないことを逆に利用するようになってきた。つまり、体よく無視できるのだ。

(426)

ゲンお爺さんのPCを使うようになってから、知らない人にフォローされたり、リプライされたりすることが多くなった。その多くはゲンお爺さんのフォロワーさんだ。お爺さんは本当に気に入った人以外はブロックしていたようだけど、亡くなってからもそれを続けることは出来ない。不良フォロワーも増えてきている。

(427)

亡くなってからもフォロワーが増えるなんて、ゲンお爺さんは凄人だったんだなとノルコは思う。でもそのフォロワーさんの中には、殆ど嫌がらせに近いリプライをノルコに飛ばしてくる人もいるのだ。そういう人たちをノルコは、呟けないことを理由にして無視

している。

(428)

ルイ「ノル？」 ノルコは少し考えたのち、DM機能を使ってルイに返事を送った。ゲン《このごろ、変なりプライが来るの。知らない人から》 ルイ《え、まじで？ 痴漢か?!》 ゲン《ううん、何か政治みたいなこと》 ルイ《政治？ 何て言われるんだ？》 ゲン《私がゲンお爺さんの正統な後継者だとか、そんなの》

(429)

ルイ《うわ、それってゲンお爺さんの熱烈な信者なのかな。迷惑な話だね。ブロックしちやえば？》 ゲン《そのほがいいかな？》 ルイ《うーん、その人が何て言うてくるのか詳しく知りたいな。明日、学校の後にノルんち寄っていい？ 見てみたいよそれ》 ゲン《そうしてくれるとうれしいな》

(430)

ノルコは母に、明日お友達遊びにくることを伝えようとしたけど、咳けないので代わりにルイが伝えることに。それから母がノルコに「OKよ」とリプライを入れるという、ちょっと回りくどいことをする。ノルコはPCを閉じ、ガンバールのことですつと友達と喋っているワクをよそ目に、お風呂に向かった。

(431)

ノルコはお風呂の脱衣所に入って扉にカギをかける。洗濯機の上に置んだパジャマを置き、そして服を脱ぎ始める。ノースリーブの夏物セーター。バナナのプリントが入ったシャツ。ベージュ色のショートパンツ。水色の横じまが入った靴下。全部綺麗に畳んで、洗濯機の横のカゴに入れていく。

(432)

全ての衣服を脱ぎ終えて、カゴを覆うようにしてバスタオルを置くと、ノルコは浴室へと入っていった。ノルコ(ふうんふうんふうん……) 咳けないので頭の中で鼻歌をハミング。まずはシャワーを浴びる。こうして体を流してから湯船につきり、それから体を洗ったりするのがイズミ家の流儀だ。

(433)

ボディソープで体を洗いながら、ノルコは自分の体をチェックする。最近とにかく肉がつく。小さかった頃のノルコはガリガリにやせていて、あばら骨とか尾てい骨とか、とにかく骨が突き出ていた。ノルコ(……お相撲さんになっちゃう!) 成長期なので仕方ない

ことなだが、やはりそこは女の子。

(434)

ノルコ(……ハッ!) ノルコはお風呂場にT.L.が設置されていることを思い起こして、一瞬息を飲んだ。でもすぐ、それがなんのこっちゃと思い直す。お風呂場で自分の体をしげしげと観察している女の子なんて、はしたなすぎて家族にも知られたくない。でもT.L.にはそこまでは記録されない。

(435)

イズミ家のお風呂T.L.には色々なことが記録される。誰がどれだけお湯を使ったか、何のお湯に何分かつたか、お風呂のフタはちゃんとしたか。さらには、どんな歌をハミングしたかとか。どれも資源の有効利用と、家族の健康管理のために欠かせない情報だ。そのためノルコは、先ほど監視されているような気分になったのだ。

(436)

ノルコ(お風呂にはT.L.があるけど、トイレにはT.L.がない。不思議) 体を洗い終わったノルコは、再び湯船につかりつつそう思う。お風呂とトイレの間に何か違いがあるのか? わかるような、わからないような。しかしとにかく法律で決まっている。トイレにT.L.を置くことは現在タブーなのだ。

(437)

ノルコ(そもそもトイレにT.L.を置いてどうするか?) お小水の量でも調べて記録するのだろうか? 後はいつ誰が何分利用したかとか? そんなことはまっぴら御免だと、ノルコは素直に思う。もっともらしい利用目的としては、緊急時の通報用だが、それだつて別にT.L.でやる必要はない。

(438)

ノルコは顔を湯船に半分沈めてブクブクしつつ、改めてＴＬを設置することの意義を考えた。一番重要なＴＬの機能は、その場でなされた会話や独り言を記録するというものだ。記録しておけば、あとでゆっくり状況を省みることが出来る。必要があれば、かなり過去まで遡って検討することができる。

(439)

次に、その場に人や物がどれだけ存在したかを記録することだ。人々がお互いの行動を把握しやすくなり、物をなくした時もしくはＴＬをたどって発見できる。誰もいない場所で一人ぼっちになっても、かつて人々がそこで活動していた時のＴＬを眺めたりして暇をつぶすことができる。

(440)

いまやＴＬは、生活に欠かせないものという次元を超えて、空気や光のように、ごく当たり前に存在するものになっている。それがトイレだけには適応されていないのだ。トイレにＴＬを設置しないことで、人々は一体何を守っているのか？ 改めて問われてみれば、なんとも答えようもないことだ。

(441)

こんな難しい問題を、まだ小学5年生のノルコに解けるはずも無く、しかも何だかのぼせてきた。ノルコ（そろそろあがろうー……）そうノルコが思ったとき、唐突に一通のリプライが飛んできた。ミギノウエ「この間リプライした件、考えてくれたかな？ ノルコちゃん」またきた。ノルコは風呂場の中で一人、臨戦態勢をとった。

(442)

しかしノルコは、いつも通り無視することにした。ミギノウエ「君はミスター・ゲンのひ孫さんだ。そしておそらくは彼と似たポリテイクスを持っている。と僕は推測する。やはり君は、ゲンお爺さんの意思を継いで、政治の表舞台に立つべきだし、それが出来る人物だと僕は思う」

(443)

ミギノウエという人物は、トウキョウのアカサカに住んでいる男の人で、年齢は34歳。職業はプログラマーとなっている。彼はノルコに対し「政治の表舞台に立て」という一貫した主張を続けている。ノルコ(……一体何なんだろう?) さらに困ったことに彼は、ゲンお爺さんの相互フォローなのだ。

(444)

ゲンお爺さんがフォローしている(生前の話だが)ということ、ノルコはこの人を信用したとも思っている。しかしその主張が「政治に首をつっこめ」だというのは、いかにも胡散臭い。ノルコは逆に色々質問してみたい気分だったが、いかんせん眩けない身。それに相手も気にしていないらしい。

(445)

ミギノウエ「君が眩けない病気だっことは良くわかってるし、別にそれで全然かまわないんだ。ただ僕の話聞いてくれさえすれば。その方が僕らにとっても都合が……いや、特に深い意味は無いんだよ、ゲフフンツ」このような含みのある言い回しをちよくちよく使ってくることも、ノルコをイラツとさせる。

(446)

ミギノウエ「改めて言っておくよ。君にはゲンお爺さんの意思を継ぐ資格と、そしておそらくは義務がある。この国の国会議員は、

全国民による相互投票によって、法案ごとに出選される。そこに年齢制限は存在しない。つまり小学生の君でも国会での議決投票に加わることができるんだ」

(447)

ノルコ(それは知ってます!) 体内ツイッターの普及によって、選挙システムも変化した。国民は、自分達の知る人の中から「この人が国会議員だったらいいのに」と思う人に投票することができる。しかし選出されるのは投票数の多い人ではなく「投票関連度」の高い人だ。これは少しわかりにくい。

(448)

例えば、ノルコがルイに投票し、ルイがヤマオに投票した場合、ノルコは“ヤマオを支持するルイ”を支持したことになる。つまり、ルイとヤマオの両方に投票したことになり、票が累積されるのだ。この場合、ノルコ0票、ルイ1票、ヤマオ2票という形で、票が振り分けられることになる。

(449)

もし、その状態でヤマオがノルコを投票すれば、そこにノルコ・ルイ・ヤマオのループが出来上がる。こうなった場合、票は累積されず、それぞれ1票として処理される。この操作が現在の日本国民の間で行われるわけだ。つまり理論上の最大獲得票数は(全人口・投票棄権者数)となる。

(450)

ノルコ(だからって私が国会議員に選ばれるわけない、常識的に考えて) ノルコ達は、友達同士で投票しあったりするが、結局ループがたくさんできてしまうので、大した票にはならない。ミギノウエ「果たしてそうかな?」 ノルコ(!?) ミギノウエ「おっ

と、なんでもない。ゲフフンッ」

(451)

ノルコ(今の、頭の中を覗かれた感じは……)　ホウさんみたいだとノルコは思った。そしてその仮定が意味するところは。ノルコ(GPTL!?)　ホウ以外にもGPTLを利用して人かいてもおかしくない。ノルコは愕然とした。このミギノウエという人はきつと、私を利用して政治を動かそうとしているんだ、と。

(452)

ノルコはお風呂を出ることにした。そしてパジャマに着替えている間中『何も考えないこと』に徹した。思考を読まれてしまうのなら、何も考えなければいい。ミギノウエも潮時と思ったのか、ピタリとリプライを止めた。今の世の中、夜遅くに偏執的なリプライを続けても、何ひとついいことはない。

(453)

ノルコは脱衣所を出た後も何も考えなかった。何も考えずお風呂上りのスポーツドリンクを飲み、自室の絨毯にコロコロをかけ、ランドセルにノートとマイ箸を入れ、机上のピヨッターをジーンと見つめ、洗面所に行って歯を磨いた。ノルコ(思ったより簡単だ何も考えないの。あ!)　考えない考えない。

(454)

何も考えないようにしていたノルコは、家族に話しかけられたら何かしら考えなきゃいけないな、なんてことも考えず、まるで夢遊病に罹ったようにフラフラとダイニングに歩いて行って、食卓の椅子に座った。向かいの席にアフレルが座っていた。テレビがついていて、弓道講座をやっていた。教育チャンネルだ。

(455)

ノルコ() ノルコはもうまったく完全に無思考の境地に達していた。自分が何も考えていないことにも気付いていなかった。一方アフレルは、テレビの方を向いてはいるが、目の焦点はそこではなく、遙か彼方だった。何か物凄い勢いで思考しているようにも見えたし、ノルコと同じく何も考えていないようにも見えた。

(456)

そのまましばし時が流れた。テレビだけが、ダイニングの沈黙を癒していた。テレビ「弓は強く握ってはなりません。人差し指と親指の股に軽く気持ちをこめ、小指の付け根を締めます。俗に卵握と呼ばれ、ちょうど生卵を手につくくらいの力加減です。強く握ってしまうと弓が返らず、矢勢が弱まり、狙いも定まりません」

(457)

テレビ「執り掛け、打ち起こし、引き分け。一連の所作の中でも常にこの卵握を意識します。何度も繰り返し練習し、意識しなくとも出来るようになりましょう。親指が的に向かって伸び、角見が十分に利いていけば、離れの際に弓がクルリと手の甲側に返ります。以上が『手の内』の作り方です」

(458)

テレビ「手の内を隠すという言葉がありますが、それは弓道の手の内からきていると言われています。手の内の作られ方は射手の数だけあるといわれ、弓道において最も工夫がなされる個所です。日々の鍛錬の中、何年もかけて作る大切な手の内ですので、そうやすやすと人に教えるわけにはいかない訳ですね」

(459)

何も考えていないノルコは、もちろん弓道講座の内容など頭に入

つていなかった。目の前でアフレルがボーっとしていることも頭になかった。今、ノルコの頭にあるのは、真っ白な心地よい海だ。真っ白な海水が、真っ白なしぶきをあげ、真っ白な砂浜に押しは引いている。ざざーん、ざざーん。

(460)

アフレル(……………あつ) アフレルがノルコの存在に気付いた。アフレル(いつからそこに…………?) 娘は弓道講座を熱心に見ていた。まるでテレビの中に溶け込んでしまったのではないかと思うくらい、熱心に。アフレルはいつか娘が弓をやりたいと言ってきたら、喜んで了承してあげようと思った。

(461)

ヨコ「あなた、お風呂は？」 寝室で布団を敷いているヨコがツイートした。家下りが一段下がり、その上にヨコのツイートが書き加えられる。アフレル「あつ、うん、今入る！」 アフレルはノルコを横目にチラッと見ると、せかせかとお風呂に向かっていった。ヨコが寝室で、一人静かにため息をついた。

(462)

妻がムツツリとした様子で「別に怒ってないわ」という時は、間違ひなく怒っている。事実ヨコは怒っていた。夫が勝手に単身赴任を決めたことではなく、一番最初にワクに相談したためにだ。仮にも一家の大黒柱が、まだ10にもならない息子に、就職に関する相談をしたのだ。

(463)

その事実はヨコの美意識に反していた。アフレルの美点は、いつでも純真で裏表がないことだが、しかしそれは時として「いくつになっても大人にならない大きな子供」という印象をヨコにもたらす。

先ほどの「あつ、うん、今入る！」だって、まるで言葉を覚えたばかりの子供のようだ。

(464)

単身赴任のことも、いつそ夫の独断で決めて欲しかった。なんなら家族ごと引越したって良かった。「オレは秘密基地の研究員になることにした、だからお前達もついてこい！」男ならそれくらいの強引さや気概があってもいいんじゃないかとヨコは思う。そうじゃなきゃ張り合いがない。

(465)

しかしそれを今の夫に求めることは、たぶん難しいだろう。ヨコ(……あらやだ!) 私は今いつたい何て考えた? 今の夫にはって思った? 夫は今も昔もこれからも、あの人だけのはずではないの? そう思いつつも、ヨコの脳裏には、先日ナンパしてきたイタリア風の青年の面影が浮かんでいた。

(466)

あなたがガンモドキを忘れるだろうことを予感しておりましたので。それって一体どんな予感なの? ヨコは今日までに何度そう問い直したか知れない。確かに変わったナンパ術だ。しかし重要なのは形ではなく、思いの強さだ。ヨコ(いけない、疲れてるせいか、おかしなことを考える……)

(467)

ヨコは早めに寝てしまおうと思う。寝る前に炊飯器のタイマーを確認しようとキッチンに向かった。通りがけのダイニングにノルコがいた。ヨコ「あら? ノルコなに見てるの?」ノルコは弓道講座が終わったあとの「これからの番組予定」を見ていた。恐ろしく熱心に。まるで目がテレビになってしまったかのように。

(468)

ヨコ「??」 ヨコは何がそんなに気になるのだろうかと首を傾げた。何かとても重要な番組でも予定されているのだろうか? いや、そんなことはない。ヨコ「……えっ?」 ノルコが唐突に椅子から立ち上がった。そして耳たぶ操作でテレビを消す。まるでゼンマイ人形のような力チカチとした動きだった。

(469)

ヨコは変だなと思った。しかし出来ることは一つしかなかった。ヨコ「ノルコ」 ノルコは反応しない。ヨコ「ノルコ!」 強く言つて肩をさすつた。ノルコがその場でビクツと跳ねた。ヨコ「どうしたの?」 ノルコはしばらく口をポカーンと開けて、それから何かに気付いたように首を横にプルプルさせ始めた。

(470)

ノルコはその後すぐに走って出て行ってしまった。ヨコはキッチンでオロオロとした。どうしちゃったの私の子。明日お医者さん? それとも今すぐ? しばらくしてヨコにリプライが来た。ゲン「おふるでのぼせた」 その1ツイートで、ヨコの胸中の不安がスツと溶けた。ヨコ「もうノルコったら!」

(471)

ノルコもノルコでホツとした。変な子と思われてしまうところだった。やはり人間、何も考えないで生きて行くのは難しい。ノルコ(もう寝るから!) ノルコは自分の心を覗いているかもしれない誰かに向かつてそう唱える。そして布団をかぶって電気を消すと、すみやかに夢の世界へと潜り込んだ。ノルコ(おやすみ!)

(472)

きーんこーんかーんこーん。朝の予鈴がなった。遅ればせに登校してきた子供たちが、足早に教室へと向かっていく。ジエネ「うーん……」保健室の一角では、机の上で保険医のジエネ先生がノルコのバイオデータをチェックしていた。ジエネ「なかなか治らないわねえ……ノルちゃんのツイート」

(473)

ジエネ先生はウェーブがかったブロンドをさりげなくかき上げ、淹れたばかりの特濃コーヒーを口に運ぶ。近ごろ蒸し暑い夜が続いて寝不足ぎみなのだ。ジエネ「バイオロジーネットワークに異常はなし、もういつツイートが戻ってもおかしくない状態だけど」そう言うってジエネ先生はうーむと考え込む。

(474)

ジエネ「もしかして、つぶやき方を忘れてる？何かきっかけみたいなものが必要？」しかしジエネ先生には、そのきっかけの作り方が今ひとつ思いつかない。ジエネ「困ったわね。そのうち自然になおるのかしら？」とんとんとん。ドアがノックされた。ジエネ「はい、どうぞー」

(475)

クオ「失礼するおっ」入ってきたのは「眠りのウイスパーボイス」の二つ名を持つクオ先生だった。ジエネ「あら、どうしたんですか？」クオ「いやあ、そのお。ちょっと今朝からお腹の調子がよくないんだお。何かいい薬ないかなと思っておっ」ジエネ「ふ

わああ〜。ちょっと待って下さいね」

(476)

生あくびを噛み下しつつ、ジエネ先生は棚から整腸剤を取り出した。ジエネ「はい、どうぞ」クオ「どうもなんだおっ」クオ先生は薬を上着のポケットにいれると、ぼんやり窓の外に目をやった。クオ「今日はいい天気ですお」ジエネ「ええ、本当にー。うつらうつら」ジエネ先生、今にも寝そう。

(477)

クオ「今週いっぱい天気がいらいらしいんですお。それでその……今度の水曜の祝日、もしお暇だったらお……」ジエネ「こっくり、こっくり」クオ「一緒にパラグライダーなどやりにいきませんかおっ、おっおっおっ」クオ先生は額に汗だったが、ジエネ先生は鼻からzzzマークがもれていた。

(478)

きーんこーんかーんこーん。お昼休みの予鈴がなる。ジエネ先生が催眠術のような眠りから覚めたころ、ノルコ達のクラスでは給食の準備をしているところだった。ヤマオがトレーを渡し、ルイが白飯をよそい、ノルコがすみれ汁をつぎ、レイタがだし巻き卵をのせ、リンが金平と佃煮を添え、カズノリが牛乳を配る。

(479)

給食の準備ができたころ、突然レイタがノルコに言ってきた。レイタ「だし巻きやるよ。好きだろ？」そういつてだし巻き掴んだトングをググイと突きつけてきた。ノルコはオタマを持ったままポカーン。ノルコ(………いつたいう風のふきまわし?)しかし、だし巻きはしっかり頂いた。

(480)

レイタ「……悪かったな、いろいろ」 そう気まずそうに言い捨てる、レイタは自分のトレーを持って行ってしまった。ルイ「なんなのかな？ いまさら」 ノルコは首を傾げつつ、自分の分のつみれ汁をついで席へ向かう。そして全員着席し「いただきます」をする段取りとなった、その時……。

(481)

レイタ「ちよつとまった！」 レイタがいきなり立ち上がって叫んだ。教室にどよめきが走る。レイタ「今、この場でガンバルやってるやつ、スタンダアップ！」 申し合わせたかのように、クラス半分以上が立ち上がった。ルイもなんとなく、つられて立ち上がってしまった。

(482)

ルイ「レイタあ？」 レイタはルイの怪訝な視線も気に留めず言う。レイタ「俺は……俺は今ほど嬉しいと思っただことはない！」 といって胸の前に握りこぶしを作る。レイタ「全員、ノルコに向かって敬礼だ！」 ばばっ！ いくつもの敬礼が、突然ノルコに向かってなされた。ノルコ（な、なにごと!？）

(483)

ノルコばんざーい！ ノルコのパパばんざーい！ 戦え我らのガンバル！ 地球の未来に光あれ！ 謎の唱和斉唱が、ノルコを中心としてなされていた。ルイ「……そういうことか」 レイタ「俺、ノルコのクラスメートでほんつとうに良かったぜ！ 友達達の父さんが秘密基地の研究員だなんて、まじ最高だぜ！」

(484)

レイタ「なあノルコ！ 俺たち友達だよな！ な！ 食いもんを

交換する仲だよな！ 大親友だもんな！」 そしてノルコの手をとり強制ハンドシェイク。レイタ「で、今度ノルコの親父さんの職場に行ってみたいんだが」と、そこまで言ったところで、ノルコの膝蹴りが彼の尾てい骨に炸裂した。レイタ「あー！！！」

(485)

給食後、ノルコ達は会議を開くことにした。例の迷惑リプライについてだ。放課後ノルコの家に行って、ゲンお爺さんのPCで「ミギノウエ」について調べるのだ。ルイ「犯人はミギノウエってやつなのか、変わった名前だな」 カズノリ「しょ、小学生に政治の話をしけるなんて。ふ、フトドキな人だよ！」

(486)

ノルコの席を囲むようにして、ルイ、リン、カズノリが座っている。少し離れた窓際では、ヤマオがボーっと外を眺めている。レイタは体育館だ。テコンドーの修行をするらしい。リン「ミギノウエ……さん？ なんだかどこかで聞いたような？」 ルイ「えっ、どこで？」 リン「どこでって……なんだろう？」

(487)

カズノリ「あ！」 秀才肌のカズノリ君が何かに気づいたようだ。そしてヤマオの方を振り向いた。カズノリ「や、ヤマオ君の。よ、四番目のツイート」 ノルコ（！！） ルイ&リン「あ！ そうだった！」 そして4人の視線がヤマオに集まる。ヤマオ「……………」 ヤマオの切れ長な目と福耳が、ゆっくりこちらを向く！

(488)

一同 ヤマオはしばし首だけをこちらを向けた状態で佇み、そして再び窓の外に視線を戻した。ルイ「なあヤマオ。まさかとは思うけど、何か関係あったりするか？ ミギノウエって人と？」 ヤマ

才は両腕を組むと、やや上方を見やって考え込んだ。そしておもむろに首を振る。知らないということだ。

(489)

ルイ「そうだよな、ただの偶然だよな。ごめんなヤマオ」 ヤマオは手の平をこちらにかざし(問題ない)と伝えてくる。カズノリ「な、何はともあれ、げ、ゲンお爺さんの、か、関係を、し、調べないと、ねっ」 政治問題とかに強そうなカズノリも、今日はノルコの家に行くことになっている。

(490)

やがて5時限目の始まりを告げるチャイムがなった。ノルコ達は席に戻って準備をする。タッチパネルになっている机の天板を綺麗に拭いてノートを起動し、耳たぶクリックで教科書を表示、タッチペンを机の隅に置いて準備完了。ノルコ(……ん?) ヤマオがノルコの方を見ている。なんだろう?

(491)

先生が教室に入ってきて、電子黒板の落書きに黒板消しをかけていく。その間中、ヤマオはジッとノルコを見つめていた。ふくよかな顔の輪郭に埋もれる切れ長な瞳。その瞳がさらに細く糸のようになる。極限にまで収斂されたその視線は、ノルコの網膜さえ貫いて、まるで頭の中に直接メッセージを伝えてくるかのようだった。

(492)

「起立! 礼! 着席!」 日直の号令とともにノルコはヤマオの視線から開放された。ノルコは席に着きつつ思う。ヤマオ君は私に向けて何か重要なことを伝えてきたのでは? 実はミギノウエっという人と関係がある? ヤマオ君とミギノウエさんは、実はやっぱり知り合いなのか?

(4 9 3)

考えるほど謎は深まるばかりだ。ノルコ（問題が山盛り！）つ
ぶやけない病氣、ミギノウエの政治勧誘、秘密基地員になったお父
さん、ナンパされたお母さん、ホウとGPTL、ヤマオの意味深な
視線……。ノルコ（もう何が何やら！） まったく思考がまとまら
ない。ノルコはひたすらタッチペンを回し続けるのだった。

(494)

放課後になると、一同はまっすぐノルコの家に向かった。女子3人の中に男一人のカズノリ、それとなくヤマオ君をさそってみた。すると以外なことに、二つ返事で了承してくれたのだった。ルイ「ヤマオが放課後寄り道って珍しいな！」　そう、ヤマオが誰かの家に遊びに行くなんて滅多にないことだ。

(495)

ノルコは家に着くと、心の中で(ただいまー)と言いながらドアを開けた。カズノリ「お、おじゃましますっ」　ルイ「こんにちわー」　リン「おじゃまますっ」　ヤマオ「……………」　母のヨコはダイニングから顔をのぞかせつつ、ヨコ「はいはい、いらっしやいー。ゆっくりして行ってね！」

(496)

ヨコは子供たちが二階に上がっていくのを見送った後、お菓子のジュースの用意を始めた。ヨコ(ヤマオ君ってああい子だったのね。なんて大人びてるのかしら、まだ小学生なのに)　玄関先でのお辞儀の仕方なども堂に入っていて、夫のアフレルにも見習って欲しいくらいだった。

(497)

ヨコ(ヤマオ君のおうちにはお父さんがいないのよね……………確か)　ヤマオは母と二人暮しである。父親はヤマオが生まれてまもなく、まさに煙のように消えてしまったらしい。しかも、生まれてきたヤマオはなかなか言葉を発しなかった。この当時のヤマオの母の気持

ちは、想像に余りあるなとヨコは思った。

(498)

言葉を発しないヤマオは、当然ながら知能障害が疑われた。しかし3歳時の知能テストの結果、ヤマオの知能指数は平均を上回っているということがわかった。事実、ヤマオは殆どと言ってよいほど母親の手を煩わせなかった。それどころか、気落ちしがちな母を慰めるような行動さえ見せたのだった。

(499)

EQ・IQともに人並みはずれた天才児。しかし滅多につぶやかない。ヤマオはある種のサヴァンなのではないかと考えられ、発達心理学や児童心理学に関わる人達の目を引くこととなった。ヨコ(確かに凄い子だけど、それでもノルコのお友達に変わりはないわ)そうしてヨコはノルコの部屋にお菓子を運んでいった。

(500)

子供達はお菓子を持ってきてくれたノルコの母親にお礼を言っと、さっそく例のPCを起動させた。ルイ「これがPCってやつか！なかなか使えるようになってないな」リン「このカリカリって音なんだろ？」カズノリ「た、たぶん。き、記録装置が、う、動いてるんだよっ」ヤマオ「……………」

(501)

PCが起動すると、すぐにツイッター用のブラウザを立ち上げる。カズノリ「む、む、僕らのツイッターと、に、似てるね」ルイ「だな。これでツイートをどんどん逆登っていけば、いずれミギノウエって人のリプライに行き当たる」リン「でもどれだけ逆登ればいいのか？ 下手すると終わらないんじゃない？」

(502)

一同どうしたものかと首をひねったその時、ヤマオの瞳がキラーンと光った。ヤマオはノルコの肩を軽くつつく、まるで「ちよつとPCいじってみていい?」とでも聞くように。ノルコはウンと首を縦に振る。ヤマオはさっそくマウスを片手にPCを操作しはじめた。カズノリ「や、ヤマオくん……すごい」

(503)

ヤマオがやったことは至極単純な操作だった。ゲンとミギノウエの名前、両方を含むツイートの検索をかけたのだ。ルイ「そうか、この手があったか!」リン「こんなの普段やらないから、わかんなかったねー」誰かさんと誰かさんが何を話していたか、なんてことノルコ達の世代は殆ど気にしないのだ。

(504)

カズノリ「さ、流石だね、や、ヤマオ君。尊敬するよ……」そうこう喋っている間にも、ノルコはゲンとミギノウエの会話をどんどん読んでいった。最初の方は、ゲンお爺さんが亡くなった時の御悔みのツイート、その下が闘病中の励ましツイート、その中に、どうも政治っぽい話題がチラホラ混ざっている。

(505)

ミギノウエ「@ゲン：ああ、人類はまたかけがえのない人を失なうんですね。ああ……「ご冥福を」ミギノウエ「@ゲン：しっかりと！ 気をしっかり持ってくださいミスター！ 僕はもっと貴方と話たいことがあるんです！」ミギノウエ「@ゲン：落し物管理法案が否決、やりましたよ!」

(506)

ルイ「なんだか普通に親しかった感じだね」ゲンお爺さんが亡

くなつた時、ノルコは5つか6つくらいだったからよく覚えてないのだが、でもその時にミギノウエ氏とこんなやりとりがあったなんて、正直おどろきだった。ノルコ（私に政治の話ふってくるのも…
…わからなくもないかな？）

(507)

一同はさらに古いツイートを読んでいく。ゲン「@ミギノウエ：
落し物管理法案の『管理』は『監視』の婉曲表現だと私も思います。
紛失物の情報を第三者機関により一元管理し、落とし主に確実に返却する。聞こえは一見よいが、要は特権団体による情報の独占であり、一方的社会監視の一助となるだろう」

(508)

カズノリ「な、なんとも本格的、的な議論だ、ね」リン「落し物ひろつた時って、たまに返す返さないでもめるんだよね」ルイ「この『監視』って言葉が重要なんだな？」ノルコはウンウンうなづく。一方監視という概念が、世の中を底なしのドロ沼に引きずりおろすのだと、お爺さんはよく言っていた。

(509)

ゲン「@ミギノウエ：もう100時間くらいぶっ続けてPCの前におるな？ 散歩でもして日に当たってきなさい」ミギノウエ「@ゲン：うわなげバレンタWWW」ゲン「@ミギノウエ：わしが何年ツイッターやってると思っちよるW」ミギノウエ「@ゲン：ちよっとコンビニ行ってきますWWW」

(510)

ミギノウエ「@ゲン：ゲンさんは、宇宙人の存在って信じてる口ですか？」ゲン「@ミギノウエ：いてもおかしくないじゃろ」ミギノウエ「@ゲン：侵略とかしてきたらどうします？」ゲン「

@ミギノウエ：全力でバトる」 ミギノウエ「@ゲン：えっ！」
ゲン「@ミギノウエ：血の気の多い奴等にはそれが一番」

(511)

ルイ「ずいぶん仲よしだね。Wの連発にはちよつと時代を感じるけど。ゲンお爺さんはどんなきつかけでこの人と相互フォローになったんだろうね」 リン「ゲンおじさん、相互少なめ」 カズノリ「あ、相手を、え、選んでたんだ、ね。な、何かき、基準があったの、かな？」 ノルコはしばし考えた後、キーボードに手をかけた。

(512)

ゲン「何となく良い感じのする人をフォローしてた」 カズノリ「な、なんとなく?!」 ゲン「言葉の汚い人はフォローしなかった」 ルイ「まあそれはあるね」 ゲン「神秘的な感じのする人が好き」 カズノリ「な、なんでそんなこと知ってるの？」 ゲン「むかし好きな女の人のタイプを聞いたの」

(513)

ルイ「うんまあ、ツイートみてる分にもそれとなくわかるかな。ノルコのお爺ちゃんって、きつと風変わりな人に好かれるタイプなんだ」 言われてみれば、ミギノウエという人はどこか理解不能なところがある。自分だけベラベラ喋って、相手の返事を待つことなく消えてしまうあたりなんか。本当に何を考えてるんだらう。

(514)

ルイ「頑張ってTL逆登ってみよう」 それからノルコ達はひたすらマウスをカチカチやってTLを過去へと逆登って行った。ノルコ（みんなお菓子食べるの忘れてない？） ノルコに促されて気づいたみんなは、マウスを交代でカチカチやりながらブリッツやら揚げ団子やらをつまんで食べた。

(5 1 5)

ヤマオ「……………」 ヤマオはジューズのストローを啜えたまま
ジーンとディスプレイを見つめている。マウスを必死にカチカチや
ってるのはカズノリで、だんだん慣れてきたためか、TLは結構な
速度で流れていく。しかしヤマオはその一文一文をしっかりと読んで
いるようだった。ノルコ（読めるの?!）

(5 1 6)

ルイ「よし！ 行き着いたぞっ、みんな！」 一同、PCの前に
つめよる。【投稿日時：2090年8月2日12時34分】ミギノ
ウエ「貴方の考える愚民思想の問題点とは？ RT@ゲン：とかく
大抵の発案者は愚民思想の持ち主で自分だけが賢いとおもっとる」
これが二人のファーストコンタクトだった。

(517)

ルイ「……な、なんだ？」 一同沈黙。カズノリ「に、人間のほとんどもは愚かだから、だ、誰か頭のいい人が、し、し、指導してあげなきゃ、い、いけないって考えただけど……」 ルイ「そうなのか？ なんだかムカツとする考えだな。アホはアホなりに考えてやってるしんだし」 リン「うーん、私は政治の話とかさっぱり」

(518)

カズノリ「つ、続きを読んでみよう」 カズノリの提案で一同P Cに目を戻す。思いがけないキーワードに、みな少々恐縮している。ゲン「特権集団による権力の独占は、往々にして公共の利益に反する決断を生む。もっとも、これは一般論だが。RT@ミギノウエ：貴方の考える愚民思想の問題点は？」

(519)

ミギノウエ「@ゲン：個人の管理能力を超えた今日の情報氾濫が、市民生活を混乱させている事実があります。それを防ぐための一元的管理は、検討されて然るべきでは？」 ゲン「@ミギノウエ：その混乱を乗り越えることでのみ人は進歩する。一方監視が作る仮初めの平穏は、いずれ利権の温床となり社会を蝕むだろう」

(520)

ノルコ（ゲンお爺さん、なんだかとっても難しいお話してる……）
ノルコはそう思ったが、その一方で。ノルコ（……でも何となくわかる気がする） とも思った。カズノリ「ど、どうやらミギノウエさんは、げ、ゲンお爺さんのポリティクスに、興味を持って、り、

リプライしてきたんだね」

(521)

ルイ「いやまてよ、何となく対立してるように読めないか？」
リン「うんっ、私もそう思う！」　そして一同はさらに読み進める。
ミギノウエ「@ゲン：ではプライバシー問題はどうします？　バイ
オツITTERは個人情報秘匿性を奪いました。取り戻すにはセキ
ユリティー団体による管理が必要です」

(522)

ゲン「@ミギノウエ：プライバシーという概念は不変ではない。
時代によって変化する。現在のよう相互監視社会において、プ
ライバシーは一種の贅沢品であるし、過剰な保護はかえって猜疑心を
深め、人々を孤立させる」　ミギノウエ「@ゲン：隠し事が人々を
孤立させると言うのなら、いずれ人は服すら着られなくなります」

(523)

ルイ「そりやただのあてつけじゃないか！　やっぱちょっと変だ
ぞこのミギノウエって人」　リン「服は着ないわけにいかないよ…
…」　カズノリ「ん？　ん？！　っ、次のツイート！」　ゲン「@
ミギノウエ：世の中には、一家そろってスッポンポンという方々も
ある。いずれ人類がみなそうなる可能性は否定できまい」

(524)

ノルコ（……確かにいるけれど）　いわゆる裸族と呼ばれる人々
であるが、まさかそんな切り替えしをするとは。みんな、自分なら
こんな質問された時点で無視を決めてしまっただろうと思っていた。
ルイ「凄いね、ノルコのひい爺さん」　リン「で、でもすっぽんぽ
ん?!　えー?」

(525)

ノルコ(そういえば……) 以前、こんな事件があった。プライバシーの保護を訴える過激な人たちが、無作為に抽出した人々の入浴シーンをネット上にばら撒いた事件。そうすることで、人々のプライバシー意識に火をつけようとしたのだ。今の世の中、その気になればこんなことも出来てしまうのだ、と。

(526)

無論、隅々まで相互監視の行き届いたツイート社会において、彼らの行動は見逃されるものではなかった。すみやかに晒し上げられ、社会的な制裁を受けた。件の入浴シーンは、発信元から末端までくまなく検索され、完全に消去された。全てバイオツイッターを使っていたので、労力はそれほどかからないのだ。

(527)

晒された側の人達は「別に恥ずかしいとかはない」と主張。晒そうとする側が逆に恥を晒して懲りるという、相互監視社会らしい決着がついた。ルイ「服を着ることが常識じゃなくなるって、あるのかな?」リン「お、大昔はみんな裸だったんだろうけど」カズノリ「っ、続きを読もう……」少年は顔を赤らめていた。

(528)

ゲン「@ミギノウエ:こう考えればどうか。生まれたままの姿を保護すべき個人情報と捉え、裸になったり裸を表現したりしてはいけない、という決まりを作ったとする。それで個人のプライバシーが守られるのだろうか? 私たちはただ『裸を表現する自由』を特定団体に奪われただけではないだろうか?」

(529)

ゲン「@ミギノウエ:決め事というものは、だいたいが人から自

由を奪う。バイオツイッターによる情報拡散は自然現象として不可逆であるから、それを制限しだしたら際限がない。世の中は際限なく窮屈になり、行動は自ずから決定され、人々は自由意志を失うだろう。それは良くない事と私は考える」

(530)

ミギノウエ「@ゲン：貴方は今、自由意志という言葉を使われましたが、この相互監視が隅々まで行き届いたツイッター社会にだって、はたして自由意志があるのかどうか。僕たちは今、裸を表現するどころか、夕食の献立を考えるにしたって、世の中の目を気にしなければなりませんよ？ 行動は自ずから決定されつつある」

(531)

ゲン「@ミギノウエ：自由とは何もかもが思い通りになることは違うと私は思う。問題は相互監視ではなく一方監視。一方監視の行き着く果ては独裁であり、果ては全人類の愚民化だ。そもそもバイオツイッターが無ければ監視はないのか？」

(532)

ミギノウエ「@ゲン：少なくとも昔は、夕食時の会話まで衆人監視の下におかれることはありませんでした。今はその気になれば地球の裏側のご家庭の内情まで瞬時に調べられる。果たしてこのままでもいいのでしょうか？ 相互監視下における自由は気球みたいなものだ。全ては世の中の空気次第です」

(533)

ゲン「@ミギノウエ：人は本質的に、衆人監視の下で生きるものだと私は思うが……。自由を気球と比喻することは、言いえて妙と思う。バイオツイッターが無くとも、近くに一人でも他者がいれば、それは監視されていると同じこと。我々はみな、相互監視という名

の空気に漂う、一隻の気球なのかもしれん」

(534)

ゲン「@ミギノウエ：少し、昔の話をしよう。私はかつて完全なプライバシーを保った生活を体験したことがある。完全な個室で一人で暮らし、外に出るときもネットに出るときも、完璧な匿名性が保たれていた……と思っていた。実際は、監視カメラや通信ログなどで、常に誰かが監視していたわけだが」

(535)

ゲン「@ミギノウエ：自由気ままと実感できる日々も、やがて終わりが来た。バイオツイッターの爆発的な普及によつてだ。推進派と反対派が激しくせめぎ合い、血生臭い事件もおきた。しかしその抗争は不思議な構造をもっていた。推進派も反対派も、『個人の自由を守る』ことを旗に掲げていたのだ」

(536)

ゲン「@ミギノウエ：推進派は相互監視を広めることで世の中を公平にしようとした。隠し事や不正が出来ない社会でこそ、人は自由になれると考えた。反対派は、個人が内面的な秘密を持てる事こそが自由であるとし、それを守ろうとした。本音と建前を、外向きと内向きを、あくまでも仕切ろうとしたのだ」

(537)

ゲン「@ミギノウエ：まさしくそれは、自由とは何かを定義するための闘争だった。正直、いまだ私には判断がつかない。みなバイオツイッターは便利だからと言って導入しているが、私は確かな判断がつくまではと導入していない。この歳になってもまだ、自由とは何なのかわからないのだ」

(538)

ゲン「@ミギノウエ：ただ一つ、確信を持つて言えることが一つだけある。それは、情報の拡散は不可逆であるということだ。どんな隠し事もいつかはばれる。完全なセキュリティは存在しない。いずれ遠い時の彼方、私達は全てを共有し、魂だけの姿になって生きているやもしれん。ただ一つの、情報の塊として」

(539)

ミギノウエ「@ゲン：そこが幸せな場所とは、僕には思えませんね。出来ればそうなって欲しくないとさえ思いますよ。それは自由というより単体化。情報共有の終局は人類の単体化ですよ、そんなの良いわけがない……それはきつと、滅亡と同義だ」

(540)

ゲン「@ミギノウエ：まだ人間はそこまで極端な状況にはないよ。何のためにトイレがあると思ってるのかね。一人で思索にふけるくらいの自由は、まだいくらかでも残っている。なんなら部屋のTLを外すなり、いつそログオフするなり、好きにすればよい。人はいまだ試行錯誤の最中」

(541)

ミギノウエ「@ゲン：ログオフなんてとんでもない！ そんなことしたら慈善団体が心配して部屋に乗り込んできますよ！ 世の中おせっかいな人がいっぱいいて、ありがた迷惑なことです……まったく。僕は部屋TLをつけてませんが、それだけでも色んな人から怪しまれるんですよ？」

(542)

ノルコ達はゲンとミギノウエのやりとりを眺めながら、首をひねっていた。難しい話のようで、実はとても身近な話のようだ。リン

「確かにー、部屋のＴＬってつけるのが当たり前になってるね」
ルイ「つけないと逆に怪しまれるんだよな。あの部屋で何かコソコソ変なことしてるぞっ、て」

(5 4 3)

カズノリ「く、空気、ってやつ、だね」 リン「そうそう、空気空気」 世の中、空気というものは法律以上に生活を拘束している。ノルコ（だからトイレのツイッターは「禁止」ってことになってるのかな？） トイレにまでＴＬつける空気が流行ったら世界は終わりじゃないかと、ノルコは根拠なく思った。

(5 4 4)

ゲン「@ミギノウエ：怪しまれるとて、それを選ぶのもその人の自由だと私は考えるがな。先ほども言ったが、情報の拡散は自然現象として不可逆であるし、相互監視化も後戻りできない所まで来ている。我々は状況に従ってこれからを考えていく他あるまい。本当の自由とは何か、考えていく他あるまい」

(5 4 5)

ミギノウエ「@ゲン：自然現象として不可逆ですか。その果てにある理想の社会は、一つの巨大な村みたいなものなのでしょうか。誰もがみな村の全てを知っているながら、空気を読んで見てみぬふりをするような。……少なくとも僕達はまだ悩む自由を持っている。ちよつと考えて見ます。フォローしても？」

(5 4 6)

この後、ゲンの「勝手にするよろし」の一言で、二人のリプライ合戦は終わっている。ルイ「どういういきさつでフォローしてんだか」 カズノリ「さ、さんざん言い合って、ぎゃ、逆に仲良くなったって感じ、かな？」 ノルコ（そうれはどうかな……：そういえば、

何のために集まってたんだっけ？

(547)

リン「ところでね、あの単体化っていうのはなんのことなのか？あの辺のやりとりがよくわからくて」カズノリ「う、うーん、じ、人類単体化、ってのは、え、SF小説とかで、よ、よくある、し、シチュエーション」ルイ「みんな同じような人間になっちゃうってアレだろ？」

(548)

カズノリ「う、うーん、そうだな、た、例えるなら……」その後、カズノリは『おばちゃん』と『引きこもり』を例に挙げて説明した。もし世の中が、空気の読み合いに長けたおばちゃんだらけになっても、逆に名無しの引きこもりだらけになっても、みんな同じようになるという意味で単体化してしまう、というようなことを。

(549)

ルイ「んで、結局どっちも嫌だねって結論？」カズノリ「いやあ……」リン「ミギノウエさんは、プライバシーを守るための管理を誰かやったほうが良いって言って、ゲンさんはそれに反対して、ミギノウエさんはわからなくなってしまうって、悩む自由があるんだ、って結論じゃない？」

(550)

なぜか一同、ヤマオ君の方を向いた。ヤマオ君はしばしジーンとリンを見つめた後、一度だけウンと首を縦に振った。ルイ「うー、よくわかんねー。んで、結局私らは何がしたかったんだっけ？」カズノリ「ん？」リン「あっ！」ルイ&リン&カズノリ「あー！！」そして一同、今度はノルコの方を向いた。

(5 5 1)

ノルコ(……そうだった) ミギノウエ氏をブロックすべきか否かという話だった。ノルコ(……どうしよう) リン「リンは、別にブロックしなくていいと思うのー」 ルイ「ん、まあ、悪い人じゃなさそうだけ？」 カズノリ「ちよ、ちよっと困った人かも、し、しれないけど」というわけで結論は出たようだ。

(552)

その後ノルコ達は、WEBアプリで夕方までひとしきり遊び、それぞれの家へ帰ることに。ルイ「あ、カラスがいないぜ」リン「カラスがなくなから」カズノリ「か、帰ろうか」ヤマオ「……」ノルコはみんなを玄関前で見送り。ヨコ「ちよつとみんな、これ持って帰って食べてっ」

(553)

そういつてヨコは、リボンでラッピングされた袋をわたす。中身は手作りマドレーヌだ。一同「ありがとうございます！」ヨコ「また来てねー」みんなバイバイと手を振って、それぞれの家路につく……が。リン「私、ちよつと買い物してかえるね！」そしてどういうわけかヤマオとアイコンタクト。

(554)

ルイ「お、おおう。気をつけてな！」カズノリ「ま、また明日」そしてリンとヤマオは二人で別方向に歩いてしまった。ルイとカズノリはそれを見送ると、照れくさそうにモジモジし始めた。カズノリ「お、送るよ」ルイ「べべ、別に一人で帰れるっつ」カズノリ「で、でもそんなと、遠くないし……」

(555)

なんだかんだ言いつつ、二人は並んで歩き始めた。街は夕日に照らされていた。カズノリ「きよ、今日は、なんだか色々、べ、勉強になった、ね」ルイ「あ、ああ……そうだな」二人ともまったく逆の方を向きながらのぎこちない会話だ。ルイ「ノルコも大変だ

よ。つぶやけないっただけで、こんなに色々面倒になるんだな」

(556)

それでぶつつりと会話は途切れた。でもそれで構わなかった。なにせ保育園からの仲だ。いまさら会話の間を気にするような間柄でもない。二人はただ黙って家路を進む。茜色に染まった街角は、夕食の買出しをする人や仕事を終えて帰宅する人で賑わっている。野球道具を肩に担いだ、部活帰りの学生もいる。

(557)

二人は特に意味も無く、それぞれの耳たぶをクリックした。すぐさま視界に夥しい数のAR情報が空間投影される。道行く人の頭上に簡易プロフィールとTLが表示され、店先には広告用AR映像が流れ始め、監視装置の存在を表す光点がいたる所で光りだす。生まれた時から慣れ親しんだ、ごくありふれた光景だ。

(558)

カズノリ「と、特に危険は、な、ないみたい」 ルイ「まあ……街の中だしな」 市街地は相互監視網の密度が非常に高いので犯罪はめつたに起こらない。カズノリはコンソールを操作して「不審者チェッカー」を表示させた。これは人々の移動経路を調べ、挙動不審な人をピックアップするサービスだが、よほど用心深い人しか使わない。

(559)

同じ所をウロウロしたり、不自然にゆっくり歩いたりするとチェッカーに引つかかる。誰かにくつついて歩いても引つかかる。それが赤の他人でも友達でも関係ない。そのため、今のルイにとって一番の不審者はカズノリという結論が出てしまっている。カズノリ「わ、わけがわからないっ」 ルイ「ほへ？」

(560)

とはいえ、カズノリはやはり男の子であり、好きな女の子のことを何としても守りたいと思うのは当然だった。ルイ「カズノリはホント心配性だなー」カズノリ「そ、そんなことないよっ」二人の馴れ初めは保育園時代までさかのぼる。ルイは今にもまして男らしく、そしてカズノリはさらに吃音がひどかった、あの頃。

(561)

いじめっ子1「ちゃんとつばやけっつーの！」昔の話である。保育園のすみで本を読んでいたカズノリは、少年達にいじめられていた。バイオツイッターの形成に不具合のあったカズノリは、深刻な吃音障害を抱えていた。カズノリ「ほ、本……か、かか、かえ、え、えし、かえして！」いじめっ子2「ちゃんとつばやけたら返してやるよ」

(562)

ルイ「てめえらなにやってんだー！」口と同時に手足が出る。腰の入った右ストレートと後ろ回し蹴り、一瞬のうちに二人を吹き飛ばした。ルイ「人の弱みにつけこむなんてサイテーだな！その本返しやがれ！」いじめっ子2「暴力だっつてサイテーだろこの男女！」ルイ「なに！？もういっぺんいっつてみる！」

(563)

いじめっ子1「何度だっつて言うてやるよ男女！ぜってー嫁の貰い手ねーぞお前」いじめっ子2「そーだよこんにやるー！」お返しとでも言わんばかりに、少年はルイの顔めがけて拳を振るってきた。ルイ「っ！てめえら顔ねらいやがったな！」いじめっ子1「いーだろ、おめー女じゃねーもん！」

(564)

いきなり勃発した肉弾戦に、周囲の子供らがざわつき始めた。「またルイちゃんがやってる……」「せ、先生呼ばなきゃ!」「喧嘩しちゃだめー!」いじめっ子1「女扱いしてほしかったらもつと女らしくすればいいんだ」いじめっ子2「そーだそーだ。またルイが人殴ったってリツイートしまくってやる!」

(565)

ルイ「うぐっ……」普段から「もつと女の子らしくしなさい」と大人たちに言われているルイは、またカツとなつて手を出してしまったことを後悔した。逆に弱みを握られるハメになったのだ。ルイ「……てめえらホントに腐ってやがる!」いじめっ子達はそのルイのつぶやきをすかさずリツイートした。

(566)

いじめっ子1「口の汚い女子はいやですなー」いじめっ子2「いやですのおー」ルイ「ぐぬぬ……」いじめっ子1「てめえらじゃなくて、あなた様方、って言いなさい?」いじめっ子2「くくく、がはははっ」ルイ「間違ってる……お前ら絶対間違ってる!」

(567)

カズノリ「……る、るる、ルイち、ちゃん。も、ももも、もう、もうい、いい」ルイ「カズノリ?!」いじめっ子1「だーかーらちゃんとおつぶやけての! うひゃひゃ! 笑い死ぬ!」カズノリ「き、ききき、きみの、の、ひひひょうばん、わ、悪く、な、ななちやうよ」

(568)

ルイ「だけどきー!」カズノリ「い、いい、いいい、ん、だ」

そしてカズノリはルイと少年らの間に割って入った。いじめっ子1「なんだあ？」 いじめっ子2「やんのかこのもやし野郎」 カズノリは彼らに奪われた本を指差す。カズノリ「あ、あああ、げ、あげ、る、よ、そ、そそ、それ」

(569)

いじめっ子1「はあ？」 カズノリ「べ、べべ、べん、きよ、きよきょうする、といい、いい、いいいい、よ、そ、そそれ、それでいじめっ子2「笑えない冗談ですなあー」 カズノリ「き、ききき、きみ、きみ、たち、は、あ、あ、あああ、あたあた、あま、あたま、がががわ、わ、わ、わるい！」

(570)

二人のいじめっ子は互いに顔を見合わせ、そして額に血管を浮かび上がらせながらカズノリをにらみつけてきた。いじめっ子1「なめた口きいてんじゃねーぞゴラァ！」 そして拳をボキボキ……鳴らないが、鳴らすふりだけした。いじめっ子2「歯あ食いしばれや！」 ルイ「か、カズ……！」 カズノリ「うぐっ！」

(571)

カズノリは右頬を思いつきり殴られた。いじめっ子2「どーだ、痛いだろう」 いじめっ子1「はやく謝らねーともう一発いくぞ？ あーん？」 カズノリ「うっ、うう……くっ！」 カズノリは歯を食いしばって痛みをこらえ、そして殴られた反対側の頬、すなわち左の頬を少年らに向かって差し出した。

(572)

カズノリ「そ、そそ、そその、ほほほ、ほん、ほん、に、かかか、かいて、ああるよ」 カズノリが奪われた本、そのタイトルは「せかいのせいじんたち」だった。カズノリ「こ、ここ、こっち、こっ

ちの、ほほ、頬、ほおも、な、な、なぐ、なぐる、と、いいんだ…
…よ！」 その時、タイムラインが火を噴いた。

(573)

二人は本当にぶち切れて、カズノリに殴りかかってきたのだが、直前で動きを止めた。いじめっ子1「な、なんだこの感じ」 いじめっ子2「あ、頭が、頭があ！ わあああー！」 そして二人は頭を抱えてその場にしゃがみこんでしまった。ルイ「な、なんだ…」 カズノリ「こ、こここ、これ、は、は」

(574)

二人のＴＬに、ご近所の、いや日本中の説教好きな人たちからの説教リプライが押し寄せていた。バイオツイッターによるリプライは、その人の脳内回路に直接送信される。いつきにリプライが流れ込んだ影響で、脳がパニックを起こしたのだ。いじめっ子1&2「頭が痛い！ 痛いよー！ わあああー！」

(575)

すぐに先生たちがやってきて、炎上したＴＬの火消しにあたる。少年らのツイッターは自動的にログオフされたが、二人はしばらくその場に伸びていた。いじめっ子達への説教リプライは、彼らはおろか、彼らの両親、兄弟、親族にまで飛び火し、保育園の先生や、どういうわけかカズノリとルイのＴＬにまで送られて来た。

(576)

10分ほどでＴＬは鎮火した。後日、いじめっ子の二人は、知恵熱を出してしばらく休むことになった。その間うわごとのように「ごめんなさい」とか「もうしませえん」とかつぶやいていたらしい。その一件以来だった。ルイとカズノリの間、友情とはちょっと違った、仄かな感情が芽生え始めたのは。

(577)

話は現在に戻る。ルイの家がある集合住宅が見えてきた。二人は暮れ行く夕日を眺めながら、とてもゆっくりと歩いていった。ルイ「なあ」 カズノリ「んっ？」 ルイ「いまどんなこと考えてた？」 そうルイの方から話しを振ってきた。カズノリ「ああ……む、昔のこと、とか」 ルイ「昔の？ いつのだ？」

(578)

カズノリ「ほ、保育園のとき、の……こと」 ルイ「ほあ？、そりやまたずいぶん昔の話だな」 カズノリ「ぼ、僕が、ま、まだ全然うまく、うまく咳けなかった、あのころ。よく、いじめられて、ルイに、助けられた」 ルイ「だなー、しょっちゅう喧嘩してたっけ。ま、今でもそうだけどさ」

(579)

カズノリ「む、昔っから喧嘩っぱ、ぱやかっただよね。ルイは」 ルイ「まーなー。アレでも精一杯抑えてたつもりだったんだけど、全然女として扱われてなかったなー。いや今でもだけどさっ」 そういつて自虐的に笑うルイだったが。カズノリ「そ、そんなことないさー！」 ルイ「えっ……そ、そうか？」

(580)

カズノリ「る、ルイは……その、や、や、やや、優しい、い、じやないか、げっふげっふ！」 ルイ「お、おいつ、無理すんな……って、私は優しくなんかないぞっ」 カズノリ「そんなことない、ルイは、優しいよ、お、女の子らしいって」 ルイ「お、おま……か、痒いじゃんか、そんな言われたら……どうしたんだよ」

(581)

カズノリ「だ、だだ、だつて。じ、じじ、自分のこと、女らしくない、とか、な、何度も言うんだもの。よ、よくないよ、自虐的に、なるのは」ルイ「そ、そうかな？」カズノリ「ルイは、お、女の子、らしいよ、大丈夫だよ」ルイ「だ、大丈夫とか！ なんか病気みてーじゃないか！ 逆にはら立つつてば！」

(582)

そうこうしているうちに、もうルイの家の前だ。5階建ての集合住宅、そのゲートの前で、なんとくなく名残惜しそうな二人。ルイ「ついちゃったな……」つて！ 別に深い意味はねーんだからなつ「カズノリ「う、うん、わかつてる」ルイ「わわわ、わかつちゃダメだろ！」カズノリ「ご、ごめん……」

(583)

ルイ「じゃ、じゃあな。また明日なつ。ちゃんとメシ食べよ？ じゃねーと筋肉つかねーぞ？」そう言つてルイはカズノリの肩をたたく。カズノリ「うん、ちゃんと食べるよ」ルイ「ちゃんと歯も磨けよ？ 黄ばむぞ？」カズノリ「うん、ちゃんと磨くよ」ルイ「お、おおう、じゃあな！」カズノリ「うん、ま、また明日」

(584)

ルイを見送つて、少年はその場を後する。ルイとはずっとこんな調子だ。僕らはまだまだ子供なんだと少年は思う。でも僕達は友情とは違う何かでつながっていて、みんなも応援してくれている。カズノリ「うふふ」少年はそつと含み笑いをこぼした。ルイ「な、なに笑つてるんだぜ？」カズノリ「ううん、別になんでもないよ、ルイ」

(585)

そのころノルコは、自室でルイとカズノリのやり取りを眺めてニコニコしていた。早くもつと仲良くなって、ノルコ達を結婚式に招待して、そして私に向かってブーケを投げてくれたらいいのに……。そんなことまで妄想してしまうノルコ。もし二人を邪魔する人がいたら、じゃじゃ馬の如き後ろ回し蹴りで容赦なくお星様になつてもらう勢いだ。

(586)

ノルコ(……そうごかんし社会) 誰もが誰もを監視できる状況においては、空気こそが何よりも重要だ。世の中には、クラス内の男女が親しくすることを許さない空気というものもあるらしい。二人の名前が書かれた相合傘を電子黒板に描かれて、さんざん冷やかされる……とかなんとなか。ノルコ(そんなの絶対ゆるさない!)

(587)

空気はみんなで守らなければならないもの、という感覚がノルコの中にはある。しかし一方で、その空気のために思うようにならないこともある。例えばノルコは以前、従兄弟のお兄さんのことを「いいな」と思ったことがある。でもお兄さんは当時18歳で、ノルコは9歳だった。ノルコ(……かなわない恋も、あるわ!)

(588)

そのお兄さんは、よくノルコをかまってくれた。しかし、ある一定の線を踏み越えてくることはけしてなかったし、こっちから踏み込もうとしてもそっけなくあしらわれた。ノルコにもその理由はわ

かっていた。そうだったことは一般常識的に認められない空気なのだ。ノルコ（歳の差があと5歳少なければ……ちっ）

（589）

相互監視社会特有の問題というのは、やはりあるの。ノルコは先ほどのゲンとミギノウエのやりとりを思い起こす。……その気になれば、地球の裏側にいる人々の生活まで監視できてしまう。ノルコ（やってみよう……）そして耳たぶをクリックし、海外TLに飛んだ。ノルコはちょっとドキドキしていた。

（590）

リオデジャネイロはちょうど朝日が昇ったところだった。それはついさつきノルコが見送った夕日である。ノルコ（……朝からラブラブな人達はさすがにいないか）と思いきやさすがはラテンの国。明け方の公園のベンチで中むつまじくする若いカップルをノルコは発見した。

（591）

他にも、朝のカフェで二人静かにコーヒーを飲みながら本を読んでいるカップルも見つけた。ノルコはなんとコーヒーの銘柄と本の題名まで知ることが出来てしまった。店内にはゆったりとしたボサノバが流れており、その曲をピックアップして自分の部屋のBGMにすることも出来てしまった。

（592）

ノルコ（ちょっと楽しいかも……ふひひ）下手すると時間を忘れて一日中検索してしまいそうだ。でもノルコには他にもっとやるべきことがある。今日の授業の復習をしないといけない。もうすぐ夕食の時間で、今日から単身赴任のお父さんとのオンライン夕食があるので遅れるわけにはいかない。

(593)

何でも自由に調べられるといっても、調べられる時間には限りがある。検索できる情報が増えれば増えるほど、知ることの出来る情報は相対的に減っていく。そんなちよつとした無力感を誰もがぼんやり感じている。だからこそ一番大切な情報だけはけして見逃してはならない。情報の海に溺れないためにも。

(594)

ノルコはお父さんとお母さんの寝室のＴＬを調べた。今日からお母さんは一人で眠ることになる。寂しくないだろうか。ノルコ(…あつ) 最新スイートは昨日の朝だった。昨夜二人は一言も会話することなく就寝したのだ。こんなことはノルコの知る限り一度もない。ログオフしていたわけでもない。

(595)

ログオフ…夜に夫婦が寝室でこの状態になるといのは、つまるところがそういうこと。この場合のログオフを追及するような行為は、常識的にありえないことで、ノルコだってそれくらい知っている。人は木の叉から生えてくるわけではないし、ペリカンが運んでくるわけでもないのだから。

(596)

ログオフでもないのに、お父さんとお母さんが寝室で一言もスイートしないというのは、はっきり言って異常事態で、地球の裏側の恋人達の事情より、よっぽど重要度の高い検討課題である。ノルコ(…あつ) やっぱり喧嘩してるのかな。お母さんはホウさんと友達になると言ってるし、どうなることやら。

(597)

そのころ……。イイズカ「アフレル！ 2番バルブ閉めて！」
アフレル「は、はい！」 ハツブル「ハリーアップ！ 破裂するゾー！」 秘密基地の地下にある大規模試験場で、巨大な鉄の腕がガツコンガツコンと轟音をたてていた。アフレル「バルブ閉まりました！」 全身オイルまみれだった。

(598)

アフレル（す、すごい……まさか初日からこんな仕事を任されるなんて） 油圧駆動系試験のアシスタントとして雇用されたアフレルは、いきなり実動試験の現場に放り込まれた。ガンバールの腕、特に拳の部分は機構が複雑であり、試験はいくらやってもキリがないのだ。

(599)

ハツブル「ヘイ、アフレル。いきなりこきつかっちまって悪イネ」
アフレル「いえいえ！ こんなすごいメカニズム……むしろ燃えてきましたよ！」 イイズカ「いいねえ新入り。燃えすぎて火いつけねーよーにな！」 昼からずっと試験にかかりつきりなアフレル。夕食の時間がすぎてしまっていることに……気づいていなかった。

(600)

ロボットアームは、ビルほどの大きさがある鉄骨製の支持体に取り付けられていて、油圧、電気系統、測定機器等々の夥しい配管・配線類とつながれている。アームの先の手が開いたり閉じたりするたびにアフレルが立っている支持体の足場が激しく振動する。アフレル（……うぶっ、揺れるし油くさいし大変……）

(601)

軽い吐き気をもよおしつつも、アフレルは試験場のメインTLに目を光らせ、測定装置のAR情報を常に確認してデータを拾い、さ

らに同時進行で装置の機構について学習していた。アフレル（いきなり実機に触れるなんてラッキーだ！） 視界を埋め尽くすほどのAR情報とタイムラインに、アフレルの頭脳はパンク寸前だった。

（602）

その時、計器の一つが異常な数値を示した。小指を制御する油圧配管3系統のうち一つが、異常な圧力上昇を示している。アフレル「いけない！ 小指3番下げてください！」 イイズカ「ダメだ、カットできない！ 故障か？！」 ハツブル「破裂スル！ テイク・カバー！」 次の瞬間、アームの小指付け根から黒いオイルが噴出した。

（603）

幸い、下にいた作業員は全員退避していたので人がはなかつた。作動油は高温になっていて危険だ。ここで作業は一旦中止となり、後片付けが始まった。作業員総出で油の処理をする。ドラム缶にして10個分程度のオイルがこぼれた。全ての作業が終わるころには日付が変わっていた。

(604)

アフレル「遅くなってしまいましたね……僕がもつと早く気づいていれば」 イイズカ「いや、あれでいいんだ。半分は壊すのが目的の試験だからな」 アフレルは温泉で汗を流した後、他の職員とともに食堂に来ていた。食堂は24時間やっていて、ビュッフェ形式になっているようだ。

(605)

まずはライスと味噌スープをよそう。おかずは紅鮭とインゲン豆の煮物という純和風な選択。それに美味しそうなオムレツがあったのでケチャップソースをかけてトレーに乗せた。アフレル(秘密基地というわりには、意外と普通だなあ……) するとイイズカがちよいちよいと肩をつついてきた。

(606)

イイズカ「ここに来たらやっぱりこれ食べないとな」 アフレル「……なんですかこれ？」 イイズカが指し示したのは緑色のグニヤグニヤした物体だった。よく見るとその中に、黄色いツブツブしたものやら、半透明の細長いものやらが入っている。見るからに怪しい食べ物だった。

(607)

イイズカ「まあ食ってみろって」 ハツブル「だまされーたーと、思っテー」 アフレルはしぶしぶながらも、それを一さじすくってお皿のすみに乗せた。アフレル(……ぐによくよしてる) そして食堂の片隅に置いてある解析装置「MONOSUGOI」にトレ

ーを乗せ、料理の種類と量を記録した。

(608)

解析装置は料理中に含まれている有害物質の量も調べてくれる。アルデヒド、ダイオキシン、カドミウム、セシウム……。もちろん全て検出限界以下だったが、すべてご丁寧に記録された。アフレル「なにか意味があるんですか？」 イイズカ「まあ……。秘密基地だしな」 ハッブル「何がまざるかワカラナイ」

(609)

席につくとアフレルは、例の緑色のグニグニを箸でつついてみた。アフレル(……ホントに食べられるのかな) イイズカ「ささ、食べた食べた」 ハッブル「体にいいYO！」 箸でつまんで鼻先までもつてくる。クンクン。なんだか病院の処置室みたいな匂いがする。なんともいえない薬臭だ。

(610)

アフレル「……もぐもぐ……ん？」 見た目はドロドロだが食感には不思議とサクサクしていた。たまに粒々が潰れてプチつとなる。半透明のこれは……クラゲか何かだろうか？ 味はすこし酸っぱくて磯の香があり、ヨード臭がきつい。アフレル「なんだろう？ 魚介の漬物みたいなものですか？」

(611)

イイズカ「ふむ、俺も最初はそう思ったさ。でも実はこれな……地球の食材じゃないらんだ」 アフレル「えっ！」 イイズカ「……ここだけの話なんだが、この研究所の地下で、宇宙人を培養してるらしい……」 ハッブル「そうそう、宇宙人ね。エイリアン」 アフレルはみるみる青ざめた。

(6 1 2)

アフレル「そ、それとこれとどういう関係が……！」 イイズカ
「どうもこうも、宇宙人なんて公表できるわけがねえだろ？ でも
実験すれば残骸は出てしまうわけだ。それで手っ取り早い証拠隠滅
として……だな」 アフレル「じよ、冗談ですよね？」 イイズカ
「どうかな、だってここは秘密基地なんだから？」

(6 1 3)

アフレル「じゃ、じゃあこの料理はさしずめ、宇宙人漬け……」
ハツブル「そ、そ、宇宙人のピクルスという話だよ、ウヒヤヒヤ」
イイズカ「くくく……食べちまったねアフレル君。実はそのエイ
リアンの細胞はまだ生きていて、食べた者はみな宇宙人に体をのっ
とられててしまうんだ……」

(6 1 4)

アフレル「(ガタガタブルブル)……じゃ、じゃあイイズカさん
達はもう……う、ううっ！」 アフレルは突然自分の首を押さえて
苦しんだ。アフレル「ううあ……うガガツ……ゲボア！」と、
その時、ちょうど目の前をクサヨシ研究主任が通りがかった。なぜ
か割烹着姿だった。クサヨシ「……何してるんだい？」

(6 1 5)

アフレルは顔を真っ赤にしながら味噌スープをすすっていた。ク
サヨシ「はははっ、君も随分とノリの良いやつだなあ」 アフレル
「い、いやだって、そういう流れでしたし！」 イイズカ「まあ、
ここの洗礼みたいなものだ、悪く思わんでくれよ」 ハツブル「あ
そこまでノってくる人もメズラシイけどネー」

(6 1 6)

謎の緑色の正体は「松前漬け」だった。ただしかなりアレンジさ

れている。クロレラ抽出物がたっぷり入っているため、毒々しいまでの緑色を呈しており。風味付けにアブサントを用いているため薬臭がする。クサヨシ「ガンバル基地特製の『エイリアン漬け』だ。バタートーストにのせてもうまいぞ」

(617)

割烹着姿のクサヨシ研究主任は、まかないの「タコさんウィンナー茶漬け」をサラサラとやっている。アフレル「あ、あの、調理師だったんですか？」クサヨシ「最近はね」イイズカ「ここは人事異動が激しいんだよ。主任、以前はリーダー開発の担当でしたよね？」いや、激しいどころじゃないだろう。

(618)

クサヨシ「料理とはいわば一種の科学だ。キッチンに立つことで得られる閃きもある」アフレル「そうなんですか？」ハツブル「チーフはニュータイプなリーダーのプロダクションがジャムってんだよアフレル」アフレル「じゃ、ジャム？ ああ、煮詰まったことですか」クサヨシ「うむ」

(619)

クサヨシ「煮詰まった時はキッチンに立て。我が家の家訓だ」本当かな？ とアフレルはいぶかしんだ。アフレル「新型のリーダーですか。僕は専門外なんでお役に立てそうにないですけど、どんなリーダーなんですか？」クサヨシ「ふむ……一言でいえば、体重0キログラムの宇宙人を観測できるリーダーだ」

(620)

クサヨシ「もし君が地球侵略を目論むエイリアンだったとする。なんとかしてコッソリ地球に浸入したい。しかし、地球にはそれなりの文明があり、電波望遠鏡などで銀河系全域までをもリーダー観

測している状況だ。さて、どうする？」 アフレル「なんとかして観測網を潜り抜けないといけないわけですね。うーん……」

(621)

アフレル「あつ、それで体重が0というわけですか」 クサヨシ「そう、質量が0というのははつまり、光や電磁波などの光速エネルギー体のことだ。もし、宇宙人が純粋なエネルギーだけの姿で地球に侵入してきた場合、今の我々に発見する手立てはない」 アフレル「ま、まるでSF小説ですね……」

(622)

クサヨシ「ふふふ、我々は今、そのSF小説の真つ只中にいるのだぞ、アフレル君」 アフレル「確かに……。いやでも、そんなことが可能なんですか？」 クサヨシ「わからん。だからこうして毎日割烹着を着てキッチンに立っているわけだ」 アフレル「はあ……」 ハツブル「案外もう侵略されてたり」

(623)

イズカ「その可能性もあり、だな。今こうして話していることも、実はみんな筒抜けだったとか……」 一同、しばし辺りをキョロキョロとする。アフレル「……なんかゾツとしますね」 クサヨシ「我々はすでに発見されている……か。ま、それはそれで面白い」 ハツブル「おトモダチになれたらイイネ」

(624)

クサヨシ「ふふ、トモダチか。それがベストな状況ではある」 クサヨシは残りのお茶漬けをスルスルとかきこむと席を立った。クサヨシ「では失礼するよ」 そして鼻で「お化けなんてないさ」をハミングしつつ、軽いステップでどこかへ行ってしまった。イズカ「宇宙人とトモダチ……か」

(6 2 5)

その後三人は食事を取りながら、純エネルギー生命体を直接観測する方法をあれこれ話し合った。しかし、これといったアイデアは浮かばなかった。イズカ「そもそも物理的に可能かどうか……」ハツブル「ライフディフィニションも考えないと」アフレル「うーん、困難な課題ですねえ」

(6 2 6)

イズカ「そういやアフレル、遅くなっちゃったが家族には連絡したか？」アフレル「……はっ」アフレルの手から箸がこぼれ、カランカランと音を立てた。アフレル「あっー！」ハツブル「ど、どしたノ？」アフレル「しまった……今夜同じ時間に食事とろうって約束してんだ……」

(6 3 0)

イズカ&ハツブル「あちゃー」アフレル「ちよつとすいません……」そう言っアフレルは、家族のTLを確認した。もちろん三人とももう寝ていた。次にダイニングのTLを確認する。夕食はいつもより遅めの時間にとったようだ。ワクのツイートが残されていた。ワク「ダッド・イズ・ノット・ヒア？」

(6 3 1)

ヨコ「うん。お父さんは忙しいみたいなの。一日目だからきつと色々あるのね」アフレルはハツとなった。そしてすぐさまDMを確認した。ヨコからのメッセージが残されていた。ヨコ《私達のことはいいから、お仕事がんばってね。終わったらでいいから連絡してね》アフレルは深くため息をついた。

(6 3 2)

イズカ「……どうなんだ？」 アフレル「いえ、大丈夫です……取り乱してすみません」 ハツブル「カーゾクはダイジーにしない」と アフレル「ええ、まったく。でも仕事も大事ですから……」 イズカ「まあ、あんまり無理はするな。今日はもう休んだ方がいいだろう。いつデカイ仕事が入るかわからんからな」

(633)

アフレルはそそくさと食事をすませると、割り当てられた自室へと向かった。巻貝のような形の研究基地、その地下1〜3階が単身者の居住施設になっており、海から見た反対側に扇状に広がっている。高速の動く歩道が完備されており、全員が10分以内で職場を行き来できる設計になっている。

(634)

宇宙船の船内を思わせるインテリア。アフレルはエアロックのような自室の扉に手をあてる。すぐに生体認証され、プシューというエアシリンダーの音とともに扉が開いた。初めてこの部屋に案内されたときは、その凝った作りに思わず小躍りしてしまったアフレルだが、今はガツクリと肩を落としていた。

(635)

4畳ほどのスペースにデスク、ベッド、冷蔵庫、映像端末、シャワーといった、最低限の設備が配置されている。アフレル「少し寒いな」 アフレルは耳たぶクリックで暖房を作動させ、ベッドに腰掛けて考え込んだ。アフレル(……ヨコになんて謝ろう) 秘密基地への単身赴任。初日の夜はこうして更けていった。

(636)

ヨコ「ふんふん、ふんふん」　ヨコは朝からとても機嫌が良かった。軽やかなステップでキッチンを動き回り、3人分の朝食を作っていた。ヨコ「あらいけない」　コーヒーメーカーの設定が、いつと同じ二人分になっていた。ヨコ「こんなに飲めないけど、まあいいわっ」　特に気にせず料理を続ける。

(637)

ヨコ「ノルコ、起きてたらワクを起こしてちょうだい」　もちろん返事はないのだが、二階からドタドタと足音が聞こえてきて、それがリプライみたいなものだった。ワク「ムニヤムニヤ……アウチッ！　ウワーオ！」　ボディプレスとバックドロップを立て続けにくらったようなツイートを聞きつつ、ヨコはサンドウィッチを切る。

(638)

今日の朝食はサンドウィッチ、トマトオムレツ、シーザーサラダ。そしてヨコ特製の野菜ジュースだった。ノルコ（朝からやけに豪華だなあ）　ヨコ「お父さんがいなくて寂しい分、頑張っちゃったのよ？」　ワク「イテテ……hum?　Oh!」　眠気まなこにむちうち状態のワクも一気に目が覚めたようだ。

(639)

ノルコはトマトオムレツを品定めするような目つきで眺めつつ、そろりとナイフを入れた。ノルコ（……か、完璧だ）　しっかりと煮詰められたトマトソースが、一分のムラもなく卵につつまれてい

た。こんな手間も技術もいる料理を朝から……。ノルコは嫌な予感がした。オムレツは美味しく頂いたけど。

(640)

ワク「グッド・モーニン・ダッド、ホワッツ・ドゥーイング？」
ワクが何気なく送ったモーニングコール。ノルコは父の反応に注視した。アフレル「お、ワク、おはよう。今からシャワー浴びるとこだぞー」
ワク「Oh! ショウ・ミー・プリーズ!」
ワクは研究基地の部屋が気になるようだ。

(641)

ヨコ「ワク? お父さんのシャワーなんか見てどうするの?」
ワク「Wrong!」
アフレル「ははは、ワクは基地の中が気になるんだらう? でもシャワーは普通のだぞ?」
それでも見たいというので、アフレルは一通り部屋の中を見せてあげた。部屋はまるで宇宙船の中みたいで、ワクはよだれをたらしてしまった。

(642)

ヨコ「ワク、きたいわ。ところであなた、なんだかひどい顔よ? ちゃんと眠ったの?」
アフレル「いやあ、色々調べてたらね……少しは寝たよ」
ヨコ「大変なのねえ……」
アフレル「あ、き、昨日はごめん。夕食すっぱかしちゃって」
ヨコ「いいのよ。子供達の夢のためにも頑張っつてね、あなた」

(643)

アフレル「う、うん、ありがとう……」
ヨコはとても機嫌がよさそうに見えたが、それが返ってアフレルを不安にさせた。まるで自分がいなくなってせいせいしているかのような印象を受けたのだ。
ヨコ「昨日は何を食べたの?」
アフレル「……ん、社食で普通に食べたよ。ちょっと変わったおかずもあったけど」

(6 4 4)

そうツイートしつつ、アフレルはノルコ達の食卓T.Lをチラッと確認した。アフレル(何を食べてるのかな……え!?) とても豪華な朝食だった。こんなの朝ごはんを見るのは新婚の時以来かもしれない。アフレル「……こ、こんど帰る時、お土産に持っていくよ。エイリアンの漬物なんだけど」 ワク「エイリアン!？」

(6 4 5)

朝なのでそんなにゆっくり話していらなかったが、アフレルの新しい職場での話は、ノルコ達にとって刺激的なものだった。アフレルがシャワーに入ってしまったから、ワクはしばらく興奮状態にあった。ヨコ「職場の人とも仲良くやってみたいで良かったわね、お父さん」 ノルコとワクはうんと頷いた。

(6 4 6)

ノルコ(でもお父さん、すごく疲れた顔してた) それに、お母さんの顔色を気にしている様子だった。ノルコ(……色々気にしてるんだろうな) しかし、それよりさらに気になるのが、お母さんの異常なまでの機嫌の良さだ、まるでこれから好きな人に会いに行くような。ノルコ(どうなっちゃうんだろ?)

(6 4 7)

ノルコとワクが、ランドセルをゆらしながら歩いていくのを見送ったヨコは、ルンルンとステップを踏みながら、寝室のクローゼットへと向かっていった。ヨコ「どれにしようかしら」まるで初めて恋を知った女学生のように、ヨコは次々と衣服を身にあてがっては、鏡の前でクルクルと回るのだった。

(6 4 8)

ヨコが青年ホウとデートの約束をしたのはつい先日、ツイッター協会のチカコさんに事情を聞いたときのことだ。ホウがツイート能力を失った経緯を聞いたヨコは、その胸にしめつけられるような切なさを感じた。ホウ（あの人のこと、可哀想なんて思っちゃいけない……でも放っておけない！）

（649）

いきなりガンモドキを持って現れて、奇矯なふるまいでナンパしてきたホウのことを、はじめは不審に思ったヨコだったが、フタをあけて見ればあら不思議。両親のネグレクトにより耳とツイート能力を失いつつもその過去を乗り越え、ツイッター協会で世のため人のために尽力する好青年だったのだ。

（650）

ヨコ「是非とも一度お会いしたいですわ」それが開口一番、ヨコの口から出た言葉だった。ツイート能力を失っているホウと話すには、直接会うしかない。言づてをチカコさんをお願いして、ホウと連絡を取ってもらった。チカコさんの話によると、ホウは喜びのあまり、その場で3回転ジャンプをして気絶したという。

（651）

ヨコ（……こんな年増の主婦とのデートを、ジャンプして気絶するほど喜んでくれるなんて！）しかも回転よ回転、どんな状況だったのかしら？ そんなことを考えつつも、お化粧に余念のないヨコだった。衣服は水玉のワンピースに黒のジャケット。バッグは花柄のトートバッグを選んだ。

（652）

水玉模様はヨコの勝負色である。ヨコ（水の色は私の色……）半端な気持ちで会うわけではない、という自分自身へのメッセージ

だ。しかし、あくまでも良い友達になることが目的なので、華美な色使いは極力さげ、バッグの花柄のワンポイントに限った。ヨコ（こんなものかしら？）

（653）

身支度を整えたヨコは、玄関の中でそわそわしながら時間が来るのを待った。ホウが車を手配してくれることになっている。ヨコ（そわそわ……そわそわ……） その時、外からクラクションが鳴った。ヨコ（ドキーン！） 玄関を出るとそこには、とりわけ目立ちはないが、高級そうなグレーのセダンが来ていた。

（654）

ヨコはサツと車に乗り込んだ。中は無人でドアが閉じられると自動で発進した。内装は豪華な作りになっている。助手席の部分は給仕コーナーの付いたテーブルになっていて、下のクーラーボックスにアイスティーと白ワインが用意してあった。クリーム色の本皮シートにゆったり腰掛けると、ヨコはまうでお姫様になったような気分になった。

（655）

隣の座席にバラの花束が置いてあり、手紙が挟まれていた。ヨコは花の香をそつと嗅ぎ、手紙を開いて読み始めた。【僕の敬愛なるミセス・イズミ】 あくまでも年上の、敬うべき相手としてヨコは会食に招待されたようだ。手紙には、ヨコとデートできることがいかに嬉しいかが綴られており、独特のユーモアの中にも進るような情熱が伺えた。

（656）

会食の場所は、成田空港の近くにあるホテルレストラン。飛行船の離着陸を間近に見ながら食事をしようというわけだ。距離的には

弦音市から車で30分といったところ。道中、車窓に流れる景色を眺めつつ、先ほど読んだ手紙とバラを胸に抱いて、ヨコはうつとりとした面持ちだった。

(657)

ヨコ(こんなにも誰かに心を尽くされたのはいつ以来かしら……)そう自身に問いかけねばならないような気持ちだった。もちろん今でもその気になれば、そういった相手を得ることは難しくない。けれども今は家庭を持つ身。いくつもの幸せを同時に求めることは許されない。そう思い、ヨコはふうとため息をついた。

(658)

やがてキーンという飛行機のエンジン音が響いてきた。現在では殆ど使われなくなった液体燃料式のジャンボジェットだ。国際線の一部でのみ運用されている。そのジャンボジェットの数倍はあるのかという、巨大なソーラー飛行船が、今ゆっくりと飛翔を始めているところだった。化石燃料が使えなくなったことで、空の事情は大きく変化した。

(659)

ヨコはその飛行船を見て新婚旅行のことを思い起こした。空飛ぶホテルと呼ばれるエンタープライズ号に乗って、アフレルとヨコは二週間かけて地球を一周したのだ。しかしその間、アフレルはヨコに謝りっぱなしだった。アフレル「ごめんヨコ、せめて雨漏りだけはしないように頑張るから!」

(660)

いったい何がおこったのか? 世界トップクラスの豪華客船であるエンタープライズ号、その客室を予約することは非常に困難だ。以前ならお金さえ用意できればなんとかあったのだが、今はお金の

介在しない世界。客室のチケットを得るには、気長に待つか、飛行船のキャプテンを説得しなければならないのだ。

(661)

エンタープライズ号のキャプテンは非常に大雑把な人で、客室から溢れた人でも通路やらホールやらに泊めてあげることあった。アフレルはそんなキャプテンの計らいで、飛行船の最上部にある空中庭園に泊めていただけのことになったのだが……。アフレル「まさか天井がないなんて思わなかったんだよ！」

(662)

台風の近くを飛行すると聞いて、アフレルは必死になってテントを持っていてる人を探し、何とか借りて空中庭園に張った。そして雨がビュウビュウ吹く夜を、ヨコとともに過ごしたのだ。飛ばされそうになったり、雨がしみてきたり、高山病になったり、それは大変なことだった。ヨコ(……一生忘れないわ)

(663)

もつとも今となつては笑い話。(キャプテンが一番笑っていたようだ) それに良い思い出がなかったわけでもない。アンデス山脈のウユニ塩原で見た星空は、それは素晴らしいものだった。もう一度あの星を見られるのなら、また高山病にかかったって良いと思えるくらいには。

(664)

そんな追想に浸っているうちに、待ち合わせのホテルに到着した。ヨコはジャケットの襟を正して気合を入れた。ヨコ(しっかりとてなされない!) 車のドアが開く。ドアマンが指し示す道には赤いカーペット。そしてその向こうに、フォーマルな装いを定みなく整えた青年の、少し赤らんだ笑顔が待っていた。

(665)

そのころアフレルは、仕事を午前中で切り上げて、呟音市へと向かう電車の中にいた。アフレル(……やっぱり一度帰らないとダメだ) ヨコの態度がどう考えてもおかしい、そのことがずっと頭からはなれなかったのだ。アフレル(僕は一度、ヨコに怒られる必要があるんだ……きつと)

(666)

アフレルはこう考えていた ヨコは僕の単身赴任のことを良く思っていないくて、本当は言いたいが沢山あるのだけど、ノルコやワクのいる前での口喧嘩はしたくない、だからずっとニコニコ笑って我慢しているんだ と。アフレル(……腹をわって話し合わなきゃいけない。それも、ちゃんと直接会って)

(667)

アフレルの手にはエイリアン漬けが入った紙袋が握られている。子供達が学校から帰ってくる前に話しを済ませて、そして何も気兼ねすることなく、みんなで夕食を楽しもう。お土産話もいっぱいしよう。アフレル(就職して二日目で休暇とっちゃったけど……でも家族の方が大切だ) 複雑な思いを乗せて、電車はカタコトと進んでいく。

(668)

夫が家に戻って来るなど思いもしないヨコは、優雅な昼食の真っ最中。程よく火の通った石鯛のムニエルに舌鼓を打っていた。ヨコ「とっても美味しいわ。こんな素敵なお店、どうやったら予約できるの？」 ホウ「直に会って交渉したんです。僕はツイッターが使

えませんかからね」

(669)

ホウ「不便じゃないかと良く言われるけど、こういう時は別ですよ。やっぱり、本当に熱意を伝えたいと思えば、直接会って話すのが一番ですからね」 ヨコ「まったくその通りだね。私達はバイオツイッターに頼りすぎているのかもしれない」 ホウ「まあ、生まれつき備わってるんですし」

(670)

ホウの年齢は19歳と聞いている。ヨコは実際に会ってみて、想像した以上に大人びた青年だと思った。老成していると言って良いくらいだ。ヨコ(いつたい、どんな人生を送ってきたのかしら……)話題もツイッターのことになっている。ヨコは、今こそ彼の過去について尋ねる時だと感じた。

(671)

ヨコ「ホウ君も、元々はツイッターを使えたんでしょう？ なんとか元に戻すことは出来ないのかしら？」 ホウ「難しいですね。アンインストールを使われましたから。僕の中にはまだ、アンインストールの分子が生きていて、リインストールしようとする拒絶反応が起こるんですよ」 ヨコ「まあ……」

(672)

ホウ「でもいいんです。僕はツイッターは失ったけど、その代わりに、こうして貴女に出会うことができた」 突然の告白に顔を赤らめつつもヨコは ヨコ「前向きなんですね」 と言葉を返した。ホウ「ええ、このとおり髪がボサボサで、後ろが良く見えないものですから」 ヨコはその微妙なユーモアにくすくすと笑った。

(673)

ヨコ「私、ホウ君のユーモア好きよ？ なんとというか、ツイッタ
ーで育った人にはないセンスがあるみたい」 ホウ「そうですか？
そう言ってもらえると嬉しいな！」 ヨコ「でもきつと、色んな
苦労があつたんでしょね……」 ホウ「ええ、それはもう！ で
も今の一言で吹き飛びましたよ」

(674)

ヨコ「ほんとに？ もし良かったら、何か話してくださらないか
しら。少しでもホウ君の身なつてあげられればと思うの……」 そ
う言つてヨコは、真摯なまなざしでホウを見つめた。ホウはその視
線のために、座つたまま昇天しそうになつた。ホウ「ああ……今日
は僕の人生最良の日だ」

(675)

ホウは、幼少時に耳を切り落とされた時のことを話した。ヨコは
ショックで、食事の手が止まつてしまつた。ホウ「しかし正直なと
ころ、僕の中には悲しみも怒りもなかつたんです。なんとというか、
まるでそれが当たり前前の出来事だと思えた。きつとこの運命は、僕
自身が選んだものなんだと」

(676)

ホウ「協会に拾われた僕は、それから何年も外に出ませんでした。
でもそれは塞ぎこんでいたからじゃない。僕には心を静かにして考
える時間が必要だつたんですよ。それも、とても長い時間が」 ヨ
コ「まあ……私には想像すら難しいことだわ。きつと三日と経たず
に気がおかしくなつてしまつ」

(677)

ホウ「もしそんな状況に陥ることがあったら、僕はいつでもスー
プとガンモドキを持って飛んでいきますよ」 変てこなジョークだ
ったが、ヨコは思わず吹き出してしまった。張り詰めていた空気が、
一瞬にしてほぐれたようだ。ヨコ「うふふ、でもどうしてガンモド
キが必要だつてわかったの？ あの時」

(678)

ホウ「僕には未来が見えるんです……と言ったら信じてくれます
か？」 ヨコ「ええ、もちろん。なんだかホウ君の言うことなら何
でも信じちゃいそうな気分よ」 ヨコはホウの不思議な能力につい
ても、チカコさんから話を聞いていた。ヨコ「だって、こんな素敵
にエスコートされたことなんて、今までなかったくらいなんですも
の」

(679)

ホウ「気に入って頂けてなによりです。でも、そんなにですか？」
ヨコ「ええ、まるで私のことも世の中のこと、何もかも知り尽
くしているような感じだもの。その若さで、これだけのことが出来
る人なんて、そうそういないわ」 ホウ「ああ……そんなに貴方に
褒められたら、僕は……僕は……」

(680)

ホウ「ビヴァーチエー！ クルミナーレ！！ エウフォリカメン
テー！！」 ホウは爆発したように立ち上がり、フロアをクルクル回
りながら窓に向かっていった。ヨコ「えっ、えっ?!」 なんだな
んだとざわめくフロアで、ヨコはただオロオロした。ホウ「今日は
本当に良い天気だなー！ イヤアアアホオオウー！！」

(681)

ヨコはなんとかホウに付いて行って、席に連れ戻した。そして水

を飲ませたりおしぼりを首にあてたりして、血の上りきった頭をなんとか冷やした。フロアが落ち着きを取り戻したころ、ホウは我に返った。ホウ「ああミセス、僕はとんだ失態を……」ヨコ「ううん、いいのよつ。私が褒めすぎたのがいけなかったの！」

(682)

料理はデザートに変わっていた。ジェラートの三種盛りだ。冷たくて甘酸っぱい一口が、二人のテンションを良い感じに冷ましてくれた。ヨコ「なんの話をしていたのだけ……ああ、そうだわ、ガンモドキの話だったわね」ホウ「はい……あれは、その、なんと……」

(683)

ヨコ「何となく、私がガンモドキを買い忘れることがわかったの？」ホウ「そうですね。そうしたら居ても立ってもいられなくなってしまった……」ヨコ「不思議！世の中にはまだ科学で説明できないことが沢山あるのね！」ホウ「ええ今はまだ。でも、この僕的能力はまもなく解明されるでしょうね」

(684)

ヨコ「まあ、そんなことまでわかるのね！一体どこまで未来を見通せるの？」古来より、高名な占術家は非常にもてることが知られている。未来を見る目を持つものに、人は本能的に魅かれてしまうようだ。今のヨコも、ちょうどそんな状態だ。ヨコ「私、ホウさんのこともっと知りたい！」

(685)

その言葉にホウの顔は再び赤くなった。ヨコはしまったと思った。ヨコ「わ、私つたらなんてはしたない……気にしないでね？」ホウ「は、はい……ゲフフン。どこまでわかっているのかというと、

僕自身にもよくわかりませんね……、宇宙の終わりまでわかってる気もするし、一瞬先のこともわからない気もする」

(686)

ホウ「思うに、未来が見えるのはきつと僕だけじゃないんですよ。誰もがみんな、未来を見つめる目をもっているんだ。誰かが未来を発見して、その未来を変えようとしてしまったら、きつと僕が見たはずの未来も変わってしまう。そうして少しずつ未来も変化していくんですよ」ヨコ「……深い話ね」

(687)

その時ちようど、ジャンボジェットが一機飛び立った。ホウ「例えばあの飛行機、行き先は誰でも調べられます。つまり未来がある程度はわかっているといえる。でも誰かがあの飛行機の行き先を変えてしまうかもしれない。その時に、見えていたはずの未来は少し違ったものになってしまうでしょう」

(688)

ホウ「僕はたぶん、人より少しだけ未来がよく見えるだけに過ぎないんだ。きつとツイッターを失っていることが、その原因でしょう。僕にはツイッターを持っている人たちの行動が、自分とは関連性を持たない一つの塊として見える。そのことが、僕に未来を予見させるんですよ。おそらくは」

(689)

ヨコ「なんだか、ホウさんが前向きな理由がわかった気がするわ。貴方は自分がどんなものを持って生まれてきたかを、ちゃんと理解しているのね。大人でもなかなか出来ないことなのに」ホウ「ええ。きつと人は何かを失った分、何かをちゃんともらっている。でもそれに気づくには、人それぞれ時間がかかるんです」

(690)

その後も二人は楽しく食事を続け、食後の紅茶まで飲み終えた。

ヨコ「ごちそうさま、とても美味しかったわ！」　ホウ「僕も、楽しいひと時を過ごさせてもらいました……。ところで、このあとちよつと行ってみたい場所があるんですが」　ヨコ「あら、どちらに？」　あまり遅くならなければ」　ホウ「大丈夫、帰り道の途中です」

(691)

そのころ……。アフレルは弦音駅に着いたところだった。アフレル(ヨコ、今なにしてるのかな) ふとそう思い、TLを開いて確認する。アフレル(ん……。成田? 友達とでも出かけてるのかな?) まだしばらく帰ってこないようなので、アフレルは駅前で暇を過ごすことにした。

(692)

アフレルは書店に寄った。書店とはいっても、本そのものはどこにも置いていない。本のタイトルが書かれたARコードが、ジャンルや出版社ごとに整理され、並べられている。いまや書店は本を得るための場所ではなく、今の自分にはどんな書物が必要かということについて、じっくり考える場所になっている。

(693)

アフレルはセルフサービスのエスプレッソをいただき、甘口のマキアートにアレンジして休憩所へ持って行った。書店の中央に設置された休憩所は、腰を据えて本探しが出来るよう、一人がけのソファーが並べられている。アフレル「……。ふーむ」 アフレルは店内に流れるジャズを聴きながら、女心に関する書物を検索した。

(694)

ヨコ(この車を予約するのだったって大変だったはず……) 帰りの車はワゴンタイプの迎賓車だった。後部座席が向かい合って座れるようにセッティングされている。目的地に向かう間、ヨコは家族のことについて話した。ヨコ「それでね、ノルコがのぼせてたのを勘

違いして、病気が悪化したのかと思っちゃったの」　ホウ「はっはっは」

(695)

話題の中心は、やはり失眩症になってしまったノルコのことになった。ホウはそのことを知っていたが、いま初めて聞いたように振舞った。ノルコとの間に面識があることは、彼女のために伏せておく必要があった。ホウ「それで、その後どうしたんです？」　ヨコ「娘はいまPCをもっているから……」　ホウ「ほほう」

(696)

ヨコ「それで何とか会話ができるんですよ。でなかったら私、無理やり娘を病院に連れて行くところだったわ」　ホウ「ふうむ……」　「呟けないというのも、なかなか大変ですね」　ヨコ「本当にね。そうだ、ホウさんなら何かわからない？　娘の病気がいつ治るかとか、そういったこと」

(697)

ホウ「現時点での予測でしたら……しかし、あくまでも現時点です、さつきも言いましたけど、未来はちよくちよく変化する」　ヨコ「それでかまわないわ。ちよつとでもわかることがあれば教えてもらいたい。もう、この頃は娘のことばかりが気がかりで」　ホウ「では僭越ながら……」

(698)

ホウはすこし考え込んでから言った。ホウ「ふむ……娘さんは3日以内にはツイートを取り戻すようです」　ヨコ「え？　そんなにすぐ？」　ホウ「はい」　何事もなければ　とは、ホウは付け足さなかった。実を言えばノルコのツイッター、もう治っているのだ。ただそのことにノルコが気づいていないだけで。

(699)

ヨコ「3日以内ってことは、今日にでも治る可能性があるってことね？」　ホウ「ええ、いつ咳いてもおかしくない状態のようです」
ヨコ「まあ……ホウさんにそう言ってもらえて何だか安心したわ」
ホウはニツコリ笑ってそれに答えた。しかし、心の奥では厳しい表情をしていた。

(700)

今、ホウに見えているノルコの未来は、とても危うげなものだった。まるで見えない蔓草に、ノルコの全身が捕われてしまっているようなのだ。そしてその蔓草の動きは、ホウの予見眼をもってしても予想不能だった。ホウ（あれがノルコ君の咳きを封じようとしているのか、それとも……）

(701)

ヨコ「ホウさん」　ホウ「うむ……」　ヨコ「ホウさん？」
ホウ「え、あ、はい」　ヨコ「着いたみたいですよ？　ここ、遊園地ですか？」　ホウ「ああつ、すみません。なんだかボーっとしていました」　ヨコ「あら、具合でも良くないの？」　ホウ「いえいえ、きつと貴方が目の前に居るからですよ」　ヨコ「まあ、ホウさんったら」

(702)

そこは呟音市の近郊にあるちょっとした遊園地だった。噴水広場にメリーゴーラウンド、野外ステージと、いくつかの遊具。10分もあれば回れるような、こじんまりとした場所だ。ホウの目的はメリーゴーラウンドだった。ホウ「昔からの夢だったんです。……好きな人と一緒に、メリーゴーラウンドに乗ることが」

(703)

ヨコはハツと息を飲む。そして胸元を手で押さえた。ヨコ(きつとお馬の上で抱きしめられるんだわ!)　ホウ「一緒に、乗っていただけませんかしょうか。ヨコさん」　ヨコはまっすぐホウを見つめつつも、揺れ動く気持ちに翻弄されていた。ヨコ(……ダメよヨコ、私には夫が、家族が……)

(704)

そしてヨコは決心した。ヨコ「私は馬車に、貴方はお馬に。それでも……良いです?」　それは否定の言葉だった。貴方とは恋仲になれない。でも、親しい間柄でいたい。そんな我儘を、ヨコはあえて押し通した。ホウはその答えがわかっていたかのように答えた。ホウ「もちろん、よろこんで!」

(705)

そして二人はメリーゴーラウンドに乗った。騎士のように白馬にまたがるホウ。お姫様のように馬車に揺られるヨコ。二人の間の距離は2メートルばかり。遠くはないが、きらびやかなメロディーにかき消されるから、二人の間に声は通らない。　ツイッターが使えれば、話せるはずなのに　二人ともそう思わずにはいられなかった。

(706)

二人の時はゆっくり流れた。二人が、恋に関するあれこれに思い尽くすに十分な時間をかけて、メリーゴーラウンドはめぐり巡った。精一杯胸を張って白馬を駆る青年を、馬車の中で物憂げな表情を浮かべる麗しき淑女を、数人の子供達が指をくわえて見送った。そしてメロディーの終わりとともに、二人の夢は覚めるのだった。

(707)

ホウは白馬から降りて馬車へと向かい、ヨコの手をとり広場に下りた。ヨコ「すごく楽しかった。本当に久しぶりだったから」しかしその言葉には“でも昔はよく乗ったの”というニュアンスがこもってしまった。ホウ「ええ……僕は初めてだったんですよ」ヨコはただうつむいて、車へと歩いていった。

(708)

帰りの車の中はとても静かだった。プロポーズをするために招待し、されるために招待された二人。その目的が達成され、その結果が決まってしまった今となつては、どんな言葉も白々しく響くだけだ。二人ともそれを承知していた。ヨコ（私の倍は若いこの方が、どうして私なんか……）ヨコはため息を抑えるので精一杯だった。

(709)

まもなく車はイズミ家に到着した。二人とも車を降りて、玄関の前で向き合った。あとは笑顔で再会の約束をするだけだ。ホウ「今日は忙しい中、本当にありがとうございます」ヨコ「こちらこそ。とても素敵な一時を過ごさせてもらいました」ホウ「こんなものでよければ、またいつでも招待……いたします」

(710)

ヨコ「うん。あ、そうだ。今度はうちに遊びにくるといわ。チカコさんも誘ってね。旦那が単身赴任なものだから、昼間はとても寂しいの」ホウ「……はい、是非、伺わせてもらい……」そこでホウはこらえ切れなくなってしまった。空を見上げて涙を流してしまった。ホウ「ああ……神よ……」

(711)

ヨコ「ホウさん……」ホウはこう思っていた。自分はこの先、人として異性と結ばれることはないだろう。なぜならば僕の場合は、

GPTLを覗いてしまったことで、神のTLに触れてしまったことで、社会的生命としての階梯を飛び越えてしまったのだから。ホウ「僕はもう、誰からも愛されないんだ……」

(712)

ヨコ「そんなことないわ！」　そう言ってヨコはホウの腕を掴んだ。ヨコ「しっかりして！　ホウ君はすごく素敵な人よ！　もうはつきり言っちゃうけど、わたし、これまで付き合ってきた男は数え切れないくらいなの！　その中でも貴方はダントツよ！　だからきつと間違いないわ、自信を持って！」　ホウ「よ、ヨコさん……？」

(713)

そういう次元の問題ではないんだけど……そう思いつつもホウは、あまりになりふり構わないヨコの姿に、どことなく心温まるものを感じた。ヨコ「他にもっと若くて素敵な女の子が、貴方に声を掛けてもらえる日を待っています。だから私なんかのために絶望しちゃダメ」　ホウ「……はい」

(714)

ヨコ「うーん、まだ納得していない様子なのね……。じゃあ、こうしてあげるわ」　ホウ「えっ！」　そしてヨコはそっとホウの体を抱きしめた。包み込むように優しく。ヨコ「一回限りの大サービスよ。私は貴方の二倍も年上で、夫も子供もいて……わかるでしょ？　これ以上は……」　ホウ「……あああ」

(715)

ホウはただ素直に、ヨコの善意に身をあずけていた。しかし彼女が自分の“二倍年上”とは感じていなかった。ホウには全てが自明のことのように思っていた。彼女が自分を振ることも、こうして慰めてくれることも知っていた。自分はもう、普通の人間が何度生ま

れ変わっても達することのないような境地に、すでに在るのだ……と。

(716)

ホウ(……僕はもう、誰からも愛されないかもしれない。でも、僕が誰かを愛することは出来るんだ) ヨコが抱擁を解くころには、ホウの涙は乾いていた。二人はもう一度、互いの姿を見つめなおす。ヨコ「こんなところ、誰かみられてたら大変ね」 ホウ「は、はい……すみませんでした、ははっ」

(717)

ホウが少し笑ったことでヨコは安心し、バイバイと少女のように手を振って、家の中に入って行った。ホウはその姿を見送り。そして達観したように空を見渡した。そして車に乗り込んで、その場を後にした。自分は全てを知っていると彼は思い込んでいた。しかし、道端で呆然と立ちすくむアフレルの姿は、彼の目には映らなかったのだ。

ツイートピア718〜737

(718)

ノルコ(……大事件だわ!) 帰りのHRの時だった。ノルコはその場に棒立ちになり、カタカタと震えていた。一体何がおきたのか? レイタ「すっげー! ノルコすっげー!」 先生「すごいわ! ノルコちゃん!」 リン「こんなことが呟音小で起るなんて!」 カズノリ「よ、世の中、わ、わからないね!」

(719)

突然だが、ノルコは『国会議員』に選出された。公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の法案審議に参加することになったのだ。ノルコ(どうしてこうなった!?) どうしてもこうしても、バイオツイッターの選挙管理システムに選出されてしまったのだから仕方ない。

(720)

パチパチと拍手が降り注ぐ中、ノルコはひとまず立ち上がってペコペコと頭を下げた。そして座った。先生「というわけで、このクラスから国会議員が誕生しました! なんと呟音小学校が始まってから3人目の国会議員さんですよ! みんなでノルコちゃんを応援してあげましょうね!」 パチパチパチパチ。

(721)

2100年現在の日本では、全ての国民に被選挙権が認められている。国会議員は法案ごとに選出され、その法案が議決されれば解散となる。それぞれの法案にとって一番ふさわしい人達を集めて審議するという訳だ。つまり総選挙は引つ切り無しに行われるわけで、

投票活動はごく日常的なものになってしまっている。

(722)

選挙の仕組みは単純で、みんながみんな誰でも好きな人に投票して、その投票数を累積していくというものだ。普段、ノルコのクラスで一番累積投票数が多いのは、色んな分野で何かと注目されているヤマオ君その人である。しかし当のヤマオ君は、どういうわけか今まで誰にも投票してこなかった。

(723)

ルイ「なにがビックリしたかって、ヤマオがノルコに投票したってことだよな」ルイの言う通り、ヤマオの投票によってノルコの累積投票数が一気に増加した。システム上、ヤマオがノルコに投票したことはノルコにしかわからない。ノルコはヤマオの同意を得た上で、それをみんなに伝えたのだ。

(724)

ルイ「あとやっぱ、眩けなくなったせいで、変に注目されたってのもあるんだろうな」リン「うんうん」ノルコ（それは喜ぶべきことなのか、さてはて）確かに、投票してくれた人を調べてみると、知らない人がずいぶんいる。あのミギノウエという人もノルコに投票している。ノルコ（……なんでかー？）

(725)

ノルコは家の前でバイバイと手を振りみんなと別れ、そそくさと家の中に入った。リビングには母のヨコがいた。テーブルに座って両肘をついて、どことなくアンニュイな雰囲気だ。ノルコ（あれ？……朝はあんなに機嫌よかったのに）ノルコは何となくそっとしておいた方が良いと思って、そのまま素通りした。

(726)

洗面所で手を洗ってうがいをする。アフレルのコップと歯ブラシが目の前にある。ノルコ（お父さん、今頃なにしてるかな？）ノルコはぬるま湯にうがい薬をいれて丹念にうがいをする。ガラガラガラガラ……ペッ。タオルで手と顔を拭く。特に用はないのだけどトイレにいつて、便器が清潔かどうか注意深く確認する。

(727)

ノルコ（トイレ法……か）それはトイレにツイッターを設置できるようにするための法案らしい。ノルコはそのメリットについて考えてみる。ノルコ（ツイッターとカメラをつないだら、いつでもトイレが綺麗かどうか確認できるかな？）それはそれで便利かもしれないとノルコは思う。

(728)

ノルコの将来の夢は「良いお嫁さん」になることだ。ごくありふれた女の子の夢。でも女として生まれて、それ以上に叶える価値のある夢があるだろうか？ そうノルコは思っている。良いお嫁さんとは、自分達の暮らす家を最高の状態に保つことができる人であり、トイレの管理はその最重要項目の一つなのだ。

(729)

ノルコ（あつ、そうだ） 国会議員になったこと、お父さんとお母さんに知らせなきゃ。そのことを思い出したノルコはトイレを後にし、二階の自室へと上がっていった。そしてPCを立ち上げ、ツイッターを起動させた。ゲン「なんと！ ノルコはこっかいぎいんにえらばれましたー」 あれ、フォロワーさんがまた増える。

(730)

ノルコはこっかいぎいんにえらばれましたー……ノルコはこっかい

いぎいんにえらばれましたー……ノルコはこっかいぎいんにえらばれましたー……。そのツイートは静かに、しかし確実に拡散していた。野を越えて山を越えて、電子の海の遙かまで。ココロの穴をくぐり抜け、遠い天の彼方まで。

(731)

ヨコ「ええっ?!」　ヨコがそのツイートを讀んだのは、咳かれてから2分30秒後だった。ヨコ「え? ええー?!　なんでノルコが?!　お、お父さんにも知らせなきゃ……あれ?」　ヨコがアフレルの状況を確認すると「オフライン」になっていた。ヨコ「あらら、仕事かしら?　こんな時に……」

(732)

チカコ「あらあらまあまあ」　ツイッター協会のチカコさんがそのツイートを讀んだのは咳かれてから4分01秒後だった。チカコ「ホウー、大変よ、ノルコちゃんがね!　国会議員に選ばれたって!」　しかしホウは部屋の中でGPTLを見て気絶していた。チカコ「もう!　まったくこの子ったら」

(733)

クメゾウ「ブフーツ!」　盛大に麦茶吹いたクメゾウ。ウメナ「きつたないな!　何をそんなに驚いて……なんだってー!」　二人がそのツイートを讀んだのは、咳かれてから10分49秒後だった。クメゾウ「ゲッフ!　ゲッフ!　とんだビツクリ水だな!」　ウメナ「大変なことになったね……法案のこと調べないと」

(734)

ユウタ「うわっ、すごい!　ノルコお姉ちゃんおめでとう!」　みんなとサッカーの練習をしていたユウタが、そのツイートを讀んだのは咳かれてから15分55秒後だった。カントク「こらユウタ

「よそ見るなー！」　ユウタ「すみません！　友達が国会議員になつたんです！」　カントク「なにー！　おいみんなー！　練習中止だ！」

(735)

カイザワ「小学生議員キター！」　ヨシシゲ「キタアアア！」　ギンジ「イエーッ！」　養老会の集まりでゴルフをしていた3人がそのツイートを読んだのは、呟かれてから18分後だった。その場にいたお爺ちゃんお婆ちゃん全員がゴルフを中断し、法案についての井戸端会議を始めた。カイザワ「トイレは生活の基本！」

(736)

クサヨシ「イズミ・ノルコ……おお、アフレル君の娘さんか、なんと」　割烹着姿でだし汁の味を見ていたクサヨシがそのツイートを読んだのは、呟かれてから28分30秒後だった。クサヨシ「そして彼女は……我が敬愛なるイズミ・ゲン御大、そのひ孫さんでもあったか。うーむ、世間とは狭いものだ」

(737)

イズスカ「アフレルのやつ、まだログオフしてやがるぜ」　ハツブル「ナンカ変ジャナイ？」　二人がそのツイートを読んだのは、呟かれてから32分後、クサヨシから連絡を受けてのことだった。イズスカ「いくらあいつが絶倫だからって、このログオフ時間は異常だ」　ハツブル「ナニやってんだ？」

(738)

そのころノルコは、ゲンの名前でつぶやいたツイートが、驚くほど沢山の人に読まれていることなど露も知らず、母と弟の三人で夕食後の家族会議を開いていた。ヨコ「さて、まずは当選おめでとう、ノルコ」 ワク「コングラッチュレーション！」 ノルコは（いやはや……）といった感じで頭をかいた。

(739)

ヨコ「お父さんと連絡がつかないんだけど、きつとお仕事の関係だと思ふの。ひとまず3人で考えましょ？」 ノルコとワクは頷いた。3人は「トイレ法」を可決すべきかどうかの検討を始めた。ヨコ「まず！ この法案の発案者はミタ・セイさん。32歳の男性よ。発案者としては、かなり若いほうね」

(740)

ヨコ「出身校はケイオウ、法学部を出ているわ。とても頭のいい人なのね。しかも会社の社長さんなのよ？ この若さで本当にすごい人だわ」 本当に、思わず唖ってしまふほどすごい経歴だと、ノルコとワクは思った。ワク「ホワッツ・カンパニー？」 ヨコ「B・ソーシャルの会社よ」

(741)

B・ソーシャルは社会生活を便利にしたり快適にしたりするためのプログラム製品の総称である。ワクがはまっている「救星機神ガンボール」もB・ソーシャルの一種だ。バイオツイッターのネットワーク環境に上乘せする形で使用される。バイオツイッターをOS

として駆動するアプリケーションソフトのようなものだ。

(742)

バイオツイッターそのものは誰でも好きに使っている。しかし、B・ソーシャルの開発や使用には様々な法的制限が加わる。そのためソーシャル・アプリの開発者には、情報工学の知識のみならず、法学、社会環境学、心理学など、広範にして高度な知識が要求されるのだ。

(743)

ノルコ(ふむむ……ただものではない) やっぱり法律を作るよ
うな人は、すごい人なんだとノルコは改めて思った。そんなすごい
人の考えたことを、平凡な小学生である自分にいったい何が言える
というのか? ヨココ『さわやか日常』っていう会社ね。通称サワ
二チ。あの『不審者チェッカー』もここの製品よ」

(744)

ヨココ「ところでノルコ、実はつぶやき治ってたりしない?」
ノ
ルコ(え?) いきなりだなあ、なんだろう? そう思いつつもノ
ルコは、頑張って咳こうとしてみた。ノルコ「……………」?
ヨココ「無理そう?」 ノルコはうなずく。ヨココ「そう、残念ねえ。
でもきつともうぐ治るから大丈夫よ!」

(745)

母がやけに確信めいてそう言うので、ノルコ少し首をかしげる。
ノルコ(あっ!) その時、重要なことに気づいた。ノルコ(つぶ
やけなくても国会に出られるの?) ヨココ「国会までに治ればいい
んだけど、もし治らなくても大丈夫よ。みなさんの議論をちゃんと
聞いて、きちんと自分で判断して投票すればそれでいいんだから」

(746)

ノルコ(そうだったのか) ノルコは国会議員というと、あれこれと難しい話し合いをしなければならぬイメージを持っていた。しかし言われてみれば確かに、国会議員の最終的な役割は議決をすることなのだ。ノルコはトイレ法に関して最終判断を下すことを、多くの人達から任されたのだ。

(747)

ヨコ「国会決議の仕組みについておさらいしておきましょうか。まず、誰かが発起人になって法案を常設議会に出さなきゃいけないのね。発案自体は誰でもなれるけど、だいたい企業の役員さんとか、大学の教授さんとか、市民団体の人とかがやることが多いわ。まずは法案を作って常設議会に提出するのよ」

(748)

ワク「ジョーセツギカイ？」 ヨコ「常設議会っていうのは、提出された法案を審査して、優先順位をつける議会のことね。月に一回、何もなくても選挙をすることになってるでしょ？」 ワク「オーイエス！」 ヨコ「常設議会には他にも、政府や裁判所を生暖かく見守るお仕事とかがあったりするのね」

(749)

ヨコ「そして常設議会で決められた優先順位の高い法案から順に、議決国会で審議していくのよ。ノルコが選ばれたのが『トイレ法案 衆院議決国会』で、これとは別に『参院議決国会』というのがあるわ。これは、衆院議決国会での議決が、本当に間違のないものかどうか、改めて審議するための国会なのね」

(750)

ノルコ(なんだかコムズカシいな) ヨコ「これは二院制といっ

て、議会制民主主義が確立したところから連綿と続く、古式ゆかしき伝統なのよ。何事もよーく何度も考えてから決めなさいっていう、先人達のありがたい教えなのね。だから二人ともちゃんと覚えておいたほうがいいわよ」　ワク「イエア！」

(751)

ノルコ(シューインとサンインは何か違うのか?)　ヨコ「ノルコ、頭の上にクエスチオンマークが出てるわよ?　いい質問ね。衆院は庶民が選ばれる傾向があつて、参院はインテリさんが選ばれる傾向があるわ。これも昔の二院制の名残ね。でも権限は衆院の方が強いよ」　ノルコ(ふむふむー)

(752)

ヨコ「じゃあ、いよいよ本題に入るわよ。トイレ法案の中身!」
そう言つてヨコは、法案の条文をテーブルの上に表示させた。ヨコ「本法案は、公共圏における犯罪抑止を目的とし、そのために必要となるバイオツイッター関連機器を、公衆トイレ、及び公共施設のトイレの内部に設置することを許可するものである」

(753)

ノルコ(やけに長つたらしい文章だな)　それがノルコの最初の感想だつた。そしてその次に思ったことが。ノルコ(ん?　公衆トイレ限定なの?)　ヨコ「公共施設つてことは、学校とか市役所とかね。あと野球場なんかも。とにかく不特定多数の人が使うトイレにツイッターを設置できるようにしましょうつてことね」

(754)

ワク「コンビニも?」　ヨコ「そうね、入るわね。スーパーとか映画館とかもきつとそうなるわね」　何となく外出しにくくなりそつうだな、とノルコは思う、がしかし。ヨコ「お外で急にトイレに行

きたくなっても、ツイッターが付いてればきつと安心ね」 ノルコ
(?!?) 母とは意見が食い違っているようだ。

(755)

ノルコは知らず知らず表情が複雑になってしまふ。ヨコ「ん？
ノルコは何か思うところがあるのね？」 ノルコはハツとなって顔
を上げた。近ごろ、何も言わなくても色々と伝わるようになってし
まった。ノルコは腕を組んでしばし考え込んだ後、大きく一つ「う
む！」といった感じで頷いた。

(756)

ヨコ「まあ、そんなに簡単な問題ではないかもしれないわね。ト
イレにツイッターがあると最低でも『いつ、誰が、どれだけそこに
いたか』ってことがわかってしまうもの」 だからこそ犯罪抑止の
効果があるのだが、そのぶん人は公共の場におけるプライバシーを
失ってしまうことになる。

(757)

ヨコ「ただ、この法案で重要なのは、ツイッター設置を『許可す
る』って所。許可なのよ許可。義務じゃないわ。だからきつと気の
利いたお店とかなら、ツイッターのあるトイレとないトイレの両方
を作ってくれるはずよ」 ワク「ワンダフル！」 ノルコ「トイレ
が四つに分かれるってこと？ えー？」

(758)

これまでの母の話でノルコが感じたことは三つ。母がどちらかとい
えばこの法案に賛成だということ。世の中にはトイレへのツイッ
ター設置を待ち望んでいる人も少なからずいるだろうということ。
そして、トイレが四つに分かれるかどうかは、法案を成立させてみ
ないとわからないんじゃないか、ということだった。

(759)

ヨコ「ワクはどう思う？ 賛成？ 反対？」 ワク「m u u……」
ヨコ「まだわからない？」 ワク「ノーアンサー」 ヨコ「うふ
ふっ、こんなこと普段考えないものね。でも大事なことからこれ
を機によくよく考えてみるといいわよ？」 そんなこんなで夜も更
けてきたので、今夜はこの辺でやめることにした。

(760)

その後ノルコはお風呂に入り、歯を磨き、明日の学校の準備をし、自室の床をコロコロで丹念に掃除した。そして寝る前に部屋ＴＬを確認しようと、耳たぶをクリックした。ノルコ（あれ？） 部屋ＴＬが開かない。どうやら壊れているようだ。ノルコは部屋のドアのすぐ横に取り付けてある部屋用ＴＬを手にとった。

(761)

部屋用のＴＬは、だいたいマツチ箱くらいの大さだ。コンビニとかスーパーとかで簡単に入手できる。内部に組み込まれた各種センサーが部屋の大きさを認識し、部屋の範囲内でやりとりされる情報をＴＬ上に記録していく、いわゆるユビキタスコンピューターの一種だ。これを部屋に取り付けることが、現在は常識になっている。

(762)

ノルコ（新しいの買ってこなきゃ） 部屋用ＴＬは電池が切れたり、踏んずけて壊したりしても大丈夫な仕様になっている。すぐ近くに別のＴＬ機器があれば、そこに全てバックアップされる。ノルコが明日やるべきことは、部屋用ＴＬを買ってきてスイッチを入れて部屋に置く、たったそれだけなのだ。

(763)

ノルコの部屋のＴＬは、子供の部屋にふさわしい設定がすでになされているタイプだ。デザインも花柄だったりウサギの絵が描かれていたり、いかにも子供用っぽい。ノルコはその部屋ＴＬをひっくり返して、その裏側を見てみた。「サワニチエレクトロニクス」

と書かれたステッカーが貼ってあった。

(764)

ノルコは机の上のひよこ型BOTT「ピヨッター」にアクセスし、今はもう電池が切れてしまった部屋TLの、情報バックアップを引き出した。ノルコ（ほおお） サワニチエレクトロニクスは、あのトイレ法の発起人ミタ・セイさんが経営する「さわやか日常」の関連企業だった。ノルコ（世の中せまいな）

(765)

ノルコはその情報をたどって「さわやか日常」社のビジターTLにアクセスし、そこから社長室TLに飛んだ。ミタ・セイさんは今日の昼すぎに一時間ほど社長室にいて、秘書の人といくつかの会話をしたようだ。ノルコはそのTLをまじまじと眺める。ノルコはさながら、さわやか日常の社長室にいるようだった。

(766)

セイ「きみの教えてくれたレストラン、すごく美味しかったよ。先方もずいぶんと気に入ってくれたみたいだ。何より知名度が低くて予約しやすいからね。またあんな隠れ家的な場所を見つけたら、是非とも教えてほしいよ」 秘書「お役に立てて何よりです。足で検索すると結構見つかるですよ」

(767)

セイ「そうなんだろうね、あれはネット検索じゃまず見つからないお店だよ。生垣で入口を隠してあるレストランなんて初めて見たね。とことん目立たないようになって店主の配慮がいたるところに伺えた。あるんだねえ、あんな店が」 秘書「とっておきですから。あと、あまり咳かれない方が」

(768)

セイ「おつとそうだった。うつかりしてたよ、せつかくの隠れ家
に行列でも出来たら大変だ、はははっ」秘書「はい。ところで、
取引の方はうまくいきそうなんですね？」セイ「ああ、先方はこ
ちらの提案にとても好意的だった。予定通り進めてかまわないよ」
秘書「かしこまりました」

(769)

ノルコ「お仕事の話？ レストランの話？」社長室ＴＬをちま
ちまと読んではみたが、それがどういうやり取りなのかは今ひとつ
わからなかった。B・ソーシャルの会社の社長さんが、誰とどんな
取引をしているのかなど、ノルコには想像もつかない。ただ、人柄
だけはなんとなくわかった。ミタ・セイさんは明るくて誠実そうな
人だ。

(770)

ヨコ「よるほーよるほー」ノルコ（あっ）ノルコは時計を見
た。夜の十時を回るところだった。ノルコ（寝なきや、あう？）
キンツ……ノルコの頭に頭痛が走る。ノルコ（なんか頭痛が痛むな）
ノルコはキンキン痛む頭を、両手で「ぎゅう」と圧迫する。ノル
コ（治った！）そして何も気にせず眠りについてしまった。

(771)

深夜11時。まもなく終電もなくなるという時間に、ギンザ
の街をうろつく男が一人……。アフレル「うい……ヒックッ」
ずいぶん泥酔しているようだ。顔は赤いのを通り越して白みはじ
めており、髪の毛もボサボサだ。よろよろと千鳥足で、まっすぐ歩
くこともままならない。アフレル「月がキレイだな、アハハ」

(772)

昼間、ヨコの浮気現場を目撃した（と勘違いした）アフレルは、そのまま眩音駅に引き返し、あてもなく彷徨った。電車を何本か乗り継いで、どういっわけか海芝公園に行き着いた。神奈川県鶴見工業地帯にある海芝浦駅は、昼間は利用者が殆どいない。出来るだけ人のいない電車をと、乗り継いでいった結果だった。

（773）

その名の通り、海の上に浮かんだ芝地のような作りの海芝公園。アフレルはひとまずベンチに腰掛けて海を眺めた。ときおり魚がぴちゃんぴちゃんと跳ねる海原。その向こうに見える赤茶けた古い工場。アフレル（まるで世の果てだ……） そう思うアフレルの背後にあるのは、実は世界トップクラスの電気メーカーだったりするのだが。

（774）

アフレルはそのままたっぷり1時間、そのまま海を眺めていた。子供のころから続く、ヨコとの思い出が、脳裏に駆け巡っていた。アフレル（思えば僕の人生は、失恋そのものだった……） 物心ついたころから思いを寄せていたその少女は、アフレルの目の前で次々と知らない男たちのものになっていったのだ。

（775）

幼稚園児の時、知らない少年と手をつないで歩いているヨコを見て、アフレルはショックで体重が半減してしまった。小学3年の時ヨコが知らない男子とキスをしたことを知って1週間学校に行けなくなった。中学1年の時、ヨコに恋の相談をもちかけられて、毎晩逆立ちして過ごすほど苦悶した。

（776）

しかしアフレルは、めげずにその試練を一つ一つ克服していった。

そして高校生になるころにはそのカタルシスをバネにして勉強に励めるまでになっていた。アフレル（だから今もきつと……）ヨコが浮気したという現実をバネにして、より仕事に精を出すことが出来るはずだ。アフレルは何度もそう自身に言い聞かせた。

（777）

が。アフレル「……………」何かが事切れていた。アフレルは何も言わずにバイオツイッターをログオフした。両耳をクリックしたまま5秒間。たったそれだけでアフレルは、この世界の誰ともつながらない状態になった。アフレル「……ふっ」ほくそえんでも一人、その声はさざ波の音にかき消されていく。

（778）

そしてアフレルは海芝浦を後にした。途中、鶴見駅のキオスクでワンカップ酒を大量購入した。キオスクのおばあちゃんはアフレルがログオフしていることに気がつかなかった。気づいてたら止められたらどう。そしてアフレルは電車に乗りながらお酒を飲んだ。それから先の記憶は定かではない。

（779）

深夜11時20分。うらぶれた夜のギンザを歩く男が一人。もう電車はなくなつた。ログオンすれば車を呼べるけど、そんなこととはしたくなかつた。街角にはもう誰も歩いていない。店も開いてない。時折わら草の塊が風に吹かれて、砂っぽいアスファルトの上を転がっていった。まるでやすい西部劇のような光景だった。

（780）

歩きつかれたアフレルは、何に使われているかもわからない、薄汚れたビルの隙間にうずくまつた。かつてバブルと呼ばれた時代があつて、その時ギンザは世界の中心だった。地球上でもっとも高貴

で、華やかで、富に溢れた場所だった。人々はこの場所にありつたけの金と見栄とを持ち寄って、競うように消費したのだ。

(781)

だがそれも昔の話。ありつたけの金と見栄は、ありつたけの借金と無気力に変わり、貨幣制度に基づいた大量消費社会の終焉とともに、この街は歴史の遺物となったのだ。東京のいたる場所が農地化され、人々は地方に分散して暮らすようになり、そして最後には、お金そのものが地上から消えうせた。

(782)

ヒヒーン　どこからともなく、馬のいななきが聞こえてきた。アフレル(……誰が馬を飼っているのか?)　心なしか空気が馬くさい。昔々誰かが言っていた『ギンザでベコ飼う時代』というものが、もうそこまで迫ってきているかのようだ。アフレル(ああ……僕らはいったい、どこへ行くのだろう)

(783)

アフレルは馬のいななきがどこから聞こえてくるのか気になった。その馬の姿を見てみたいと思った。ひとまず立ち上がり、いななきが聞こえる方角へヨロヨロと進んでいく。ヒヒヒーン、ブルブル　そう遠くはないようだ。そしてやっぱり馬くさい。アフレル「ここを曲がったところか……?」

(784)

目の前にほのかな明かりが差し込んだ。ランタンの明かりだ。ポロポロのビルの間に、木造の馬小屋がある。ちよつと冗談みたいな光景だなとアフレルは思った。丸太を大雑把に組んだだけの簡単な馬小屋に馬が2頭つながれているのだ。アフレルは街灯にむらがる夏虫のごとく、その光景に引き寄せられていった。

(785)

目の前には間違はなく馬がいた。栗毛の馬が二頭、つぶらな瞳でアフレルを見つめている。気にするわけでもなく、嫌がるわけでもなく、ただアフレルがそこにいることを認めている。アフレル「いい馬だなあ」そして馬がいるということは、飼い主もどこかにいるということだ。いったいどこに？

(786)

すぐ隣のおんぼろビルに目をやると、看板に一つだけ明かりがついていた。地下一階『BARオールドウエスト』バー？ いったい誰が来るんだろう？ そう思いつつも気になって仕方なくなつたアフレルは、そのビルの階段を降りていった。その先にはいかにも西部劇に出てきそうなあの扉、スイングドアが待ち構えていた。

(787)

スイングドア。押しても引いても開く、扉というよりはただの中仕切りに近いような代物。アフレル（なんでギンザにこんな西部劇なお店が？）しかし、やけに威圧感のある入り口だった。中には荒くれどもがたむろしていて、よそ者は容赦なく厄介ごにまきこまれてしまうような。そんな威圧感だ。

(788)

アフレル（……ふっ、まあそれも面白いかもね）いつ東京湾の魚のエサになつてもいいような心境だったアフレル。その扉のかもし出す威圧感など、今の彼にはどうでもいいものだった。手で開けて入るのも芸がないなと思ったアフレルは、そのドアを背中を押して開けた。しかし千鳥足がからまって、転げるように突入してしまった。

(789)

そしてそのままゴロンと倒れこむ。古びた木の床がギシギシとなった。バーへの進入方法としては、おそらく最低な部類に入るだろう。アフレルは恐る恐る顔をあげた。マスター「おやまあ」カウボーイハットを被った老年のマスターがグラスを磨いていた。マスター「とんだよそ者のおでましですな、ほほほ」

(790)

マスターはそのまま無言でグラスを磨き続けた。アフレルはその姿をボーっと見つめた。店内はとても狭く、テーブル席が二つだけあってあとはカウンター。椅子の代わりに丸太の横木が取り付けた。

れている。アフレル（あの横木、座りにくそうだなあ……）　アフレルはしばらく目をぱちくりとさせていた。

（791）

マスター「お座りになつたらどうです？」　アフレル「……はい」
言われてアフレルは立ち上がる。そしてカウンターの前の横木をまたいで座ろうとした。マスター「ああ、またがなくてもいいです。こちらに背中を向けて結構」　アフレルは何もいわずにそれにならった。カウンターの反対側を向いて座り、上体だけマスターの方を向く姿勢だ。

（792）

アフレル「なんだか変な感じだ」　マスター「慣れるとこれが中タイケてるんですよ？　今のあなたはさながら、さすらいガンマンです」　はあ、しかし残念ながら僕のピストルは折れています……とアフレルは心の中で呟いた。マスター「失礼ですが、お金はお持ちですか？」　アフレル「……え？」

（793）

予想外の言葉だった。この国の貨幣は、アフレルが生まれるずっと前になくなったのだ。マスター「その様子だとお持ちではないのですね。ログインもせず、お金も持たず。冷やかしかもいいところですな」　アフレル「……でもお金なんて、今時どうやって手に入れるんです？」

（794）

マスター「おや、ここにございますが？」　そういつてマスターはレジから一万円札を取り出した。福沢諭吉の絵が描かれている。アフレル「!?　本物？　初めて見た……」　マスター「まあ無理もありません。私が子供の頃はまだ使えたのですがね。時代の流れ

とは恐ろしいものです」 アフレル「はあ……」

(795)

アフレル「この店ではまだお金のやりとりを続けているんだ……。お金なんて遺残国債の処理をするだけのものと思ってた」 マスター「まあ、おままごとみたいなものですよ。昔を偲ぶ者達のね。何か飲みますか？ つけておきますよ？」 アフレル「つ、つけ？」
マスター「貸しにすることです」

(796)

アフレル「お、お任せします」 マスター「かしこまりました」
マスターはそう言っただきめのグラスを取り出した。スコッチを注ぎ、水で割る。最後に氷を一個浮かべる。マスター「どうぞ」
なんの変哲もない、ただの雑な水割りだった。冷えてもいない。のどが渴いていたアフレルは、一気に半分ほど流し込んだ。味も薄かった。

(797)

アフレル「貸しって、お金で返せばいいんですか？」 マスター「ええ、どんなことをしてもお金を手に入れてください。もしくは今すぐロゲインしてください」 アフレルは「……ぐぐ」とひとつ唸ってから。アフレル「……必ずお返しします」 と答えた。
マスター「ほほ。よほどロゲインしたくないんですね」

(798)

アフレルはそれ以上にも言わず、店内をちまちまと眺めながら水割りを飲んだ。店の内装はおおよそ木製だ。しかも、朽ちた廃屋から拾ってきたような、小汚い木材ばかりだった。店内をほのかに照らすランタンからは、油の匂いがもれている。アフレル「ケロシンの火か……」 マスター「よくおわかりで」

(799)

アフレル「油はしょっちゅうさわってるから」 マスター「なるほど」 アフレル「この木材はどこから集めてきたの？」 マスター「そこかしこから」 アフレル「この水割りおいしいね」 マスター「それは何より」 アフレル「マスター、トイレ借りていい？」 マスター「そちらです」

(800)

アフレルはトイレに入り、ゆっくりと放尿した。ずいぶん溜まっていたようで、いつまでたっても途切れなかった。生まれてこの方、こんなに長く放尿したことなどないというくらい、ゆっくり時間をかけて用をすませた。トイレを出るとマスターがお絞りをくれた。マスター「水道がないもので」

(801)

アフレル「マスター、外の馬ってマスターの？」 マスター「ええ、趣味で飼っています」 アフレル「とても綺麗な目をしていた」 マスター「馬ですから」 アフレル「乗ったりするの？」 マスター「ときおり」 アフレル「ところでマスター寡黙だね」 マスター「それほどでもございません」

(802)

アフレルは水割りを飲みきった。マスター「おたばこは」 アフレル「吸いません」 マスターはグラスを下げてカウンターを拭き、代わりに小さなコップを置いて水を注いだ。アフレルは軽く会釈をした。アフレル「マスター」 マスター「なんでしょう」 アフレル「僕って困ったお客かな？」

(803)

アフレルはマスターに言われた通り、カウンターに背を向けて座っていた。だからマスターの表情はわからないはずだった。しかしアフレルにははっきりわかった。マスターが背後で、自信満々の表情を浮かべていることが。マスター「あなた様なぞ、困った客のうちには入りませんなあ」

(804)

アフレル「む、まだまだ上がいるってこと？」　マスター「ええ。世の中には実に凄絶な困ったお客さん方がいる。他の客にからむ。延々クダを巻く。ずっと寝てる。大声で自慢話ばかりする。嘔吐する。ひたすらいちゃつく。ウーロンハイありませんかって聞いてくる。実に様々です」　アフレル「ウーロンハイ？」

(805)

マスター「ええ。そして私が無いというと、『ちつ、ウーロンハイも置いてないのかよ!』と吐き捨てて帰ってしまわれる。本当に困ったお客さんですよ」　アフレル「……バーで飲むお酒じゃないよね」　マスター「まったくです。お子様用のミルクは出せても、ウーロンハイはお出しできません」

(806)

マスター「いやしかし。せめて不満を心のうちに留めておいてもえれば良いのです」　アフレル「え？」　マスター「思うことがあるのなら、言わなくともわかるもんです。それが、バーが寡黙な場所である意味だと私は考えておりますが」　アフレル「……マスター」　マスター「何かお作りしましょうか？」

(807)

アフレル「お任せします」　マスター「かしこまりました」　そう言つとマスターは、アフレルの背後でそそくさと作業をはじめた。

どうやらカクテルを作るようだ。アフレル（何作ってくれるんだろ？）アフレルは、もし自分がマスターだったら、何をこの客に作ってやるだろうかと考えてみた。

(808)

二日酔いに気をつけなさいという意味でブラッディー・メアリー？ もうすぐ12時ですよという意味でシンデレラ？ 今の自分の姿はまさしくこれだという意味でソルティ・ドック？ もうこれで最後だよという意味でXYZ？ まだふてくされるには早いという意味でギムレット？ あたって砕けるという意味でカミカゼ？

(809)

マスター「どうぞ」 言われてアフレルはカウンターの方を向く。置かれていたカクテルグラスには、うつすらと青みのある液体が注がれていた。アフレル「……なんだろ？」 マスター「一息にグイッとやるタイプです」 飲み方まで指定されてる？ どんなカクテルだろ？ アフレルは言われるまま、一気にそのカクテルを飲み干した。

(810)

アフレル「?!@ ~#\$%&!」 瞬間、すさまじい刺激がアフレルの鼻腔を襲った。とにかく滅茶苦茶な味がした。アフレル「げほっ！ げほっ！ な、な、なんですかこれ！」 頭に酒気が駆け上がり、視界がぼやけ、平衡感覚がマヒしていく。相当に強いカクテルだ。マスター「アース・クエークでございました」

(811)

アフレルはひったくるようにしてコップを取り、ゴクゴクと水を流し込む。しかし、アルコールで熱くなった胃袋は全然おさまらな

い。アフレル「ま、まさかこんなすごいのが……ゲフツ、ゲフツ」
マスター「元気でました？」アフレル「むしろ死にそうですよ
！」マスター「またまたご冗談を」

(812)

マスターが面白そうにヒツヒと笑ったので、アフレルは流石に危
機感を覚えた。もう本格的にお帰りになったほうが良さそうだと立
ち上がった。マスター「まだ後から効いてきますんで、お早めにタ
クシーを呼んだほうが良いですよ」アフレル「そ、そそ、そうし
ます……うう」アフレルはしぶしぶ両耳をつまんだ。

(813)

アフレル「ご、ご馳走様でした……」マスター「はいお気をつ
けて。つけは2600円ですからね。ちゃんと手に入れてください
よ、お金」アフレル「は、はい……ヒック！」何とかビルの外
まで這い出たアフレルは、ツイッターにログインして車を呼んだ。
車を待つ間、またあの二頭の馬が目に入った。

(814)

馬は立ったまま眠っていた。鼻息がふうふう聞こえてくる。ふう
ふう、ふうふうアフレル(……ああ生きているんだな)その馬
たちは、今そこで確かに生きていた。酔いにぼやけた意識のなかで
アフレルは、何故かそう実感せずにはいられなかった。やがて車が
来た。何とか体を押し込んで行き先を設定する。

(815)

研究基地までは2時間近くかかるだろう。アフレルは後部座席に
ぐったり横たわり、そのまま目を閉じた。アフレル(……ああ、ひ
どい目にあった)視界がグワングワンする。天と地が入れ替わる。
アフレル「……お金どうしよう」しかしそう呟くアフレルの頭の

中からはもう、ヨロへの執着はすっかり消え去っていたのだった。

(816)

翌朝。ノルコ(あうっ……) ノルコはベッドの上で頭を抱えていた。ズキン、ズキン。ノルコ(頭いたいっ!) ヒトまず顔を洗ったり水を飲んだりしてみよう。そう思いつつノルコは自室を出る。今日は水曜日だが、祝日のためにお休み。こんな日に頭痛とはもつたない限りだ。

(817)

ノルコはいろいろ試してみたが、どうにも頭痛がおさまらない。ノルコ(頭痛のお薬あるかな……) そう思い、ＴＬを開いて確認してみる……すると。ノルコ(なんじゃこれー!) ノルコのＴＬは訳のわからない政治的リプライでゴツチャゴチャになっていた。ノルコ(頭痛の原因これかー) 国会議員も大変だ。

(818)

大量のリプライが一度に押し寄せると、脳内回路に負荷がかかって頭痛のような症状をきたすことがある。特に子供に多いのだ。ノルコ(こういう時はログオフ!) ノルコは両方の耳たぶを同時につまんでログオフする。ふと思う。ログオフしたら喋れるようになつたりして。ノルコ「あーあー」!?

(819)

ノルコはあわてて口を塞いだ。ノルコ(声でた……どうしよう) 別にどうしようもこうしようもないのだが、反射的にノルコは口を塞いでしまった。神は言っていた、今はまだつぶやく時ではないと。ノルコはあわてて自室に駆け戻ると、ゲンお爺さんのPCを立

ち上げた。

(820)

頭痛がひどいのでしばらくログオフします　そうゲンお爺さんの名前でツイートしようと思ったのだが、途中でノルコの手は止まってしまうた。ミギノウエ「やあ、やっぱりログオフしたんだね。いま君に直接リプライしても、TLの流れが速くて届かないと思うたから、このタイミングを待たせてもらったよ」

(821)

ノルコは反射的に全思考を停止させた。それが最大の防衛行動だと本能的に察知したのだ。ミギノウエ「まずは議員選出おめでとね、僕の言ったこと当たっただろ？　君には並ならぬものを感じていたんだ。なにかこう、魂の導きみたいなものをね」　ノルコは彼の言うことをさっぱり頭に入れなかった。

(822)

ミギノウエ「でもきつと君は困っているんだろう。読みきれないほどたくさんのご意見リプライが来てるはずだから。それでだね、お節介とは思いつつも、それらの意見を勝手にまとめさせてもらっただよ。なあに、なんてことはなかったさ。ただ君と近い人たちのリストを作っただけだからね、5分もかからなかったよ」

(823)

ミギノウエ「このリストを使うかどうかは君しただい。僕はどうにも信用されていないようだし。でもこれだけは覚えておいてほしい。僕は人々のよりよい未来を常に願っているし、人の生き方について君のひいお爺さんから教えてもらったことを、心から感謝しているってことを」

(824)

ミギノウエ「それじゃあ、そういうことで。またいずれ時がくればアプローチするよ。あと、僕は別に君の心を覗き見たりはしてないから、そんなに心を閉ざさなくても大丈夫だよ！　あと、それから、たぶんもうログインしても大丈夫なんじゃないかな。TLもだいたいぶ落ち着いたろうしね。じゃあまた」

(825)

ノルコはミギノウエのリプライを一通り流すと、両耳を再びつまんでログインした。そして一つ大きく深呼吸した。すうううううう、はああああああ。ノルコ(頭痛がなくなっただけ……まじまじ)　そして、今日一日なにして過ごそうかと、途方にくれてしまった。ヨコ「ノルコ、朝ごはんよー？」

(826)

そのころ　。クオ「じえ、ジエネ先生。それじゃあ行くんだお！」　ジエネ「はあーい、わくわく」　呟音市近郊にある丘の上。クオとジエネは、今まさにパラグライダーで飛び立とうとしているところだった。クオ(ジエネ先生と空のタンデム……夢のようなんだおっおっお!)　二人を乗せたグライダーが、風をはらんでゆく。

(827)

ジエネ「すごい、本当に飛んだー！」　クオ「まるで人がゴマ粒のようなんだおっ」　そのままぐんぐん上昇し、空の彼方へ。クオ「怖くないですかお？」　ジエネ「そんなことないですよ！　むしろ風が気持ちよくて眠く……」　クオ「おっ、お？　ジエネ先生、寝ちゃだめなんだお！」

(828)

ジエネ「……すやすや」　クオ「おっー!?」　実はジエネ先生、

ここまで来る間、眠くてしかたがなかった。なんといつてもデートの相手は眠りのウイスポーボイスの持ち主、クオ先生であるのだから。飛んだら眠気も吹き飛ばかと思っただが、どうやらだめだったらしい。クオ「あっ、バランスが！ おっ、おー！」

(829)

二人を乗せたグライダーは、そのまま山中へと突っ込んでいった。クオ「ひいひいひい！」 ジエネ「……むにゃむにゃ、もう食べられなあい」 木に引っかかって失速し、そのままずると地面まで落ちていった。クオは必死に身をよじってジエネをかばう。そしてお尻からドスンと着陸した。クオ「お”っー！」

(830)

ジエネ「むにゃむにゃ……はっ！」 流石にジエネは目を覚ました。お尻の下でクオが伸びていた。ジエネ「あら、どうしちゃったの……ここは？」 あちこちと見回すと、一方に崖があった。クオ「いつつ……もう少しそれてたら崖に突っ込んだところだおっ」二人とも殆ど怪我がなかったのが、まさに不幸中の幸い。

(831)

ジエネ「……あら？」 ジエネが何かに気づいた。ジエネ「ここ圏外だわ！」 クオ「ええ？」 クオは耳たぶをクリックしてＴＬを確認する。クオ「本当だ、圏外になってるんだお」 山奥とかでは圏外になったりするが、まだそこまで深くは入っていないはずだった。クオ「どういうことだお……？」

(832)

ジエネ「電波障害がでてるのかもー？」 クオ「うーん。何はともあれ、森を出るんだおっ」 ジエネ「あっ、ちょっと待ってクオ先生。あそこ、何か変じゃない？」 クオ「なんだお？」 ジエネ

が指差した先は、ちょうど崖の付け根だった。ジエネ「岩の形がちょっと変な気がする。まるで何かを隠しているみたい」

(833)

ジエネがやけにウキウキしているのを見て、クオはちょっと戸惑った。クオ(この人、僕より冒険好きなんだお……) ジエネ「ちょっと探検してみましようよ！」 クオ「だ、だおお」 言われてクオはジエネについていく。ジエネは岩の前まで来ると、ポケットから電灯を取り出して岩の隙間を照らした。

(834)

ジエネ「やっぱり奥に空間がある！」 クオ「鍾乳洞みたいなものお？」 ジエネ「それにしても形が不自然だわ。ねえ先生、ちょっとこの岩どかしましょうよ？」 クオ「ええ！ 何が出てくるかわからないんだおっ」 ジエネ「だって気になるじゃない！ ほらほら！」 クオはしぶしぶ岩の隙間に手を入れる。

(835)

クオ「ジエネ先生のためならエーンヤコーラっと！ おっおっお！」 クオ先生が渾身の力を込めて引つ張ると、岩はゴゴオンと音を立てて倒れた。ジエネ「わあお、先生意外と力持ち！」 クオ「はあはあ、コツソリ鍛えてるんだお……って、おおお！」 クオ先生は言葉を失った。洞窟の中にはなんと……大きな箱があったのだ！

(836)

ジエネ「宝箱！」 クオ「え、ええー？」 そんなバカなと思いつつも、二人は箱に近づいていく。クオ「結構大きな箱なんだお。五月人形が入りそうなくらいなんだお」 ジエネ「大きい箱って、確かお化けとかが入ってた方よね？」 クオ「お、おー！ 開けないでおくかお!?」 ジエネ「まさか！」

(837)

ここまで来たら開けないわけにはいかなかった。二人は顔を見合
わせ、お互いに「うん」とうなずき合う。そして二人で箱のふたに
手をかけた。クオ「じゃあ、いくんだおっ」 ジエネ「せーの！」
パカッ。ふたは開けられた。二人は中をのぞきこむ。ジエネ「
……」 クオ「……」 そして何も言わずに閉じた。

(838)

ジエネ「クオ先生」 クオ「だお」 ジエネ「入ってましたね、
中身」 クオ「だお」 ジエネ「何かこう……人の形をしたもの
が」 クオ「……だお」 ジエネ&クオ「ひええええええええ
！……」 二人は一目散にその場から逃げた。ジエネ「け、警察に
……！」 クオ「知らせるんだお！！」

(839)

クサヨシ「おおつ、それはいいアイデアだアフレル君！」 アフレル「え、そうですか？」 アフレルはガンバールの腕の試運転をしながら、昨夜の車の中で思いついたアイデアを伝えていた。クサヨシはやっぱり厨房にいて、ネギを刻んでいた。クサヨシ「なかなか大胆不敵なアイデアを思いつくじゃないか」

(840)

アイデアというのは、純エネルギー生命体のエイリアンを発見する方法のことだ。光と一体化した彼らを発見することは、通常の方法では不可能なのだ。アフレルは昨夜のバーで見た2頭の馬から、アイデアの着想を得た。クサヨシ「言われてみればなるほど、生命体を認識できるのは生命体以外のなものでもないわけだ」

(841)

アフレルのアイデアは単純に言うと「バイオツッターのネットワークをパッシブレーダとして使用する」というものだ。アフレル「はい、生命って、どこか生命自身にしか感じとることのできない『息吹』みたいなものを持っていると思っただんですよ」 その着想を、昨夜の馬の中に得たのだ。

(842)

クサヨシ「さながら、われわれ自身の魂を受信機とするわけだな。いやはや、君も恐ろしいことを思いつく」 アフレル「そ、そうですか？」 クサヨシ「ああ。だってね君、その受信機は我々自身の心の実感であって、科学的に存在を証明できる代物ですらない。あ

る意味、科学への反逆、カルトと思われるでも仕方のない発想だ」

(843)

クサヨシの言葉に、アフレルは冷や汗を流した。クサヨシ「しかしまあ、やってみる価値はある。科学は常にそれ自身を超越していくものだからね。それに、そのアイデアならすぐに実行できる」アフレル「ええ?!」クサヨシ「我々の技術力をなめてもらってはいけないな、2時間以内にプログラムを組み上げてみせよう」

(844)

クサヨシは「すたたたんっ」と鮮やかにネギを刻み終わると、その場で割烹着を脱ぎ捨ててリーダーシステム開発室へと向かっていった。アフレル「ほへえ……」アフレルは鉄の腕をがっこんがっこん動かしながら嘆息した。イイツカ「おいアフレルもういいぞ、昼飯にしようぜ!」ハツブル「腹ペコー」

(845)

アフレル達は食堂へと向かうムーブウオークに足をかける。イイツカ「なあアフレル、言いくれれば言わんでいいんだが、昨日のやたら長いログオフは一体なんだったんだ?」アフレル「え? 気になる?」イイツカ「そりゃあな。殆ど半日ログオフしてたんだぜ?」ハツブル「ファミリーとナニがあったん?」

(846)

アフレル「いや、家族とはうまくやってるよ」イイツカ「ならいいんだが」ハツブル「イインダガ」そしてアフレルは少しためてからこう言った。アフレル「だって僕の奥さん超美人だしっ」しばしポカーンとする二人。イイツカ「こ、このやるお!」ハツブル「やっぱりゼツリンだったんだな!？」

(847)

アフレルが職場で頭をグリグリされているころ、妻のヨコはリビングでテレビを見ていた。テレビ「本日の午前、呟音市近郊の山林で意識不明の状態の男性が発見されました。男性は洞窟の中に放置されていた箱の中から見つかりましたが、命に別状はないもようです。呟音市警察にて現在、身元の確認が進められています」

(848)

ヨコ「あら、怖いわね。一体なにがあったのかしら？」 テレビ「それでは第一発見者のインタビューをご覧ください。クオ」は、箱の中に人が入っていて本当にビックリしたんだおっ、誰かの手によって隠されたような感じだったんだおっ。あ、カメラマンさん眠っちゃだめなんだおっ」

(849)

テレビ「ジエネ」なんとというかこう、岩盤でフタをしてあったんです！」 クオ「そ、そんなんだおっ、結構重かったんだおっ。ちなみに僕たちはデート中だったんだおっおっ」 ヨコはふうむと唸りつつ、お茶を一口すすった。ヨコ「何はともあれ、怪我が無くてよかったわねー」 気がつけばテレビとお喋りしていたヨコだった。

(850)

ヨコ「ふう……なんだか退屈」 ワクはガンバールフェスタに行っているし、ノルコは自室にこもって色んな人の意見に目を通していろいろらしい。ヨコも何か手伝ってあげたかったけど、何か聞かれたときに答えてあげる以上のことは出来ないのだった。ヨコ（あくまでも、ノルコが決めなきゃいけない問題なのよね……）

(851)

ヨコ(そうだ！　ホウ君は今なにをしているかしら！?)　すつかりホウの友達になった気持ちでいる魔性の女ヨコは、チカコさんにリプライしてみた。チカコ「あら、ヨコさんこんにちは。ホウならさつき出掛けていきましたよ？　なんだかとっても焦っているみたいだったんだけど、何かしらね？」

(852)

ヨコ「え、そんなんですか？　お茶にでも招待しようかと思っただんですけど」　チカコ「うふふ、うちのホウを気に入ってもらえて何よりですわつ。ホウは午前にGPTLを見て気絶して、目を覚ましたかと思ったら飛び出て行ったんですよ」　ヨコ「まあ……それはちょっと気になりますねえ」　チカコ「ほんとにねえ」

(853)

チカコ「そうそう。今ですね、アップルパイ焼いてるんですよ？　もしお暇でしたら食べにきませんか？」　ヨコ「えっ、良いんですか？　我が家にも今ちょうど、良いお茶がございますのよ？」　チカコ「まあまあそれは！　是非と遊びにおいらしあそばせ。ホウもそのうち戻ってくるでしょう、おーほほほ」

(854)

ヨコとチカコが貴族口調で優雅なティータイムを画策しているころ、ホウは近くの公園に向かって猛ダッシュしていた。ホウ「くっ……これは大変なことになりそうだ！　GPTLが僕を裏切るなんて！　一体どうしたことなんだ！」　GPTLが裏切った？　それは一体どういう状況なのか？

(855)

ホウはGPTLを見ることにより、大まかな未来の出来事を感じることが出来る。しかし、予想外の事件がおきたのだ。そう、呟音

市近郊の山林で見つかった意識不明の人物のことである。ホウ「誰だ、一体誰なんだ。GPTLをかき乱しているやつは！」ホウはGPTLのかく乱の根源が、近くの公園に現れることを感じていた。

(856)

ホウは全体力を注ぎ込んだ猛ダッシュにより、3分で公園にたどり着いた。ホウ「はあはあ……」何の変哲もない、ただの公園。ブランコがあつて鉄棒があつて砂場があつてベンチがあつてトイレがある。ホウ(どうやら、まだ来ていないようだ……ドイツセスタール)ホウはベンチに腰掛けて『その者』の訪れを待った。

(857)

そのまま数分の時が経過した。まだ誰も来ない。木の上で小鳥がピーピーさえずっている。ホウ(……一体相手は誰だ……そして何が目的だ)ホウにわかっていることは唯一つ、正体不明の誰かが、人知れず人類の営みに干渉してきているということだ。その目的も、手段さえもわからない。

(858)

ホウ(まさか……地球外文明の干渉?)どうにも人間の仕業ではなさそうだとホウは思う。今の人類の文明レベルでは到底不可能なことが起こっているのだ、と。地球外生命体……もとい、エイリアン。ホウ(なんて荒唐無稽な……むっ!)その時、公園の入り口に人影のようなものがよぎった。

(859)

ホウ(……あれは)人影はそのまま公園の中に進入してきた。背の低い、小太りなシルエット。しかしその存在感は尋常ではない。切れ長にして眼光するどい双眸。驚異的にふくよかな福耳。ホウ(確か彼は、ノルコ君のクラスメートの……)カスガイ・ヤマオ

何故こんなところに？　ホウの表情が、いつそう険しくなった。

(860)

そのころ、ノルコは自室で煮詰まっていた。ノルコ（あれがあれであれなっぺばっばーのぴー！）色んな人の色んな意見を讀み比べるうちに、ノルコは自分が今どこにいるのかさえわからなくなってしまった。ノルコ（頭痛い……痛くないけど痛い）そして頭をかかえてうんうん唸った。

(861)

ゲンお爺さんの友達の、お爺ちゃん三人組からは「トイレは心のオアシスじゃからＴＬ設置はイカン！」との意見。ツイーター互助会のチカコさんからは「トイレで起こった犯罪が原因で協会を尋ねてくる人もいるの」との意見。ユウタ君からは「いつでもみんなと繋がってられる方が安心だね、賛成！」とのご意見。

(862)

お父さんの職場のイズカさんからは「一人でじっくり考え事できる場所ってやっぱり貴重だと思うから、ＴＬいれるのは嫌だなあ、反対」との意見。お父さんの上司のクサヨシさんからは「全ての発明のトイレより生まれる。トイレへのＴＬ導入は、人類の発達過程に甚大な影響を及ぼすだろう」と、どっちつかずの意見。

(863)

ウメナお姉さんからは「ゲンお爺さんならきつと反対したろうね。何事も慎重な人だったし。だから反対」との意見。クメゾウお爺さんからは「俺は別にどっちでもいいなあ。要はみんなの心がけしだいだらうがな」との意見。てんでんばらばら自由自在、ときおり支離滅裂。ノルコ（うー！みんな好き勝手言って！）

(864)

ノルコはいい加減疲れてしまった。ノルコ(気分転換しないと……あつ) 部屋のＴＬが壊れていることを思い出した。買いに行かなければ。ノルコは上着を着ると、壊れたＴＬをもって玄関に向かった。ノルコ(お母さんに言っていかなきゃ) そう思っリビングを覗くもいなかった。キッチンにもいないようだ。

(865)

ノルコ(寝室かな?) お昼寝してたらどうしよう? そう思いつつヨコとアフレルの寝室を覗く。ヨコ「ふんふんふん あらノルコ、どうしたの?」 ヨコはお化粧をして出掛ける準備をしていた。服装からみて、どうやらお茶会にでも行くみたいだ。ヨコ「お母さん、これからちょっと出掛けてくるからね」

(866)

ノルコは壊れたＴＬをヨコに見せた。ヨコ「あら壊れてるわね。買ってこないと」 ノルコはそこで手を大きく上げて(自分で買っていく!)と宣言した。ヨコ「え? 自分で行く? そうね、すぐそのコンビ二で買えるしね。買ってきたらお母さんが戻ってくるまでお留守番しててくれる?」 ノルコは大きくうなずいた。

(867)

コンビ二は歩いて2分もかからない場所にある。ノルコは壊れたＴＬを回収ボックスに入れると、新しいＴＬを手にとった。色んな絵柄のものがあるが、今回はイヌの絵が描かれたものにする。耳たぶクリックで部屋用ＴＬの商品情報を確認すると『仕様変更あり』とのロゴが赤々と点滅した。

(868)

ノルコ（なんだろう？） さつそく調べてみる。どうやら壁にピタッとくっ付けるためのテープの部分が変わっているらしい。ノルコ（子供がガムと間違っって食べても大丈夫な粘着素材になりました……？） ちなみにペパーミント味であるらしい。ノルコ（そんなもの誰が作ったのかな？） ノルコはさらに調べてみる。

（ 869 ）

ノルコ（！？） 食べられる粘着素材の開発者はイズミ・アフレルとなっていた。ノルコ（お父さん！？） ノルコはしば口をあめぐりと開けたままホゲーっとしてしまった。ノルコ（これってすごいこと？） いや、きつと凄いいことなんだろう。日本中の部屋ＴＬに使われるような品物を作ったのだから。

（ 870 ）

家に帰る途中、ノルコは何回かそのＴＬ装置を眺めた。そしてその度に言い知れぬ感慨に打たれた。ノルコが小公園の前を通り過ぎようとしたとき、なにやら騒ぎ声が聞こえた。ホウ「ハイボーイ！ そんな耳たぶゆらしてどこに行くつもりだい？」 ノルコ（ホウさんの声だ！） ノルコは公園を覗き込んだ。

（ 871 ）

ノルコ（あれは…… ヤマオ君?!） ヤマオとホウが公園のトイレの前でにらみ合っていた。ノルコにとってそれは、まるでシューリリアリズム絵画の如き不可解な光景に見えた。ホウ「僕にわかるはずのことがさっぱりわからなくなった！ でもボーイ？ 君がその原因だってことはわかってるんだぜ、ビバーチエ！」

（ 872 ）

ノルコ（何を言っているんだろう？ ヤマオ君が何かしたの？） ヤマオはホウの言葉を事も無げにやり過ごし、いつもの変わらぬ

微笑を満面にたたえていた。かすかに後光が差しているかのようだった。ホウ「なんとか言いたまえよボーイ？」 ヤマオは何も答えなかった。その代わりに ノルコに視線を向けた。

(873)

大出力レーザーの如く強靱にして確固たる視線に、ノルコはおでこの真ん中を打ち抜かれてしまった。ノルコ(うひゃう?!) そのままビーンと硬直する。ホウ「……ふふ、このタイミング。偶然とは言いがたいなボーイ&ガール？」 するとヤマオは招き猫のような仕草で、ノルコにこつちへ来るよう手招きした。

(874)

ノルコはカチコチとした動作で二人のもとへ歩いていった。ノルコ(一体何をしているの?!) 聞いてみたかったが呟けない。もちろんヤマオも呟かない。ホウ「そして僕は喋れても呟けない」 奇しくも全員ツイート能力が欠如していた。ヤマオ「……」 ホウ「……」 ノルコ「……」 三人はそろって空を見上げた。空は青かった。

(875)

ノルコ(この状況……一体どうなるんだろ?) ノルコがそう思うやいなや、ヤマオが自らの両耳をつまんだ。ログオフしようというのだ。そしてノルコをジーと見つめてきた。まるでノルコにもログオフを進めているかのよう。ノルコ(……てやんでえ!) ノルコは半ばヤケクソ気味にログオフした。

(876)

ノルコのログオフを確認すると、ヤマオは何も言わずトイレに向かって歩いていった。二人ともそれに続いた。ノルコは引き返すなら今しかないと思った。この先トイレに入って、そこで『なにごと

も起らない』わけがなかった。ノルコ（……それでも） それでもそこはトイレだった。今のノルコにとって、最も重要な場所だったのである。

（877）

ヤマオは多用途トイレの扉を開けた。体が不自由な方のために、広々としたつくりになっている。もちろんT.L装置を含むすべての監視・記録装置が設置されて『いない』。ホウとノルコが中に入ると、ヤマオはその扉を閉め、そして鍵をかけた。これで完全な密室。情報工学的に言って、どこへも繋がっていない場所が成立した。

（878）

ヤマオ「やあ、わざわざごめんね。ノルコちゃん。そしてホウさん」 ノルコ（?!?!?!） 驚天動地の出来事だった。ホウ「……ほほう！」 ヤマオ「ノルコちゃん、声を出して驚いてもいいんだよ？」 ノルコ「なにことだわ!?!」 そして自分が喋れることをヤマオが気づいていることに気づいて、さらに驚いた。ノルコ「ほげー!」

(879)

ノルコは白目をむいてしまったが、ヤマオは気にせず語り始めた。ヤマオ「あまり時間もないから手短にね。まずはノルコちゃん」そう言つてヤマオはノルコの方に向き直つた。ノルコは何とか白目むき出し状態から回復する。ヤマオ「ミギノウエという人を知っているよね。実はあの、僕の知り合いなんだ」

(880)

ノルコ「ふ、ふう〜ん……」ノルコはもう大して驚かなかつた。驚くという感覚がマヒしていたのだ。ノルコ「そ、それで？」ヤマオ「それだけっ」そっけなくそう言つと、ヤマオは今度はホウに対して向き直つた。ヤマオ「次はホウさん」ホウ「ふっ、耳の穴かっぽじつてよく聞いてさしあげようじゃないか！」

(881)

ヤマオ「GPTLは体によくないんだよー？」ホウ「そんなこと、言われるまでもないことさ。それで？」ヤマオ「それだけっ」またしてもそっけなくそう言つて、ヤマオは二人から視線をはずした。ヤマオ「じゃあ、もう出よう。人がきちやうから」ヤマオはそれ以上何も言わず、トイレの扉を開けた。

(882)

まぶしい光がトイレの中に差し込んできた。ヤマオはトイレから一歩踏み出すと、両耳をつまんでログインした。ノルコもそれに続いてログイン。ホウは髪をかきあげて無い耳に光を当てた。ホウ「そして君はもう眩かないんだね？」ヤマオは何も言わず、穏やかな笑みを浮かべた。

(883)

ノルコはヤマオに聞きたい事が溢れんばかりだったが、ログインした以上は咳くことが出来ない。ただヤマオの横顔を見つめ、その表情の奥にある彼の意思に思いを馳せる他にないのだった。ヤマオはそのまましばし空を見上げていた。何かを咳こうかと迷っているように、ノルコには見えた。

(884)

ノルコ(ヤマオ君……本当はもつとつぶやきたいのかな?) ヤマオ君の一声は、きつと私のつぶやき一万回分の重みがあるに違いないと、ノルコは思わずにはいられなかった。ヤマオ「……」ヤマオ君がわずかに口を開いたように、ノルコには見えたのだが……。ノルコ(やっぱり気のせい?)

(885)

ヤマオがノルコの方を向いた。その表情には、いつもと同じ微笑が浮かんでいる。そしてやはり後光がさしているようにみえる。ノルコ(……!!) その瞬間^{とき}だった。ノルコ(……そうか、わかったよヤマオ君) ノルコの表情の変化に気づいたヤマオは、なんとも満足げな表情を浮かべ、そして何も言わずに去って行った。

(886)

通行人1「おい、たしかこの辺だ」 通行人2「あっ、いたぞ、ヤマオ君だ!」 彼らはヤマオが公園の中で突然ログオフした理由を探りに来た人達だ。有名になると、ろくにログオフも出来ない。ヤマオはその人達の前を、軽く会釈をしてから通り過ぎた。二人の男は、ただ呆然とヤマオを見送った。

(887)

ノルコ（ヤマ才君はきつと、大勢の人に注目されることの意味を教えてくれたんだ） ノルコは無意識に空を見上げていた。そして思った。日本中、いや世界中から注目されるなかでつぶやくということは、もしかすると、大空に向かってつぶやくのと同じことなのかもしれない、と。

（ 888 ）

ホウ「……やれやれ、つまりはGPTLを見るなという警告か。一体彼は何者なんだろうね？」 ヤマ才が何者なのかはノルコにはわからない。もしかしたら宇宙人かもしれないし、弥勒菩薩の化身かもしれない。未来からの使者かもしれない。ただ一つ間違いなく言えることは、ヤマ才君は友達だということだ。

（ 889 ）

ホウ「ところでノルコ君、ミギノウエというのは？」 そんなのは私の頭の中を読めばいいでしょ！ とノルコは思う。ホウ「今の僕はGPTLの恩恵がまったくないんだ」 ノルコ（心を読めないってこと？） ホウ「そうなのかもしれないし、そうじゃないかもしれない」 ノルコ（どっちなの！？）

（ 890 ）

ホウ「ああ……どうしよう。GPTLの使えない僕なんてただの変質者じゃないか」 ノルコ（自覚してたんだ?!） ホウ「こんな状態じゃ誰も救えやしない。また昔の僕に逆戻りだ」 ノルコ（そんなことはないんじゃない？） ホウ「ああ困った。ずっと未来を読む前提で生きてきたから。今僕は何をしていいかわからない」

（ 891 ）

ノルコ（とりあえず家に帰ったら？） ホウ「あああー、今夜のおかずは何だろう！ それさえもわからないなんて！」 ノルコ

(ちなみに我が家はアジフライなのです) ホウ「あああー、ムズムズする! いやクサクサか? むしろウサウサなのか?!」
ノルコ(う、ウサウサ?)

(892)

ホウ「……ごめんよ、君に言っただってどうしようもないね。まだツイート直らないのかい? うち来てGPTL見るかい?」 ノルコは目を閉じ耳を塞ぎ口をつぐんだ。ホウ「見ざる言わざる聞かざるかい? ふっ、まさに人が到達しえる最高の境地じゃないか。オールインワン」 ノルコ(ホールインワン?)

(893)

ホウ「ふふふ……なんだか君を見てて元気が出てきたよ。君はつぶやきを失ったのに、そんなにも明るく今を生きているだね。僕も見習わなきゃね」 ノルコ(なんだかムズ痒いわっ) ホウ「ああ、人は未来が見えずとも、前を向いて生きていけるのだろうか……」
ホウはそのまま、力なく歩き去っていった。

(894)

何をそんなに落ち込む必要があるんだろう? とノルコは思う。
ノルコ(未来が見える方がどうかしてるの……) そして今のノルコは国会議員で、考えることが山ほどある状況だ。ノルコ(気にしていられないわ) ということで、余計なことは後回し。ノルコ(……でも、ミギノウエとヤマオ君が知り合ってどういうこと?)

(895)

どの程度の知り合いなのだろうか? 親しいのか? ただ顔を見知っているだけなのか? また、何のためにそのことを伝えてきたのか。ノルコ(わからぬ……) でもまあ、そのうちわかるだろう。ノルコはそのくらいに考えて、それ以上深く追求することをやめた

もとい、やめることを自らの意志で選択した。

(896)

山林の奥で発見された意識不明の人物が目を覚まし、自らカスガイ・トシオと名乗って、子と妻がいることを告白するのが、今日から一週間後のことである。しかし、それをまだノルコは知らない。知ろうと思えば知ることが出来ることだったが、ノルコは自らの意志でその可能性を放棄した。つまり、ヤマオのことを気にしなかったのである。

(897)

カスガイ・トシオが光情報生命体であり、宇宙全天に遍在する種族『光文明』の端末素体であることを、ノルコはもう一生知ることはない。ヤマオが彼と地球人女性との間に生まれたハーフであることも、地球人に情をよせてしまったトシオを更正するために派遣されたエージェントこそがミギノウエであることも、一生知るよしはない。

(898)

人知れず地球圏に侵入した光情報生命体、もといエイリアン。その存在に、ホウは危うく気づきかけたのだ。故に光文明は、彼の下にヤマオを派遣した。ヤマオはどういうわけか、その工程にノルコを巻き込んだ。それは光文明にとってイレギュラーな事態であり、現在その意義が全力で検証されているところだ。

(899)

光文明の目的は人類と友達になることである。しかし彼らからすれば、人類はまだ相当に幼い。ゆえに対話が可能になるまで人類の成長を見守るといのが、彼らのポリシーだった。しかし、こともあろうか、その幼い文明の生命体に恋して、子供まで作ってしまった

た端末素体が発生した。これにより彼らのポリシーは大きく動揺する。

(900)

光文明は現在、そう遠くない時期に自分達の存在が地球人に知られるだろうと予期している。そしてその事態を可能な限り先延ばししようとして、持てる知能を結集させている。幸い、ホウとノルコの二名は無力化できたようだ。しかしいずれその時は来るだろう。彼らの存在は、ヤマオという名の銚かすがいを通して、にじみ出してしまうのだから。

(901)

たとえヤマオが宇宙人だったとしても、友達であることには変わらない。ノルコが心の中でそう宣言してくれたことは、光文明にとってこの上ない喜びとなった。おそらく、ここ数億年の間で一番の喜びであつたらう。彼らは最大限の自制を保ちつつも、やはりどこかで浮き足立ってしまった。地上の光に、揺らぎが生じるほどには。

(902)

ノルコ(……ん?)　　なにか光ったような気がした。よく見れば、体の周りにキラキラと、光の粒子が踊っているようだった。ノルコ(あれあれ?)　　目をゴシゴシこする。やっぱりキラキラしたものがまとわりついている。ノルコ(なんだろう、なんか不思議だな……)　　キラキラはまもなく消えてなくなった。

(903)

ノルコは再び歩き出した。ポカポカといい天気で、自然とアクビが出てしまった。ノルコ(はしたないふわあ〜)　　帰ったらちよつとお昼寝して、それからまた皆のご意見シートを読もう。そんな他愛も無いことを考えつつ、ノルコは歩く。彼女が今まさに世界

の中心に在るといふことは、知る由もないことだし、知る必要もないことだった。

(904)

時計の針が15時を回ったその時、突然アフレルはクサヨシに肩を叩かれた。どうやらツイッターを使わないで話がないようだった。その時クサヨシは、とても切羽詰った表情をしていたのだ。アフレル(な、なにことだろう……)　クサヨシは何も言わず、ただ自室に向かって歩みを進めた。

(905)

アフレルはクサヨシの自室に招き入れられた。クサヨシの部屋は和風な趣で、戦国時代の茶室を思わせるような作りになっていた。掛け軸には「人は人なり」と、なかなかの達筆で描かれていた。アフレル(ど、どうするんだろう……ドキドキ)　クサヨシはアフレルに座布団をすすめ、自らも座した。

(906)

アフレル(……え、ええっ！)　クサヨシは何も言わずにログオフした。クサヨシ「君もログオフしてくれないか、大事な話がある」　アフレル(え、えええ！　じ、自室で二人っきりでログオフって、そ、それは!)　男同士であっても、そういうことをする際はログオフするものだが……。クサヨシ「……何か勘違いしてないか？」

(907)

アフレルはあわててログオフした。そして、アフレル「か、勘違い？　何のことですか？」と、とぼけた。クサヨシ「ふむ、ならば良い。実はとてもとても大変なことになったんだよ、アフレル君」　アフレル「な、なんです？　まさか宇宙人が見つかったとか言わ

ないですよね？」　クサヨシは口元にニヤリとした笑みを浮かべた。

(908)

アフレルの頬に冷や汗がつつた。アフレル「……ま、まさか本当に」　クサヨシ「そうだ。本当に見つかったのだ。しかも大変なことに……」　アフレル「……なんです？」　クサヨシ「アフレル君。宇宙人の反応はね……君の娘さんの、すぐ近くでおきたんだ」　アフレルの表情が一瞬にして凍りついた。

(909)

アフレル「この人たちが悪戯好きなのは良く知ってますけど、さすがにその冗談は無いですよ？」　アフレルは目がマジになっていた。その眼光の険しさは、クサヨシでさえ息を詰まらせるレベルだった。アフレル「なんでわざわざノルコのそばに現れなきゃいけないんです？」　父は怒っていた。

(910)

クサヨシ「それはわからない……、ただこの白衣に誓って言わせてもらおう。こんな笑えない冗談を私は言わない。反応が出たのは事実だ」　アフレル「……すみません」　クサヨシ「いいんだ。私だってまだ半信半疑なのだから」　クサヨシは開発用の情報端末を取り出した。クサヨシ「この端末は、私のPTLだけに繋がっている」

(911)

アフレル「PTL？」　聞きなれない単語だったが、それはハウがパーソナルタイムラインと呼ぶものことだった。クサヨシ「バイオツイッターを駆動させているソースコードのようなものだ。暗号化された個人の思考情報と言い換えても良い。バイオツイッターの中核をなすものの一つだ」

(9 1 2)

クサヨシ「PTLは個人の無意識のコードであると同時に、人類の集合的意識に対する《影》でもある。私自身のPTLを利用することで、全人類の無意識的感觉を利用できるのでないかと私は考えた」 アフレル「そんなプログラムを作っていたんですか？ たった2時間たらずで」 クサヨシ「うむ」

(9 1 3)

アフレル「その端末を見せてもらっていいですか？」 クサヨシ「もちろん」 アフレルは端末を受け取る。画面には宇宙人との接触が疑われる人物がリストされており、その最上位にノルコの名前があった。アフレル「ほんとだ……」 クサヨシ「私も驚いたよ、こんな結果がでるとは」

(9 1 4)

アフレル「なんだかよくわかりません……どういう基準なんですか？」 クサヨシ「人間が地球上で生きていて、おおよそ経験するはずもない経験をした者を抽出している」 アフレル「その経験って具体的にはどんな経験なんですか？」 クサヨシ「その選定に自身のPTL情報を利用しているのだ」

(9 1 5)

アフレル「そのPTLというのは、本人にもわからないように暗号化されているから……」 クサヨシ「そうだ。私にもなんだか良くわからない」 アフレル「うーん……」 クサヨシ「ともかく君の娘さんが、通常では経験しえない体験をしたらしい。そのことは間違いないのだ。心当たりはないかね？」

(9 1 6)

心当たりもなにも、アフレルはもうずいぶんノルコと会話をしていないかった。アフレル（娘の今の状況も把握していないなんて……僕は父親失格だ）クサヨシ「君の娘さんは最近、国会議員に選ばれたようだ、それについては何か話していないのかい？」アフレル「……え？」

(917)

アフレルの頭の中に、クサヨシの言葉が幾度も反響した。国会議員に選ばれた？ ノルコが？ 国会議員に選ばれた？ ノルコが？ え？ クサヨシ「……まさかとは思うが、知らなかったのかい？」アフレルは頭の中が真っ白になった。ヨコの浮気現場（勘違い）を目撃した時から、色々なものが吹っ飛んでしまっているのだ。

(918)

アフレル「少し、時間をください……。家族とちよつと話してみます……」クサヨシ「うむ、それがいいだろうな。心ゆくまで団欒すると良い。なんなら休みを取ったらどうだ？」アフレル「いえ、それには及びません……では、失礼します」クサヨシ「ああアフレルはクサヨシの部屋を後にした。

(919)

アフレルは近くのムーブウォークに乗ると、すぐさまＴＬを開いて家族のＴＬに目を通した。そしてトイレ法のことを知り、ヨコがノルコに日本の政治システムの説明をしたことを知り、ワクがガンバルフェスタで好成績を収めたことを知った。無我夢中で目を通していたので、アフレルはすっかり基地の端っこまで来てしまった。

(920)

アフレル「げげっ、ここどこ!?」そこは人気のまったく無い、廃倉庫のような場所だった。アフレル「はあ……」アフレルは

頭を抱えた。どうして僕はこんなに間抜けなんだ。自分自身に呆れて言葉もでなかった。アフレル（こんなんだから、奥さんを知らない男に取られちゃうんだ……）

（921）

引き返す気にもならず、アフレルはしばしそこに佇んだ。彼はけして間抜けというわけではない。ただ並外れて集中力が高いため、それ以外のことが目に入らなくなってしまふ傾向があるだけだ。ひとまず気分を落ち着けて、状況をしっかりと把握できれば、大抵のミスは取り戻せる。

（922）

アフレル（……ここは試作品の投棄場なのか）よく見ると、暗がりの中にガンバールのパンツが見え隠れしている。長さ15mの巨大なバールまで横たわっていた。アフレル（もつたいないな）そこはとても静かな場所だった。ここなら案外、落ち着いて家族と話せるのではないかとアフレルは考えた。

（923）

アフレル「ヨコ、今なにしてる？」　ヨコ「あらあなた。今ね、チカコさんとお茶しているのよ？」　アフレル「チカコさん？」　チカコ「あら、ヨコさんの旦那さん？　始めましてー」　ヨコ「チカコさんはお菓子作りの達人なのよ？」　アフレル「そ、そうなんだ。いいなあ、僕もなんだかお腹すいてきちゃったよ」

（924）

ヨコ「あなた今、休憩中なの？」　アフレル「うん、そうなんだ。ちょっとみんなの様子が気になってね」　ヨコ「そう……。ところぞノルコがね」　アフレル「うん知ってる。国会議員に選ばれたんだよね。僕も今、法案を読み込んでるところなんだ。ノルコは今

なにしてる?」 ヨコ「お昼寝してるみたい。疲れてるのよ」

(925)

アフレル「そうか……。頑張つて勉強してるみたいだしね、政治のこと」 ヨコ「あなた、あんまり驚かないのね。私なんか驚いてしばらくになにも言えなくなっちゃったけど」 アフレル「ん? そうかな。これでも結構驚いたんだけどな」 ヨコ「ふうーん」 嘘ではないが、つい先ほどのことだ。アフレル「うんうん」

(926)

ヨコとアフレルのリプライを聞いていたチカコが、微妙な二人の間の空気を察して話しにわりこんできた。チカコ「ご主人は単身赴任なんですか?」 家族と離れて寂しくありませんか?」 アフレル「ええ? そりゃあ寂しいですよ」

(927)

ヨコ「えー? ホントに? 仕事に我を忘れてたりしない?」 アフレル「そ、そんなことないよ」 そんなことありだった。チカコ「うふふ。家庭のことを忘れるくらい楽しい仕事なんだつたら、それは良いことじゃないですか」 ヨコ「まったくだわ。私にも半分分けて欲しいくらいね!」 アフレル「ううっ」

(928)

アフレルは流石にいじけてしまった。アフレル(……人の気も知らないで) しかし、すぐに気を取り直す。今のアフレルは、超重要な懸案事項を抱えているのだ。アフレル「いやでもさ、ノルコのこととかとにかく気になるんだよ。いまノルコつぶやけないから、離れていると調子とか様子とかわかりにくいからさ……」

(929)

チカコ「うんっ、それはご主人とっても心配だと思う！」　ヨコ
「それもそうねえ」　アフレル「何かこう、疲れてるとか塞ぎ気味
とか挙動不審とか、なってない？」　ヨコ「国会のことで煮詰まっ
てるようではあるわね。でも、気持ち的にどうこうってことはなさ
そうよ？」　アフレル「ならいいんだけど……でも心配だな、国会
議員かあ……」

(930)

ヨコ「大丈夫よ。私もちゃんと見てるから。……あ、でも強いて
言うなら」　アフレル「な、なに？」　ヨコ「あなたが単身赴任す
る前の日の夜だったんだけど、ノルコ、お風呂でのぼせちゃったの
よね。そんなこと今まで一度もなかったのに」　アフレル「え？
お風呂？」　アフレルはその夜のことを思い起こす。

(931)

アフレル（そういえば、テレビを食い入るように見ていたな……
確か弓道講座）　ヨコ「お風呂でなにか考え事でもしていたのかし
らね？　本人に聞こうにもノルコつぶやけないし」　アフレル「ま
あ……そうなんだよなあ」　ヨコ「でもきつと、もうすぐ治ると思
うから、そしたら聞いてみるわ」　アフレル「うん、頼むよ」

(932)

そこでアフレルはいったん会話を切り、そしてその場を後にした。
アフレル（お風呂で考え事してた？　じゃあなんでその後、テレビ
の弓道講座に見入っていたんだろ……？　なにか変じゃないか？）
アフレルはさらに記憶を探り、テレビを見ていた時のノルコの様
子を詳細に思い起こそうとした。

(933)

アフレル（……なんとなく、目の焦点がテレビに合ってなかった

ような気がする……はっ！！）　そこでクサヨシの言葉とリンクした。クサヨシ「宇宙人の反応はね……君の娘さんの、すぐ近くで起ったんだ」　アフレル「せ、せん……！？」　咄嗟にアフレルは口を塞いだ。宇宙人に聞かれてはまずい。アフレル（洗脳された！？）

（ 934 ）

もう一刻の猶予もなかった。光情報体の宇宙人に、自分の娘が洗脳された可能性がある。傍から見ればバカげた妄想に聞こえるかもしれないが、わずかでも可能性がある限り、最悪の事態を想定して行動せねばとアフレルは考えた。アフレル（どうすればいい……！）　高鳴る胸を抑えつつ、アフレルは猛ダッシュでムーブウォークを駆けていった。

(935)

タケシ「すげーぜワク！ いつの間にあんな上手くなったんだよ？！」 ワク「イツツ・シークレット」 ワクはガンバールフェスタの帰りだった。今日のワクは絶好調で、なんと撃破ポイント289をたたき出したのだ。これは国内では7位、世界では321位という、超がつくほどの好成績だ。

(936)

ワクは帰り道ですつとガンバール仲間の少年達に問い詰められていた。あまりにもいきなり強くなったからだ。だがワクはその秘訣を誰にも明かさなかった。そういう「約束」をしたのだ。ある人とワク（ミスター・ミギノウエ……アイ・ウィル・ウイン！） み、ミギノウエ？！

(937)

このところ、毎晩のようにワクをガンバール対戦にさそってくる大人がいる。その者の名はミギノウエ。ノルコにちょっかいをかけているゲンお爺さんのお友達だ。もちろん大人なので、いくらがんばっても撃破ポイントはあがらない。しかし、大人の知識を駆使したえげつない戦法でワクを翻弄してくるのだった。

(938)

ミギノウエ「ふはははー、まだまだ修行が足りんぞワク君！」
そう言つて挑発してくる彼のことを、ワクは「なんて大人気ない人なんだろっ……ホワツツ・ア・チャイルディツシュ・マン！」と思つていた。しかし、彼と対戦するうちに、ワクのガンバール操縦技術はどんどん進歩していったのだ。

(9 3 9)

ジョージ「なあ教えるよ、なんであんなに上手くなったんだよ？」
リュウヤ「あの翼の衝撃波でバーンってやつ、どうやってやるんだ？」
タケシ「もったいぶってないで教えるYO！」
ワク「…
…大事な人との約束だから、いまは教えられないんだ！」
ワクに日本語で言われては、誰もそれ以上追及できなかった。

(9 4 0)

ミギノウエはワクにこう言った。ミギノウエ「ワク君、おじさんはもういい年なんだけど、このガンバルというゲームが大好きなんだ…。こんなこと恥ずかしくて他の人には言えやしない。だからこのことは秘密な？ な？」
ワクも、大人に教わったえげつない技で強くなつたとは、あまり人に言いたくなかった。

(9 4 1)

途中で友達と別れると、ワクは家に向かってダッシュした。すごくお腹が空いていた。ワク「アイム・ホーム！」
家に入るとキッチンへ行く。おやつのおみやぎがおいてあった。ワク「hum？」
姉のノルコの分が手付かずにいる。もう4時になるというのに。ワクは二人分温めて、ノルコの部屋に持っていくことにした。

(9 4 2)

ワク「Knock Knock」
しかし返事はなかい。ワクはソッとドアを開けて、ノルコの部屋を覗いてみた。ワク「??？」
ノルコは机の椅子に正座して、ゲンお爺さんのPCとにらみ合っていた。そうとう髪の毛をワシヤワシヤしたらしく、アホ毛が数え切れないほど跳ね上がっていた。

(9 4 3)

ワク「シスター？」 ノルコ（！！） ノルコがガバつと振り向いた。そしてズカズカとワクの方に歩いてきて……ガッ！ ワク「ノー！」 襟首を掴んだ。ワク「ちゃんとノックしたよう！」 ノルコはワクの持っているタイヤキに気がついた。ノルコ（あ……ごめん） そしてワクの襟首を離して、頭をナデナデした。

（944）

ひとまずタイヤキを一つほおばる。甘くて熱々でおいしい。ワク「ホワッツ・ドゥーイング？」 ノルコはフウと一つため息をついて、ノートPCを指差した。ワク「トイレ法？」 うんうん。ワク「ベリー・デイフィカルト」 うんうん。ワク「お父さんに相談してみた？」 ノルコ（……そういえば、お父さんの意見聞いてない）

（945）

ゲン「いま仕事？ 終わってからでいいから、トイレ法の賛成か反対か教えてー」と、ノルコはゲン名義でリプライを送った。しばらくかかるかと思ったが、返事はすぐに来た。アフレル「お、お爺さん！ じゃなくてノルコ。あ、あー、うわわわ。いやなんでもない……。大変なことになったなー、アハハー」

（946）

なんだか調子が変わる。ゲン「いそがしい、無理しない」 アフレル「いや、そんなことないぞ！ 今ちょうど休憩中だ」とは言ったもの、実はクサヨシと対策会議を開いているところだった。しかも筆談で。ゲン「トイレ法を知ってる？」 アフレル「ああー、もちろんだとも。そんな大事なこと、お父さんが見過ごすわけないだろー？」

（947）

なんだか無理をしている様子だったが、ノルコは気にしないこと

にした。アフレル「あれはなー、すごく微妙な法案だなー。父さんは反対だ」 ゲン「その心は」 アフレル「今は公共のトイレだけってことになってるけど、そのうち家のトイレにもＴＬ付けたほうが良いって雰囲気になりそうな予感がするんだ」

(948)

ゲン「ふむふむ」 アフレルはドキリとした。ゲンお爺さんもよく『ふむふむ』と言って人の話を聞いていた。まるでノルコの体にゲンお爺さんの魂が乗り移っているみたいだった。ゲン「雰囲気は流されると良くない」 アフレル「ま、まあ、そうだな。雰囲気ってというのは人の手では制御できない不安定なものだしな」

(949)

ゲン「もう少し考えてみる」 アフレル「ああ、あんまり気負わないようにな。……ところでノルコ。国会議員になって色々注目されてると思うけど、最近変わったことはないかい？」 ゲン「なー……」 あると言えばある。ヤマ才君のこととか、ミギノウエという人のこととか。でもそれをお父さんに言っているのかどうか。

(950)

ノルコ(……どうしょ?) ヤマ才君との密談はきつと言わないほうが良い。ログオフしてまでヤマ才君が伝えたかったことだ。でもミギノウエさんのことは言った方が良かったかなとノルコは思う。ルイちゃん達も知っていることだし、ゲンお爺さんのＴＬを読めばすぐにわかってしまうことだから。

(951)

ノルコ(なにより家族内の隠し事は少ない方がいい!) ゲン「ミギノウエさんというゲンお爺さんの友達と知り合いになった」 アフレル「ミギノウエさん? なー、聞いたことないな……。そん

な知り合いが爺さんにいたんだ」　ゲン「お爺さんとは政治みたいな話をいっぱいしてたんだって」

(952)

アフレル「へえー、知らなかったなー」　ゲン「私が国会議員になることを予言した」　アフレル「……え、まじ？」　ゲン「まじまじ」　アフレル「……ねえノルコ。その人は本当にゲンお爺さんの友達なんだね？　お父さんもあとで調べてみるけど」　ゲン「うん。ルイちゃん達とＴＬを読んだ」

(953)

ワク「僕もその人知ってるよ?!」　ノルコ（え？）　ワク「最近よくガンボールで遊ぶんだ」　アフレル「ええ？　一体おいくつなの？　その人」　ワク「サーティー・フォー！」　アフレル「んー、もうパイロットになれる歳じゃないな……いくら上手くてもポイント稼げないよ」　ワク「オールライト&シークレット」

(954)

アフレル「そうか、ワクもお世話になっているんだな。じゃあ父さんもちやんとご挨拶しておかないとな」　アフレルは本当はこう言いたかったはずだ。『なんでそんな大事なこと、もっと早くいわなかったんだ!』と。しかし、単身赴任でゴタゴタしていた時期でもあった。ノルコ達も言い出しにくかったのだ。

(955)

アフレル「おっと、そろそろ休憩時間も終わりだ。トイレ法のこととはまた後でゆっくり考えよう」　そこで会話は終わった。ノルコとワクは、タイヤキを食べたので喉がかわいてきた。とてもお茶が飲みたかったので、二人でドタバタとキッチンに下りていった。ノルコはお父さんに怒られなかったことを、少し不思議に思った。

(956)

チカコ「結局ホウは戻ってこなかったですねえ」　ヨコ「ええ残念。でも、とつても美味しいお菓子をいただきましたわ」　チカコ「こちらこそ、いいお茶の時間を過ごせました。また是非いらしてくださいね」　二人が玄関で、何度もお辞儀を繰り返していると。　ホウ「オオ……マイ・セレーネ」

(957)

チカコ「あら、おかえりホウ。ヨコさんが遊びに来ていたんだよ？」　ヨコ「まあ、こんなタイミングで会うなんて。ご機嫌いかが？」　ホウは青ざめた表情で後ずさり、そのまま胸を抑えて倒れこんだ。　ヨコ「え、ええ?!」　チカコ「ちよつとホウ! どうしたんだい」　ホウ「ジーザス……」

(958)

GPTLの恩恵をなくしたホウは、それだけでずいぶんまいっていた。そこに突然現れたヨコは、彼にとって刺激が強すぎたのだ。　ホウ「だ、大丈夫……きつと、日に当たりすぎたんだ……」　ヨコ「そうなの?　心配だわ。お医者さん呼ぶ?」　ホウ「いえ……少し横になれば……」

(959)

ホウはそのままヨコとチカコに支えられて自室まで行き、ベッドの上に横たわった。　チカコ「私、なにか冷たいものを持ってきます!　ヨコさん、お願いできます?」　ヨコ「はいもちろん!」　そしてヨコはホウの熱を測ったり、衣服を緩めたりした。　ホウ「え、ああ!　そんなとこまで!」　ヨコ「いいのよ!」

(960)

ホウの青ざめていた顔が、今度は急激に真っ赤になった。これではまるで、看病という名の拷問だ。しかしヨコはまったくお構いなかった。ヨコ「ひどい熱。熱中症かしら……とにかく冷やさなきゃ」
そこでヨコは大胆な行動にでた。ヨコ「私の二の腕って、いつつもヒンヤリしてるのよ！」　そういつてホウのおでこに当てたのだ。

(961)

ホウ「わあー！」　ホウは絶叫した。頭の中が滅茶苦茶になっていた。ヨコ「ひよえ！？」　ホウはヨコを突き放す。そしてベッドから這い出て、机の上に置いてあったGPTLディスプレイを手に取った。ホウ「ああああ……やっぱりこれがないと僕は……僕は！」
そういつてGPTLスイッチをONにした、その瞬間。

(962)

ホウ「エザスペラツツイオーネー！」　ホウは雷に打たれたように身を震わせ、そして気絶した。ヨコ「……どうということなの」
チカコ「ヨコさん、おまたせ……って、ええ！？」　チカコは手にしていた氷嚢とタオルを床に落としてしまった。チカコ「なんでGPTLを見たんだい？」　ヨコ「GPTL？」

(963)

二人が流石に医者を呼ぼうと思いはじめたその時。ホウ「……うう、ノルコ君……GPTLを……はやく」　ヨコ「！？」　どうしてホウがノルコの名前を？　ヨコ「どうということなんです？　チカコさん……ホウ君とノルコは知り合いだったんです？」　チカコ「え？　知らなかったんですか？」　ヨコはもう、何がなんだかさっぱりだった。

(9 6 4)

それからホウは、うわごとのようにしてノルコの名前を呼び続けた。その間にヨコはチカコから説明を受け、眩けなくなつて間もない頃、ノルコがホウに連れられて、ここに来ていたことを知つた。ヨコ「そんなことがあつたんです……。ノルコはきつと、言いたくても言えなかつたのね。つぶやけないから」

(9 6 5)

間もなく医者が到着し、ホウの診察を始めた。医者「光癲癇ですね。何かチカチカしたのを見たんでしょう？ いけませんな、そういうお遊びは」それ以外の問題がないことを確かめると、お医者さんはプリプリしながら帰つていった。チカコ「ヨコさんも遅くなる前に帰つた方がいいわ。ホウは私達が見てますから」

(9 6 6)

ヨコは後ろ髪引かれる思いだったが、子供達のこともあるので帰ることにした。そして道すがら考えた。ヨコ「あのディスプレイがホウ君に予知能力を与えていたのね。でもそれをノルコにも見せるつて……。何のために？」いくら考えてもわからない。ただ一つ確実なことは、もうホウにはG P T Lを見せられない、ということだった。

(9 6 7)

そのころ……。クサヨシの部屋（和風の部屋）で、筆ペン片手に難しい顔をしている大人が二人。アフレル「……。」クサヨシ「……。」机の傍らには、墨で真っ黒になった半紙が分厚く積み上げられている。毛筆による筆談を続けて、二人はほぼ同一の見地に達していた。アフレル&クサヨシ（ミギノウエが黒だな……）

(9 6 8)

クサヨシが2時間で開発した「宇宙人に目をつけられた人発見器」によれば、その有力候補は以下の通りである。【一位：イズミ・ノルコ 二位：カスガイ・ヤマオ 三位：カスガイ・トシオ 四位：ツブヤ・クオ 五位：ジエネ・フランソワ】 上位の殆どをノルコに近い人たちが占めていた。

(969)

カスガイ・トシオについて調べてみると、彼がヤマオの失踪した父で、本日の昼に岬音市近郊の山林で発見されたことがわかった。アフレル（これ単独でも驚くべき事件なんだけど……） クサヨシ（発見器に引つかかった以上は人間と見なすべきか……） 例えその人が、何ヶ月も飲まず食わずで生きていたのだとしたも

(970)

アフレルらは、最近ノルコと接触した人間の中で「宇宙人と接触した可能性が最も低い人物」を検索した。それが彼、ミギノウエ・コウイチだった。しかもずば抜けて低かったのだ。ついで、ここ最近のミギノウエのツイートを検分した。そして、決め手となるツイートを、ゲンのTLの中に発見した。

(971)

【ミギノウエ「それじゃあ、そういうことで。またいずれ時がくればアプローチするよ。あと、僕は別に君の心を覗き見たりはしてないから、そんなに心を閉ざさなくても大丈夫だよ。あとあとそれから、たぶんもうログインしても大丈夫なんじゃないかな。TLもだいぶ落ち着いたろうしね。じゃあまた」】

(972)

『もうログインしても大丈夫なんじゃないかな。TLもだいぶ落ち着いたろうし』 この発言である。これはつまり、ノルコが頭痛

を患っていることを、ミギノウエが知っていたことを意味している。しかしどうやって知ることができたのか？ それをアフレルとクサヨシは検証し、そして「不可能である」という結論に達したのだ。

(973)

ノルコの部屋のTLはその時壊れていた。もし壊れていなければ、部屋TLにアクセスすることで、ノルコの状態を知ることが出来たかもしれない。しかしその時TLは壊れていたのだ。まったくの偶然に。そしてミギノウエは、その部屋TLが壊れていることに気づいていなかった。いや、気づけなかったのだ。

(974)

クサヨシ(TL装置の内部プロセッサは量子ビットによって構成されている……) アフレル(量子ビットはその量子効果により、ある確率で壊れることが確定している……) クサヨシ(しかし“いつ壊れるか”は不確定性原理により誰にもわからない……) アフレル(たとえば、どんなに進歩した生命体であっても……)

(975)

この時のミギノウエのツイートは、ノルコが頭痛を患っていることを『確実に知ることができ』という状況が前提になっている。しかしそれは明らかにおかしいことなのだ。クサヨシ(彼は通信手段はおるか、物理手段さえ用いなくとも我々を知ることが出来る) アフレル(そんなことが出来る人は宇宙人に違いない!)

(976)

とはいえ、謎がすべて解けたわけではない。なぜミギノウエという名を騙る宇宙人は、そうまでしてノルコにメッセージを伝えたかったのか？ どうやら、なんとしてでもノルコを政治の舞台で活躍させたいらしいが……。クサヨシ(彼らの意図はわからない) ア

フレル（だけど僕達に無断で干渉してきている）

（977）

アフレル&クサヨシ（なんとかせねば……！）　そのために僕達はここで働いている。ガンバールを作っている。どこぞの宇宙人に勝手な干渉をされていることを知って、それを黙認することは我々の矜持に反する。クサヨシ（ガンバールを起動する）　クサヨシは流れるような手つきで半紙にそう書いた。アフレルはただ黙って頷いた。

(978)

アジフライはワサビ醤油をつけて頂くものだとなルコは信じて疑わない。ノルコ(だってお魚料理じゃないか?) そんなノルコを奇異な瞳でながめつつ、弟のワクは普通にウスターソースをかける。ヨコ「今日はなんだか疲れたわぁ……」 母はため息をつきつつ、クレイジーソルトをパラパラとかける。

(979)

アフレル「何かあったのヨコ?」 と、画面上のアフレルがつぶやく。単身赴任三日目にして、ようやく一家そろっての夕食だ。いつもアフレルが座っている席の上に、社員食堂で夕食をとるアフレルの姿が表示されている。ヨコ「……ちょっとチカコさんの所でひと騒動あって」

(980)

ヨコはホウという青年が、GPTLという装置を見たときたん気を失ったことを話した。アフレルは彼が妻の浮気相手(勘違い)であることなど思いもせず、むしろGPTLに興味津々だった。アフレル「そんな装置……よく一人で作ったものだね、その人は」 ヨコ「まったく凄いことよね。それに、ある事情でツイッターを無くしているの」

(981)

一方ノルコは、ヨコがホウのことを、ためらいもなくアフレルに話すものだから、それはもう気が気ではなかった。ノルコ(ハートによくない!) アフレル「ん? ノルコどうかしたか?」 ノルコは何でもないよと首をふる。アフレル「なあノルコ、もし……少

しでも調子がおかしいようなら、何でもすぐに言っただぞ?」

(982)

ノルコはウンとうなずきつつも、何となく違和感を感じた。必要以上に心配されているように思えたのだ。アフレル「ツイッターを無くしているってことは、眩けないんだね、そのホウさんは」ヨコ「うん、普通に喋ったりは出来るのよ? ノルコとはちょっと違うケースなのよ」アフレル「ふむう」

(983)

ヨコ「アンインストールって薬が体の中に入っているから、もう再インストールは出来ないんですって」アフレル「そうなのか、気の毒にな……。それで、何とか別の手段でツイッターを取り戻そうとしたんだな、ノルコのPCみたいに」ヨコ「うん、それですごく昔の機械に詳しくなったそうよ」

(984)

アフレル「そうかー、苦労したんだな、きつと。ノルコもどんどんPCの使い方が上手くなってるもんな。ずいぶんと文字を打つのが早くなっただんじゃないか?」ノルコはフフフとほくそえんで箸をおき、テーブルの上で「それほどでもないよ」と、ブラインドタツチでエアタイプした。

(985)

アフレル「ははは。その分だと、国会でもちゃんと発言できるなあ」ヨコ「それが、そうもいかないみたいなの」アフレル「え? だめなの?」ヨコ「ええ。問い合わせしてみたら、ノルコ本人の名前でツイートしなきゃだめなんだって。議事録として残るから」アフレル「そうなんだ……」

(9 8 6)

アフレル「じゃあ、ノルコに出来ることは、賛成反対の投票をすることだけなのか」ヨコ「そうね、でもそれで十分じゃない？ノルコはまだ小学生なのよ？ 国会議員に選ばれたってだけで、もう凄いことだと思わなきゃ」アフレル「それもそうだな。ノルコ、ちゃんと投票できるか？ 心は決まってるか？」

(9 8 7)

そこでノルコは強く頷きたいところだった。でも実際は、最後の最後まで決められなさそうだと思った。アフレル「うーん、やつぱりそう簡単には決められないか……。でもいいさ！ それだけちゃんと考えてるってことだからね」ヨコ「あなたはどう思ってるの？ トイレ法のこと」アフレル「え？ 僕はもちろん反対だよ？」

(9 8 8)

ヨコ「えー？」アフレル「え？ だ、だめ？ ヨコは賛成なの？」トイレに管理ツイッターを置くなんて、女性こそ嫌がることだろうとアフレルは思っていたのだが……。ヨコ「正直言って、今の公衆トイレは問題が多すぎるわ。もつと安心して使えるようにした方が、私はいいと思うのよ」アフレル「う、うーん……」

(9 8 9)

ヨコ「でも、意見は人それぞれだと思っし 私にはわからない問題点もたくさんあるのかもしれないし、結局はみんなで良く考えて慎重に決めてくれればそれでいいと思ってる。だからあなたがこの法律に反対でも、私は全然かまわないわ」アフレル「うむむ……」ワク「クール！」ヨコ「ふふふ、これが大人の態度なのよ？」

(9 9 0)

アフレル「うーん、よく論争の種になるのは、個人のプライバシー

「か公共の保全かっていう対立なんだけど、実際よく議論しなきゃいけないのは、管理ツイッターの導入で本当にトイレが安全になるのかってことなんだよな」 ノルコはその意見に賛成だった。自分なりに考えて、問題の核心はそこにあるのではないかという考えに至っていた。

(991)

ヨコ「でもそれは、実際にやってみるしかないんじゃないかしら？」 アフレル「それが一番手っ取り早い確かめ方だね。発起人のセイ氏も、まずやってみて効果がないようなら廃止も検討するって言ってるし」 そこでノルコはさらに疑ってみる。一度導入したら、元に戻せなく可能性もあるんじゃないかと。

(992)

ノルコ「……実際やってみて効果抜群だったら たぶん、そのまま定着するだろう。自分達の社会は、トイレというプライバシーを少し失って、社会全体の安全性が少し高まる。二度と元には戻らない。とすれば、話はまた元に戻ることになる。ノルコ(トイレの秘密は守られるべきか否か?) しかしその判断基準をノルコは持ち得ない。

(993)

ノルコ「……はっ!」 そこでノルコは、昼間の出来事を思い出した。ホウさんとヤマ才君と三人で、公園のトイレで密談したことだ。ノルコ(もし、トイレにツイッターがあつたら、あの密談は出来なかった……) そう考えると、ツイッターが無くて良かったとノルコは思う。あのヤマ才君が、二言以上も喋ったのだから。

(994)

しかし同時に、例えようのない疑念も浮かんでくる。ヤマ才君は

言った、自分はミギノウエ氏と知り合いだと。それを私に教えてくれたのは何故？ アフレル「ノルコ？」 アジフライを口に入れたまま不動の状態になっていたノルコを見て、アフレルが言った。アフレル「……ど、どうした？」 ノルコ（……考え事してただけなの）

(995)

そういちいち心配されてはロクに考え事も出来ない。そう思うと何だか腹立たしかった。ノルコはその後一切、アフレルの言動に対しリアクションをとらず、機械的に食事をすませて席をたった。ノルコ（国会議員はいそがしいのだっ）そして食器をキッチンに運び、政治ＴＳを眺めながらさっさと洗ってしまった。

(996)

食事の後、ヨコは後片付けをしながら、アフレルにDMを送った。ヨコ「ねえあなた。何だかノルコのこと気にかげ過ぎじゃない？あれじゃノルコも機嫌悪くするわよ」DMの返事はしばらくしてから来た。アフレル「そ、そうかな……気をつけるよ」そっけない内容だった。ヨコは不審に思った。

(997)

ヨコ「ねえ。私の女の勘が教えてるんだけど、何か隠し事してない？」そのDMを受け取った時、アフレルはガンバールの前腕部センサーに細工をしている所だった。アフレル「ええ？そんなことないよ……ちょっと仕事思い出してさ。手が離せなくて、ごめん」ヨコはひとまず納得しておいた。

(998)

クサヨシ「アフレル君……どうだい？」アフレル「ええ……もう終わります」アフレルがいじっているのはガンバール前腕部の照準用レーダーだ。エイリアンに鉄拳制裁を食らわす時に必要になる。そのレーダーの波長を、クサヨシの端末で操作できるように改造しているのだ。

(999)

アフレル「これで……見えない敵をあぶりだせるんですね。そちらの首尾は上手くいきそうですか？」クサヨシ「ああ、上層部はまんまと私の口車にのってくれたよ……」アフレル「それはそれは……」クサヨシは研究基地のお偉い方に、『エイリアンを発見したという嘘』をついたのだ。本格的な実証データを示した上で。

(1000)

基本的にいたずら好きのお偉い方は、それをクサヨシ流のサブライズだと見抜き、それに乗った。偉い人1「そ、それは大変だクサヨシ君！ 可及的速やかにガンバールを発進させたまえ！」 偉い人2「なんとしても人類の意地と誇りを見せ付けるのだ！」 クサヨシ「はい、直ちに」 そんなクサヨシを試すように、偉い人達はニヤニヤと笑った。

(1001)

アフレル「ちよつと重いのを取り付けるんで、手伝ってもらえますか？」 クサヨシ「ああ、まかせろ」 重量が60kgくらいある増幅器を二人で持ち上げる。本当はクレーンを使いたるところだが、今は隠密行動中だ。暗闇の中で、非常灯の明かりだけをたよりに増幅器を運ぶ。クサヨシ「む……これはきついな」

(1002)

すると不意に、増幅器が軽くなった。アフレル「え?!」 機械の陰から人が出てきて、増幅器を持ち上げたのだ。クサヨシ「お前達……」 イイズカ「水臭いですよ、二人とも」 ハツブル「なに二人でエンジンイしてるノネ？」 クサヨシとアフレルは互いに顔を見合わせると、同時に笑いだした。

(1003)

アフレル「ばれちゃった」 クサヨシ「しかしこれは、ガンバール初出撃の裏で進行される、超重要な極秘ミッションだ。我々は人類の未来に対し、計り知れない責任を持つことになる。君達にはその覚悟があるのかね？」 イイズカ「何のために僕らがここで働いてると思ってるんです？」 ハツブル「オフコースに決まってるだろ？」

(1004)

二人では中々はかどらなかつた仕事も、四人でやるとスムーズに進んだ。4人はその夜のうちにレーザー装置の取り付けを終えた。その後、ハッブルから提案があつた。ハッブル「このレーザーじゃ、エイリアンの全部は暴けないね」クサヨシ「一矢報いらればよいのだ」ハッブル「もつとスゴい手があるんだよ？」

(1005)

クサヨシ「ほう」するとハッブルは太平洋上の海図を空間投影した。ハッブル「Trans Pacific VLBI Network」通称TPVN。それは環太平洋地域に設置された長基軸線干渉電波望遠鏡のことだ。南北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、日本、ロシア。計32機の電波望遠鏡が太平洋を取り囲んでいる。

(1006)

アフレル「ま、まさか……この電波望遠鏡を使ってエイリアンを可視化すると」ハッブル「フフフ、その通り」イイズカ「となると、国際天文学協会をも巻き込む話になるな」クサヨシ「私とて、流石にそこまでは手が回らないぞ？」ハッブル「くくく、パパの友達がその理事長だね」三人「ええー？」

(1007)

日が明ける頃には、作戦の内容がほぼ決まつた。環太平洋電波望遠鏡でエイリアンを可視化するためには、その観測圏内にエイリアンを誘導しなければならぬ。さらに、多面照射で全貌を可視化するためには、宇宙空間まで上昇しなければならぬ。クサヨシ「しかし、そこまで達成する必要も実はない」

(1008)

ガンバールの目的は、地球侵略を企むエイリアンに一矢むくいることだ。ノルコにちよっかいを出しているミギノウエは、おそらくエイリアン達を作った実体端末か、すでに洗脳支配した地球人かのどちらかだろう。そのミギノウエに対して何からのアクションを起こせば、それだけでもガンバールの目的は一応達成できることになる。

(1009)

クサヨシ「まずは、ミギノウエに直接会って正体を暴く。これをミニナム・ミッション（最低限の達成目標）とする」そしてそのミッションを任せられるのは彼しかない。アフレル「僕が明日、ご挨拶に向かいますよ」 イイズカ「エイリアン漬けを持っていくといい」 ハツブル「いいイヤがらせダ！」

(1010)

クサヨシ「次に、ガンバールを出撃させ、無事に太平洋を一周して帰ってくる。これをフル・ミッション（達成目標の完遂）とする」ガンバールは未だ一度も出撃したことがない。無事行つて帰ってくる事が出来れば、それはそれで凄いことである。クサヨシ「エイリアンが純エネルギー体として遍在しているなら、痕跡くらいは見つかるはずだ」

(1011)

クサヨシ「最後に、可能であればガンバールでエイリアン本体を鉄拳制裁する。そして、TPVNを使ってエイリアンの全貌を可視化し、人類にその存在を知らしめる。これをエクストラ・ミッション（ついでの達成目標）とする」 イイズカ「奴らがコソコソできないようにしてやるってわけだ」

(1012)

クサヨシ「が、このエクストラ・ミッションは困難を極めるだろう。エイリアンを発見した上で、太平洋上の50km程度の位置にまで誘導しなければならぬ」 アフレル「仮にそれが出来たとしても、現れたエイリアンをみんなが信じるかって問題もありますしね」 イイズカ「壮大な悪戯と思われるのがオチかもな」

(1013)

ハッブル「ま、それでもいいんジャーネー？」 クサヨシ「いずれにしろ、エイリアンにとっては痛烈なメッセージになるさ……。我々は、我々自身の主権を守るために、彼らの正体を暴くのだ」 そういつてクサヨシは腕時計を見た。朝の5時を回るところだ。クサヨシ「そろそろみんな、ログインした方がいい」

(1014)

4人はそれぞれ耳たぶを長クリックし、バイオツイッターにログインした。4人だけの孤独な場所が、瞬時にして世界中のツイッターで満たされる賑やかな場所になった。イイズカ「……なんでログオフしてたのかって質問がさっそく」 アフレル「どうしましょ」 クサヨシ「アッー！ なことをしていたとも言っておけ」 三人は口をそろえていった。三人「それはいやです！」

(1015)

ノルコは算数の授業を受けていた。得意科目の一つで、いつもならあつという間に過ぎてしまう時間なのに、ノルコの表情は今ひとつ冴えなかった。ノルコ(……ふう) ため息をつくもツイートにはならない。ノルコの視線はまっすぐヤマ才君の席に向けられていた。ヤマ才君は、今日はお休みだ。

(1016)

先日、山奥の岩の中からヤマ才君のお父さんが発見されたらしく、お母さんと二人で看病に行っているらしい。ノルコ(お父さん……無事に目を覚ますといいね) そしてまたため息を一つ。ノルコ(……聞きたいこと、沢山あったんだけど) そしてまたため息。ノルコ(……おうどん食べたい) ため息。

(1017)

今日の午後一時から、ミタ・セイ氏本人による法案説明がある。ノルコもそれに参加しなければならぬ。バイオツイッターによる通信会議なので、どこで何をしていてもかまわないのだが、一応ちゃんとした場所で議論に参加した方が良いということで、校長先生が特別に校長室を貸してくれることになっている。

(1018)

校長室には立派な木製の机と、真っ黒でツヤツヤした本革の椅子がある。高そうな花瓶とか絵とかも飾ってある。コーヒーサーバーもある。お茶も飲み放題。まさにいたれりつくせりだ。担任の先生と、校長先生と、お母さんが付き添ってくれるのだから、きつとも心配することはない……はずなのだが。

(1019)

ノルコ(なぜこの宇宙にはトイレというものが存在するのか?)
ノルコはトイレ法について考えに考え続けた結果、宇宙そのものの概念にまで思いを馳せるまでになっていた。今、ノルコの精神は、虚空の果てに宙ぶらりんだ。ノルコはチャイムがなったのにも気づかず、ぼんやりとしたままだった。

(1020)

ルイ「おいノル」 しかし返事がない。 ルイ「ノルコ？」
やっぱり返事がない。ルイ「飯の時間だぞ！ ノル！」 そう言われてお腹がグウとなり、ノルコは我に返った。ルイ「やっと気づいたか……そんなに考え込むなって、ほら、手洗いにいくぞ！」
ノルコはコクンと頷いて手洗い場へと向かった。

(1021)

ルイ「私は反対だな、トイレ法」 石鹸で手を洗っていると、突然ルイがそう言った。ルイ「昨日さ、気になってミタ・セイって人のこと調べてみたんだ。凄く……立派な人なんだろうけど、なんかこう……引つかかるんだ」 ひっかかる？ ルイ「上手くいえないんだけど、言うことが不自然でぎこちないんだよ」

(1022)

ルイ「法律うんぬんとかいう話だけじゃなくて、その法律作ったヤツの性格とかもきつと大事なことだと思うからさ、今日はノルコ、そこんとこちゃんと見ておいたほうがいいと思うぞ？」 ノルコはしばし洗う手を止めて考え、そしてルイに向かってコクリと頷いた。
そのとき。

(1023)

セイ「もつともな意見！ 岷音小学校の子供達はなんて聡明なんだろう。ねえ、先生！」 ノルコとルイがビツクリして振り向くと、そこには輝くようなグレーのスーツに身を包んだ男、ミタ・セイと明らかに狼狽した表情で、冷や汗をぬぐう校長先生の姿があった。ルイ「うえ！？ えええ！」

(1024)

コウチヨウ「……アワワ、なんと申してよいやら」 ルイ「む、むぐぐ……」 蛇口から流れる水の音だけが、ジャージャーとあたりを響いていた。セイ「いえいえ、良いんですよ、いきなり来たこっちの方が悪いんです。改めまして、私、ミタ・セイといいます。トイレ法の発案人の。今日はノルコさんにご挨拶に来たんですよ」

(1025)

ノルコはしばしセイの顔を見上げた。第一印象は「意外と子供っぽい」だった。社長というからには、もつと凄みのある人だと思っていた。しかし、今日の前にいる人は、ノルコから見て大人というよりは、むしろお兄さんといった印象だった。セイ「あ、どうぞどうぞ、手、洗っちゃってください」

(1026)

ノルコは会釈だけすると、せかせかと石鹸を洗い落とし、ハンカチで手を拭いた。コウチヨウ「セイさんは、こうしてわざわざ議員全員に会って回ってらっしゃるんだよ」 ノルコはセイと目を合わせると、今度は深々とお辞儀をした。セイ「確か君はいま、つぶやけない状態にあるんだっただね」 ノルコは頷いた。

(1027)

セイ「きつと、とても不便な思いをしているだろうね。でも必ず良くなる。大丈夫さ！」 そう言っただけでセイはニッコリと笑った。一

点の曇りもない、完璧なスマイルだった。そして握手を求めてきた。セイ「僕も、もっと世の中を良くしていけるよう頑張るからね」ノルコがその手をとると、セイはしっかりと握り返してきた。

(1028)

セイ「うん。まだ小学生だというのに、君はとてもしつかりした人だ。議員に選出された理由がわかる気がするよ」ノルコはブンブンと首を振った。謙遜したのだ。コウチヨウ「セイさんはとてもお忙しい。すぐ次に行かなければいけないんだ。今のうちに、何か聞いておきたいことがあるかい？」

(1029)

そこで校長先生はアツと口を塞いだ。コウチヨウ「ノルコ君、咳けないんだっけか……ごめんごめん」校長先生のウツカりは今に始まったことではないので、ノルコ達はウフフと笑ってやりすごした。ルイ「はいっ！ はいー！ ノルコに代わって質問していいですか！」セイ「おお、なんだい？」

(1030)

ルイ「今日の朝ごはんは何を食べたんですかっ？」セイ「ええ？」コウチヨウ「ちよっ、ルイ君?!」ルイ「え、いや……社長さんの朝ごはんってどんなかなーって、えへへ」ルイがそう言うのと、セイは笑った。セイ「ははは！ これは面白い質問だ。初めてされたよ、驚いた」

(1031)

セイ「パンとハムエッグとサラダだよ。普通だろ？」ルイ「奥さんの手作りなんですか？」セイ「いや、残念ながらまだ独身なんだよ。サラダは出来合いのものだけど、ハムエッグは自分で焼いたんだよ」その時、ノルコのアホ毛レーダーがピーンとバリ立ち

になった。ノルコ(どのように焼いたのです!?)

(1032)

朝から自分でハムエッグを焼く人となら、きつといい友達になれるとノルコは思った。少なくとも……そのときは。ルイ「料理が好きなんですか? うちのパパは独身時代、ずっとお店で食べてたつて」 セイ「僕も一人暮らしは長い方でね、でも外で食べるのはあまり好きじゃないんだ。食事は家でゆっくり取りたいタイプなんだよ」

(1033)

セイ「他に質問は無いのかな? 食事の話しかしてないけど」
ルイ「うーん……、えーと……、いえ、特に思いつきません!」
セイ「ははは、だいたい仕事のこととかで質問攻めにされちゃうんだけどね……。何だか気持ちになるよ。暇があるときに、またゆっくり話そうね! じゃあノルコさんはまた後ほど」

(1034)

セイは校長先生に案内されて、その場を去って行った。ノルコはその姿をしばし見送った。そして幾つかの視線に気づいた。ルイ「むっ?」 廊下の影からレイタを含む数人の男子がこっちを見ている。レイタ「……ノルコすげー、まじすげー!」 ユタカ「セイジカだ!」 コウ「モノホンだ!」

(1035)

ユウタ「おばさん、こんにちは！」　チカコ「あらユウタ君、こんにちは〜」　ユウタ「ホウ兄ちゃんのお見舞いにきました！　これ母さんから、皆で食べてください」　チカコ「あらありがとうございます。美味しそうなクッキーね。ホウなら部屋で寝てるわ。まだ熱が下がらないのよ」

(1036)

ユウタは以前、ツイーター協会の世話になっていた少年だ。彼は幼馴染の女の子が病死したことで深く傷つき、自分の殻に閉じこもってしまっていた。だが、ホウらの懸命な励ましとGPTLの恩恵により、少年は以前の快活さを取り戻したのだ。ユウタ「ホウ兄ちゃん、入るよ！」　ホウ「う、うーん……」

(1037)

思っていた以上に調子が悪そうなホウを見て、ユウタは心配になった。ユウタ「だ、大丈夫？」　ホウ「う、うう……え、エイリアン……」　ユウタ「エイドリアン？」　ホウ「の、ノルコ……エイドリアン……」　ユウタ「ほえ??」　ユウタはバイオツイーター経由でチカコに質問した。ユウタ「おばさん、大丈夫なの？」

(1038)

チカコ「お医者さんは『ホットケー!』って言ってたわー。GPTLを見すぎるとそうなっちゃうのよ」　ユウタ「そ、そうなの?」　ユウタは改めてホウの顔を見た。半分寝てて、半分起きてる。顔が少し赤くて目が半開きだ。ホウ「ば、僕は……大丈夫だ、ユウタ……君。そ、それより……それを……」

(1039)

ホウ「それを……ノルコ……に」　ホウが指差したのはGPTL装置だった。ユウタ「え、あれをノルコお姉ちゃんに？　でもお姉ちゃんは今……」　ホウ「し、知ってる……でも時間がない……投票前に……早く……うごっ、うごっ」　そこまで言うつとホウは、白目を向いて気絶してしまった。ユウタ「ホントに大丈夫なの？」

(1040)

ユウタはそのまましばし、ホウの寝姿を眺めていた。以前、ここで暮らしていたときも、こんな感じになったホウ兄ちゃんを何度か見たことがある。あれの重症バージョンと思っておけばいいのだろうか？　そう思いつつユウタは、部屋の隅に投げ捨てられてたGPTL装置を手に取った。ユウタ「あれ？　電源が入らないや」

(1041)

ホウが勝手に見ないよう、チカコが電池を抜いてしまったのだ。単3電池が4本必要だが、近くで手に入るだろうか？　ユウタはしばしGPTL装置を眺め、これが僕を救ってくれた装置なのだと思うってしみじみした。ユウタ「うんっ」　ユウタはGPTL装置をランドセルに入れると、ホウの部屋を抜け出した。

(1042)

セイ氏による法案説明は30分ほどで終了した。彼が起稿した法案は、先々に起るかもしれない問題にも対応できるよう、綿密に練られたもので、もはや質問の余地もないくらい丁寧かつ簡潔な説明がされた。彼が事前に全議員を訪問したことで、殆どの議員がすでに十分な知見を得ていたのだった。

(1043)

さんざん気を揉んだ割りに、あっさり終了してしまい、ノルコは拍子抜けしてしまった。さらにセイ氏が自分を訪問してきたのが、一番最後だったことを後で知って、少なからず腹が立っていた。ルイ「んー、まあでも、校長先生の椅子に座れたんだか良かったじゃんっ」 ノルコ（それでも、腑に落ちない……）

（1044）

ノルコはこのイライラ、憤りをルイに打ち明けたかった。いつそログオフして喋ってしまおうかとも思った。でもグツと胸の内に押さえ込んだ。いまはまだ、口を開く時ではないのだ。そうノルコの直感が告げている。ルイ「明日は本会議だな。応援してるからな！」

（1045）

ノルコは家の前でルイと別れた。ルイは何度も振り返って、ノルコに手を振ってくれた。物心ついた時から一緒にいる、唯一無二のお友達。男勝りで、喧嘩っ早くて、けれども情に厚くて、仲間思いで。思ったことを率直に包み隠さず話してくれるルイの存在を、ノルコは改めてかけがえの無いものだと感じた。

（1046）

ノルコは部屋に戻るとさっそくゲンお爺さんのPCを開いた。そして起動を待っている間に、セイさんが今朝作ったというハムエッグについて調べてみた。出来上がった現物を見ることは流石に無理だろうが、セイさんの家のコンロのログを調べれば、焼き加減くらいわかるはずだ。ノルコ（……恐ろしい世の中！）

（1047）

朝6時30分。コンロに最初の火が入っている。なかなか早起きだなとノルコは思った。火加減は最強で、おそらくフライパンを温めるためだ。ほぼ同時に、コーヒーマーカーのスイッチも入れられ

ている。冷蔵庫からつぶやきマートのサラダが取り出されている。
ノルコ（シンプルだけど凝ってるな）

（1048）

続いて、デンデン牧場のハムが取り出され、フライパンに投入された。その32秒後に火が少し弱められ、ここで卵が一個投入されている。ノルコ（火が強すぎる！） ノルコ（感覚ではこの火加減は、両面焼きの目玉焼きを作る時にしか考えられないものだ。そして両面焼きはノルコの好くところではない。

（1049）

凝った食材が使われているけど、どこか雑な印象を受ける焼き方……それがノルコの感じるところだ。ノルコ（男の人の料理ってこんなものなのかな？） そう思おうとしたノルコに、さらに驚愕の事実が突きつけられた。ノルコ（……どういう、こと？） その後コンロの火が突然切られ、20分以上もそのまま放置されたのだ。

（1050）

ノルコは途方に暮れてしまった。料理を途中で、しかもタイミンが命の卵料理を放り出して、このミタ・セイという人は一体どこへ行ってしまったのか？ ノルコはゲンお爺さんのPCがとっくに起動していることも忘れて、ミタ邸のTL情報を引っ掻き回した。まるで、おもちゃの家をひっくり返すがごとく。

（1051）

驚くべきことに、コンロの火が切られた20分の間、セイ氏の行動記録はどこにも残っていなかった。20分後にキッチンに戻ってきて、申し訳程度にハムエッグを温めて、その後はリビングでテレビを見たりしていたようだけど……。ノルコ（どこに消えたのか……あ！） ノルコの頭に、電球が閃いた。

(1052)

ノルコ(トイレだ!) 家の中において、一切の行動記録を残さず
に過ごせる空間。それはトイレしかない。行動記録が残っていない
ということ、逆にトイレに入っていたことがバレバレになる事
実は、なんとも皮肉だ。ノルコ(お腹の具合が悪くなったの?……
じゃあ仕方が無いか) しかし、まだ何となく引っかかる。

(1053)

20分は流石に長くないか? お父さんだって、いくら調子が悪
くても10分くらいで出てくる。ノルコ(なにしてたんだろ……)
もしかして、ノルコの想像が及ばないような事をしていたのだろ
うか? だとしたらこのミタ・セイという人物、かなり怪しい。ノ
ルコはさらに、前日の記録も調べてみた。

(1054)

すると、ある事実が浮かび上がってきた。セイ氏は、ほぼ毎朝と
言っているほど、トイレに長時間籠っているのだ。しかも決まって、
朝食の準備をしている時にもよおすらしい。ノルコ(……やめよう)
流石にノルコはそう思った。いくら相互監視が認められるとは
いえ、これ以上深く追求するのはどうかと。

(1055)

しかし改めて思い知らされた部分もある。誰かがその気になれば、
ノルコの生活だってほぼ全て丸裸にされてしまうのだ。トイレにも
おちおち長居できない。もっとも、ノルコのような美少女はウコ
なんてしないわけだが……。ノルコは気を取り直して、ゲンお爺さ
んのPC宛に來たりプライに目を通し始めた。

(1056)

アフレル「ここか……」 アフレルは赤坂にいた。建物が込み入っていて、地形の起伏もあって、なんだかゴチャゴチャした印象を受ける場所だ。ミギノウエの住居は、4階建てのこじんまりとしたマンションだった。アフレルはお土産のエイリアン漬けを握り締め、意を決してエントランスに入った。

(1057)

インターフォンなどという前時代的なものはない。アフレルはミギノウエにリプライした。アフレル「ごめんください」 やや、間を置いて返事が来た。ミギノウエ「はい、どちらさまで？」 アフレル「ノルコとワクの父のアフレルです。子供らがお世話になってるようなので、ご挨拶にきました」

(1058)

すぐにロックが解除され、アフレルは部屋に通された。ミギノウエ「これはわざわざ……。ご覧の通り、お客をもてなす部屋もないものですから」 アフレル「いえいえ、長居はしませんので。これ、つまらないものですが」と言っただけでエイリアン漬けを渡すアフレル。ミギノウエは少し困ったようにまばたきをした。

(1059)

彼の住居は1Kで、おそらく10畳もないだろう。玄関にいながら部屋の中が丸見えだった。部屋はこの上なく閑散としていて、絨毯とコタツとタンスしかなかった。生活感がまるでなく、窓は分厚い遮光カーテンでさえぎられている。アフレル「お一人で暮らしているんですか？」 ミギノウエ「ええ、そうです」

(1060)

ミギノウエ本人の容貌は、初老の男性といった風情だった。髪には白髪が混ざり、丸メガネをかけており、ボヤっとした印象を受ける。しかしまだ30代なのだ。アフレル「ゲンお爺さんと知り合いだったとか？」 ミギノウエ「ええ、懐かしいですねえ。よく色々なことを教えていただきましたよ」

(1061)

アフレル「生前はお世話になりました」 ミギノウエ「いえいえ、こちらこそ。この間いきなりゲンさんが咳かれた時はビックリしましたよ。娘さんなんですよ？」 アフレル「ええ、僕の娘がやったことなんです」 ミギノウエ「ええ……いやあ、すっかりアフレルさんにご挨拶するのを忘れてて、申し訳ないです」

(1062)

まったくだ。とアフレルは思ったが、胸のうちに留めた。そして話題を切り替えた。アフレル「お仕事はプログラマーをしておられるとか」 ミギノウエ「ええ。といっても在宅ですが」 アフレル「在宅？ ここで仕事をしているんですか？」 そしてチラと部屋を見た。仕事道具のようなものは一切ない。

(1063)

ミギノウエ「はは、仕事場には見えませんよね。でも、僕らの仕事は殆ど道具を必要としませんから」 アフレル「そうなんですか……」 バイオツッターに開発ソフトを直接組み込んでプログラミングするので、現代のプログラマーが情報機器に触れることは殆どない。

(1064)

ミギノウエ「僕らの職業はよく魔法使いに例えられますね。実際こんな何も無い部屋で黙々とアプリを操作している姿は、何か魔術的な儀式をしているようにも見えるでしょう」 アフレル「ふむふむ」 必要なのは道具ではなく知識だということだ。クサヨシさんもそんなふうにはエイリアン発見器を作ったのかなとアフレルは思った。

(1065)

アフレル「ここでの暮らしは長いんですか？」 そう聞くと、ミギノウエは一瞬考え込んだ。アフレルがこの質問した目的はそれとなく「実家はどこか」と聞きたためだ。まさか「実家はなんと星雲のうんたか星です」とは言っていないだろうけど。ミギノウエ「大学を出てからずっとです。僕は早くに親を亡くしたもので……」

(1066)

アフレル「えっ？」 予想外の返答だった。アフレルは、もっと彼の身の上について調べてくれば良かったと思った。その気になれば、役所のTLを通じて、明治の初め頃まで家系を辿れるはずなのだ。ミギノウエ「母は僕を産んだとき40を過ぎていて、僕が16のときに病気で……」 アフレル「ああ……」

(1067)

ミギノウエ「父は僕が物心つく前に亡くなったらしいのですが、母は最後までその死因を教えてくださいませんか」 アフレル「調べることができなかつたんですか？」 ミギノウエ「ええ、父はツイッターを入れていながつたんです。もちろん父の両親も」 アフレル「そうだつたんですか……」

(1068)

「ご親戚は？」 とアフレルは聞きたかつたが、話しぶりからして、

おそらく居ないか疎遠であるかのいずれかだろう。ミギノウエ「でも、良い世の中ですよ。血縁を失っても孤独になることがないんですから」 アフレル「え？」 ミギノウエ「部屋から一歩もでなくても、友達100人つくれるんですからね」

(1069)

その100人のなかに、ノルコとワクも含まれるのだろう。今の世の中、孤独になることほど難しいことはないのだ。ミギノウエ「だから全然寂しかったりはしないんですよ？」 そう言ってミギノウエはニコリと笑った。アフレルも引つ張られるようにして笑った。ぎこちなく笑った。

(1070)

その後アフレルは、どうでも良いような話題でしばし話し込み、握手までしてミギノウエの部屋からおいとましました。アフレル「……とてちてたー」 アフレルは思考を整理するために、近くのコーヒーストップに入った。そしてシナモンロールとキャラメルラテを注文した。カロリー警告を受けたが無視して席についた。

(1071)

アフレル「いま、僕の脳はブドウ糖に飢えている……」 アフレルはひとしきりシナモンロールをモグモグし、キャラメルラテで流し込んだ。だいぶ血糖値があがってきて、停滞ぎみだった脳回路がぐんぐんと回転数を上げていった。アフレル「結論から言おう、ミギノウエは宇宙人であっても『おかしくない』」

(1072)

早くに両親を亡くして、若くして白髪頭になった人のことを、エイリアンだと疑うことはあんまりではないか？ アフレルはそう思っていたが、シナモンロールを食べたことにより考えを変えた。ア

フレル（あの人のことを、可愛そうな人だと決め付ける権利は誰も無い！） ゆえに宇宙人と疑うことに問題などない。

（1073）

アフレル（それに、こんなに綺麗さっぱり親戚関係の無い人はそうそういない！） それこそまるで、エイリアン達が自分の都合のために、お役所のデータを改ざんしたのではないか思われるほどに、彼の4親等以上の人とつながりが、綺麗さっぱりないのだった。アフレル（かといって宇宙人と決まったわけではないんだけど……）

（1074）

なにか地球人らしからぬ行動でもしていれば、まだ宇宙人と疑う余地もあるのだけれど。アフレル（うーん……） アフレルはミギノウ工氏のことをよくよく思い起こした。なにか変な所はなかっただろうか。地球人らしからぬような、人間らしからぬような……、はたまた生物らしからぬような……何か。

（1075）

人間に必要なもの……衣・食・住。ミギノウ工氏の部屋にあったものは、絨毯とタンスとコタツ。キッチンも使われた痕跡がなく、綺麗なものだった。そういえばゴミ箱も無かった。ちょっとそれは人間らしからぬことではなかるうか？ 生きていけば、何かしら廃棄物が出るものだ。

（1076）

アフレル（どこで食事をとってるんだらう？） そう思って調べてみると、行き着けのパン屋があることがわかった。そこで朝と晩にベーグルを一個買って、近くの公園で食べるらしい。アフレル（……すごい小食な人だ） そして変わった人だ。排泄物の量も、きつと少ないに違いない。

(1077)

アフレル(何とかして調べられないかな……) はしたないとはい
思いつつ、アフレルはその方法を探った。そして水道局のＴＬにア
クセスし、ミギノウエの部屋の下水道使用量を調べた。異常な数値
ではなかった。しかし。アフレル(上水道使用量とぴったり一致し
ている……!) アフレルは思わず立ち上がった。

(1078)

キャラメルラテを飲み干すと、アフレルはミギノウエがいつも食
事を取る公園へと向かった。そしてそこで夕方５時まで待った。
やがてミギノウエがベールを持ってやってきた。ミギノウエ「あ
あ、いたんですか」 アフレルは腹を決めて言う。アフレル「ミギ
ノウエさん、あなたは宇宙人ですね」 彼はにべもなく……。ミギ
ノウエ「バレましたか」 と言った。

(1079)

ミギノウエはベーグルを袋から取り出すと、自分では食べずに、ベンチの下に置いた。どこからともなくニャーニャーと猫が集まってきた。パクパクとベーグルを食べ始めた。アフレル「シユールだ……」ミギノウエ「この子達は我々の忠実なサーヴァントです」アフレルは気が遠くなってきた。

(1080)

アフレル「宇宙人は食事をとらないの？」ミギノウエ「いえ、とろろと思えばとれます。この体は人間とまったく同じように機能させることができる。しかし我々は本来、この星にいてはならない者。エントロピーへの影響を可能な限り少なくするため、食事はとるふりだけしています。排泄もしません」

(1081)

アフレル「でも、僕の子供達にはちよっかいを出している。ゲンお爺さんにだって」ミギノウエ「人類を滅ぼすわけにはいきませんからね」アフレル「いまなんて？」アフレルは耳を疑った。アフレル「人類が滅ぶ？」ミギノウエ「はい。トイレ法が可決されれば人類は滅亡します」そんなバカな。

(1082)

ミギノウエの言うことはまったくもって不可解だったが、アフレルが我慢してその言葉を飲み込み、さらに質問を返した。アフレル「じゃ、じゃあ、法律を作ろうとしている人を何とかすれば良いんじゃないの？」ミギノウエ「いいえ、一度法案を提起させた上で否決する必要があるのです」なぜに？

(1083)

ミギノウエ「今、ミタ・セイ氏の活動を制限することは可能です。しかしそれではいずれ、トイレ法を考え付き、実行しようとする者が現れる。トイレ法という概念そのものが否定されなにかぎりはねアフレル「うむむ、でも仮にノルコが反対したとしても、否決される保障は……」 ミギノウエ「明日になればわかりますよ」

(1084)

ミギノウエ「ここから先は独り言になります。聞きたければ聞いてください」 そう前置きして、ミギノウエは語り始めた。ミギノウエ「この宇宙の彼方に、地球と良く似た青い星があったんです。そこでは生命が繁栄し、やがて発達した中枢神経を持つ8本足の生物が、その星を支配するようになりました」

(1085)

ミギノウエ「8本足の生物達は宇宙の物理法則を学び、高度な通信手段を発明しました。それはちょうど、この星のバイオツイッターと良く似たものだったんです。8本足の生物は、やがて全ての情報を共有しあうまでになりました。それこそ、誰がいつどれだけ排泄行為をしたか、ということまでも」

(1086)

ミギノウエ「さら8本足の生物は、自分達の肉体の限界さえ乗り越えようとなりました。彼らはさらに宇宙の物理法則を学び、ついに自らの精神を『光そのも』に変えることに成功しました。そして彼らは光の波となって、大宇宙に飛び出したのです。長い、長い旅がはじまりました」

(1087)

ミギノウエ「数億年の時が流れました。しかしある日のこと、8本足の生物だった者達は重大な事実に気づいたのです。彼らはあまりに情報を共有しすぎたために、誰が誰なのかがわからなくなってしまうていたのです。自分と他者を区別することが出来ない状況に陥ってしまったことを知り、彼らは戦慄しました」

(1088)

ミギノウエ「彼らは何としてでも『他者』を取り戻したいと考えました。しかし、あまりにも情報が共有化されてしまったので、もはや彼ら自身の力だけでは『他者』を作り出すことが出来なくなっていたのです。残る道は一つしかありませんでした。そう、自分達以外の文化的生命を発見することです」

(1089)

ミギノウエ「さらに長い時を彷徨いつづけ、彼らはとうとう、自分達のふるさとと良く似た、生命あふれる星を発見したのです。それがここ地球でした。しかしその時はまだ、地球には知的生命と呼べるものは存在しませんでした。彼らは、この星に知的生命が育まれることを祈りつつ、その時が来るのを待ちました」

(1090)

ミギノウエ「やがてアフリカの奥深くの森から、二足歩行をするサル的一种が旅立ちました。サル達が道具を使用し、壁画を描き、火を操るようになったその時、彼らの喜びは最高潮に達しました。そこには夢にまで見た『対話可能な他者』がいたのですから。しかしまだ、一方的に監視するだけの状態でしたが」

(1091)

ミギノウエ「もと8本足の生物達、彼らが最も恐れたこと、そして今も恐れ続けていることがあります。それは、人類が自分達と同

じ過ちを犯し、『他者』を失ってしまうのではないかということ
です。それは文化的生命としての『滅亡』と同義であることを、彼ら
は身を持って知っているのです」

(1092)

ミギノウエ「ゆえに、今は光と化した8本足の生物達は、人類が
自分達のようにならないよう、最低限の干渉をおこないながら、人
類が自分達と対等に向き合えるようになるまで見守ろうと、決心し
たのです。本来ならばその時が来るのは、もっとずっと先のことに
なるはずでした」

(1093)

ミギノウエ「しかし、彼らは少しお節介が過ぎたようです。しか
も彼らと人類の間に、子供まで出来てしまいました。その子を通し
て少しずつ彼らの存在感が漏れ出してゆき、そして先日、一人の少
女の部屋ＴＬが壊れていたことがきっかけで、とうとう自分達の正
体を隠し通すことが出来なくなってしまうたのです」

(1094)

ミギノウエ「その時点で、僕たちは詰んだのです」 アフレル「
……………」

(1095)

ずっと三人称複数で語っていたミギノウエは、最後に一人称複数
で物語を結んだ。アフレル「その…………少女の部屋ＴＬというは、ノ
ルコの部屋のＴＬのことなんですね」 ミギノウエはただ黙ってう
なずいた。ミギノウエ「我々も、量子の世界までは観測できません。
まったくの不意打ちでした」

(1096)

そのまま二人は、しばし公園の真ん中で佇んでいた。お互い何を口に出していいかわからなかった。これから何がどうなるかは、それこそ『神のサイコロしだい』といったところだ。アフレルの中には、ミギノウエの話を信じるという選択も、信じないという選択もなかった。

(1097)

瞬間、アフレルの脳裏に疑問がよぎった。なぜ、ログオフもせずにこんな話を。だれが聞いているかわかったもんじやないのに。本当に自分達の存在を隠す気があるのか？アフレル(そうか……) 答えははっきりしていた。彼らはもう、全てをアフレル達に委ねたのだ。数億年の旅路の果てに見つけた、人類という名の『他者』に。

(1098)

アフレル「いまはまだ、何もいえません……」アフレルはミギノウエの目を見て言った。アフレル「あなたの話が、とても興味深いものだったという以外には」アフレルがそう言うと、ミギノウエは微かに笑った。ミギノウエ「明日になれば」アフレル「ええ、明日になれば」二人はそう確認し合った。

(1099)

ゲンお爺さんのフォローさんは、どうしてこんなに政治のことに詳しいんだろう？ ノルコはPC画面の眺めながらそう思っていた。明日、本会議があるかと思うと、ソワソワしてしまって夕食もろくに喉を通らなかった。お風呂もさっさとすませてしまった。ノルコ(……ソワソワ)

(1100)

ゲンお爺さんのPCには、もちろんご高齢の人からのリプライが来る。それに対し、ノルコに直接くるリプライは若い人からのものが多い。その二つを見比べる中で、ノルコはある疑問を抱くようになっていた。ノルコ(……昔はバイオツイッターなんてなかった)その当時と現在とを比べて、どちらがどれだけ幸せなのだろうか。

(1101)

ノルコの指は自然とキーボードを叩いていた。リプライ先はクメゾウお爺さん。バイオツイッターが無かった時代を知っている人だ。ゲン「お爺ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるの」返事はすぐに来た。クメゾウ「なんぞお？」ノルコはクメゾウに、当時のことを教えてほしいとリプライした。

(1102)

クメゾウ「ワシらが小さかったころは、部屋下しつける習慣もなかったなあ」クメゾウは当時のことを思い起こしつつ、ノルコに語って聞かせた。バイオツイッターの黎明期は、まさに混沌の時代だったのだ。クメゾウ「むしろ、部屋に下しつけとるもんは、変な奴と思われたくらいであった」

(1103)

ゲン「なくても不便なかった」クメゾウ「いやあ、あればあったで便利なもんだったがな。物なくしても、クリック一つで見つけられたし」ノルコ「はじめは健忘症の人が使った」クメゾウ「よく知つとるの！」部屋ＴＬは当初、部屋ログと呼ばれる生活支援ツールであつて、監視装置ではなかったのだ。

(1104)

クメゾウ「しかしだんだんとな、部屋ＴＬの推進派が出ばつてきたのだ。情報化の流れという奴じゃ。ゲン爺さんも良く言つたが、世の中は『どんどん秘密がなくなる』方向に動いていくらしい。世の中のことは何でも知りたい、知つて自分で制御できるようしとかならん、人間うちゅうもんは、そう思う生きもんらしい」

(1105)

ゲン「秘密がどんどんなくなる」クメゾウ「そう。だがな、皮肉なことに全部をわかる人間はどこにもおらん。何故だかわかるか？」ノルコは3秒ほど考えて言った。ノルコ「知ることが多すぎる」クメゾウ「そうじゃ。秘密がなくなるほど、知れることになる。だから結局、本当のことはわからずじまいだ」

(1106)

クメゾウ「部屋ＴＬのことにせよ、それが本当に良いもんかどうか、誰も答えをもつておらんかった」ゲン「フキユウしたのは結果として」クメゾウ「然り」ゲン「トイレ法もそうなる？」クメゾウ「なきにしもあらずじゃ」ゲン「はたしてそれでよいのか」クメゾウ「どうだろうなー」

(1107)

結局、最後は『気分』の問題になるのだろうか？ そうノルコは思った。トイレにＴＬをつけて監視した方が、みんなは気分が良くなるだろうか？ 良くなる人もいるだろうし、悪くなるひともいるだろう。でも、ノルコ自身は嫌だった。ゲン「部屋ＴＬなかったころと今と、何か違う？ 気分とか」

(1108)

クメゾウ「どうかの、あんまり変わらんきがするが……。むしろバアさんの愚痴がいつでもどこでも……。ブベシッ！」 ウメナお姉さんに殴られたらしい。ウメナ「ノルコ！ こんなジジイの言うことあてにすんじゃないよ！」 クメゾウ「な、なに言うか！ せつかく孫に高尚な話を聞かせるチャンスだに……。うわなにするやめ！」

(1109)

ウメナ「ふう……。ようやく静かになったかい」 ゲン「ケンカはダメ」 ウメナ「喧嘩するほど仲がいいんだよ！ って、昔の話してたのかい？ 昔と今とどっちが便利かっていやあ、やっぱり今の方が断然いいね。買い物とかも楽し、金がなくて飢える人もいなくなっただしね」

(1110)

ゲン「昔はお金があった」 ウメナ「そ、お金。昔はみんなそれを使って買い物してた。今はお金の代わりにログを残す。そして、そのログを皆で監視する。誰かが必要外に買い占めて、世の中がかしくなっちまわないようにね。そういう意味じゃ、相互監視するのは便利なもんだ。それをトイレにまで使っていいかはわからないけどね」

(1111)

ゲン「犯罪も少なくなった」 ウメナ「ああ、そうさね。昔はお

ちおち外も歩けなかった。特に、30年代の経済がひどかった時代は『暗黒の時代』って言われてね。ある国では、生き延びるために人の肉まで食ったって話だ。ひどい時代だったのさ」 ゲン「人の肉」 ウメナ「いまじゃ考えられないけどね」

(1112)

ウメナ「昔は良かったのに……なんていう連中もいるが、あたしやそうは思わないね。明日ってのは昨日より良くなってるものじゃなきゃダメなんだ。そうじゃなきゃ救いがない。昔は良かったなんて寝言いつてる暇があったら、少しでも明日を良くする努力をしなきゃいけない。違うかい？」

(1113)

ゲン「ちがわない」 ウメナ「だから昔と今、どっちがいいかって聞かれたら、あたしは今だって答える。絶対にね」 ゲン「ポジティブ」 ウメナ「そうさね、ネガティブになるのは決まって男どもだからね。女は黙って胸をはる。胸は無くとも胸をはる！」 ノルコは、胸だけはウメナ姉さんに似ませんようにと思った。

(1114)

ウメナ「まあしかし、たまには昔のことをを思い出すのもいいもんだ。勉強になるからね」 ゲン「部屋ＴＬに反対していた人はどうなったの」 ウメナ「あたしはその反対していた人なんだよ」 ゲン「そうなの？」 ウメナ「そう。人様に自分の生活覗かれるなんて、まっぴらごめんだったださ」

(1115)

ウメナ「だからあたしは、結婚するまで部屋にＴＬはつけなかった。どんなに嫌がらせのリップライが来ても、絶対につけるもんかって突っ張ってたんだよ」 ゲン「ふむふむ」 ウメナ「でもね、う

ちのアホ爺さんはもうバリバリ使ってたね。否応なしさ。一緒に住んでるんだから、使わないわけにはいかなかった」

(1116)

ウメナ「さつき爺さんも言ってたけど、やっぱり世の中は秘密をなくす方向に進んでるらしい。爺さんの使ってた部屋、全部捨てたかとも思ったけど、結局できなかった。そこまで旦那の生活破壊する権利は、あたしには無いって思ったんだ」　ゲン「我慢した」　ウメナ「ま、そういうことさ」

(1117)

ウメナ「でもな、最後まで反抗し続けたことの意味が無かったとも思わないんだよ。みんながみんな賛成賛成！　って突っ走ってたら、絶対世の中おかしいことになってたと思うしな。今でも常識としてあるだろう？　世の中には、あんまり自分の生活見せたくないって思ってる人もいるってことがさ」

(1118)

ウメナ「あたしは、そういう世間の常識の一部に、その時なれたんだと思ってる。いずれ賛成派に押しつけられる反対派にだって、その逆にだって、絶対になにかしらの意味があるんだ。あたしはそう思うね」　ゲン「とてもいい話」　ウメナ「爺さんの話よりよっぽどためになるだろ？」

(1119)

ゲン「おじいちゃんの話もちよっと面白かった」　ウメナ「そうかあ？　ノルコはいい子だなあ。こんな真面目に法律のこと考えてるしな」。大丈夫、ノルコならきつと世の中のためになる決断できる。自分を信じるんだよ」　ゲン「うん、がんばる」　ウメナ「そか、じゃあ今日はもう遅いから眠りな」

(1 1 2 0)

ゲン「まって、後一つきかせて」 ウメナ「ええ？ 一個だけなよるほーされてしまう」 ゲン「ウメナお姉さんとクメゾウお兄さんの、結婚のきっかけは？」 ウメナ「ほえ？」 この質問はいつかしてみたいと思っていた。表面上の二人の仲が、あまりにも良くないものだから。

(1 1 2 1)

ウメナ「うーん……、これまたちよつと長い話になるな」 ゲン「いいづらいこと」 ウメナ「そういうわけじゃないんだけど……まあいいか、ノルコももう大きくなったからな」 ゲン「??」 ウメナ「あたしらがくっ付いたきっかけはな……」 クメゾウ「ごほんつ、それはワシから話そう」

(1 1 2 2)

ウメナ「……生きてたんかい」 クメゾウ「当たり前じゃ！ ごほんつ。ワシらのなれそめ……それは二人が中学生の時までさかのぼる」 ゲン「そんなに」 ウメナ「ミチコ母さんがまだ存命だったころのことだよ」 ミチコ母さん……若くして亡くなった、ノルコの曾お婆ちゃん。写真でしか見たことの無い、麦藁帽子の女の人

(1 1 2 3)

クメゾウ「ワシらが13の時に、ミチコ母さんは危篤状態に陥った。ガンじゃった。病床で母さんはワシに言った。『お前の嫁の顔も見ずに、母さん死んじゃうんだね』とな。それでワシは、何とかして嫁の顔を見せてやりたくてな」 ゲン「……」 ノルコは、急激にこみ上げてくる愛惜の念に、思わず胸を抑えた。

(1 1 2 4)

クメゾウ「それで、これに頼み込んだんじゃ」 ウメナ「この人、あたしに土下座してきたんだよ。『一日でいい、嫁になってくれ！』ってね」 クメゾウ「まったくバカなことをした」 ウメナ「ほんとは、バカにもほどがあるよ」といって二人ともケラケラと笑った。ノルコもクスクスと笑った。

(1125)

ウメナ「それで、結局ウエディングドレス着て、ミチコ母さんの病室でプチ結婚式をあげる羽目になった」 クメゾウ「あの時は、切羽つまってたからの！」 ウメナ「ミチコ母さん、ウソの結婚式ってことはわかってたと思うんだけど、でも念押しちゃってね……。息子をよろしくって」

(1126)

クメゾウ「もう、あとには引けんかった……ガツクリ」 ウメナ「そういうことさノルコ、つまない話さっ」 ゲン「そんなことない」 ノルコにはその時の光景が目には浮かぶようだった。ゲン「ミチコ母さんは幸せだった」 クメゾウ「そうかのう……？」 ウメナ「だといいんだけどね」

(1127)

その後、夜の10時をまわってヨコによるほーされたノルコは、そのまま黙って布団に入った。しかし眠りはなかなか訪れなかった。ノルコ(……小鳥が一匹、小鳥が二匹……いや二羽か) 色んな人が頭のなかでつぶやいていて、まるでたくさん鳥達がピイピイさえずっているかのようにだった。

(1128)

いまノルコの頭の中は、多くの人々の思想に満ちている。たくさんの思いがぎゅちり詰め込まれている。何かをやりきったという充

実感があった。悔いのない決断を出来る自信もわいてきた。ノルコ
（眠らなきゃ）　そうしてノルコは目を閉じる。ミチコお母さんと
一度でいいからお話ししたかったな……。　眠る間際、ノルコはそう
思った。

(1129)

その夜。ホウ「う、うん……ううん」　ホウは布団の中で身悶えていた。部屋の中はもちろん真っ暗だ。しかしそこに……。ヤマオ「こんばんは、ホウさん」　ホウ「……う、はう」　ヤマオ「だからGPTLみちゃダメって言ったのに」　暗闇の中でほのかに光るヤマオの幻影が、そこにはあった。

(1130)

ホウの意識は朦朧としたままだ。しかし、朦朧としているなりに、彼はヤマオの言葉に返事をするのだった。ホウ「……僕達は……君達を……みつけた」　ヤマオ「うん。ノルコちゃんのパパ達が見つけた」　ホウ「あした……全てがきまる……」　ヤマオ「うん。人類のみんなと、僕のパパ達の未来がきまる」

(1131)

ホウ「ノルコは……GPTLを……みるだろうか」　ヤマオ「それは僕らにもわからない。光文明の計算では、全てはノルコちゃんの腹持ち次第で決まる。そういう結論が出ているんだ」　ホウ「少なくとも……彼女は知る権利が……ある。自分の身に……背負わされたものを……」　ヤマオ「そうかな？」

(1132)

ホウ「??」　ヤマオ「ノルコちゃんは、もうだいたい知っているかもしれない。地球に光文明という名のエイリアンがいることも、自分の決断次第で、人類の未来が変わるってことも」　ホウ「……それはどういう」　ヤマオ「そう考えること自体は簡単なことさ。小学生にだって出来る妄想だよ」

(1 1 3 3)

ヤマオ「未来を決める力は、全ての生命に与えられている。それが僕のパパ達、光文明が、長い旅路の果てにたどり着いた答え」

ホウ「……光文明も……万能ではない」 ヤマオ「そうだよ。全てを支配できる存在なんてない。パパ達は人類と友達になりたいだけ。ひどく回りくどいことをしているけど、もう大丈夫だと僕は思うんだけどな」

(1 1 3 4)

ホウ「……いや、まだ早い」 ヤマオ「そう？」 ホウ「……でも、僕と君とは友達だ……それで我慢しとくといいい」 ヤマオ「ふふ」 ホウがそう言うのと、ヤマオは心から嬉しそうに笑った。ヤマオ「ゆっくり休むといいいよ。もう二、三日はうなされるかもだけど」 そしてヤマオの幻影は、手を振りながら消えていった。

(1 1 3 5)

場所は変わってガンバル研究基地 クサヨシの自室。アフレル「あ、それポン」 イイズカ「ちっ！」 四人は雀卓を囲んでいた。アフレルは白と発をそろえて、役満の一手前だった。ハツブル「こわいこわい」 安パイが切られる。クサヨシ「リーチ」 翻る千点棒。アフレル「うわあ」 顔真っ赤のアフレル。

(1 1 3 6)

ミギノウエが99%宇宙人であることを理解した4人は、眠れぬ夜をやりすごすため、こうして麻雀で暇をつぶしているのだった。まさか夜中にガンバルを出撃させるわけにもいかない。明日の朝、基地の職員が出勤してくるまで待たなければならぬ。そして4人とも、今夜は寝るべきではないと、本能的に感じていた。

(1137)

クサヨシ「ツモ、リーチ一発」 アフレル&イズカ&ハッブル
「えー！」 クサヨシ「リータンピンドラドラ一発……ふっ」 負
けた3人はため息をつきつつ、雀牌を引っ掻き回していく。アフレ
ル「……もうちょっとだったのに」 ジャラジャラジャラジャラジ
ヤラジャラジャラ。

(1138)

ガンバールは今日一日で組み立てが終わって、滑走路始点のラン
チに格納されている。スイッチ一つでロケットスターターに火がつ
く状態だ。その後はメインウイングの複合サイクルジェットエンジ
ンでマツハ5まで加速。9時に発進して、昼すぎには太平洋を一周
して戻ってくる予定だ。

(1139)

イズカ「パイロットは誰になるんだろっな……」 イイズカが
ポツリ呟く。ガンバールのパイロットは敵が発見され次第決められ
る。その時点で準備の出来ているガンバールプレイヤーの中で、成
績の良い順からお声がかかるのだ。もちろん拒否権もあるため、そ
の時が来るまでは、誰がパイロットになるかはわからない。

(1140)

クサヨシ「案外、アフレル君の息子さんだったりしてな」 アフ
レル「え、まさか」 イイズカ「いや、でも最近ずっとランキング
上位にいるんだぞ、ワク君」 アフレル「そうなの？」 イイズカ
「知らなかったのか？」 ハッブル「くーくっく、このごろ忙しか
つたからね」 アフレル「うっう……」

(1141)

クサヨシ「実際、ワク君が選ばれればやりやすくなるな。身内の

者の方が、色々と指示を出しやすい」 アフレル「……そうですね」
と」 しかしそんなに都合よく、物事は進まないはずだが……そう
思いつつアフレルが手牌をそろえていると。

(1 1 4 2)

アフレル「あ……」 イイズカ「どうした？ お前が親だぞ」

アフレルは変な汗をかきはじめた。ハツブル「テンホーだったりして」 アフレルはあたりをキョロキョロみまわし、それから自分でも信じられないといった様子で、手牌を倒した。クサヨシ「こ、これは！」 国土無双天和…… 問答無用のW役満だった。

(1 1 4 3)

アフレル「つ、積み込みなんてテク、僕にはできませんよ?!」

イイズカ「うむむ……でもこりゃあ、偶然とは思えねえぞ」 ハ

ツブル「ゴクリ……」 クサヨシはしばし黙り込み、アゴをさすりつつ考え込んだ。クサヨシ「……はたして」 その時、なんだかあたりがキラキラして、四人とも目をこすった。

(1 1 4 4)

さまざまな人の、さまざまな思いが交錯する夜。エイリアンは自分達の正体を明かすための心の準備をし、ツイッター上ではトイレ法案成立にむけた最終調整が進めら、ガンバール研究基地では黒金の巨神が発進のときを静かに待っている。そして子供達は安らかな眠りのなかで、めくるめく夢を見続けていた。

(1 1 4 5)

翌朝 4時50分。ノルコの家の前で、最初のスズメが「チュン」

と鳴いた。人類の命運をかけた一日が、静かに開けようとしていた。

ノルコ（むにゃむにゃ……おばあちゃん）

(1146)

ユウタ「……ハア、ハア、急がないと」朝、8時30分。ユウタ少年は呟音小学校に向かって走っていた。通っている学校は違う学区なのだが、ノルコにGPTLを届けるために、後で叱られることを覚悟で向かっているのだ。ユウタ「ホウ兄ちゃん……必ずとどけるからね！」

(1147)

そのころ、ノルコはいつもより早く登校して、校長室の机にスタンバイしていた。国会は9時に開会する。ノルコ（ふむふむ……）ノルコはWEB新聞に目を通しつつ、お茶をひとすすり。ノルコ（もう可決したようなものなの……）政治欄の記事によれば、トイレ法は賛成派が圧倒的優位であるらしい。

(1148)

ノルコ（ちゃんと反対ですって記者さんに言ったんだけどな）ノルコも政治記者に質問されていて、その時はつきりと反対した。理由は「美少女はウコしないから」というもの。なら別にいいんじゃない？ という記者のツッコミに、ノルコはゲンのPCを使っ
てこう言ったのだ。ゲン「デリカシーって大事です！」

(1149)

散々悩んだ末の、ノルコなりの結論だった。ノルコは何があつてもこの持論を貫き通す決意を固めていた。ノルコ（……ん？DMだ！）誰からか？ユウタ「ノルコお姉ちゃん、今どこ?! 渡したいものがあるんだ!」なんだろう? そう思いつつノルコは、

校長室にいることをPCで教えた。

(1150)

しばらくして、校長室の窓を叩く音が聞こえた。ノルコが窓際に向かうと、外にユウタがいた。ユウタ《あけてー！》言われるまま窓を開ける。校長先生とお母さんは、おりよく席を外してる。ユウタ《お姉ちゃんこれ、ホウ兄ちゃんから預かってきたんだ》手渡されたGPTLをみて、ノルコは目をパチクリさせた。

(1151)

これを見ると？ ノルコは視線でそう伝える。ユウタ《うん、何だかとても大事なことみたいなんだ》ユウタの真剣な眼差しを確認したノルコは『ウム』と大げさに頷いた。それを見てホツとしたらしいユウタは、駆け足でその場をさっけていった。ノルコ(……たしか学区違ったはず、怒られないといいけど)

(1152)

お母さん達が戻ってきたので、ノルコはあわててGPTLをランドセルにしまった。コウチヨウ「さあ始まるよノルコ君」ヨコ「いよいよね」ノルコは本革の椅子に改めて座りなおすと、顔をピシヤンと叩いて気合を入れた。アナウンス【それではこれより、トイレ法案衆院議会を開会いたします】

(1153)

クサヨシ「ガンバール、発進！」世界中のガンバール好きが見守るなか、ガンバールのロケットスターターに火がついた。『うおおおおおお！』全世界がどよめく中、飛行体勢のガンバールが滑走路の上を力強く加速していく。マッハ0.4まで加速し、離陸、ついでメインエンジンが点火される。

(1 1 5 4)

イズカ「よし、まずはいい出だしだ」 アフレル「初めてなのに、スムーズに行きましたね！」 ハツブル「メカニズム自体はピュラーだからね」 アフレル達は管制室の一角につき、ガンバールの腕の動きをモニターしていた。イズカ「さ、ここからが本番だぞ」

(1 1 5 5)

三人は目で合図をとった。そして管制室の中ほどに仁王立ちしているクサヨシ司令官にむかってブロックサインを送る。クサヨシ「ん、んー」 クサヨシは襟を直すサインを返す。GOサインだ。アフレル(よし……) アフレルはポケットの中の機械に触れると、そっとスイッチを入れた。

(1 1 5 6)

ガンバールの右前腕部に取り付けられたレーダー波長が、クサヨシの「エイリアン発見器」と同期する。これにより、コツソリとエイリアンを搜索して、見つけ出すことができる。アフレル(ニセモノのエイリアンは用意してあるんだけど……) クサヨシ(実は本当に探してましたってオチだ)

(1 1 5 7)

そう。誰もこのミッションが「宇宙人搜索」を目的としているとは思っていないのだ。みんなクサヨシとその一味が画策した、壮大なサプライズパーティーだと思っている。ミギノウエとの接触に成功したことにより、アフレル達の目的は『エイリアンは見つけるが、それを人類に信じさせない』ということに変更されたのだ。

(1 1 5 8)

4人はもうすでに、エイリアンと遭遇を果たした。そしてそのこ

とを一生の秘密にすると彼らに約束したのだ。アフレル（まだ、僕達は、彼らと遭遇するべきじゃない……） 大変な秘密を抱え込んでしまったとアフレルは思った。と、同時に。生きているうちに宇宙人に会えたことを嬉しくも思っていた。

（ 1159 ）

全世界を巻き込んだこのサプライズに成功すれば、人類は今しばらくは宇宙人の存在を忘れられるだろう。空想上のもものとして認識してくれるだろう。アフレル（……あとは） それは最後の気がかりだった。アフレル（……ノルコか） 今、自分の娘に人類の未来がかかっている。父は祈るような思いでいた。

（ 1160 ）

バーチャル国会議事堂に、ミタ・セイの声が響く。彼はいま、トイレ法の意義についての演説を行っているところだ。セイ「数多くの要望があるにも関わらず！ トイレのみT.Lの設置を禁じている現在の法体制は、あきらかに不適切なものであると言わざるを得ません！」 セイが話しを区切る度に、賛成派から拍手が巻き起こる。

（ 1161 ）

セイ「我々は、進展し続ける情報社会において、安心安全な生活を場を守り続けていかなくはなりません！ 本法案が、そのための確実な足がかりとなることを、ここに強く信じるものであります！」

セイは演説を終えると、鳴り止まない拍手の中、ゆっくりと席についた。

（ 1162 ）

続いて、各派の代表者による代表質問が行われる。まずは賛成派からだ。代表のミタライ氏の姿が、バーチャル国会議事堂の壇上に

表示される。ミタライ「おほんつ、では賛成派を代表しまして、いくつか質問を述べさせてもらいます。まず、トイレ法の中身が、人々のプライバシーに与える影響について……」

(1163)

ノルコ(……ねむい) 賛成派の代表質問は、もうすでに何度も議論されたことを、もう一度質問しなおしているに過ぎなかった。そのままミタライ氏はたっぷり30分は演説を続けた。そしてセイは、それに対してわかりきっている返答を、これまたたっぷり30分はかけて行ったのだ。

(1164)

ノルコは何度も眠りの誘惑にかられたが、仮にも国会議員というプライドがそれを跳ね除けた。賛成派の意図はあきらかたで、トイレ法がいかに完璧に考えつくされたものであるか、というアピールに過ぎなかった。ノルコ(反論の余地がない!) そう、反対派にとっては、もうロクな質問が残されていない状況が作り出されたのだ。

(1165)

どうしてそんなにこの法律を通したいの? ノルコはその場で叫びたい衝動にかられた。ノルコ(お外で自由にトイレにいけなくなってしまうよ……) 賛成派の意見を何度聞いても、ノルコにとってその不安は払拭しきれないものだった。しかし、仮に声を上げたとしても、すぐさま論破されてしまうだろう。

(1166)

続いて反対派の代表質問が始まった。代表者はトガクレ氏。銀縁メガネがキラリと光る、いかにも知性的な中年男性だった。ハツと息を飲むような演説を、ノルコは期待した。トガクレ「では、ご質問いたします。まずはミタ・セイ氏の『トイレ観』についてお尋ね

します」「トイレ観……その質問の切り口に、ノルコは胸が高鳴っ
た。

(1167)

ガンバールは太平洋上1万キロメートルの高度を順調に飛行中だった。全てのシステムが問題なく作動している。現在の速度はマツハ5。これはエンジンの性能による制限ではなく、機体にかかる負荷による制限である。イズカ「現在のガンバールの装甲温度は摂氏750だ」

(1168)

メインウイング内の燃料だけで、太平洋を4分の3週できる。燃料が一定値を下回ると自動的にパージされ、メインウイングは洋上に着水し、後に回収されることとなる。だがエイリアンと会敵するまでは温存したいところだ。クサヨシ「反物質燃料の使用を許可する！」アメリカ西海岸に到達した時点で、クサヨシが指示をだした。

(1169)

メインエンジンに反物質が投入され、出力が一気に上昇する。「おおおおお！」光り輝く排気ジェットが、理論値通りの流線を描き、ガンバールは一気に最大速度マツハ6に到達した。アフレルは一時ノルコのTLを追うのを止めてまで、そのガンバールの姿に見入った。

(1170)

クサヨシは、管制室の全員がモニターに釘付けになっている隙に、ポケットの中の携帯端末を確認した。ガンバールのリーダーは、なにかエイリアンの痕跡を拾っているだろうか？クサヨシ(……変

化なし) 見つからなければそれでいい。すでにミニマムミッシヨンは達成しているのだから。

(1171)

と思ったその時。「なんだあれは!」「ま、まさか……本当にでたのか?!」「嘘だろ!?!」管制室がどよめいた。ガンバールからみて太平洋の中心側。そこに夥しい光の渦が発生したのだ。クサヨシ(なんだあれは……我々の予定にはないぞ) クサヨシはハッブルに視線を送る。TPVNが何かしたのかもかもしれない。

(1172)

ハッブル「……ナンテコッタ」ハッブルは目線で伝えてきた「まだ何もしていない」と。クサヨシ(つまりこれは……『彼ら』が自発的に姿を現したということか?) クサヨシはそう瞬時に判断すると、全体指令をだした。クサヨシ「反物質推進を中止しろ! 光の渦の正体を探る!」

(1173)

副指令「あれをエイリアンと認定するのかね?」クサヨシ「認定しだい、攻撃に移らねばならん。パイロットの選出をはじめよう」すぐさまパイロット選定プログラムが起動し、成績順に召集通知を送信していく。果たして最初に名乗りをあげるのは誰か? ワク「ゲッチュウ!」アフレル「わわわ、ワク?!」

(1174)

ワク「パパ! なにこれ? なんか召集きたよ!」アフレル「ワク……実はこれは、遊びじゃないんだ」ワク「エイリアンきたの? ねえ来たの?!」アフレル「まだわかんないけど、それっぽいんだ!」アフレルがそう言うのとワクは顔を真っ赤にして叫んだ。ワク「イエアアアアアアア!」

(1175)

一方、国会。トガクレ氏の代表質問は10分ほどで簡潔に終了した。その後の議事堂の雰囲気はまさに喧々諤々といった様相だった。トガクレ氏への野次・罵倒・批判の声のが数多く上がったが、一方でそれらの質問にセイ氏がどう答えるのかという好奇心も、その熱気の中に含まれていた。

(1176)

トガクレ氏の質問内容は三つ。まず一つは、セイ氏が幼少時に『トイレのぞき』の被害を受けていたことが事実かどうか。二つ目が、セイ氏の自宅トイレが『5重の隔壁』に囲まれている理由。三つ目が、セイ氏の会社である「さわやか日常」が開発している、トイレ監視プログラムの『特殊な秘匿性』についてだった。

(1177)

トガクレ「セイ氏が小学2年生の時、悪質な『トイレのぞき』の被害にあっていたことが、私どもの調べでわかっております。それが原因でセイ氏はトイレ恐怖症となり、自宅にある5重の隔壁を持ったトイレでしか用をたせなくなってしまうことは、世間に広く知られていることであります」

(1178)

ノルコ(そうだったのか……) セイが毎朝長時間トイレに籠っていた理由、それは下剤を用いた強制排便に時間がかかっていたためだった。ノルコ(……でもそんなことまで持ち出さなくても)

流石にこれは反感を買うだろう。ほとんど個人攻撃だと、反対派であるノルコでさえ、そう感じたものだった。しかし。

(1179)

トガクレ「セイ氏は、この過去のトラウマに対する執着から、本法案を成立させようとしているのではありませんか？ だとすればトイレ法は、きわめて私的な法律であると言わざるをえません！」
ここで遠雷のごときブーイングが上がったのだが。トガクレ「トイレ法の成立とはこのように、トイレの全てが明らかになることを意味するのです！」

(1180)

セイ氏は過去にトイレをのぞかれたことで、いわば排便恐怖症になつてしまつたのだ。しかし、トイレを覗かれることへのトラウマを持つセイ氏が、なぜあえてトイレ内の情報公開性を高めるような法案を推進するのか？ ノルコはセイ氏がどういう返答をするのか、注意深く見守つた。

(1181)

セイ「トガクレ氏の質問にお答えします。まず、第一の質問……」
セイ氏はそこで一呼吸おいた。セイ「私は、私自身の過去や、現在のトイレ事情をどんなに人に知られようと、一向に構いはいたしません！」 はつきりそう言い切つたセイ氏に、賛成派から感嘆のどよめきが上がつた。

(1182)

セイ「私が目指すものは、ひとえに社会生活の安心を守ることです。人は私心によつて幸福になることはありません。人は社会に貢献することによつてのみ承認され、そして意義ある人生を得ると確信しております。私心によつて法律を推進するものではないことを証明するために、私はまず自ら公衆トイレで用を足すことを、ここに宣言いたします！」

(1183)

なんと、セイ氏はトイレ法が可決されたあかつきには、まず自らＴＬが設置されたトイレで用を足そうというのだ。ノルコ（……恐ろしい決意だわ）その決意にノルコは感銘を通り越して恐怖すら覚えた。しかしその時、議事堂では賛成派によるスタンディングオベーションが起っていたのだ。

(1184)

トイレ法の成立直後は、恐らく公衆トイレに世界中の注目が集まるだろう。そんな中で、果たして人は、まともに用を足すことが出来るのか？ これは反対派のみならず、中間派の中でも深く首をもたげている懸案なのだ……。 「トイレ万歳！」 「人類みなトイレ！」 訳のわからない賛辞まで飛び交っている始末だった。

(1185)

セイ「第二の質問にお答えいたします。私めの自宅トイレが、なぜ5重の隔壁に囲まれているのかというご質問でした」 議事堂はいったん落ち着きを取り戻す。セイ「これはもちろん、私自身の都合によるものです。私は、自宅のトイレについては完全なプライバシーが保たれる必要があると考えております」

(1186)

セイ「公共のトイレにＴＬが設置されることにより、家庭のトイレにまでＴＬ設置の要望が出るのではないかとこの懸念が現在ございます。その懸念については、残念ながら法的に払拭することが困難です。なぜならば、法律は国家全体の空気まではコントロールできないからであります」

(1187)

セイ「よって、自宅トイレのプライバシーについては、我々国民一人一人が、日々の行いのうちに守っていく必要があります。私は

自らもそれを実践していく所存です」賛成派から再び喝采が巻き起こる。「反対派の意見はただの人格攻撃だ!」「そうだそうだ!」状況はさらに賛成派に傾いたようだ。

(1188)

ノルコ(……まず自ら実践する) ノルコは反対派ではあったが、セイ氏の言葉に胸を打たれてもいた。ノルコがトイレ法に反対する理由、思い起こしてみればそれは「デリカシーは大事だと思うから」というあいまいな私見。それは言ってみれば、ノルコ自身のわがままでしかないようだった。

(1189)

ノルコ(たくさんの人がトイレ法に賛成しているのなら、デリカシーが無いのはむしろ私の方になる……) デリカシー。直訳すると「心配り」。デリカシーが大事だというなら、ノルコは賛成する人達のトイレ観にも心を配らなければならない。ノルコ(私心を捨てる……みんなのために判断する……) 難しい問題だった。

(1190)

セイ「最後の質問にお答えいたします。私どもが運営します『さわやか日常』では、トイレTLを対象としたB・ソーシャル『トイレッター』を開発中です。トガクレ氏のご指摘の通り、『トイレッター』の管理プログラムは、現時点において達成しうる、最高の情報秘匿性を備えております」

(1191)

「それでどうする気だ!」「トイレを独占支配するつもりか!」
反対派から散発的な野次があがるも、セイ氏は気にせず続ける。

セイ「もちろんそれは、万が一不測の事態に陥った時の、緊急措置を可能にするためのものです。トイレTLそのもの情報を独占できるように仕様にはなっておりません」

(1192)

その後、セイ氏からトイレッターについての詳細な説明がなされた。どうやら宣伝もかねているらしい。説明によればトイレッターは、最寄のトイレの混雑度の把握、道順のナビゲーション、利用中のトイレTLを閲覧中の人のピックアップ機能、およびブロックング機能を兼ね備えた、トイレナビゲートツールであるらしい。

(1193)

これにより人々は、公衆トイレを利用しやすくなるだけでなく、自分がそのトイレを利用したことを『どれだけの人に知られたか?』ということまで知ることができる。そしてその一方で、自分がその情報を知ったということは誰にも知られることがない。たとえそれ

がトイレッターの開発者であつてもだ。ノルコ(……ややこしいわ！)

(1194)

セイ「このトイレッターの機能を活用することにより、トイレの使用者は、トイレを監視しようとする者よりも高次の監視能力で、相手を監視し返すことができます。その意味するところはつまり、トイレを監視しようという活動そのものの抑制効果です。このシステムによりトイレの公開性と秘匿性が両立されます」

(1195)

セイ氏はそれをもって返答を終え、席についた。議事堂内はしばらくざわめいていた。トイレッターの仕組みについて腑に落ちないといった表情の議員が、賛成派の中にも見受けられた。「それについていわゆる一方監視にならないか?」「いや、それともちよつと違うようだが」「ようわからんのだ」

(1196)

ノルコもしばし頭をひねってみたが、トイレッターの理屈は今ひとつわからなかった。ヨコ「ねえ、ノルコ」その時、ヨコが話しかけてきた。ヨコ「それつつまり、マジックミラーのことじゃないか? 外から内は見れないけれど、内から外は見えるマジックミラーで囲まれたトイレ」まさにその通りだった。

(1197)

ノルコ(お母さん頭いい!) ノルコは想像した。マジックミラーで囲まれたトイレのことを。確かに外からは中は見えないだろう。理屈ではわかつている。外の人にわかることは、誰がいつトイレに入つて出てきたかという情報のみ。逆に、トイレの中にいる人にとつては、誰がこつちを見ているかが丸わかりなわけだ……しかし。

(1198)

ノルコ(……そんな落ち着かないトイレってない!) ヨコ「あらどうしましょう。いっぱいリツイートされちゃったわ」 先ほどのヨコのツイートが一瞬にして100リツイートを超えた。議員の間でも読まれているようだ。ノルコはふとトガクレ氏の方を見る。それに気づいたトガクレは、満面の笑みを浮かべてノルコにグッドサインを送ってきた。

(1199)

セイの表情はかすかに強張っていた。最後の最後で墓穴を掘った形だ。議事堂にはいまだ微かな動揺が見られる。とはいえ、結果が引っくり返るほどのものではないだろう。セイ「TLの無いトイレだって残せるんだけどなあ……」 何気なく言い放たれたセイのツイートもまた、あつと言うまにリツイートされた。

(1200)

その発言により議事堂の空気はだいぶ落ち着きも取り戻した。「それもそうだな」「トイレTLを要望する人も多いんだしな」「みんなで良い雰囲気つくっていけば、きっと大丈夫さ」 どんどん膨らむ賛成意見。しかしノルコはまだ何か引っかかるものを感じていた。ノルコ(本当にTLの無いトイレを守りきれるだろうか?)

(1201)

部屋TLでさえ、必ず設置しなければならぬという不文律が出来る上がっているのだ。トイレに限って、TLなしが認められるかどうかは、正直怪しいところだ。ノルコ(……全てのトイレにTLがついてしまう可能性は……やっぱりある?) もしそうなった時、全てのトイレがマジックミラー張りになったとき。一体何がおこるのだろうか?

(1202)

ワク「ハイ！ マイシスター！」 ノルコ（うわ！） ノルコは突然のリプライに、座ったまま椅子から飛び上がった。ワク「今すぐこれ読んでお姉ちゃん！」 ワクから送られてきたのは、どうやらリストのようだった。ノルコ（中身はお父さんと……ミギノウエさん？

(1203)

ワク「このままじゃ人類が滅亡しちゃう！ 早く読んで、そしてみんなに伝えて！」 ノルコ（いったいなんなのか?!） ワク「僕は……僕はこれから戦わなきゃいけない。アイ・ファイト・エイリアン。もしかしたらこれが最後になるかもしれないから……」
なにやら悲壮感が漂っているが。

(1204)

ヨコ「わ、ワク？ 一体どうしちゃったの？」 アフレル「母さん。ワクはガンバールのパイロットに選ばれてしまったんだ」 ヨコ「えええ？」 その時、学校の上の階から地鳴りのような音が響いてきた。ワクのクラスの男子達が、一斉に飛び跳ねたのだ。ヨコ「それって凄いことなの？」

(1205)

ノルコとヨコはガンバールのことを「男児用オモチャ」くらいにか思っていないが、多くの男子にとっては驚天動地の出来事だ。アフレル「そうなんだ。いま人類の未来は、ワク、そしてノルコ……二人に委ねられたんだ」 ヨコ「そ、そう……」 男の子って幸せだなと、ノルコとヨコは思った。

(1206)

ワク「パパ、ママ、シスター。ボク、行ってくるよ！」 ノルコはひらひらと手を振って弟の出撃を見送ると、渡されたリストのツイトに目を通した。どうやらお父さんはミギノウエさんに会いにいったらしい。その時の会話だった。ノルコ（……ふむふむ、トイレ法が成立すると人類は滅ぶ……ほへ？）

(1207)

太平洋のど真ん中に出現した光の渦に向かって、ガンボールはその舵を切った。ワク「ウエポン・イズ・ナッシング!?」 武器は何もなかった。開発が間に合わなかったのだ。クサヨシ「ワク君! 忘れてはならない。我々の最強の武器は、この熱いハートと鉄の拳であることを!」 ワク「ウイイイ!？」

(1208)

ワクはいつも遊んでいる時の様に、ガンボールを操作した。操作感覚は驚くほどゲームと同じだ。機体の重量や空気抵抗、遠隔操作による反応の遅れまで完全に一致している。ワク「ホウェア・イズ・アタックポイント?!」 しかし敵はただの光の渦だ。どこを狙っていいかわからない。

(1209)

アフレル「ワク! 右腕のレーダーを使って探すんだ!」 ワク「オールライト!」 言われるままに右腕のレーダーを光の渦に向ける。しかしゲームのようにはつきりとは索敵されない。クサヨシ「ゲームと違ってはつきり本体が見えるかどうか分からない。最終的に、カンを頼りにして打ち込むんだ!」

(1210)

実際にワクがいる場所は学校の教室だ。そこから遠隔操作しているので、何が起きてもパイロットは安全だ。だからこのように「当

たつて碎ける」的な戦術を実行できる。ワク「アイアン！ ナックル！」 ワクはガンバールの右腕を突き出した姿勢で、光の渦に飛び込んでいった。

(1211)

クサヨシ「いけるか！？」 しかしガンバールの巨体は、光の渦を突っ切っただけで、なんのダメージも与えることが出来なかった。イズカ「だめか……む！？ いかん逃げる！」 光の渦が急激に凝縮し、その中からレーザービームが発射され、ガンバールの装甲を焼き始めた。ワク「アウチ！」 ワクは辛うじて離脱する。

(1212)

その後も光の渦はしつこくガンバールを追ってきて、ビームを照射してきた。アフレル「このままじゃジリ貧だ……」 クサヨシ「いや、これはチャンスだよ。ワク君、いまから座標をおくるから、そこまで何とか逃げるんだ」 ワク「アイ・トライイング！」 ガンバールは螺旋飛行をしながらグングンと上昇していった。

(1213)

途中でメインウイングの燃料が尽きた。ワクはウイングをパージすると、推力をロケットブースターに切り替えて、さらに上昇した。高度50kmの地点にさしかかり、地球の輪郭が見渡せるほどになっていた。ワク「ユニバアアス！」 クサヨシ「いまだ、ハッブル君！」 ハッブル「待ってたよ！」

(1214)

ハッブルの合図により、TPVN（環太平洋長基軸干渉電波望遠鏡）のアンテナ群が、太平洋上のガンバールの方を向き、いつせいに観測を始めた。ハッブル「解析映像、デルヨ！」 大型スクリーンにその映像が表示された。「うおおおおお！」 管制室が

いつせいにどよめいた。

(1 2 1 5)

ワク「……ゴクリ」　クサヨシ「ワク君、見えてるか？　そのバカでかい八本足の奴がエイリアンの本体だ」　ワク「い、イエス・サー」　ワクの視界に重ねられた映像には、絵に描いたような「タコさんエイリアン」が映し出されていた。アフレル「そんなバカな」　イズカ「いくらなんでもお約束すぎるぜ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987o/>

ツイートピア

2011年11月30日23時56分発行